紀念山陰道行啓錄

皇太子殿下

東宮武官長陸軍中將男爵宮崎周一氏

東宮侍從長陸軍中將子爵本田親孚氏

東宮主事兼侍從長男爵入江爲守氏

東宮武官長陸軍大將男爵木村雄次氏

松永島根縣知事

山田鳥取縣知事

平井鐵道局總裁

千家東京府知事

鳥取藩主池田慶徳

松江藩主松平伯爵

濱田藩主松平子爵

廣瀬藩主松平子爵

八木下島取第四十聯隊長

小泉第廿一聯隊長

東郷大將筆蹟

山陰道行啓錄梓成る實に我友角君の編述する所なり予に嘱して序を需む受けて而して之を讀む　東宮殿下山陰行啓の發端より終尾に至るまで細大洩さず精にして密、序次記述の文書翰墨と尚多少の遺憾なきにあらずと雖、寔に以て其名に愧ずと謂ふべし蓋　東宮殿下の山陰行啓は眞に千載の一遇にして澤草木に及び恩會獣に加ふ矧んや予は筆を載せて常に鶴盥に感従し此の盛典を耳聞目睹せしに於てをや　殿下の聰明にして盛徳に勇武にして慈仁に日夕道民の休戚を軫念し給へるの狀、今尚髣髴此書に對して更に目に新

に依然後塵を拝するの感なきにあらず是實に角君の賜なり幸にして予と感を同くするの道民展讀毎日餘芳を拝せんか一部の山陰道行啓錄は行啓の活教訓をして長へに其恩澤を千載の後に傳ふに足らん君の勞や復た空しからさる也

明治四十稔九月　　岡本金太郎謹識

紀念

山陰道行啓錄目次

一	行啓御日程		
一	東京御發車		六
一	新舞鶴着御		京都府
一	舞鶴軍港物發纜		前ノ一一
一	美保灣御假泊		三五
一	米子鳳翔閣着御		島根縣
一	全　御發車		前ノ一
一	倉吉飛龍閣着御		二七
一	全　御發車		三〇
一	全　御發車		四七
一	鳥取屋形着御		四八
一	全　御發車		九二
一	安來着御		島根縣
一	全御發車		一二
一	松江着御		一六
一	全御發車		七七
一	夫道御晝餐所		八〇
一	今市着御		八五
一	大社御參拜		八九

一今市御發車　一一七
一田儀御晝餐所　一一八
一大田町着御　一二二
一仝　御發車　一三四
一大森町御晝餐所　一三五
一大家着御　一三九
一仝御發車　一四五
一淺原村晝餐所　一四六
一江津村着御　一四八
一仝　御發車　一五二
一濱田町着御　一五三
一仝　御泊艦　一九五
一別府着御假泊　一九五
一豐岐御發艦　二〇四
一舞鶴着御假泊　一　京都府　後ノ
一仝　發御　三
一福知山行啓　五

記念

山陰道行啓錄

角幽溪編

山陰行啓御日割

皇太子殿下には五月十日東京御發左の御豫定日割を以て山陰行啓仰出さる

五月十日　午前八時卅分新橋御發卓午後四時五十分名古屋御着、離宮御泊

仝十一日　午前七時四十分名古屋御發、午後四時三十分新鵜鵜御着、水交社御泊

仝十二日十三日　御滯在

仝十四日　午前鹿島灘に御艦乘御發港、午後美保關御着御假泊

仝十五日　午前境御上陸米子御着御泊

仝十六日　御滯在

仝十七日　午前九時廿分米子御發十時五十一分倉吉御着、御泊

仝十八日　午前九時三十分倉吉御發十時五十分鳥取御着

仝十九日二十日　御滯在

仝二十一日　午後一時廿分鳥取御發同四時廿分米子御着、馬車に御乘換直に御發、安來御着御泊小學校

仝二十二日　午前安來御發松江御着

仝二十三日二十四日二十五日　御滯在

全二十六日　午前橋江御發御晝餐宍道村木幡久右衛門方、午後今市御着御泊、當邸左右衛門方
全二十七日　午前今市御發杵築御着御晝餐千家尊福方午後杵築御發、今市御着御泊當邸方
全二十八日　午前今市御發、晝餐田儀小學校、午後大田御着、御泊農學校
全二十九日　午前大田御發、晝餐湖陵郡役所、午後大家村御着、御泊小學校
全　三十日　午前大家御發、晝御渡橋小學校、午後江津村御着、御泊小學校
全三十一日　午前江津村御發濱田御着

六月一日二日三日　御滯在

全　四日　午前濱田御發鹿島御乘船午後美保關御着御假泊
全　五日　午前御發船、午後境港御着水安社御泊
全　六日　午前九時御發車、十時十分福知山御着、晝餐歩兵第四聯隊司令部午後一時福知山御發五時十分京都御着、離宮御泊

供奉員氏名

勅任官

東宮大夫侯爵　中山孝麿
同侍從長男爵　木戸孝正

奏任官

内藏主事　吉田齡一
同侍從　原恒太郎
同　武官長　村木雅美
同　主事　進藤太郎
東宮侍從子爵　有馬純文
同　本多正復

同　高辻宣麿　東宮武官　墨水公三郎

同　秋澤芳馬　同　尾藤知勝

侍醫　相澤益　同　伊勢貞五郎

判任官

文書掛　東宮扇渓近澄　同後藤武三郎　屋永田虎尾

主膳掛　東宮扇栗津小次郎　屋市原丈貞

内廷掛　東宮扇松根常次郎　同矢野栄次郎

會計掛　東宮扇山崎角次郎　同岡崎茂三郎　内藏扇松崎卯郎

用度係　東宮扇春日純雄　安田安

東宮内舍人　齋藤義治、伊藤地榮輔、同塚本有松、藥劑師千葉武、武官付陸軍扇尚田彦、鐵行員二人、中山太夫隨行家扶一人等外扇仕人高森金太郎以下十三名、庖丁扇田豐吉以下三人、藥丁大谷厚盛以下一人、小者山田使夫以下十三人

主馬寮　第一班　島根　主馬扇山本勝郎、馭者細羽守人、同同千代扇並之助、同大西保作△掌車渕龍推治△馬丁喜遠芳次郎△蹄鐵工小川德次郎△馬丁萩原赤木武藏△省丁一人△馬丁十一人△勝方四人

主馬寮　第二班　鳥取　主馬扇山田曉次郎△馭者山田元次郎、同多賀谷篤治、同岩波力藏△掌車石井龜吉△馬丁飛氣與△蹄鐵工喜多川五郎△省丁一人△馬丁九人△鞍工四人

供奉近衛儀仗隊及憲兵（島根鳥取下）　陸軍騎兵中尉笹田定吉、同曹長竹内寒吉、同軍曹黒井吉之助、同小杉重治同伍長所清吉同坂口保之（内一名は給與主任、四名を二班に分ち交互服務）騎兵

卒十四人を二班に分ち交互服務外に將校二人馬丁三人

鹵簿

今回行啓の鹵簿は公式乙に依るものにして其順序左の如し

憲兵（騎馬）　近衛騎兵　近衛騎兵　同　同　**御馬車**（御隨乘侍從侍從長、武官長の內）　近衛將校同騎兵　同騎兵

馬車（侍從武官侍從）　馬車（大夫、侍從長、武官長の內、主事）　馬車（判事）　近衛騎兵同　同　憲兵（騎馬）

御列順序

鹵簿以外の御列順序は左記の如くにして此の御列內は警備嚴重にして徽章佩用者以外は一切立入るを得ず

警察署長　警視（此間二丁乃至五丁）　鹵簿　鹵簿以外（東鄕大將の隨從者）（將以下）　御荷物車　縣高等官其他　御荷物車　新聞記者　警察署長

行啓奉迎送心得

皇太子殿下山陸道行啓につき奉迎送に關する一般人民の心得を左の如く定め宮內省より沿道各地方長官へ內達したり

一　奉迎送者は鹵簿の際起立して姿勢を正し最敬禮を表すべし跪拜し又は匍匐して奉拜するは宜しからず

二　鐵道沿線に在ては線路より約二間以上道路に在ては兩側道內の許す限り玉串と距離を保ち奉拜すべし

三　老人小兒婦女は前列に其他は身体の長短に依り順次後方に整列すべし

四　階上山腹其他の高所より拜昇すべからず

五　樹木に攀登し又は椅子床几其他の物件を踏臺とし若くは馬上車上等より拜昇すべからず

六　窓其他の物陰より拜昇すべからず

七　手をかざして玉車を望み又は玉車を指す等の擧動あるべからず

八　頭巾、鉢巻、帽子其他不体裁の服体にて拜昇す可らず

九　傘をかざし帽子の類を冠り又は手拭手巾等を頭部に纏ひ若は座毛布の類を被て拜昇すべからず

十　小兒を肩車にし荷物等を背ひ提棒の類を携へ拜昇すへからす

十一　通御の際喫煙し又は雜談すへからす但萬歳を唱ふるは妨げなし

十二　直諫を懐切り又は乘越し若くは撮影等するの擧動あるへからす

十三　他人の田圃を踏荒し又は堤堰其他の工作物を毀損すへからす

十四　八種傳染病麻疹インフルエンザの患者は勿論其家は通御當日一切外出し又は外出せしむべからず病類白痴及精神に異狀ある者亦同し

十五　身体の外部に厭惡すべき疾患其他醜狀あるもの又は齒痛等にて惡臭を放つものは須らく遠慮し通御の當日御道筋に近寄るべからず

十六　盲聾者にして拜觀せんとするときは看護人を隨伴はしむべし

十七　拜觀遲著は通御の後と雖も直薄の最尾點約五町を距る笠原住居を離るべからず

十八　御召艦艇の針路を横切り又は其附近に遊弋すへからす

十九　學校赤十字社愛國婦人會武德會其他の團体は慾め所轄郡長及警察署長に協議を遂け拜觀すへき地

點を定め置くべし

二十　奉慶遊者は時々自己の身邊に注意し掏摸其他の惡戯に罹らざる樣留意を要す

二十一　奉慶遊者にして急病人負傷者又は迷子等を認めたるときは直に其事實を最寄警察官吏に申告すべし擧動不審の者若くは精神に異狀ありと認むるものあるときも亦同ト

東京御發車

五月十日

皇太子殿下には豫て仰出されし如く本日を以て山陵奉御巡啓の途に上らせられたり南陵を拜するに殿下にはカーキ色陸軍少將の御軍裝に大勳位章を佩び桐色の弁當を召され木戸侍從長御陪乘、村木武官長、奉仕事等の各隨員供奉し午前八時青山御所御出門福田通々の間御巡路を同二十五分新橋停車場へ成らせられたり御先着の有栖川大將宮、東伏見大佐宮、伏見中佐宮、竹田大將宮各殿下、通宮、淳宮、光宮三殿下の御使、丸尾主任、當宮、周宮、富美宮、泰宮四內親王殿下の御使、園御用掛、林御用掛主任を始め奉送の

伊藤枕監代伊藤勇吉、山縣元帥代齋藤副官、西園寺首相、松方伯、大山侯、田中、寺內、林、齋藤、山縣、牧野、松田、松岡の各大臣、野津、伊東兩元帥、芳川子、川村、大島、井上の各大將、德川慶喜公、九條道實公、香川皇后大夫、渡邊內藏頭、岸岡、出羽、三須、石本、福島、曾我各中將等

次武官へ御介添の上平井總裁の御先導にて直にプラットホームに出でさせられ御召列車に乘御各宮殿下各元老、光勝等の御見送を受けさせられ玉箒最も閑しく供奉の諸官を從へさせられ午前十時三十分日出度御出發ならせらる

名古屋着御

仝日

山陰行啓の御途次本日名古屋離宮に御一泊あらせらるゝに就き名古屋市民は數日來謹意奉迎の準備を整へたるが時節定まりなき數日來の天候は九日夜より降雨歇む間なく御道筋の泥濘掃除等に就ては縣廳市役所等の奉迎委員何れも雨中を冒して盡力せり翌くて停車場西側プラットホームには

大久保中將田部少將、藤田控訴院長手塚檢事長、第三師團各隊將校同相當官、在鄉將校等、同右側には名古屋市長、貴衆兩院議員、縣市會正副議長、赤十字社愛國婦人會支部代表者、高等官夫人等其の構外には縣市名譽職吏員、各團體員等整列

夫れより廣小路通本町等の御道筋には

名古屋高等工業學校、醫學專門學校、師範學校、中學校、工業學校、縣市立兩高等女學校を初め私立學校、小學校職員生徒等兩側に整列

一般奉迎人停車場外に堵を築き靜肅に御着車を待ち奉つり居御豫定の時刻午後四時五十分御着の宮廷列車驛内に進み來るや、市より敬意を表する二十一發の煙火は中天に轟き渡り其の內列車は西側下り本線プラットホームに停車、續本名古屋驛長は御車前に進み入りて扉を開き奉つれば　殿下には御機嫌麗はしく御下車あり、奉迎として演拜驛より扈從し來たる福野本縣知事及び奉迎の夫久保中將以下に御會釋を賜ひ村木武官長、本戸侍從長中山太夫、柱主事以下供奉員及び東郷大將等を隨へ陸橋を渡りて東側プラットホームに入らせられ此處にも奉迎の諸員に對し擧手の御答禮ありて豫て驛前に待ち設けたる御料の人力車に召させられ名古屋市奉迎の大旗門を御通過御順路廣小路より本町を一直線に第三師團區內に入らせらる該內に名古屋衛戍各隊の兵士は路內に整列奉迎したるを　殿下には御氣色殊に麗はしく時々擧手の禮を賜ひ乍ら程くて離宮に御着ありしは五時過きなりき

名古屋御發車

五月十一日

朝來の天候は前日に打つて代り一天拭ふが如く晴渡りぬ、扨て午前七時十分と云ふに君が代の喇叭は嘹喨として響き渡るや園陵前日の如く　　陛下には師軍少將の御服裝に改められて御機嫌麗はしく御出門、列外には大久保第三師團長騎馬にて、深野知事、濃岐阜縣知事等は馬車にて隨行し線路内兩側には各兵士の奉送あり、御順路を本町通より廣小路に出で停車場に至る二十餘町の間には清砂を撒うて塵目正しく各戸國旗を揚げ幔幕を打ち廻らし廣小路通には數箇所に大國旗を交叉し路傍數箇所に今回新調したる紅白の日の丸高張提燈を立て、沿道一帶は市民及び學生が人垣を築き煙火殷々中空に轟きて前日にも優る盛觀を呈したり、停車場に於ける奉送者前日の如く東鄕大將は牛山副官を隨へ停車場に御待申上ぐ斯くて停車場に御着あるや名古屋縣長の先導に依り供奉員一同及び東鄕大將、愛知、岐阜兩縣知事を隨へさせられ奉送者に一々擧手の御會釋ありてプラットホームに出で陸軍を送り給ひかくて宮廷列車に召さるゝや汽笛一聲を合圖に汽車は徐々圍に向つて進行を始む時正に午前七時四十分

京都着御

仝　日

皇室と縁故深き土地柄とて奉迎送者非常に多く大森知事は六角警察長、高津警察署長、根本警察署長、大角官房係長等を從へ午前八時二十三分京都發列車にて馬場驛に奉迎し各官衙長官及び在京各高等官、華族、紳官、當局等は午前十時頃より追々と京都驛内に集り來る筈、久邇宮殿下にも御馬車にて御着驛樓上に御休憩あらせられぬやがて宮廷列車の到着驛御延遲の報あるや二十一發の煙火九條の野に轟き渡り御召車は豫定の如く十一時二分着驛、　　陛下には陸軍少將の御服裝にて村木武官長を隨へ南面して御車室内に御起立あり桂東京主事

以下二三の供奉員下車して賀陽、久邇兩宮殿下を御案内申上げ御盡際に於て御挨拶あり次で來京中の土方伯と大浦氏に拜謁仰付られ土方伯より何事をか言上する所あり又　殿下よりも二三の御言葉を賜はり引續き北垣男、奥山貴族院議員、木下大學總長、菊田第三高等學校長、在京華族總代中川主殿助、島田京都府第一區長、西郷市長、石川衛兵大佐、馬場旅團長、岩田三十八聯隊長、宮川京都聯隊區司令官以下各將校及び在京非役將校、各官衙長、府市役員並に名譽議員等に拜謁を賜ひ十一時七分御機嫌麗はしく御發車あらせられたり因に大森京都府知事は數日前より調査を遂げたる廉下の敎育、實業其の他府行政に關する編纂物及び今回調製せる行啓御道筋圖面に奉呈文を添へ　殿下に奉呈せり

大阪驛着御

仝　日

ペスト流行地たるの故を以て大阪市民が陽に來迎の誠意を表する能はざりしは遺憾なれど停車場構内は嚴々しく整ひ清め

井上第四、山中第十六師團長、高崎知事、山下市長、仁田原、渡邊、菊地、前田の諸將官、長谷川警察局長其の他文武高等官、代議士、市會議長並に宗教、天下茶屋電在の陸軍上長官等プラットホームに整列して御著車を待ち奉つれり十一時五十四分御召車の南側下り本線プラットホームに停車するや奉迎諸員最敬禮を表し　殿下には御車室内に立たせられて御會釋あり師團長、知事等も態と御窓近く申上げて御召車に近かず供奉諸官も下車せざりしかど　殿下には御機嫌いと麗はしく各待合室にて靜肅に敬意を表し居たる一般來客にも時々御注目あらせられ六分間停車の上御豫定の通り御發車あらせられたり

福知山驛着御

仝　日

福知山驛の奉迎場此處は聯隊の所在地なることとて還啓の當時には御駐車さへ仰出されし程なれば今日は同地御通過の際官民いつれも奉迎せんとて朝來停車場附近は立錐の餘地なき迄に人山を築きたり　陛下には御豫定の如く午後三時福知山停車場に御着プラットホームには聯隊長始め

各高等官及同待遇者、衆議院議員及府會議員、各官衙長、町村長、郡會議長郡會議員、神官及各宗派管代表者、農會長、教育部會長、蠶糸同業組合長、產牛組合長、蓆業組合長、運送組合長、實業協會長、赤十字社特別社員及役員、郡町村名譽職員、愛國婦人會役員、婦人會役員、女學校長、小學校長、在鄉軍人會役員、武德會役員、官吏、公吏、陸兵及軍人遺族、青年會役員、八十歳以上高齢者、赤十字社員、愛國婦人會員、婦人會員、義勇艦隊建設義金寄附者、武德會員、青年會員其他各團体員別に中學校生徒女子工藝學校生徒小學校生徒は福知驛に於て奉迎す

舞鶴驛着御

仝　日

暫くて御召列車は御豫定の如く午後四時十三分舞鶴停車場御着プラットホーム東側には

赤十字社員、海員掖濟會、武德會、義勇艦隊聯合者、婦武會、愛國婦人會の各員及び高齢者西側には加佐郡立高等女學校生徒一様の黑紋付にて整列し續いて四所村尋常小學校生徒在鄉軍人、官衙長、町村長、町村名譽職員、舞鶴町奉迎委員、舞鶴高等及び明倫、高野、鎭西、中筋四尋常小學校生徒等約三千人

軌道をはさんで整列せり、程くて四時を過ぐる少時山崎侍從一行の煙を認め二發の煙花轟くや各員儀を正せしに機關車を先頭に前後に護送車を連ねお國旗を安置したる菊御紋章の御料車は前後の兩供奉車に護られ徐徐と

して舞鶴驛に着す此時　殿下には直立し御會釋あらせられし後背廣を以て裝飾したる驛内を通ふして別室寺方面を望はせられて一分間停車此時同驛に乘遲したる參謀本部出張の松川少將は新に供奉車に入り廿一發の禮火と萬歳聲中に新舞鶴に向つて御出發あらせられたり

新舞鶴着御

仝　日

御新に設れて、新しき國旗、幔幕、提灯、花の如く懸け續して全市の裝飾悉く成りつゝ正午一發の號砲と共に、舞鶴軍港に在る四十餘隻の艦艇は第一艦隊旗艦香取に準ひ滿艦飾をなす午后三時三十分海軍儀仗兵三百名の一隊は樂隊を先頭に軍艦を出で進んで新舞鶴停車場前大鐘門の外に整列す之に亞いで在鄉軍人の一隊は赤十字社員其他の各團隊と相對し各小學校生徒は三條通りより大門通りに折曲りて整列し拜觀の老幼男女は肩々相接して人垣を爲せり四時十分『捧げ銃』の號令は海軍儀仗衛兵に下る暫くして尾崎第二見張所に揭揚されたる信號旗が數分の後引降さるゝを合圖に各艦共に香取に準ひ禮砲を發す殷々轟々として海嶽に響くと同時に町の處しになる煙火は中空に爆々たり

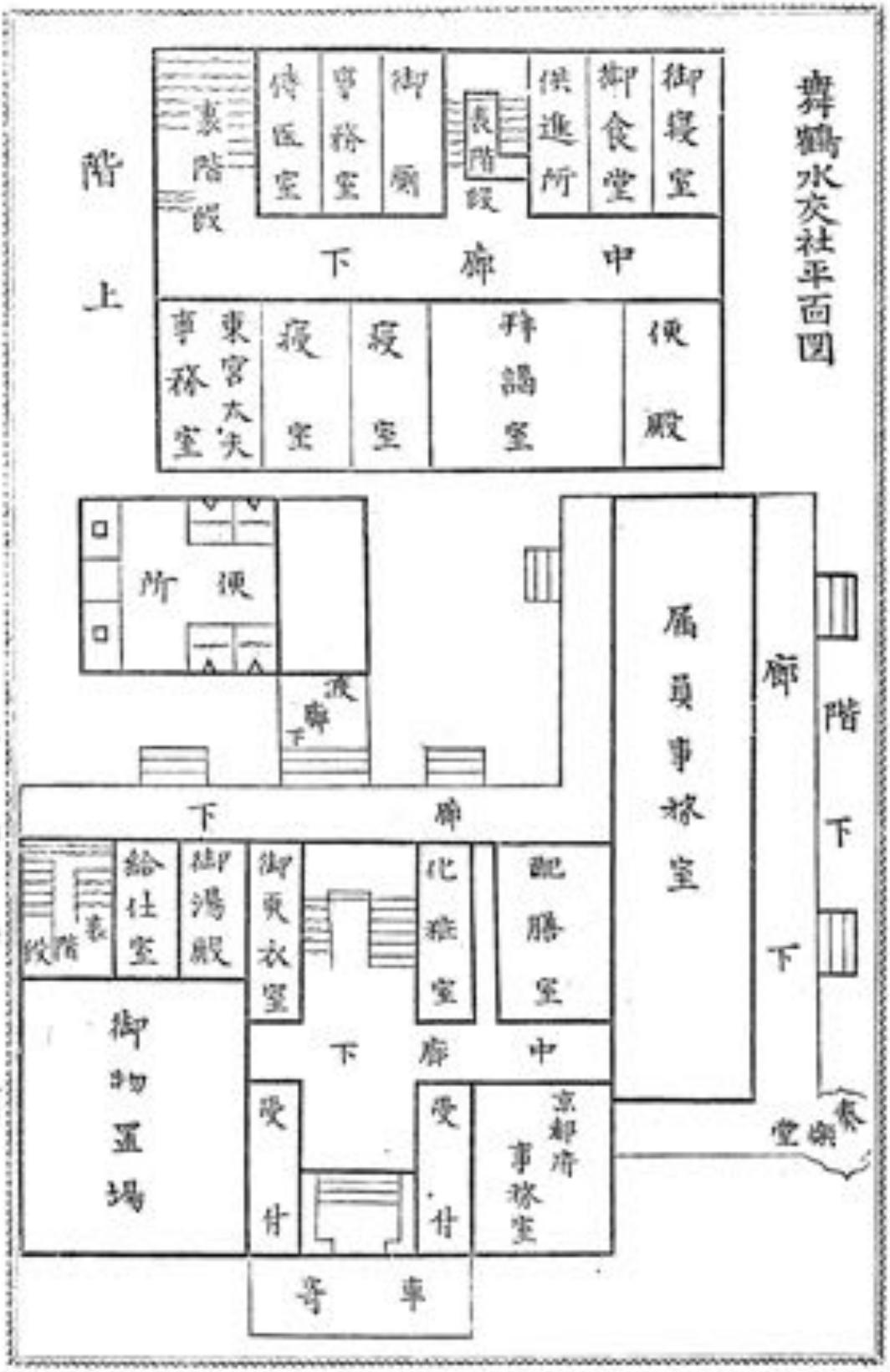
時恰も四時三十分御召列車は新舞鶴驛に靜に止るや　殿下には御氣色殊に麗はしく東鄉大將を始め供奉の文武百官を隨へさせられ御降車あらせらるプラットホームにては日高舞鶴鎭守府司令長官、伊地知參謀長、關元要塞司令官、細田要塞砲兵大隊長、牧野（舊舞鶴要塞主）木莊（舊宮津要塞主）の二貴族院議員其他文武高等官、代議士等の拜謁を受けさせられ直ちに用意の御馬車に召したまふ此時停車場前に奏樂の聲起り『捧げ銃』の號令は海軍儀仗衛兵に下る次で在鄉軍人の一隊に對する『氣を附け』の號令あり忽ちにして滿街整然肅然、人動かざること山の如く衆聲なきこと石の如し數々の雨は白砂を壓して一塵揚らず既にして騎馬の警部一名先驅して過ぐ次に日高司令長官乘車にて先導し程なく御馬車は村木武官長御陪乘市民歡呼の裡を進ませ給ふ次の馬車には東宮侍從

及び武官、侍醫、次の馬車には中山大夫、木戸侍従長、桂主殿、最後の馬車には大森御車扱従し奉らせ御列は三條通大門通より御守府東門へと進む程に此處には見上げる許りの華麗門に國旗美々しく飾り立てられ更に大門前兩側より海兵團まで八百間と云ふもの艦本中佐指揮の下各艦團下士卒四千名容儀を正して捧銃の禮を行ひ續て高等文官奉迎す御馬車は今や海岸に出で港内狹しと打集へる香取、鹿島、磐手、出雲、淺間、吾妻、對島、丹後、阿蘇、見島、金剛、千早及び村雨以下各艦遙望、水雷艇は　殿下が御眺めに入るなりけり港内を取圍める此の山岳の緑色掩らん如く初夏の空は碧碧に澄み渡りて折柄高く各艦の皇禮砲は殷々の響をなし遠く傳ふ鎧島町の煙花は天空高く彩花を開き利鎌の壯觀譬ふるに物もあらず

御座所なる水交支社には午后二時の列車にて先着せる齊藤海相を始め日高鎮守府司令長官、有馬第一艦隊司令長官、安東第十師團長、隈元鎮臺參謀副官以下の勅任官數列となつて奉迎するうち御馬車は砂濱に打敷ける上を音も立てず儀仗衛兵の間を經て御玄關前に着かせ玉へは日高長官の御先導にて菊花の紫幕を絞られたる御車寄に御下車、階上なる御便殿に入らせらる、此時天に高き鎮守府歩には皇太子旗を掲揭せられ萬人をして齊しく之を仰かしむ

殿下には六等官以下高等官及從六位勳六等以上の者に通常拜謁を仰せ附けられ、五等官以上及有爵者へは少時御休憩の後拜謁室において單獨拜謁を賜はりたり時に五時

舞鶴水交社平面図


階上
御寝室
御食堂
供進所
御厠
事務室
侍医室
裏階段
表階段
廊下中
便殿
拝謁室
寝室
寝室
東宮大夫事務室
所便
渡廊下
廊下
届員事務室
廊下
階下
廊下
表階段
給仕室
御湯殿
御更衣室
化粧室
配膳室
御物置場
受付
受付
京都府事務室
車寄
泰楽堂

鎭守府內巡啓

五月十二日

今朝來細雨濛々として來りしも午前九時三十分頃漸く歇む　東宮殿下には水交社御出門村木武官長御陪乘、中山東宮宏夫、木戸侍從長、東郷大將、齋藤海相、大森府知事、安東十師團長其他とも馬車廿兩を列ねて先づ海兵團に行啓あらせらる海軍團門に到着するや艦隊は君が代の奏樂を始め御下車迄中團長御先導便殿御少憩後直ちに正面玄關より將校集會所に四兵舍、機關部罹災室前を過ぎさせられ禁火練習所場より中央玄關に出で雪中練兵場内に於て分捕兵器を以て作られたる各種の作物御覽の後掌帆、掌砲、掌水雷形室、木工々場、野砲倉庫前を過ぎ練兵場へ御案内申上げ短艇に設けたるテントの下に出立せらる此時十時十分練兵場には巨大なる假裝軍艦を背景之に向つて砲撃演習を行ふ（實彈は用ゐず）假裝艦の發火すると同時に風船を打上ぐ　殿下には御氣色能しく御覽あり終て水雷團に行啓　橋本團長の御案内にて便殿へならせられ御休憩中各隊の戰歿を御上覽各兵舍を經て病院監督場に入らせられ、艦隊合戰準備、戰闘操練を御覽はせられ十一時三十分御出門下士官集會所へ御立寄り技處にては唯御駐車のみにて十一時三十分鎭守府に行啓御便殿に於て日高司令長官より港内の全般型に對いて詳細の說明申上げ御晝餐を召され鎭守府に於て日高長官の主催に係る宴會場へ特に御臨場の榮をはうたり、午後一時廿分御出門海軍工廠行　啓中澤廠長御先導便殿に御休憩中各部色別の平面圖其他各所の現在設備及び將來の增設計畫等を圖面には統計表に依り仔細に廠長の說明を聞し召され終つて各工場御巡覽あらせられ、特に軍艦阿蘇のメッケンダー管理艦船の狀況、遠洋航海、新造潛水艦工事狀況、丹後艦大改正修繕當時の艦艇等に就き廠長より御說明申上げ夫々御覽終つて第一船渠前渡上場より御乘艇日高中將陪乘して港内を御巡覽　あらせらる相川港務部長御先導申上げ各艦長等供奉艇にて隨ふ此時各艦にては海軍禮砲式六十二發により衛兵は捧げ銃をなし君が代の喇叭を吹奏し四時第一上陸場より御上陸御機嫌麗しく還御あらせらる

此時雷鳴尊出顯然として來り大立大の降臨地に數き須夏にして止み山川草木生色を見るの心地せり

松樹御手植

殿下本朝水安社參集室前に記念松を御手植あらせられたり

舞鶴要塞行啓

五月十三日

十二日は雷雨降霰惡惡の天候にして地方民一同眉を顰めしが曉より警を縫ひ旭の影は鎭守府廳頭に翻へる國旗に閃めき三舞鶴の市中別けて餘部舞鶴の街路は砂撒らかに戶毎に旗を飾へし鎭守府正門より西舞鶴埠頭までの沿道は未明より拜觀の人を以て埋めたり　殿下は御豫定の如く午前七時四十五分御便殿を出させらるゝ此時鎭守府長官等の皇太子旗を捧せられ日高長官以下幕僚に奉迎せられ玉ひ次田園部署長騎馬警護を爲し殿下にはカーキ色陸軍少將御服を召せられ村木武官長陪乘次で中山大夫、木戶侍從長、桂主事次に侍從、武官の各員、次に大森府知事各馬車を連ね列外院車には東鄕大將、齋藤海相、有馬第一艦隊司令長官、安東第十師團長最後に廣田舞鶴署長後隨し續らせ西門牢永久的菊刻御紋章の大奉迎門より左側儀仗兵の前を餘部本町を西へ十間の大道西側に搭を設せる小學校生徒赤十字社員始め各種團體、東部町村長及び町民の奉迎盛を受けさせられつゝ、樓木陸道を過ぎ鎭内村民奉迎の間を御通過あらせ給ふこの時餘部町民は二十一發の煙火を揭げて奉祝せり舞鶴要塞司令部、同砲兵大隊に於ては後の準備整頓し鎭内を清掃し御道筋には白砂を敷き道目正して、御休憩所たる將校集會所及び司令部會議室は莊嚴なる裝飾を施し一見豁を正さしむ御豫定の時刻に至るや先づ米田大尉の指揮せる儀仗兵二個中隊は營外練兵場前に整列し大隊營門前には安東第十師團長、眞元要塞司令官以下各將校整列して奉迎せり茲て午前八時半南鄕軍々として要塞大隊に入るや最敬禮の喇叭を吹奏し眞元司令官の先

導にて將校集會所に入らせられ設けの御座所に御着あり安東師團長より師團管下全般の景況を聞召され尚中島大隊長代理よりは大隊創設以來の概況、衛生及び教育の狀態、日露戰役の經過等に就き言上せり時に殿下には御座所に裝置せし當地兵隊安田軍曹の實戰に徴し製作せし萬寶山の陣地模型を御覽あらせられ種々御下問あり最と御意に召し侍從に命ト御召上相成りたり斯て要塞上長官以上ユ昇進を賜はりし上御徒歩にて要塞司令部に成らせらる御途中各將校に拜謁を賜はり戰利大砲を御覽あらせられ司令部會議室の御座所にて閣元司令官より當要塞防禦上に關する說明を聞召され終て九時十分司令部營門より御乘車、營舍にて將校夫人に謁を賜ひ夫より鮮鶴町に向はせ給ふ

舞鶴行啓

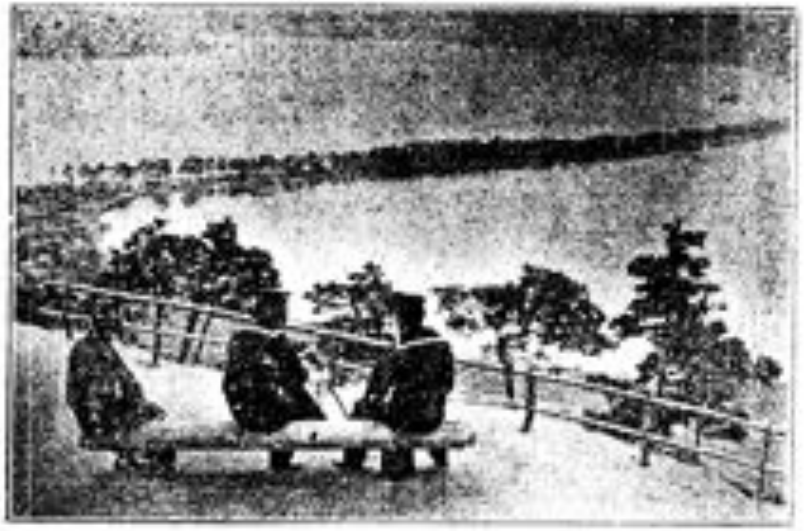
仝　日

新くて　殿下は要塞御出門舞鶴町へ向はせられ相生橋を渡り鎭道路切なる舞鶴町四辻大幕道門を過させられ兩側にる小學校生徒の整列したる間小路を西へ竹屋町を南へ本町を東へ辻平場街道を南へ濱濟街道との十字街頭の幕道門を經て商業會議所へ御着ありしが此間里程の御通路市中は固より市外近傍側に奉迎したる人民は衣冠正しく靜肅を守り道街水を打たるが如く始めて紳の御來の御姿を拜し感極つて泣くものあり同所より換て差廻しありたる御料車に召され海岸縁にて九時廿分假設波止場御着棧橋御延歩舞臨海相東鄕大將、日高長官、安東師團長、大森知事等供奉御召艦追風に御乘艇遊ばさる埋立地及び波止場には無數の國旗を連揭し柱は紅白段々の布を以て纏ひ會員は紅白幕にて廻らし裝飾道る方なく雖はしかりしが御着と同時に轟響たる海軍禮砲を發し舞鶴町の烟火は濛然として蒼空に國旗を見はし艦艇には皇太子旗掲げられ遠山嵐の靈風に翻翩たり此時市中に於て奉迎したる一般人民は晨雪の如く波止場と埋立地に寄せ來り高野川一帶を隔て、此處に奉迎しさしもに廣き四萬坪の埋立地は人を以て埋るの感觀を呈せり海上には供奉艦遂瞻夕風、白雲、朝潮の三隻碇宜の間

舞鶴要塞司令部

神明立橋全

智遠立橋の天



圍を遠きて碇泊し高野川尻の阪鶴丸始め各船は滿船飾を施し舞鶴町及び四所村等數百隻の奉迎船は各裝飾を凝らし埋立地尻より一直線に是れ宜敷の間隔を保ちて碇を下ろし延長數丁海上に時ならぬ花を散らし美觀云はん方なし此間煙花は絶えず打揚げられ奉迎兵の集る署衙々多かりし九時三十分出港發意と共に先導艦夕風先づ錨を抜きて徐行し次で御召艦迅風續航を贈る此時幾千の小學校生徒は萬歲を三唱し艦は北へと向ひ廻いて供奉艦白雲、朝潮殿して軍艦等を爲し旅艦諸々廻すが如き舞鶴灣を殘し宮津に向ひ御出航相成りしが戸島附近には新舞鶴、鎭守の市民數百の奉迎船に國旗を飜へし奉迎申上げたり

天橋行啓

東宮殿下には午前九時二十分御召艦迅風に召させられ夕風を先頭に御召艦迅風、白雲、朝潮の順列にて靜に出動し始めたり舞鶴市民歡呼の聲は港内に轟く許り港内艦艇の飾くにして時に國旗の飛ぶを見る此間艇は微速力にて進行し　殿下には特に供させ給ひし日高長官、大森知事、安東師團長、古賀警保局長等を御對手にうこ此處の山容水態を指させ給ふ、艦て港外に近づきし頃各艦遙かに十八浬の高速力を出し折しも港外に吹荒む北西の强風を衝きて列に一直線の針路を保ちつゝ疾驅し由良の沖合に至る頃　殿下には艦橋に上らせ給ひ東郷大將等を御相手に日本海の形勢を望ませられ御機嫌最と麗はしかりし、承り及ぶ所に據れば　殿下には殊の外海上に慣れさせ給ひ毫も船暈を感はせ給はざるやにて日頃「酔ふ者が憎い」と宣はせらるゝが當とかや尋しとも畏し、艇は高速力の事とて一時間を經へ程に早や舞鶴湾口黒崎に近づき此處に浮べる小船より白煙揚るを見る間に續て萬歲の聲尖は各所に起れり艇は漸く湾内近く進みつ視界の及ぶ嵐白砂の上青松の下黒く一直線を見けるもの總て是れ人垣なり人垣は地上各團體學校生徒遠郷近在の群集もて築かれたるもの高歲の聲は天橋も搖がんばかり　殿下は始終笑顏として微笑ませられき、期て艇は十時三十分橋立近く千貫松の沖合に停りぬ、頃さ

しき楽の中に　殿下は村木東宮武官長、東郷大将等を随へさせられ艦載水雷艇に移らせ玉ひ千貫松の艇道に新設せる桟橋より御上陸相成り、六角形の小亭に入らせらる

曳網御覧

殿下小亭にて御少憩の時水産講習所より撰抜せる漁夫十一艘の漁舟を阿蘇海に浮べ地曳網を引き揚げて地の名物たる金太郎扇の漁撈を覧に入れ漁獲の雑魚を御前近く進めたるに一々之は何魚なるやと半宮水産講習所長を召みさせ仔細に聞はせ給へるに所長其の度う御答奏りければ異人にあらすやと感れさせられ殊の外御興に入らせられたる様見受け奉りぬ

成相御登山

小亭御少憩の後腰車にて成相山に向はせられたり御登山の沿道には宮津町及び附近村落の各団体、在郷軍人、学校生徒等剣銃に堵列して奉迎す、此の日　殿下にはカーキ色陸軍少将の正服を召させ給ひ奉迎員に一々挙手の御会釈ありやがて籠神社に御到着此処にて車を止めさせられ挙手の御拝あり境内に記念松の御手植ありて直に成相の峻坂を攀ぢさせ給ふ坂は今次新設のものなれど八丁に餘る線路にして時は午に近き頃なれば供奉の面々は流汗淫漓喘ぎ〳〵道を辿る程よ　殿下には路すがら御先導の大森知事と御物語あらせられつゝ然のみは御歩の御気色もなく悠々として登らせらる途中にして供奉員一同の歩み遅ければ松の樹を以て造れる腰掛に暫らく息はせられ、東郷は如何に、日高は労れや爲つらん、安東は足長ければ山道には容易ならんなど御戯れあり再度の御休憩の頃は大森知事金く労れ果て御先導を田邊與謝郡長に譲りたるを　殿下には容れに及ばず是非にと強ひて勧め給ひければ知事は早速の機転もて知事の職務の一部を郡長に委ぬるは法律の規定にて憚ふものをと御答申上げければ　殿下には深く御笑を湛らし給ひぬ斯て指定御休憩所傘松に達せられしは正午に近かりき

傘松御少憩所

㊡　日

殿下は更に御疲労の体もなく容易に八町餘の峻嶮を攀ぢ一望瞭然たる傘松に着し玉ひ御休憩所に入らせられ今日の御登臨の榮を得て一段の鮮麗を致せる山海の景物を賞はせられしが大森知事は地圖を展べて四方の山嶽名勝古蹟の由緒など指點して說明申上げ此處にて絵葉書を獻上せり　殿下は御休憩中時々侯爵員を顧みて御物語あり深く其奇勝を賞でさせ給ふものゝ如く御休憩約三十分にて御下山御路を再び天橋に入らせられ厚榦なる新設の御便殿に御着相成りしは午後零時三十分なりき

磯清水御便殿

㊡　日

御便殿は天橋公園の中央眺望佳絶なる厚榦の地を卜し今回新設せられたるものにして其構造大ならざるも地は日本三景の一其風趣ある閑雅の一小亭定めて　殿下の思召に叶はせられしならん御便殿へ入御あらせらるゝや海軍々樂隊奏樂の裡に御晝餐を召させられ四圍の景物に一入の御感興を惹かせられしやに拜されぬ

松樹御手植

御記念の爲め當庭へアラもや松御手植あらせられし

宮津第四中學校行啓

㊡　日

午後二時侯清本御便殿御發車相成り、切戸の渡しは今回特に御召用とて町民の新調せし古雅なる御座船によつて渡らせられ、文珠に御立寄の上宮津町本町通りを東へ京街道を南へ府立第四中學校に成らせられ大森知事の

御先導にて全校階上なる御座所に入らせらる、此處に全校教授狀況の記錄及び教授實況の寫眞帳を電覽に供したるに　殿下には此二品を御嘉納あらせられ山内校長以下奏任待遇の教諭一同へ單獨の拜謁を賜ひ、それより各教室、標本室等を御巡覽あらせられ、博物、唱歌、英語、歴史等の各教室にては暑くも教授の實況を覽せられ、次に演武室にて三學年乙組の柔道、全學年甲組の撃劍等を御覽に供したるに　殿下には極めて御滿足の体にて更に大運動場に出でさせられ四、五學年生の兵式体操を御覽せられたるが其の發火演習の如き壯快なるものに至りては殊の外感興を催せられたるにや時々侍者に何事か御言葉のかゝるを拜し奉りぬ、約二十分間の久しき參觀を終始御退屈もなく御覽遊ばし後玉歩を御庭に運ばせられ後の日本海海戰記念の爲め全校生徒が競員指揮の下に造りたる東郷邸に臨ませられ、大森知事が御説明申上げたるに　殿下には御創なる東郷大將を眺め玉ひ感笑して御物語あり、山縣元帥の葬儀に際する校旗「國士魂」についても全く〳〵知事よりこの三字實に本校の調査として學風を作る所なる由を言上し、正玄關東側に植栽の御手植を賜ひつゝ再び階上に入らせられ知事等に「本校準備の完全なるを見貫に給快に感じて滿足なり」との長き御言葉さへ下され、尚特別の思召を以て　殿下の御寫眞および金若干圓を下賜され二十分と申すに御出門府立講習所に成らせられぬ

府立水産講習所　（全　日）

斯くて　殿下は中學校御出門各供奉員扈從水産講習所へ御着あらせらる講習所にては此の無上の光榮を負ふべく新築講堂の階上を清め　殿下を迎へ奉り、牛窪所長扈從しまねらせ製造實習室及び標本室等の諸設備を御巡覽相成り終わり殿下御あらせたるか其の專門の事項に至りては牛窪所長親しく御説明申上ぐるの光榮を有せり、かくて別室なる第四回府水産共進會の優等品を御覽に供し奉りたるに　殿下は爰に日本における水産業の發達を喜ばせられ最御滿足体のにて全講習所へも金若干圓を賜りたり、かくて　殿下には午後四時三十分を

云ふに還啓仰せ出されぬ

光榮の宮津

東宮殿下宮津行啓の佳日を待ち遂びたるは單り鄙諺の民草のみならず中、竹、籔の糸丹各郡は申すまでもなく遠く但馬地方より此の盛事の盛儀を拜井すべく走せ參じたる者前日來全町に充ち非常の賑ひを呈せり光榮ある今十三日の空は限もなう晴れ渡う興津海上波平に水天一碧明鏡を開きたらんが如し數暮の念に溢れたる民草は東天の曙光を待ち兼ね文珠街路に詰め懸け尖の堂より文珠に至る十數町の間は拜井者を以て早くも左右に埋を築かれぬ其筒にては誠め當日の混雜を慮う天橋內へは各團体員壹萬人を限う入らしむるととなう居たるがこれに學校生徒數千名を加へ約二萬に垂んとする大勢は八時前後に天橋內に入う其後は渡船を拒絕して嚴重に警戒をなせり、天橋內に整列せしは有役有勳者、府會議員、赤十字社員、愛國婦人會員、善事協會員、武德會員、在鄉軍人、地方名望議員、廢兵並に戰病死者遺族、第四中學校生徒、郡立女學校生徒、橋立小學校生徒等にして天橋の松原に一層の緑を添へたらんが如く一道の白砂を掃んで照映は寸白を剩さゞる程なりき、此日宮津灣內碇泊の船舶は何れも滿艦飾を施し市中の御通路には白砂を敷かれ兩側の民家には幔幕を張られ、全市到るところの日旗飾り、祝燈揭げられぬ、拜迎の鐵門及御通路の要所に建てられ町民が如何に莊嚴して奉迎に力めたるかを見るに至る、殊に異彩を放てるは中學門前の大鐵門にしてこれ全校生徒が自ら材料を校の山に求め建造したるもの爲以て全校の學風を偲ふに足るものありと云ふべし

宮津御發艦

全　日

これより前　殿下御上陸と同時に御召艦及供奉艦は水產講習所裏手沖合に廻り御待申上げ居たるとて全講習所裏手海岸棧橋より前の水雷艇により御召艦に移らせられぬ、御召艦の周に働き出さんとするや萬歳の

酋は宮津湾の四隅より湧き天地為に震撼せんとするところ艦列の速度は漸く急に御召艦の影は黒崎の東北に隠れ遠酋は高嶺の絶巓と共に遙に奉送の誠意を傾けり

水交社へ御還啓

仝　日

十三日午後四時三十分宮津御出航五時頃舞鶴湾金ヶ岬口へ御召艦供奉艦四隻艦隊相並んで入港し戸島附近の海上には警備鎮町民数十隻の小船を飾りて奉迎し長濱海岸御通過の際は鉦鼓町の烟花喜躍として揚り六時軍港御着在港の各艦庭は花砲礮を打ひ第一上陸場に奉迎したる日高長官以下衆僚に御会釈あらせられ御疲労の休もなく水交支社へ御帰館鎮守府諸官には再び皇太子旗を掲げられたり

御使差遣

五月十二日

鳳鳴義塾へ

摂政は降山ありしも八時頃よりは雨れたり御使尾藤侍従武官は軍艦を発へ京都府警部先導仝府属の誘導警官の後衛にて鳳鳴義塾へ向はる仝校にては青山臨主代理笹原家令、高等官、商議員等は停車場に其他の各部休員各生徒等は義塾附近に出迎へ御使着あるや笹原家令講堂へ案内後左の御沙汰と共に御真影及御日録を下し賜りたり

鳳鳴義塾へ御使口上覚書

勲正四位陸軍歩兵中尉子爵青山忠誠夙に忠愛の志篤く勤倹躬行自ら励んで幼年士官学校に入り後近衛将校となり以て　皇室の藩屏たる本分を盡し又農商士民の為め資を捐て校舎を設立し一意忠良の養成に盡力せり

皇太子殿下には本校創立以來塾員學生等亦克く子弟か勤儉尚武の志に基き既に優多の忠眞を出せしを聞食し深く御欣尚あらせられ今回山陵道行啓に際し特に本縣を御差遣に相成り實況を視察せしめられ特別の　思召を以て御真影並に御目錄を下賜せらる

抑も皆英は國家の重事たり　殿下には塾員學生等の將來益々國家の爲め勵精あらんことを望ませ給ふ

鎭守府へ

午前十一時半　殿下は中山東宮太夫を鎭守府へ御差遣相成り目黒長官へ左の令旨を賜りたり

令旨

舞鶴は帝國北岸の要鎭たり今親しく其に臨んで造營の事業着々筆捗し軍備の整頓亦其緒に就くを視て深く之れを欣賞す各員益々勵勵以て將來の大成を期せんことを望む

海軍病院　下士卒家族共勵會　共濟會病院へ

秋澤東宮武官は御使として臨場令旨傳達せられたり

伺鹿郡是製糸會へ

秋澤侍從武官は陵參拜より御下車全製糸場へ臨まれ有難き令旨を傳達せられたり

加佐郡立高等女學校へ

五月十三日

黒水侍從武官は全校へ御使として臨まれ有難き御言を傳へられたり

與謝郡高等女學校へ

尾藤東宮武官は　殿下宮津行啓の際特使として全校へ差遣せられ令旨傳達あらせられたり

國幣中社籠神社へ

全社へ特使差遣せられ幣帛料若干供進あらせられたり

御陪食者

十二日午後七時より御旅館拝謁室に於て陪食仰付られしは左の諸氏なり

東郷大将　齊藤海相　吉川侍従長官　日高長官
中山丈夫　村木武官長　安東師團長　木戸侍従長
古賀警保局長　平井鐵道總裁　桂　主事　閑本要塞司令官
伊勢地參謀長　岡野參謀　別府副官　中澤工廠官
桝永水雷團長　池中海兵團長　梶川港務部長　戸祭病院長
佐藤機關長　有馬第一艦隊司令　山下參謀長　小泉鹿島艦長
井手香取艦長　有田磐手艦長　秀島十三驅逐隊司令　磯野十四驅逐隊司令其他七名

御下賜

一御紋章付三ッ組銀盃　一組　　海兵團
一仝　上　　水雷團
一金參百圓　　水交社
一酒肴料金一封　　要塞司令部
一仝　上　　仝將校集會所
一金百五拾圓　　新舞鶴町
一金百圓　　餘部町

献上品

一御菓子一包　　舞福、能部、新舞福行啓事務關係者
一全　上　　與謝郡獅垣委員
一御菓子料金若干　　京都府及町役場吏員の行啓事務に關係者
一全　上　　加佐、與謝、天田三郡壯兵及遺族八十九名

一酒肴料金一封宛　　行啓關係の各町村長
　　八十歳以上高齢者三百五十四名

一金子一封宛　　義僕林　藤造

一全　上

海軍病院
共濟會病院
家族共濟會
鎭守府下士卒集會所
國幣中社建神社
文珠堂
成相寺

一寫眞帖　一冊　大森京都府知事
一奉獻記事　一冊
　附記淸本文庫編纂丹後誌ヌリ

一盆栽　數鉢　加佐郡農會
一三尺幅紋羽織カケヲ緞　一打　丹後織物與謝郡仝業組合
一縮緬　二匹　宮津町
一千羽　一百個　成相寺住職小野永照
一丹後縮緬　二匹　丹後織物商業組合
一仝上　中郡仝業組合
一縮緬兵兒帶　竹野郡島取村川戸半藏

一硯箱　一個　牧野子爵（舊田邊藩主）
一文臺　一個
　附記該二品は子爵家重代の寶物にして田邊城中にありし細川藤孝が古今傳授の墨を料とし製作したる歷史ある貴重品なりと

一千代紙　若干　加佐郡
一各種の製紙　若干冕　仝郡製紙講習所
一日本畫　一幅　宮津町　內山文澄（謳伯）
一和歌百三首帳（詠進者代表）　仝町　鱒賀關淸證

一 寫眞五葉（舞鶴港域を寫眞にせしもの）　舞鶴丹波町　長谷寫眞館

高齢者献上品新舞鶴及舊舞鶴町の分左に

新舞鶴及舞鶴

伏見松、瑞寶松の盆栽　日下部一如　手製煙草盆　高橋兵右衛門　手揃丹袋　堀端とめ

手縫刃袋　米盛萬藏　手織白木綿　岡輪武平次　同　西川ねぎ

舞鶴軍港行啓御次第

第一日

一 正午在港軍艦は軍艦香取に準ひ滿艦飾を施す

二 當日午後服裝は武官禮服文官は「フロックコート」とす

三 午後四時三十分新舞鶴驛御着車

四 御着車の際在港の諸艦（第一區在泊のものを除く以下同）は軍艦香取に準ひ皇禮砲を發す

御着車の時機は舞鶴第二見張所に於て旗分前に信號を揭揚し置き其降下を以て之を報す

五 鎭守府參謀長、參謀一人、艦隊參謀長、參謀一人、各艦團長は停車場内にて奉迎す

六 軍港所在海軍高等官、奏任文官、判任文官勤務に差支なき下士卒（無銃隊）及儀仗兵は別圖指定の位置に整列奉迎す

七 儀仗兵の編制及配置は別表に依る

八 艦團より出す無銃隊は士官（艦團以外の艦より出す無銃隊は奏任官着は先任下士）之を引率して指定の位置に整列し海軍中佐官士奉侍次第之を統率す（以下之に同し）

九 御道筋は停車場より御馬車にて三條通大門通、東門を經て順路水交社へ

十　御着艦の後左の通

警部騎馬　御馬車　御陪乘東宮侍從長
東宮武官長の一　馬車東宮侍從東
宮武官侍醫
馬車東宮太夫東宮武官長
又は侍從長東宮主事　知事馬車又
は騎馬　警部騎馬

列外非番供奉高等官地方警察官其他

十一　御着艦後直ちに御出發あらせらるゝ筈なりしも風浪高きに因り御着艦後約一時間にして御出發あらせられたり

十二　水交社御着のときは鎭守府司令長官同幕僚艦隊司令長官同幕僚參謀副官長官御便殿にて鎭守府司令長官御先導のこと

十三　御着の後拜謁を賜はるべき諸官左の如し

一　五等官以上及各艦艦長（單獨拜謁）

二　六等官以下高等官及從六位勳六等以上（御通御拜謁）

十四　水交社御着のとき皇太子旗を鎭守府旗竿に掲揚す

第二日

十五　午前　鎭守府海兵團水雷團に行啓　病院へ御使差遣

十六　正午　鎭守府に於て御晝餐

十七　午後　工廠に行啓御通路より軍艦阿蘇丹後御巡覽第一船渠南側波止場より御乘艇（長官艇）港內御巡覽第二上陸場より御歸館

十八　港內御巡覽の節は鎭守府司令長官御陪乘港務部長御先導各艦長供乘、港務部長及各艦長の乘用艇は追て定む

十九　當日　殿下御通行（際）のとき行ふべき敬禮は海軍敬禮式第六十二條末項に依る行啓團員の服裝は禮服とす其他は平常の通信艦船に在りては當直勤務に服する團員のみ通常禮服とす

第三日

二十　午前八時（豫定）水交社御出門西門より要塞司令部へ行啓の上錦江灣埠頭より汽車にて阪鞆鐵道波止場に御着此處にて驅逐艦追風に御乘艦同九時宮津へ行啓驅逐夕風先導白露朝潮供奉のこと

二十一　午后六時（豫定）驅逐艦追風にて軍港御着第一上陸場より御歸館

二十二　御召驅逐艦入港のとき行ふべき敬禮は海軍敬禮式第六十二條末項に依る、

二十三　御召驅逐艦供奉驅逐艦御召艇及供奉員用艇乘員の服裝は通常禮服とす其他服裝第二日に同下

二十四　鎭守府旗等に掲揚の皇太子旗は　殿下西門御通過の後之を撤し水交社御歸館のとき之を掲揚す

第四日

二十五　午前八時在港の軍艦は軍艦香取に準ひ滿艦飾をなす

二十六　服裝第一日に同下

二十七　午前時分水交社御出門第一上陸場より御乘艦此時鎭守府旗等の皇太子旗を撤す

二十八　軍港所在海軍高等官並士官判任文官（當日出港の艦艇を除く）勤務に差支なき下士卒（無統隊）及儀仗兵は別圖指定の位置に整列奉迎す

二十九　御召艇の御先導は艦隊司令長官とす

三十　御召艦第一上陸場を離れたるとき（呉崎第二見張所の信號を下す）各艦船旗等に準ひ皇禮砲を發し海軍敬禮式第六十二條の敬禮を行ひ在港各艦長供奉し鎭守府司令長官は御召艦に奉伺す

三十一　御召艦の發港は午前時分とす

三十二　御發港の節在港艦船は所在先任艦に準ひ皇禮砲及海軍敬禮式第六十二條の敬禮を行ふ

三十三　水雷艇隊一隊をして御口遊供奉警衛をなさしむ

三十四　滿艦飾は在港先任官の信號に依り撤去す

儀仗兵編表

儀仗隊一大隊

中隊長中佐
副官
下士
中隊長
中隊下士
給與下士

海兵團音樂見島水雷團海兵團

小隊長
小隊
信號兵
軍醫
看護

海兵團音樂見島水雷團海兵團

非置儀仗衛兵司令は皇太子旗の揭降を監す

新舞鶴町及び軍港内奉迎惣の位置左の如し

奉迎の位置

軍樂隊（新舞鶴停車場前西側）儀仗隊一大隊（三條通衣笠南入西側）地方團体、學校生徒、高齢者、在鄉軍人、合計四千餘人（三條通西側）人民奉拜者（大門通西側全部）鎭守府關係内家族（大門通東側）下士卒無銃隊四千人延長八百間（大門より海兵團下迄右側）判任文官（工廠通路同）雇士官、文官、高等武官（鎭守府通路）婦人會員（港務部通路口）儀仗衛兵（水交支社院内入口）長官及僚將、親任官及勅任官（全院内）

奉迎の位置

長官、親任官勅任官（本妥支社院内）　儀仗衛兵（全社院内入口）　婦人會員（鎮守府上り口）　無線隊（鎮守府通路入口より經理部前右側）　判任文官、屬、傭、儀仗兵（憲兵部前左側）　准士官、高等文官、高等武官（全上右側）

光榮の街

さし昇る朝日の御影も今日ばかりは最も鮮に仰がれて四圍の風物自ら異れるが如き心地せられたり今當日の有樣を摘記せんに倉部町民が熱誠を龍めし幾個の緑門喜びの色濃りてこの下を潜る心地好さ本町通りより西大門通りへかけての大路南側の民家には何れも新らしき白に淺黄の縞幕を張り帝氣時を語つて清淨の境となり往き來るさの人多くは禮裝をなし暑色滿面に溢る鎭守府西門の前に巍然たる模擬石造の牌樓門を設けられ菊花を天邊に揭げたる打仰ぐだに神々し門内に入れば海兵團練兵場には土俵其他鉄興の設備さま〴〵あり海兵團の東手なる小丘の半腹に電燈裝置にて現はされたる菊制の御紋章を左ちへたる點火後の光彩美しなんどいふばかりなり數十の艦船は滿艦飾を施し海上に一の牌樓街を作れるさま壯觀の極とや云はさし屈築幹の階折なる海岸には幕翅に圍み小島を築きこれに碇門を横へ其上に松を見せたるさま『龍宮』の立札さゝやと首肯れて興ある武庫の庭内には丹鶴を見せたる巧緻の作物あり其他さま〴〵の作物等あり東門外に出で新舞鶴大門通りに到れば此處も同じく國旗、幔幕、球燈を以て滿街を飾られ御順路の中央には白紙を敷べたる如く砂を敷かれつ白糸橋畔の鳥居形牌樓門これまた一異彩を放てるもの三條通りには處々街路に大國旗を交叉し遙に之を望めば國旗の街とも云ふべく停車場は緑草を以て棟木柱等を覆ひ回々紅黄の菊を飾ト柱の下半ばは紅白の布を以て捲かれ軒端には無數の紅提灯を吊されたり

各府縣の新聞記者へ鎭守府より通門證明券を渡され從來自由に軍港内を出入するの便を與へられたり當地の公衆旅館等は勿論車夫、人夫に至るまで多忙を極はめざるもの無きが中に忙中の忙と云ふは京都府出張所と新舞鶴郵便局なり京都府出張所は鎭部町龍朝館に設けあり在泊軍艦より夜に入りてはイルミネーションを施しサーチライトを放ちたれば港内の壯觀云ふばかりなく

午後七時より舞佐部直部の各小學校生徒數千名は海兵團練兵場前に集合提灯行列の隊伍を整へ鎭守府參を御座所前近く進みて萬歲を三唱し港務部下より再度練兵場に出で此處にて解散せり、市中も當夜は各戸球燈に點火し人出多く未曾有の賑ひなりき

聯合運動會

三舞鶴及東部各村の尋常高等小學校聯合生徒三千二百有餘名の大運動會は當日午前九時より新舞鶴町海岸埋立地に於て開催鎭守府、要塞の各高等官、地方高等官其他數百名へ案内狀を發したるが東宮殿下は水雷團より御覽相成るべしと今該運動會の次第を擧ぐれば左の如し

午前九時開會一同君が代の唱歌次に會長（部長）開會の辭を述べ夫れより演技に移る

午前の部

一　徒歩競爭　二百米突男　二　仝　上　二百米突男
三　球拾ひ徒歩　百米突女　四　仝　上　百米突男
五　平和の舞　新高女　六　障害物競爭　二百米突　高等男
七　仝　上　仝　上　八　球入れ　東部尋常一、二、男女
九　旭に匂ふ　新舞尋常一、二男女　一〇　カラスハカー　鎭尋常一、二男女

一一　障害物競爭　三百米突　高等三、男
　　午後の部（零時開會）
一三　アンビルコースス　新尋三、四女
一五　千島競爭　東部尋三、四女
一七　仝　上　百五十米突　尋常二、男
一九　球つき競爭　三百米突　餘高一、二女
二一　徒歩競爭　百五十米突　尋常三、女
二三　帽子とり　東部尋三、四、男
二五　服裝競爭　二百米突　新高三四女
二七　棒倒し　新尋三、四、男
二九　棒倒し　高等一、二、男
軍歌を唱へて行進終て閉會

祝賀宴會

日高鎭守府長官は山陰道最後の行啓を機として開廳以來始めて鎭守府行啓の榮を祝賀する爲め十二日東鄕大將、齋藤首相、中山文夫、有馬第一艦隊司令長官、安東第十師團長、村木武官長、木戸侍從長、大森府知事、古賀警保局長、關元舞鶴要塞司令官、中澤中將、松本、伊知地、椙川、山下の四少將其他各團隊長、地方高等官等約八十名を鎭守府に招待し正午より宴會を開きたるが　殿下には特に御臨場の榮を賜ひたれば一同の面目身に餘り東鄕大將の發聲にて　殿下の萬歲を三唱し後鎭守府樓上の便殿へ入らせられしが宴會中海軍婆樂及樂隊の假裝舞踏の催しありしが假裝舞踏は殊に　殿下の御氣に召し始終笑傾けて

一二　仝　上　四百米突　高等四、男
一四　春野の小草　餘尋三、四女
一六　徒歩競爭百米突　尋當一、男
一八　七夕競爭　二百米突　新尋高一、二、女
二〇　攻撃ガッツア　舞高女
二二　仝　上　二百米突　尋常四、女
二四　看護競爭　二百米突　餘高三四女
二六　ヒヨドリ越へ　餘尋三、四、男
二八　華遊舞　餘高女仝
三〇　スエーデン式体操　高等三、四、男

便殿より御覽遊ばされたりと洩れ承る恐くて一時三十分散會せしが舞踏番付は左の如くなりし

假裝舞踏

一番國ポラッカー　二コチャンクワドリール　三ワースラア

序列

一（海兵士官　洋裝婦人）　二（高等文官　奥方）　三（露國水兵　看護婦）　四（紳士　官女）

五（支那兵士　大臣女）　六（蘇格蘭兵士　洋裝少女）　七（赤毛布　田舍娘）　八（日本紳士　老婆）

九（法界坊男　右女）　十（大學生　女學生）　十一（印度紳士　ボンチ）　十二（庄屋　洋裝老婦）

十二日夜の光景　未曾有の提灯行列

舞鶴海軍工廠の職約五千人は挙國の誠意を表すべく大々的提灯行列を行へり今その狀況を記さんに水交社なる御旅館の前に面したる方には三千燭光位のアーク燈數個を點ず此處に海軍樂隊の奏樂嘹喨耳を貫くが如し御旅館の高地と相對して四五町を隔てたる海兵團の丘の麓に造られたる直徑二丈許りなる菊形の紋章にイルミナーションを施し之を基點として右方一帶の高地約半里の間イルミナーションを續けたり置し各屋根は闇として燈なく海面暗黒なるに反して陸上一帶の地は晝の如し是れ既に一大壯觀なり殊に處へ七時頃より東門西門の兩方面及び工廠の方より發砲の球燈綿續として漸次に現れ來り海兵團經理部前の廣場に集合し入り亂れて旋轉せし時は火山の噴火の如く怪まれたるが海兵團の大イルミナーションと相映ずて壯觀奇絶、午後九時に至り萬歳の聲天地を搖かさんばかりに起るや忽ちにして此の一大火塊は動搖を生ず光來し三身にヲの遊るゝ如く別れ去る是に至つて壯觀壯、奇觀奇、實に

舞鶴港塞前の大壯觀なりし

其計畫の主なるものは海軍の徽章なる錨形を人と提灯とを以て擁し出すものにて造艦部職工其中軸となり右翼二行は機械工場員左翼二行は造兵部職工下の爪となる所は製鐵工場及び船渠船具工場員にて充てられ　殿下は御便殿檣上にて覽せられしと

御通過遙拜

東宮殿下今次行啓は山陰衆庶の伺拜し奉る所なるが奥丹後には其光榮に浴する能はざるしかば竹野郡民は擧々全郡後茂川港に參集し十四日舞鶴より是へ向はせらるゝ御途次其沖合を通過あらせらるゝを機とし烟火を打揚げ遙拜し奉りたりと洵に殊勝のことゝ云ふべし

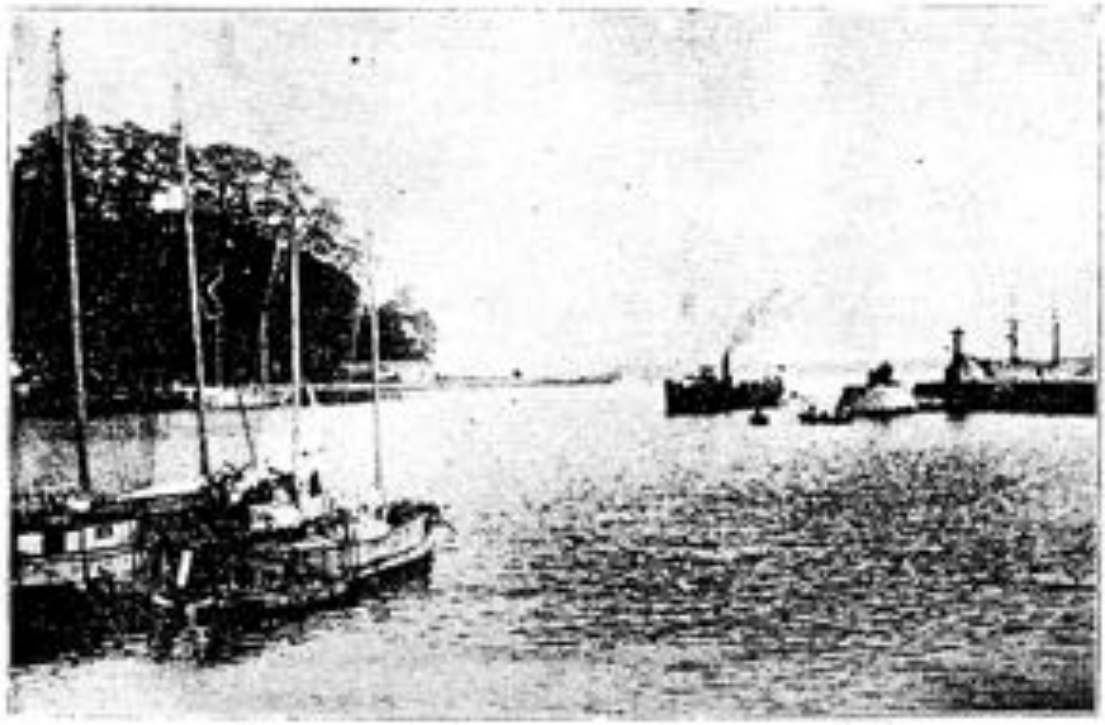
舞鶴御發艦

五月十四日

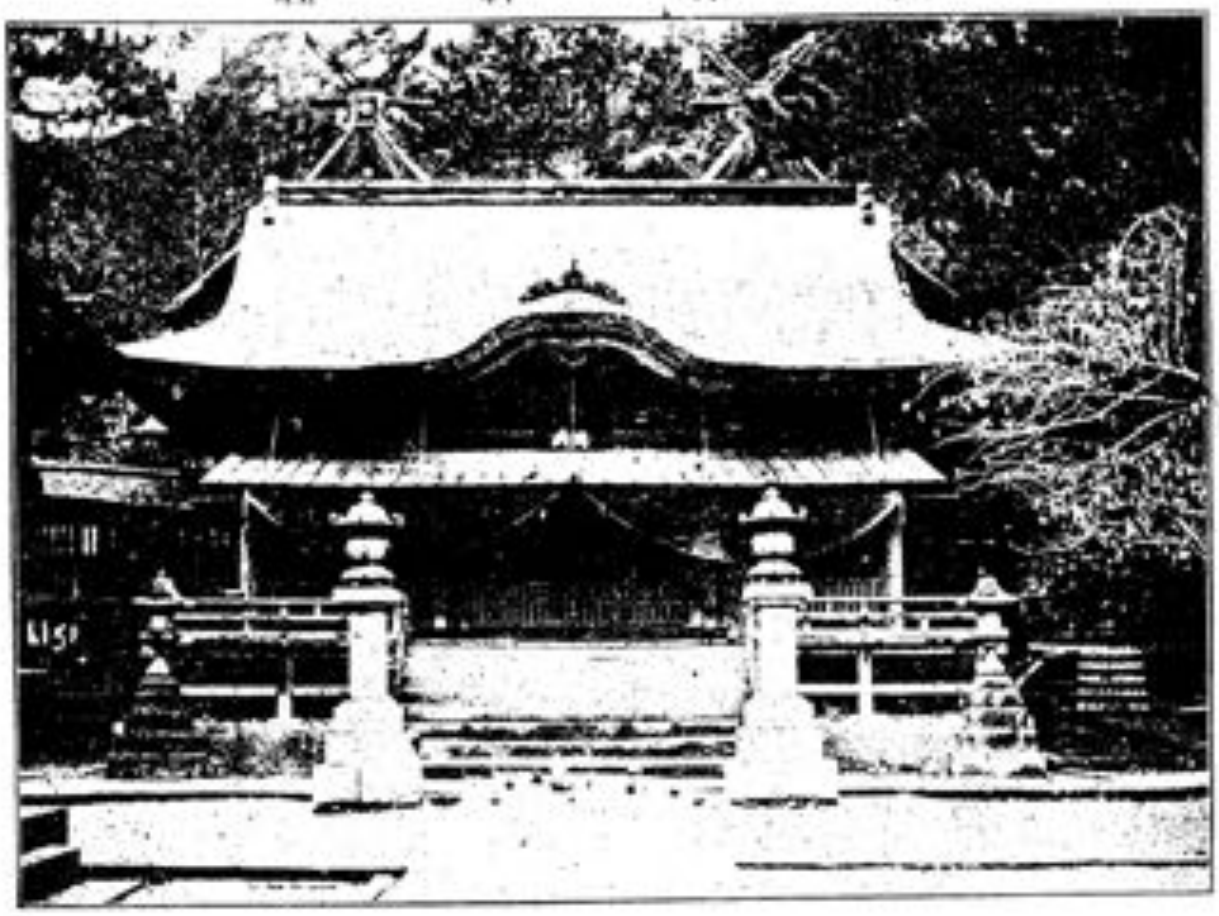
藍青の雲榮光を衆めて十四日の天は明けぬ午前八時に先つこと十分第一艦隊旗艦香取より號令の喇叭一聲響くや在港各艦艇は一齊に滿艦飾を施す港内の壯觀眼も覺むる許りなり殊見る光榮ある御召艦能登呂は一座の緩席の如く沖合艦町の處に從し供奉艦香取、磐手竝として其背後に在り　殿下は八時御座所なる水交支社御出門此時各艦艇は殷々として二十一發の皇禮砲を放つ日高長官は　殿下を第一上陸場に御先導申上げ殿下には白軍少將の御正服を召され御機嫌最も麗はしく御見送りの齊藤海相、日高長官等御陪乘長官艇に移らせらる供奉諸員及び奉迎の高等官等は五隻の小蒸氣船にて長官艇に尾す　殿下の能登呂に御坐乘相成るや供奉艦艇以外の各艦艇は皇禮式を行ひ敬意を表すること先き八時卅分第五艦隊旗艦朝潮、霧、朝風、子日を先頭に第一艦隊旗艦吹雪、薄生、有明、霰の四隻第四艦隊旗艦、雷、電、曙第十艦隊旗艦東雲、薄雲、霞等は舳艫相並んで戸島附近に出で第五第一兩隊は右方に第十、第四は左方に二縱列を作りて御通過を乘待す斯くて

殿下には午前九時を以て御發艦あらんとするや各艦艇は再び皇禮砲を放ち齋藤海相、日高長官等は御召艦御座所に於て御暇乞申上げ退艦しつ　殿下は艦橋殿々の中艦橋に立せられ奉送議員に御會釋あらせられつゝ御壯快の御氣色に拜し奉りぬ、扨に艾舞鶴にては巡洋二隻を組みて一艘とし各裝飾を凝し總數五十組に分乘し午前四時三十分高野川尻を發し經島の北方に整列し海濱に於て煙花を打揚げ新舞鶴町及び鹽濱町も各數十箇の船に國旗を飾し島を背後に一帶の陣を列ね餘部町は長濱に於て煙花を打揚げたり殊に新舞鶴町愛國婦人會の娘子軍が白襷黒紋付の揃ひにて海軍御用艇に乘組み居列びたるは氣高く美しかりし時に觀衆は數々として名殘を惜むものゝ如くなりしも須臾にして滿れ數百隻の奉送後方此方に搖き浮びて落花流水背海原に散くが如く其美觀云ふばかりなし午前九時三十分水雷艇四四、四五、四六、四七、四八の五隻先導し次で驅逐艦白雲、朝潮を先驅に朝霧、追風を後驅とし旗艦香取は中將旗を檣へして先驅し皇太子旗を翻へしたる御召艦鹿島之れに次ぎ二隻の姉妹艦巻雲山の間ぎ出たらん如く威風堂々として相竝後し供奉艦磐手後驅と爲つて現はれ來れり此際日本海を撫てゝ迎へ來る北風は習々として金ヶ崎沖しと雖し大小數十隻の艦艇浮弋の餘波は一高一低木の葉の如き數百隻の奉送船を揺動し萬歳の聲、絶頂に達し歓呼者も奉送するものゝ如く奉待の驅逐艦は皇禮式を行ひ　殿下は時々奉送船に向はせられ會釋多くも擧手の御會釋を賜はりしが十時各驅逐艦は御艦列に先んじて港外に出で艦列は博奕時を過ぎ丹後沖に出るや二十五隻の大艦小艇縦列を作りて御艦列に尾し遙かに五十浬の沖合なる經ヶ岬まで奉送し此處に再び左右に開きて御艦列を接き一回轉各艦首を御艦列に向ふて迎へ奉り三たび皇禮砲を行ひたり其壯觀、偉觀、盛況を極む時に　殿下は東郷大將以下供奉員の總てを從へさせられ司令塔上の艦橋に立たせ給ひ奉送の各艦艇に向つて擧手御別れを告げさせられ香取、鹿島、磐手の三艦は奉送艦を殘し西北方に針路を取り濛煙漸々水か天か彷彿の間に沒し去り歓呼の白帽振を振ふて飛去を見るのみなりき

美保灣圖



美保神社



御着艦假泊

五月十四日

本日御着艦と待ちにし雲伯の沿岸一帯の民人は朝來海岸に立出で偏に東方に向て翹手凝望待ち焦がれ居たりしが午後二時の頃美保の鼻地蔵崎燈臺見張所より東方に當り水天髣髴の間に漸く數條の煤煙を認むとの報あり同五時半に至て始めて御召艦の一隊なる事認定されたり茲に於て島取縣知事一行は境より島根縣知事一行は美保關より小蒸に乘りて御到着を待受けたり屢て東方を眺れば三條の黒煙は分明に認めらる艦隊の赤崎沖を通過する頃には右側に香取中央に御召艦龍島、左側に磐手の位置にあるを明瞭に認め三艦は梯陣に波濤を蹴て進行し來りたるが浮標に達したる頃より單縦陣に變形し此時御召艦の後方檣頭には皇太子旒揚揚せられ西北の微風に翩翻たり朝汐、白雲、追風、夕風の四驅逐艦隨從供奉す浮内は巡航して六時過る頃長濱沖に達し香取を先頭にして鹿島は中央に磐手浪艦の位置を占め白雲以下の四艦其附近に接續護衛す艦隊往復の間もなく島羽丸は御召艦に到り松永知事、藤本、堀田、木間の三事務官、保田警視、吉川八束郡長等は左舷より乘船し古賀警保局長、山田島取縣知事、和田事務官、西村警視、杉山、田島兩技師、箕田中尉等も龍揚丸にて同じく本伺せしに　殿下には海上何の御恙もあらせられず艦尾なる艦内御座所に於て各高等官に拝謁を賜はり優渥なる御言葉ありしやに承るも畏けれ

夜景御覽

東宮殿下には御召艦上より浮内夜見ヶ濱の篝火美保灣漁火の光景を覽はされ何れも日本海の花なりと御嘉賞あり御機嫌殊に麗しかりしといよ

御乘艦中の殿下

東宮殿下が近來非常に御壯健に渡らせ給ふ事は屢々耳にせし處なるが艦中に在す間も御坐所に靜坐する

を好ませ給はず甲板上に幾回か玉歩を運ばせられ渺茫たる日本海を望ませられ東郷大將、有馬中將等を召みて種々御下問あるなど更に倦ませ給へる御様子も無かりしは御見學の爲め行啓とは申しながら御肚健にましますとて供奉の人々も最と打喜ばれしとなん漏れ承るだに無上ふ日出度ころ思はゆれ

山田知事献上

仝知事は御召艦に伺候の際左の品を献上せり

鳥取縣管内地圖
鳥取縣治一覽
因伯紀要
御料用編絵若干

又軍艦香取を訪問して地圖繪葉書絵体へは酒若干を寄贈せり

美保關の設備と夜の光景

奉迎煙火

艦隊の海面に達したる時獅子ヶ鼻附近において五發宛は同夜八時より九時（御就寢）までの間に十發の煙火を打揚ぐ之は境川郡古志村の名手木村喬の製作に係り素然天空高く彩花を散したるは當時の皇感慨とも稱すべき壯觀なりき其の種類は左の如し

第一號砲に國旗△第二號砲後黒煙群花△第三號に日光より黒煙分煙の曲△第四號柳葉煙消去て柳に駒の曲△第五號後五彩煙去て黒煙柳の曲

●夜

第二雷機田毎の月△第二卿に分星の曲△第三雨中三足鶏龍より二分星の曲△第四春の棚△第五卿間に残る緑色遠星今曲（緑光の月去て日光消へて卿火竹月隠れて鶏龍去て二分星の曲）△第六五色の鶏火廻△第七富枝棚△第八祝砌星引分火の曲△第九星夜に残る分卿の曲△第十祝聲に灯燈行列の夜景

美保関尋常高等小學校生徒は獅子鼻に於て整列奉迎し沿岸拝観者場をなし水難救済會の教命艇三隻は何れも満艦飾をなし縣會議員諸氏之に乗じて奉迎せり

御召艦護衛

島根縣警察の手を以て御召艦附近は嚴かに警戒せり

美保灣の漁火

六時過き御召艦以下の各艦長浜沖に投錨するや豫て準備を整へありし美保関、森山兩村の漁火舟は何れも艦頭に出し東美保関より列を發せるものは順次西方沖合に出して投錨各艦の前手を西に進み又た西長浜より列を發せるものは東沖合に進みて順次東し遂に美保関より來れるものと共の先頭を合し單縦陣の隊形を整へたる上恰も日の暮るゝを待て各艦一斉に點火したり

美保灣の壯觀

御召艦鹿島を始め香取筑手の三艦は全艦のイルミネーションを點ずる各艦マストは勿論艦体全部の點火なれば遥々として實に一大不夜城の觀を呈し又美保関の右火船は長浜美保関の南方より漕ぎ出し西伯東伯兩郡一帯の沿岸には篝火を焚き海上奉迎の船舶亦何れも點火し遠近相應じ上下相映じ一望の光景燦然として人目を眩せしめ山雲覆き海若躍る美保灣空前の壯觀美景筆ふるに物もあら寸各艦は十時頃電燈を撤

したり

美保關

道路には繩砂を布し各戶國旗球燈を吊り橋には鳳を染き幷額に笹竹に注連を張れり櫛山宮司庭には幄幕を張り道路を清掃せらる有名なる五本松頂上には高さ數丈の大國旗翩々として中空に翻り幷觀人は各旅宿に充滿し近來の盛況を極めたり

御使差遣

美保神社へ御使

五月十五日

本日早朝古川郡長志谷警部は出迎として鳥羽丸に乘し御召艦に赴き續て午前七時頃鹿島の貯藏水當にて御使侍從廣文子爵は仕人一名外一名を隨ゑて宮の濱に上陸したる假橋には笹竹、幷連飾、砂盛等をなして

本間郡務官　保田警視　櫛山宮司　櫛山美保協會長　淸水主典　小濱村長　安達巡査部長

等出迎ふ一行は一揖の後保田警視先導し古川郡長の案内にて直に宮司庭に入る幣帛料神饌料を呈せられて小憩の後佐々木編宣の先導にて參拜せらる神社にては例來の通り戰役の當時東鄕甲閼兩司令長官より獻幣されたる五色絹を社頭に立て壯觀を極めたり儀式は先づ神門內にて手水の後次に本殿行事、夫より幷殿玉串を獻して下殿再び宮司先に入り直會の饗を受けらる此時宮司より美保關を寫せる繪葉書靑柴垣神事大形寫眞獻上あり九時前頃庭船に搭じ志立縣屬同行して境に向はれたり境港には小學校職員生徒村公務員赤十字社員愛國婦人會員其他三百數十名來迎せり

神社修繕

故松江藩主松平定安公の寄進したる美保神社拝殿前の大額、定安公自筆にて今回行啓を記念として松平家より修繕せられ社頭大に光彩を添へたり

黒木御所及後鳥羽院御陵趾へ御使

東宮殿下の御使として有馬侍従一行の搭せる追風、朝霧の二艦は當日午前十時黒木村別府湾に投錨せしを以て黒木中西村長は新造編艇を以て直に朝霧に伺候し出迎を為し後檣の両側旗場には黒木、福郷二村の赤十字社員、愛國婦人會員等を始め一般の出迎者約二千五百名に迫り御使は村長の案内にて登山し新築の小憩所に於て休息中茶菓饗應等を為し行在所に関する追懐等を御覧に供したり尚ほ小舟中同村屈指の壮者二十名を撰抜し紅白二組に分れ二艘の漁船を以て競漕競爭を行ひたるに決勝點間際に至り追風、朝霧の両艦より喇叭を吹奏して勢援し壮観を極めたり御使は村長の請に應じ行在所跡玉垣内へ榊を手植し終りて午前十一時乗艦菱浦に向ほる同十一時二十分同所に着艦するや小谷村長を始め海士、知夫両村の赤十字社員、愛國婦人會員其他各團体員一般有志者等多數出迎ひたり御使は大塚西郷署長先導し影山福郷分署長被護し午前十一時四十分海士村後鳥羽院御火葬塲へ参拝玉串を献じ終て右行在所御跡に回みありと傳ふる香無松の後代として雄松を手植し終て村上助九郎氏方に入り晝餐後同家寶物を見、午後二時十分發二時四十分菱浦に着し乗艦の上三時西郷に向はれたり

隠岐島廳御使　　五月十六日

御使有馬侍従の一行は島前菱浦より編逐艦朝霧に搭し護衛艦追手と共に十五日午後四時三十分島廳所在地西郷湾に入るや隠岐水産組合の改良漁船マニ號は直に湾口へ漕出して一行を出迎へたり上陸塲には新たに三間と五間の棧橋を設け大アーチは空中に聳へ町内御道筋は一面に砂を撒き各戸は日章旗を掲げ極力熱誠を表したり又棧橋附近には各高等官、屬官、各町村長、町會議員、町内有志者、學校職員生徒等

山の如く出迎ひたり御使は上陸後一行を従へ富豪池田源治氏方へ投し一泊せらる此夜隠岐有志者の發起により両島遙拜等館員を招待して手饌長に饗應警を張り下士以下には酒肴を贈れり

十六日午前八時西郷署長先導となり東島司車乗先ゐして御使有馬侍從は住人隨從遊佐後藤屋館出門隠岐島廳に臨み有難き令旨を傳へられ話事の諸下間ありて後議員に拜謁を賜り夫れより西町調練場に設けられたる隠岐名物の闘牛場へ東島司と共に馬車にて送られ闘牛數番を觀覽の上歸館午後一時各公吏職員生徒に送られつゝ御宿舘直ちに出航せられたり東島司は御使全乘送迎せり

境御上陸

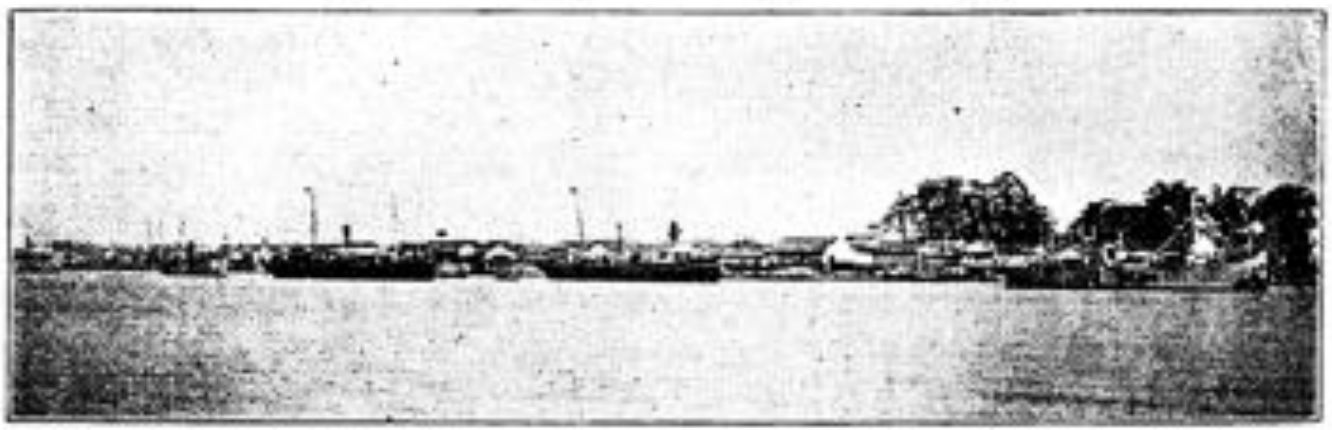
十五日の朝は來れり天は水の如く海は天の如く打澄みて西の微風僅に拂ふよりのみ平穩近來に無き日本晴の好晴なり碇泊の諸艦は午前四時無線電信により發する總員起床の號令發せられ次いで午前八時軍艦扶桑艦長の業の間に艦員は最敬禮を行ひ次で八時三十分鹿島の艦載水雷艇に御影乘あらせらるゝや各艦より二十一發の皇禮砲は打響きて殷々山河を震撼す艦員登舷禮を行ふ

境町にては今は御上陸背もあらせられさるべしと早朝より整列せる本迎者は思ひ〳〵の心かせたり港橋附近は漸く紅色たちて紺影劍光眩に燦はしくこれよりさき海軍儀仗兵三百餘名上陸し港橋より御通路なる相生町にかけ二列に整列し正裝せる海軍將校は之を指揮せり

御上陸場橋には安東第十師團長、鷲崎同參謀長、平井鐵道隊總裁、古賀警保局長其他高等官御出迎を爲し御豫定の如く午前九時香取の艦載水雷艇先づ進み次に皇太子殿下を奉げたる御召艇（鹿島艦載水雷）徐々として波を蹴りて進み次に鹿島供奉艦の艦載水雷艇後衛し港橋に着御此時また二十一發の皇禮砲は轟きわたり殿下には御上陸奉迎の諸員に對し御會釋あり直ちに御馬車に召させられ木戸侍從長陪乘す殿下の御服裝いかにと拜し奉れ

通岸海境

景全港境



ばカーキ色の陸軍少將服に大勲位菊花大綬章、功三級金瑪勲章を佩びさせ給ふ此時海軍艦隊は號砲として君が代を奏し儀仗兵は整列して最敬禮を行ひ奉迎者は熱誠なる敬意を表して壯嚴の狀筆舌に盡し難く警部先驅に次いで儀仗兵騎馬にて鉦を撃へて進めば美しき二頭立の玉車は靜に輪を轉し出し給ひ玉顏麗はしく奉迎者に對して長くも拜手の御會釋あり次の馬車は本多高辻兩侍從尾藤武官伊勢侍醫次は中山東宮太夫、村木東宮武官長、桂主事次に山田鳥取縣知事(馬車)儀仗兵の順序にて兩側は盛々として進む次に列外先導人車にて進むは海軍通常服に功一級金瑪勲章を左胸に帶び其眼其口邊見るからふべくもあらず東鄕大將老練手拳手の禮を爲し其伏目靜なる謙遜の態度は今更ながら床しく覺ゆ次に東宮職高等官、判任官御上廻、安東御團長、古賀警保局長、平井總長、安島第十聯隊長等次に正裝せる有馬第一艦隊長官、各縣長官、地方事務官、縣長各代議士縣會議員縣判任官數名新聞記者屬從し無論常高等小學校なる御休憩所に入らせらる有馬長官以下は御暇を申して歸艦す全校へ御寫眞と金瓦拾五圓御下賜あり

境の設備と雜況

燒火と烟火

當町に於ては美保灣御著艦と全時に烟火四發を打揭げ午後八時より舊奈地にて焚火を爲すを相圖とし西伯郡逢阪浦に至る海岸に半圓形を作り二町毎に焚火を爲す延長十餘里八時より九時半に至る實し各地御慰物中の最壯觀ならんとの評あり

御休憩所

境小學校構內に道路に沿ひて建造せらる當初は庭內の一部適當の位置に建造する筈にて表門を建設せしも砂土にて御馬車を乘入ること困難なる爲め此位置を選びたるなりと同日二圓奥行五間檢溜も貳間よ

り成り奥の間は御便殿一段高くし金屏風を折廻はし次を高等供奉員の休憩所とせり將來全校の御眞影當に宛つと云ふ元來境町は御上陸直ちに御發車の御豫定なりしが町民は深く之を遺憾とし町長杉谷氏等を始め非常の熱心を以て盡力せられし結果特別を以て御駐車相成ることゝなりしもの町民は非常に滿足せり御發車の際三發の煙火を打揚く

緣門

棧橋に幅三間高さ二十二尺のものを建造當御休憩所にも緣門を作れり

棧橋

堅牢なる木材を用ゐ高さは艦載水雷艇に匹敵す先般來航の伊地知參謀長も大に稱揚せり

境町奉迎委員事務所、私立救護班、消防組夜警等の設置あり

獻上品

境名物の純六貫目を獻上する計畫にて漁舟形の舟を作り潮水を湛へ生洲となし御休憩所前に置き釣具等を具備し遊戲の狀態等を御覽に供せり該魚は專ら御樂源七（ママ）釣りて町に寄附し町より獻上せしものなり此人は箕川最大漁の生れにて孝行者の評判頗る高しと

新聞記者宿

香川を各地新聞記者宿とせり

當町内は豫ての準備全く整ひ各戶國旗、幔幕、球燈を掲げ各種の裝飾美々しく人出夥し港内の各碇泊船は何れも滿艗飾をなして美觀を極む

境御發車

境尋常高等小學校に於ては御休憩約十五分にして御發車あらせらるる由通知して前記の如し此時煙火數發中空に冲して燦然美觀を極む海軍儀仗兵は軍樂聲裡に奉送し御發車の後歸營す御道筋には各戸國旗提燈を吊し幟幕を張り其他諸街有らん限りの熱誠を盡して盛裝す驛官郡吏町村長、同名譽職員、赤十字社愛國婦人會各團体員、小學校生徒、高齢者、在鄉軍人其他の奉迎者兩側に整列し沿道の拜觀者雲霞の如く人山を築きて極めて靜肅に拜觀す

大篠津御小憩

斯くて御列は順路を進々として進む大道出として礫石の如く微塵上らず午前十時大篠津驛に着御御豫定の如く愛勞尋常高等小學校に成らせらる約二十分の御休憩あり此際全校へ御寫眞と令弐拾圓御下賜ありて直に御發車米子に向はせらる御着御發の時共同しく煙火數發を以て盛んに奉送迎し御休憩所附近の人出夥し此間の行程一里二拾三町米子への御途中にては夜見村に於て御駐車（御乘車の儘）あらせられ乘馬に改むる小時にして御出發あらせらる沿道御道筋の兩側には所々に團体員一村落群又は學校生徒の奉迎あり　殿下には奉迎者前往通過の際は必ら寸御馬車の歩みを緩くせさせ給ふにや奉迎者は何れも感有涙に暮れ又はなかりし由當の米子に近くや奉迎拜觀者愈加はり諸街人の垣根を作りたらんととき光景なり

米子着御

町境なる乳山の大鳥門は偉ぐ許りの宏壯にして拜觀人は夫々豫定の位置に着き嚴然容を正して整列す町内は隈なく清潔せられ各戸は盛裝美飾し大小國旗提燈點たる中を由當は順路立町より内町を經て御旅館鳥取園に着御あらせらる時に正午御旅館附近には

有位有爵者、高等官、赤十字特別社員、兩院議員、西伯郡會議員、米子町役員、町公務員、日野郡會議員、

愛國婦人會員、敎育、實業の功勞者、軍人遺族等順次に參列して奉迎せり御列は由緒と列外供奉員とを併せ全長殆んど十餘町の長きに及べり

畏き御思召

皇太子殿下には境より米子に行啓あらせらるゝに當りて御車によらせられ寺馬車を用ゐ給ひしは沿道奉迎拜觀者を滿足せしめんとし賜ふ仁慈の御心の深きに依ると拜聞するだに感泣に堪へざる所なるが當日は炎暑に無き快晴なりしため精汗ばむを覺ゆる程にして殊に御通路は砂地なれば馬車動搖の爲め砂塵も立ち舞ふに至りしも無益のまゝ進ませられ沿道拜觀者をして十分に龍顏を拜しまつるを得せしめ給へる御思召の極みなりきしかも米子に御着あらせらるゝや御休憩の御暇もなく拜謁に中學校行啓に御精勵あらせらるる皇室の民草を惠ませ給ふこと今更記するも烏滸なれども實に感泣のことなり

鳳翔閣御旅館

本館は米子町の西端人家を距る一町餘中海の海邊錦光公園内にあり鳥取縣技師の設計に基き明治卅九年工費貳萬圓餘を投じて西庭部より建造せしものにして公會堂と棟を接せり邸内の廣さ約貳町

門扉には大菊門を設け正門は丈約十二尺尺五寸方の花崗石を以て門柱となし瓦斯燈を頭上へ飾れり

左右へは高さ四尺餘の土塀を築き假塀を以て圍ふたり

御旅館の間取

玄關口を過き御車寄（六疊）あり左は内玄關中央に壁數「形の大廊下通りを設け左右に室あり車寄に并び右側第一室は當侍臣控室（四疊半）次き御荷物室（七疊半）其隣り角は御浴室夫れに接して（廊下通り衝當り）御化粧室（四疊半）あり御廊は小廊下通り化粧室の後ろにあり侍從室（四疊半）は小廊下通左側角（大

大篠津御少憩所　（寄贈小学校）

来子御旅館厚翔園

區下曲りて街當）御宴殿（八疊）あり床付面臺を備ふ御食堂並伺候所等は（拾疊）東寄向ふ即ち大區下通り左側なり正殿（八疊）は夫れに接し奥に續き床付面臺を備ひ共に徐行出來樣を設けたり

公會堂は南長官室、全詰所、當侍官詰所、全宴室、全應接所、侍醫室、調劑室、地方官詰所、庶務軍務室其他郵便電信局出張所地方物產陳列場等貳拾餘室を設けたり

御旅館の眺望

老松東を繞し中海西に開き北弓ヶ濱の沙汀を望み前は碧波を湛へ、出雲の諸山に對し宍島松島等の諸山前面に散點し海岸には佳香なる岩礁聳立し中海は一碧萬頃を湛して波光拔ふが如く孤舟白帆其間に點々恰も盆池の趣を爲し東南には大山の高嶺肝筆を拔きて雲間を掠むるあり實に山陰の一勝景なり

殿下の拜謁

米子御旅館にては其位置の好適にして霜海朝暮の風光卿相に入り御近侍に對し折々御拜謁を賜らせ玉ひしと

拜謁者

御旅館着後拜謁を賜はりし者左の如し

男爵荒尾嘉就　鐵道關技師石丸重美　米子區裁判所判事高梨正道　陸軍騎兵少佐千葉和平　元米子區裁判所檢事三吉兵彌（以上單獨）

米子區裁判所判事天野謹　帝國鐵道關技師最上陵二　全舟賀慕二　全貞能僧道　陸軍騎兵大尉森清風

全堀忠勇　鐵道關主事補井野義正　檢事岡谷米太　鐵道關技師林忠夫　全下村智義　陸軍三等軍醫當松幸　陸軍三等主計道藤藤四郎　從五位荒尾光就　歩兵陸軍一等主計稻田藤次郎　後備陸軍一等軍醫須山

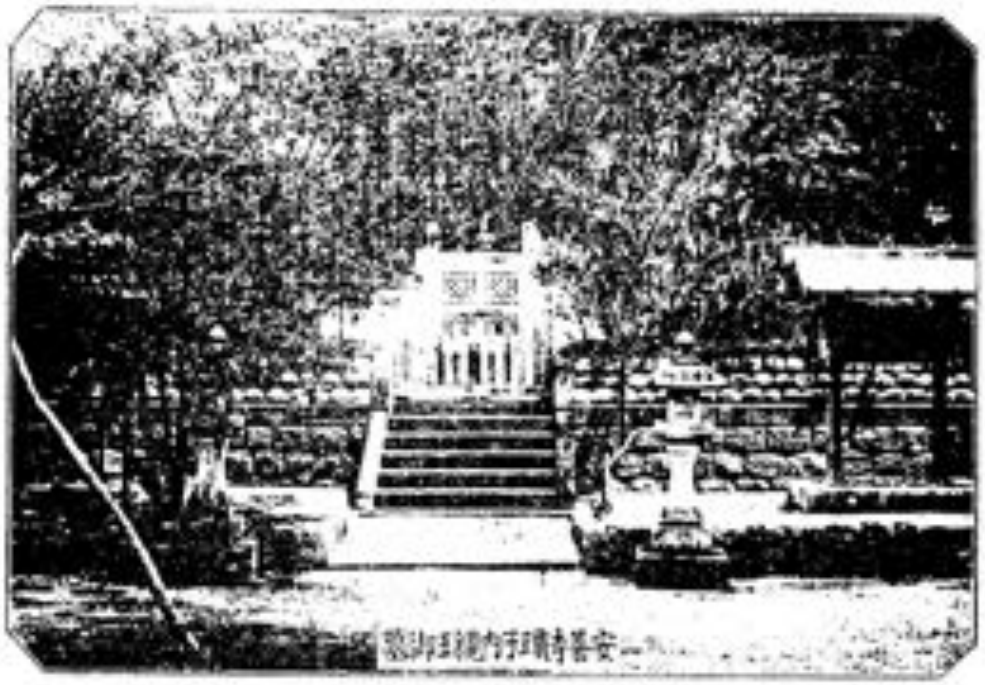
壁　退職陸軍二等軍醫細田富訓　休職陸軍中尉川井庄次郎　退職陸軍中尉栗本政信　仝杉山善夫　後備陸軍二等軍醫佐藤琢三郎　豫備陸軍少尉小村慎次郎　仝藤谷卯一郎　豫備陸軍三等軍醫小川保次郎　仝角賢市　仝船越繁平　現役陸軍少尉角角次郎　豫備陸軍少尉門脇俊太郎　後備陸軍少尉吉井正司　陸軍三等軍醫作野遠之助　名和神社宮司名和貞義　大神山神社宮司山田富務　衆議院議員國谷享（以上通御）

縣情御下問

本日山田知事が御旅館に伺候したる際　殿下には親しく鳥取縣下の事情特に教育産業の事に就て御下問あり知事は委細言上申上げたりと云ふ

第二中學校行啓

午後二時三十分御旅館最寄園を御出門、米子警察署長、關谷警部は自轉車に跨り先驅先導となり　殿下には侯爵木戸侍從長御陸乘にて供奉大夫中山侯爵、村木武官長、桂主事、原、高辻兩侍從、尾藤武官伊勢侍醫等の諸氏員外供奉としては東郷大將、並田副官、山田知事、川越警務長等扈從內町より立町筋を經て綿町に出でさせられ博勞町なる縣立第二中學校へ行啓あらせられたり生徒は校門前西側に着劍捧銃の禮にて奉迎し職員は玄關西側へ奉迎し　殿下には講堂の便殿へ入御、林校長及び委任待遇敎諭高田宇太郎、山本訥三郎、中村雷二の三氏へ拜謁の榮を賜ひたる後、林校長御先導申上げ敎諭御覽所へ出御、中隊敎練及撃劍を御覽あり中隊敎練は休憩敎師たる川井步兵中尉指揮の下に三四五年級百三十名によりて行はれ又撃劍は同村敎師と三年生足立靖との仕合形五年生橋谷義孝四年生本澁敏政の三本勝負なりき三生の進歩著多大なりといよへし右終りて再び便殿に入らせられ更に生徒の成作品を御覽あらせらるゝ而して桂主事を以て上覽に供せし五種中、國語讀方一冊（全校を通じ八名）國書一冊（同十五名）地圖一冊（同十三名）英習字一冊（同十二名）の四種を「持



ち歸りてもよきや」との御言葉かゝり林校長は大に面目を施し、直ちに獻上する旨御受けしたり名譽と謂ふべし

全校へ御寫眞と金五拾圓の御下賜あり

かくて臨御の際と全しく職員は玄關東側に、生徒は校門前西側に着劍捧銃の禮にて奉送四時前順序を經て御旅館なる鳳翔閣へ還御あらせらる

御來屋行啓

鳳翔閣御出門

本日は昨日の好晴にも勝りて蒼穹拭ふが如く風光極むる所眼に遮蔽を認め幸日麗に氣爽に所謂緑陰幽草花時に優るてふ好時機なるに加へて未來の國賓にまします　東宮殿下の御尊容を仰き奉らむとて朝に幾波を到める能登と紅顏血氣の若者と其他農より東よる近村近郷の老幼男女は互にけふ鳳翔閣を御出門遊ばされて御來屋に行啓あらせらるゝ殿下の後塵を拜觀せんずらんと潮の如く寄り來るもの實に數萬を超ゆるはかも斯くて御豫定の通り時辰器午前十時を報ずるや直落最と嚴かに鳳翔閣を御出門あらせらる殿下の御服裝全く前日と同く御馬車には村木東宮武官長御陪乘申上ぐ第二馬車は黒水、秋澤、尾藤各侍從武官、第三馬車は中山東宮大夫、桂主事、相良、伊勢岡侍醫等にして儀仗隊は例に依りて先驅し山田知事後列に次き又た列外には東鄕大將、牛田同副官、安東十師團長、其他東宮職各高等官、古賀警保局長等隨從此際御正門内に於て米子町長、赤十字社特別社員、赤十字社佩有功章者、受爵賞者、日野郡會正副議長、米子町特別功勞者、米子町會議員、米子町助役、西伯郡會議員、御正門外に於ては町村長、軍人遺族、官業功勞者、愛國婦人會有功章者等へ奉拜を賜ひ門外には有爵者、高等官、職員等例の如く奉送し滿街山の如き拜觀者の中を面諍本通りを順路東に進めば拜觀者

更に増して其の數幾万成なるを知らず容を正して拜し奉らぬはなかりき

米子驛御發車

由須米子停車場に達すれば此處には平井鐵道監督長を始め石丸所長以下作業局各高等官、判任官其他多數奉迎し又た停車場外には各婦人會員其他の貴婦人の多數奉迎し構外には中學校、女學校を始め各尋常高等小學校職員生徒等數千名整列し其他一般の奉迎者山の如く停車場構内外人垣を築き御通路を殘せる外殆ど立錐の餘地無く陛下は一々御會釋あらせられ御降車、更に御召列車に移らせらるる御召車の順序は機關車、貨車、三等車、二等車、一等車、御召車となり更に一等車、二等車、貨車と續けるが先頭機關車は青葉を結び飾らん斗りの造花を飾り交叉せる日章は微風に飜りて壯觀を極む又た御召車は莊麗の花車とも稱すべく御定紋付菊花を鏤めさせられて一見田舍人士は眼を奪はるゝに似たりき斯くて扈從の各官一同豫定の列車内に着すれば正に十時三十分列車は徐に進行を始めぬ此時米子驛を去る約八丁の鬼塚に於て十發の煙火を打揚ぐプラツトホームに奉送するもの平井總長石丸所長以下場外奉迎の時に同じ斯くて英霊を奉載せる列車が逶迤江驛に今しも差掛らんとせる場所より益々速行の度を緩めせられ唯々喜色を滿面に湛へて奉迎せる田園生活の老幼の心裡も推察せられて旅驛に均しき淀江なれや住める青民草の心の奥には同し床しき至誠は籠りたりサレは驛一面には國旗交叉せる大小の高國旗を飾り付け面もゾが爾々として微風に靡するの光景は聖代の鴻恩に浴する印象なりと言ふも恐懼の次第なり御召列車は之れより次第に淀江驛を離るに隨ひ速力を加へ十一時五分早や目指給へる御來屋驛にと安着あらせられぬ

御來屋着御

御召列車は御豫定の如く午前十一時五分御來屋驛に着す石丸所長御車の扉を開きて御先導御下車あらせらるプ

ラットホームには

湯本鳥取縣第二部長、和田同第一部長、千葉軍馬育成所支部長以下職員、在鄉軍人聯、校、警、退官者、赤十字社員特別社員、愛國婦人會員、代議士

等整列奉迎す陛下には一々御會釋あらせられ川越警務長御先導申上げ御徒歩にて停車場より十八町を距る御休憩所名和高等小學校に向はらる

海岸御遊覽

御途上圓町縣會議員勝田鎭吉氏方邸内なる海岸へ歩を移させ給ひ曾て後醍醐帝御遷幸の際時の志士圓助五衛門が提多くも御座船より玉体を御拜奉申上げて遠近の話を申し陸岸に進みて御しまれると云ふ最(陸より三間を距る)を御なはせられたり此の海岸に産する道具は扇面多く殊に小柔は最に頭の手等の通ふばかりの三尺幅位の小路にて普通人すら倘ほ肩摩すべきを陛下には御扈の御様子もなく玉歩を移させ給ひしは唯だ〳〵感泣の外無かりき海岸は蓮田の風面に渦巻派り殊に蓮葉風靡として芳臭鼻をつく所に立たせ給ひ最を御覽あらて深く追懷の御心を動かし給ひしもの〻如し少時御佇立あらせられ還て玉歩を返させられ往昔神社前の御旅橋を御通過御上覽の後名和高等小學校内の便殿へ入御御晝餐を召させ給ふ

名和神社へ御使

御豫定の如く本日正午過御來着御書記所より高辻侍從を名和神社へ差遣さる御使は久保田仕人を隨ひ両村警視の先導にて同社に到着すれば山田知事、和田、湯本、川越の三部長、名和宮司等鳥居前に出迎ひ宮司先に小憩の後奉幣遣なる奉式あり神饌料十圓幣帛料三十圓を御供あらせられたり

因に名和神社は其の昔時後醍者守護忠三位忠朝臣名和長年公以下の一族並に相前後して王事に殉死せる一

般の勇士四十二名の神靈なり

試みに其の緣起を尋ぬるに今を去ること二百五十余年前西伯郡名和村に名和氏の邸址と稱する所あり地方の信徒等相謀て一小祠を建て武勇の木像を安置して祭祀せり該社の寶庫に右の木像および後醍醐天皇の長年公に賜へる御宸筆の御製並に長年公の異績なる「以義制事以德制心」の幅を今尚ほ寶物として藏するによりてその由緣を知るべし

爾來年を經ること二百有余、明治六年に至りて氏殿神社と改稱し縣社に列せらる次で明治十一年一月十日別格官幣社に列し社號を名和神社と改めらる長年公の建武三年六月晦日京都の大宮に戰死せられてより玆に至る實に五百四十三年忠魂は玆に無上の光榮を地下にて感泣せん社殿の結構は最とも壯嚴を極め境内の地積は約五千坪にして社道の兩側には櫻樹を植ゑ日本海に面して隱岐と島根半島は烟波渺茫の間にあり東南に船上山を望む境内老樹蒼然人をして尚ほ千載の感に堪へざらしむ

名和神社御遥拜

殿下には御宿所より名和神社へ御使を差遣あらせられ御使歸還の后川越第四部長の先導にて中山大夫を隨ひさせ給ひ名和神社へ成らせられ暫時境内御遥拜中

焦米採堀御覽あり

社前右側に小松の御手植あらせられ

夫より國町の種馬所出張所に於て

西伯郡に於ける種牡馬四頭、當國産牝馬及其仔馬各二頭東伯産牝馬及其仔馬各一頭赤崎村牧畜改良氏方の牧のスタッセルより乃木將軍に送りたる有名なる白馬合計拾三頭

名和神社

大山大智明權現

元亮帝若婚處（御座所跡）

御覽あらせられ任馬は一々御手支へられ親しく御覽あらせられたり尚は名和校にては一ヶ月前御來屋灣に於て採捕せし

珍魚御上覽

クツルモブル（くもひとでの種類）を御覽あらせられ甚だ珍しきものなれば大切に保存せよとの御思召なりしといふ

十二時三十分御來屋町へ歸らせられ同町埋木細工西村莊一方に御立寄あり

御買上品數点（柱掛等）

再び小學校の御休憩所に成らせられ同校へ

御寫眞並に金二十五圓の御下賜あり

鑑て還御仰出され午後一時五十分御來屋驛臨時御發車二時二十二分米子驛御着直清總て午前に同しく二時五十二分昌福園へ還御あらせらる

御召列車の通過せる沿道各驛にては何れも盛裝して奉迎の意を表し拜觀者亦山なして集る殊に御來屋停車場よりは弓弧帝蹟の海岸に至る約半里の間は兩側人垣を築き其數十万と計上せられたり

御來屋に於て御上覽の際御手を支へられし光榮を得たる任馬名及び所有者は左の如し

洋種牡駒政擔號（父）島根種馬所種馬サラブレット種チソン號（母）濠洲産丸富號西伯郡名和村栃原政吉

洋種牝駒政歯號（父母）滿國産同郡同村右同人

一回雜種牝駒丸房號（父）島根種馬所種馬サラブレット種チソン號（母）奥羽産龍飛號同郡同村栃原善四郎

洋種牡駒丸玉號（父）島根種馬所種馬ハクニー種ブリンス號（母）濠洲産丸德號同郡庄内村中原鉦太郎

洋種牝駒第二丸榮號（父）同所種馬サラブレット種チソン號（母）同上丸榮號同郡大幡村野坂清

洋燈各戸数の二夫指定之に上ノタニ一部ンス駿(駅)岡上九間駅岡郡富郷村米野まで花

御来屋驛の警備

鉄門　町境と御休憩所門前に設けたり

町内は國旗を立て砂を撒き清掃せり

名和山麓に假ホームを設け御着車の際は其處より御乗車相成たり

御使差遣

安養寺御墓所へ御使　五月十五日

五月十五日酉前第五半右村安養寺塔子内親王墓所へ（後醍醐天皇皇女）御代拝として本多侍従を差遣はさる一行は鳥取縣庁より先駆たる佐野縣属藤原し御使本多侍従箕田中属及仕人随従還査役掛として午後一時三十分御旅館出発二時三十分御着是れより先き郡書記二名先着せらる村長學校生徒及村内有志者は村界に迎田住職并に守部高座門前に出迎ひ御使は當寺に入り御供物あり小憩の後住職先導にて御墓所數十歩前に於て守部御手水を進められより御墓前にて恭しく御拝あり終て再び全寺に入り實物拝写本堂に於て開山内親王の御木像へ御拝あり終て書院にて整あり住職より左記の品を捧呈す三時三十分来手へ歸院を時に重要なる實物六點未子御宝館へ持参参覧に供したり

一後醍醐天皇御影寫真　二條子内親王御木像寫真　三安養寺縁起寫真（奥筆添付）

四條子内親王御墓所寫真　五安養寺現景　六靈形案（由来記添付）

大神山神社へ御使　仝　十六日

十六日酉前第五時出発村役場小社大神山神社（祭神大己貴命）へ御使として本多侍従を差遣はさる其刻次は先

鳥（村長村界より）先驅（巡査）松田縣視學誘導し御使本多侍從野仕人桑田郡書記隨從一行を村界まで出迎へたる美馬屋高等小學校尾高尋常小學校職員生徒村吏員並に青年團員等小學校職員生徒村吏員並に青年團員等小學校生徒村吏員並に青年團員等小學校生徒村吏員並に青年團員等小學校

して工女製糸の現況を視しく視察せられ屑物等に就き種々御下問あり了て休憩所に復し更に當地方桑の栽植方法より養蚕の狀況製糸職工勤勞の摸樣本業に關する資本組等悉細に御下問あり最後に將來益勵業の發達を圖るへき旨の御諚を傳へられ約二時間にして歸還せられたり

御手植

御産所風神園庭園へ松樹御手植あらせられ山田知事內海郡長御供を侍せり

奉拜者

奉拜の榮を賜はりし者左の如し

米子町助役稻田秀太郎○仝篠井吉三郎○境町長杉谷卓○縣會議員山本熊吉○西伯郡會議長門脇元右衛門○仝副議長久野源吉○郡會議員船越猪太郎○仝松村吉太郎○仝後藤快五郎○仝大塚誠太郎○仝高塚保藏○仝木村得策○杉山永其○仝面塚治平○仝松下晉成○仝稻賀龍二○仝宮本鳥孝○高橋松藏○仝船越英一○仝生田幸太郎○仝岡田周次郎○仝長谷常次郎○仝野坂精○仝中本範治○仝小西源四郎○仝門脇門治○仝森田泰治○仝遠藤三郎○仝巻井有一郎○仝插木松次郎○仝建部繁三郎○日野郡會議長入澤將次○仝副議長山根幸吏○米子町會議員田村源太郎○仝九重谷岩次郎○仝三好乙次郎○仝淺邊幸四郎○仝野坂義三郎○仝笹鹿久太郎○仝進藤治兵衛○仝坂口常次郎○仝長田吉太郎○仝稻田芳太郎○仝三谷水哉○仝岡本伊四郎○網代岩次郎

藍綬章佩者村田吉藏○緑綬章佩者近藤喜八郎○西伯郡赤十字特別社員石源良波保○仝福井富三郎○仝岡田平次郎○仝門脇繁次郎○仝八田今太郎○仝角田九郎○仝仲田作次郎○仝永見喜雄○仝植田常太郎○仝八幡貞藏○仝村山金次○仝益尾吉太郎○仝船越編一郎○仝吹野儀四郎○仝古門吉郎治○仝近藤重太郎○

仝近藤長夫○仝荒木平三郎○仝坂口平兵衛○仝佐野直太郎○椎木芳三郎○仝泉頭宇三郎○仝庄司儀○米原弘德○名島嘉吉郎○仝三好榮次郎○日野郡赤十字社特別社員奥村弘道○仝吉田八太郎○仝田川萬五郎○仝山川龍次郎○仝近藤喜兵衛○仝佐々木源太郎○仝山中榮三郎○仝木下盛三郎○御旅館設備ニ關スル功勞者阪口豐藏○貢業功勞者特別奉拜者荒木惣平○仝木島猛三郎○勝田傳六○原弘業

歷兵伊藤藤次郎○仝關幸三郎○仝新澗鐘曉○仝大谷勝治郎

御下賜

井上西伯郡長

石丸鐵道局米子出張所長

酒饌を賜はる

階記之れは本邊事務勞別盡力せし廉を以ての爲めなりと

一莚地	一反	井上西伯郡長
一金子	一封	米子公會
一御紋章附三組銀盃		米子町
一金參百圓		西伯郡本邊功勞者百三拾六名
一金子	一封	
一御菓子	一包宛	
一御菓子	一折宛	山田鳥取縣及各高等官
一金千疋		鳥居米子郵便局長

一金參千疋　御旅館振出

一酒肴料金　一針　郵便局長一同

一酒肴料金　一針　安達境郵便局長

一酒肴料金　一封　渡邊米子町長

杉谷境町長

角田御來屋町長

安田大篠津村長

一金子　若干　原控乳所

献上品

一生糸　一括　西伯郡代表者　井上郡長

一真綿　貳百匁　米子町代表者　渡邊町長

一繭　三升　大篠津村代表者　安田村長

一真綿　五百匁　御來屋村代表者　角田町長

一天然生蝋燭　若干　大山村代表者　中津尾村長

一生糸　一括　米子製糸會社　阪口社長

一伯耆誌　一冊　米子商工會

一箱　日野郡代表者
一箱　井上慶治
一箱
一反　御幸原外二ヶ村學校長　時山久藏
組合立補習
一冊　若干　井上郡長
一冊　若干

高齢者献納品は左の如し

白木綿一反　米子　栢栂さつの
同　同　手間小谷さく
同　同　岡稲田いせ
同　同　岡稲田いせ
同　同　都田きく
同　同　盛宮三村よしの
同　同　名和谷口ふな
同　同　三尋半　高麗大場いと
同　同　一反　渡　是立きく
同　同　中沢　是立ふさ
同　同　是立きく
同　同　是立きし

白木綿一丈　東長田　赤井てよ
木綿糸百匁　淀江　吉岡たか
同　倉木いわ
同　吉田かね
同　冨　徐子
同　西山さつ
同　景山つる
同　六尺　境　里見ふゆ
同　一反　同　佐々木さつ
木綿糸三十匁　淀江　川口とみ
同　是立武藏　植田よし

白木綿一反　中浜永見とみ
同　同　渡門熊とみの
同　同　中浜画田せつの
同　同　是立きく
同　同　福生畑岡ふさ
同　同　東尾田岡ふて
同　同　中浜木村なつ
同　同　崎津妥田とも
同　同　淀江角　なを
同　結一反　同　吉田きく
白木綿七尺五寸坂　平島はる
同　若干　幡郷妹尾つね
同　一丈二尺法勝寺岩崎きよ
同　同　深田なつ
同　同　前田あさ
同　同　前田あさ
同　一反　最坂尾せむ
木綿同　尾徳高田ますさ
木綿糸七十匁　大和渡　せき
同　六十匁　同　油田きく

木綿糸三十匁　長谷川かめ
同　同　青木ふさ
同　五十匁　同　渡邊きむ
同　同　佐々木とみ
同　二十匁　大國持田しげ
同　同　花岡たけ
同　同　潮尾ちよ
同　同　吉村たの
同　同　前田ちよ
同　同　田口しめ
同　同　作野よみ
同　同　前谷ふさ
同　同　なか
同　同　山田いく
同　同　深田かつ
白木綿一反　遊名　有田ふな
同　同　崎津永井いし
同　同　吉岡きく
木綿糸五十匁　賀野　門原たけ

木綿糸　九十匁　同　長井はつ
同　八十匁　同　大塚なか
木綿一反　御菜屋角田せき
同　縞来久野しか
ハンカチーフ一枚　賀野中村せと
木綿一反　同　羅賀のい
角樽一ヶ　同　松田清三郎
木綿糸　百匁　産生　松尾しげ
同　八幡こめ
同　結城よの
同　八田たる
同　小町ふで
同　天谷　染出さき
同　鳥尾きう
同　鳥尾ふさ
同　加藤きよ
同　五十匁　田子はつ
同　百匁　田子とも

糸　五十匁　天津渡邊つな
同　六十匁　同　大西さく
同　五十匁　同　丸山よし
同　百匁　遠藤しう
同　内田たけ
同　内田たけ
同　百匁　遠藤しう
同　六十匁　同　宮倉いち
同　五十匁　同　大西さく
同　綿一反　富田なを
同　綾津渡邊きく
同　友志とも
同　松本きく
同　大和塚本よゆ
同　上島とよの
同　七十匁　同　村側よしの
同　六十五匁　同　本島とめ
同　二十匁　同　中村くも
同　五十匁　同　赤木とみ
同　同田きく

木綿一反　庄内金田たね
同　百束　同　大山こめ
同　同　岡野坂ちよ
同　糸　同　賀野田見さつの
同　同　大高木下れつ
雑　一幅　同　安田友次郎
同　同　同　青木はる
信玄袋　賀野岡田あさ
糸　若干　同　孝内むね
煙草入　崎津　安田七蔵
俵袋　淀江　奥田茂三郎

日野郡

白木綿一反　米原新見さつ
麻　布八尺　由上坪倉長
獨活蔵　由上北垣ますさ
茶　淀江伊達せき

御買上品

米子町公會堂に於て各種物産等を陳列して御台覧に供したるものゝ内左記の物品は優等賞を以て御買上相成たり

寫眞帳　十四點　米子町　日向長一郎
巣　籠　四十ヶ　米子町　木島幸太郎
煙鉾鐘詰　六ヶ　仝　矢野藤太郎
カステーラ　入斤　仝　右仝人
白魚鐘詰　六ヶ　仝　右仝人
白羊羹　一箱　仝　佐藤壽市
千温純　三箱　仝　野津庄藏
白魚田麩　六ヶ　仝　荒木惣平
仝　三箱　仝　平田佐七
硯箱重箱　一ヶ　仝　黒安岡三郎
清酒水雷　三瓶　仝　稻田秀太郎
冊子自筆帳　一冊　仝　金井德次郎

清酒本正宗　三瓶　　米子町魚口合名會社　　シヨンレース　半六反　乙六反　　米子町　野坂兵三郎
紀念　蠟燭　三袋　　仝　　堀谷金次郎　　輕便牛馬尺杖二ヶ　　米子町　松村吉太郎
五色　蠟燭　二ヶ　　仝　　右　仝　人

裝飾と設備

繰門四ヶ所

立町入口、御旅所前、停車場前、大工町（出雲方面の町境）には夫々的來遊繰門ありいづれも工夫凝らして最も壯觀に裝飾に出來上れり

國旗と提燈

本通には二間毎に國旗並提燈各一張づゝ三間の處はこれに二倍其他これに準ずる配當にて國旗を掲げ提燈は之れを兩端にして「奉迎」の二字を記したり

救護所

大篠津、米子町界には救護所を設け醫員看護婦等出張なしたり

假設廁舍

米子公會堂に設けたり

米子の宿舍

米子に設ける供奉員の宿割は左の如し

東宮大夫（坂口平兵衛氏本宅）侍從武官長、武官一人、內廐長、侍從二人（岩佐屋館）侍從長、侍從三人（米村旅館）侍從武官二人（福島旅館）主馬寮一人外隨行員九人（手島旅館）仝隨員十四五人（中村旅館）第

十師團長（岩田秀太郎氏別莊）縣廳高長（住田半三郎氏本宅）東部大將（後藤快五郎氏本宅）縣議會議長（一人（遠藤源次氏別莊）鐵道局長以下十二人（米五旅館）憲兵九人（御の屋）新聞記者（松戸、安藤、安島各旅館）

給仕女教員

各旅館へ配當する給仕女には高等女學校の女教師、作法を敎授して不作法なからしむるを期したり

旅館用行燈

夜間御旅館にはランプは一切御用ひ遊ばさらさるはけにて特に大阪より取寄せたり

鳥取縣奉送迎事務所

米子内町後藤快五郎氏借屋内に設けたり

米子奉送迎事務所

今後藤氏借家鳥取縣向ふ側に設けたり

鐵道の奉迎設備

米子にては二等待合室を修繕し窓掛、銘銘等裝飾をなし御休憩室として三等待合室の一部を潰しの奉迎事務所及供奉員の休憩所に充てたり▲停車場建物は總てアスナラの緑葉を以て裝飾し日章をを交し緑葉を張り渡したり其他御乘車、御下車の御座屋、倉吉鳥取各驛共同樣にて停車場前は壯高なる緑門を建造せり▲プラットホームには有位、有爵者、縣官、郡市町村長、縣郡會議員、御所所在地の町村會議員に限り入場奉迎を許すことゝなり米子驛の入場者は約百三十名其他は停車場の廣狹に準ず▲高等官婦人は待合所に於て奉迎を爲し停車場外の構内には赤十字婦人社員、愛國婦人會員の奉迎場に

完てたり▲其他御通過の各驛には國旗を掲げ奉迎を表し場内整地はなるべく本庭遶者を入場せしむ▲當日米子を始め御乘車、御下車の各驛には一般乘客のため臨時出札所を別に設けたり

餘興

着御相圖

十五日正午より午後一時まで野波灘海岸に於て煙火二十一発を打揚げ奉迎下の着御を祝せり

樂器合奏

着御の時正門外奉迎の門において約三十分間歌、琴、ヒチリキ、笙、太鼓、笛を合奏せり頗る優美なる樂調物陵遊遨の美音を聽くの感あり

曳網

第二中學校より御覽あらせらるゝや區劃區先きに於て四十五人の漁夫三組に分れ三隊の舟に分乘し二百五十尋の揚網をもつて漁せしが　殿下には岡崎を經散歩あらせられつゝ御上覽あらせられしが頗興にして漁網たる黒絹、絹、苧、麻、藁の類、總て他種魚網にかゝりしものを大盤に盛て御覽に供せしに殿と御機嫌に御ひさせられたりと

十五日の夜況

煙火

午後七時頃より九時迄煙火を中浜に打揚ぐること四十五發凄然たる響と共に中天の光影劇部の美觀を極む

夜間短艇競爭

未予中學校生徒は短艇に球燈を釣ること無數紅白に分ち新案の夜間競漕を五回試み御覽に供せり

提燈行列

角籠喜等小學校生徒其他兩尋常生徒三千餘名の小學生徒の提燈行列は壯合燒の如く美觀を極め殊に海に沿へるとき は流燈の如くにして六千の提燈土手に點ぜられし觀あり未予區裁判所前より部立病院前の間に集合し順次行進して元冷藏前會場より海に沿ふて整列し九時頃萬歲を三唱して歸れり

飾船

午後八時より深堀紙園前より漸々に進行し御旅館沖合に停船せる首し未予紙園祭の船神輿に擬したるものなり數千の提灯を用ひ國旗交叉の圖と奉迎の二大文字を紅白に現はし美觀を極めたり

サーチライト

美保艦碇泊の艦隊はサーチライトを發射せしめたり其光未予錨泊當時は晝の如く遠く島田村に至るまで達せしといふ

十六日夜の光景

今夜の光景も昨夜に讓らず煙火は例に依て湖畔より引續き中空に擧りて彩花燦然たり海上には漁火點燈盛に燃して其數算すべからず上下相映して美觀を呈し此間新項女學校生徒の樂船遊蕩して嘹喨たる美音を送り實に錦海空前の盛觀なり町内は提燈街燈を處に點して祝意を表し人出は昨夜よりも少々減したる感あれども勿論神田祭の比にあらず各町共混雜を極めたり

樂船

十六日夜御旅館附近の海上に於て御覽に供し奉らんとて西伯郡立高等女學校生徒の企に係れるものにして提燈數百を以て女學校の文字を現はし大船數十艘を繰し午後八時頃深浦浦より漕出したり各船には校長以下職員分乘監督し生徒は日頃準備の樂器を携ひ船隊の御座所沖に達したる頃一齊に君か代を始めとして新作奉迎の曲を奏し其他唱歌を齊唱して御旅情を慰め奉り最後に陛下の萬歳を三唱して海岸通に上陸したり

雜　況

新聞記者へ寄贈

鳥取縣より左の品を

縣治一班、圖畫記要、地圖、繪葉書、記章

西伯郡より

郡治一班

米子町より

伯耆誌及菓子

御來屋より

繪葉書及菓子

東郷大將、中山大夫、木戸侍從長以下供奉扈從の高官の宿舍には扁額の表札をさげ其他は一樣に呼鈴を張り奉迎の文字ある提燈を點じ各戸の店頭は屏風盆栽等にて裝飾し各地より入り込みたる人の數は數萬なるを知

ら手帽影繪形繪る如く紀中海岸通もの如き屋々相岸する石橋にして警官出張所流を設にせり

紫綬褒の學校旗

當縣に奉迎せる小學校は其數幾十なるを知らず其大旨分は紫綬褒の校旗を飜へし甚平は黒塗にして其裏は均しく紫絹ものをブラさげ居れり中にはモスリンのもあれどいづれも皆は全様にして各々校章を染抜きて今日を晴れと飾り立てたり

米子町の熱誠

米子は今回兩縣行啓中第一の御宿泊の地なれば郡民町民の熱誠實に絶頂に達し如何にして來迎申すべきかに苦て寢て焦慮苦心をなしたる結果は各戸の設備整整し各種の御思物の工風最新を極めたり又行啓圖繪の來來者に對しても用意周到設備大に整ひ何れも町民の行啓に對する熱誠激越したる結果たらずんばあらずとの評あり

東鄕大將の宿舍後藤氏の榮譽

東宮殿下御還啓供奉員なる東鄕大將のために當町民は大將の宿泊を祈はんとする希望者續出し遂には篠儀なく抽籤をもつて定むることとなりたるが運好くも籤に當りしは當前後藤快五郎氏なり同氏は世界に名たゝる當名を掲げたる東鄕大將のことなればこれが宿をせしものは末代までの榮譽なるべくされば後藤氏の喜びは一方ならさもし折柄重ね〳〵の好運にやさた何等の名譽もたよはさる幸福に逢へると均しく籤に御駐來中甚多くも　殿下の御下問に接しこれに奉答するの榮をも一身に擔ふに至れりといふ今うの次第を報ぜんに後藤氏は米子町來遊委員の一人にして　殿下御來米の第一日御坐所前において網引の御覽ありし際彼は自ら波打ち際に立て一巻の道幅あらせじと眼を八方に配り後見と指圖し居たりしが　殿下には此時御手を紫紺の上に御つきありていと興ありげに其樣を御覽せられつゝありしがうの

中二綱は殊なく引き上げられしをもつて後藤氏は手づから獲物を大盥に移しあけしに　殿下にはつか〳〵うの際に進ませられ御覧を乗れさせ給ふて親しく大魚小魚の游泳する様を御覧あらせられたりこの時後藤氏は御前を退く間なく僅に六歩の此方に行立して謹しんで拝しまゐり居たりしに　殿下には侍従に對し「此魚は何であるか」との御尋ねあり、御眼はまさしく後藤氏に注がせ給へるをもつて氏は恐々恐懼に堪へず謹みて「メバル」にて候と奉答に及びたるに　殿下は直に鋼を召し給ひて御下問あり夫れより縷々として御下問に接せしを以て後藤氏は涙を流さん計り欣喜の思ひをなして奉答申し上しと言ふこの時　殿下には鳥取縣立第二中學校より歸京後間もなき御事とてカーキ色の軍服に御帽子もろの儘にて具軍刀のみは帶びさせ給はざりしと言ふ

淀江奉迎

當町にては何日良辰　皇太子殿下を迎へ奉らんとて先づ淀江停車場内を借り受けて　殿下拝観場に充て還内は萬民の大本国旗數百をもつて裝飾し在郷軍人會青年團在鄉軍人遠藤老人および一般町民の清掃區域を定め清掃仕遺憾なく整理し并當日（即奉迎當日の日）と定められたる十六日を一日千秋の思にて待受しが當日は幸ひ天候晴朗にして一點の雲影だになかりしかば從來稀なる男女五萬に先を競ひて午前八時頃より續々と詰め掛け入場が切の定數頃には殆んど溢れ立錐の餘地もなき程となりしも何れも敬意を表し謹直に拝観せんとの誠意あると警官の注意周到なるとにより極めて靜肅に時刻に十時を過る十五分迄くも　殿下の御召艦は當驛に着し當驛構内は汽車も既着するが如く寂かに進行して拝觀を得易からしめられたるは誠に有難き事どもなりと何れも感激感泣の外なかりし夫れより構内を出るや否普通進行にて御乘屋へ行啓あらせられたり

因に當町八十歳以上の老人は九十一歳を最老者として約三十名に達せり

米子御發輦

本日は朝來雨風烈しく殊に名古屋の浪華にて天候の怪しく知られ步兵に出至りて今日の御出門如何らんと氣遣ひりしを八時過ぎより雨收み天霽々れ渡りて見ゐしが愈御出門仰出され御發輦の如く午前八時五十分眞田侯の御旅館を御出門あらせられたり御歸の順序及び先驅、列外の扈從、警衛共に前日御來屋行啓と同じく順序内町、立町、尼高、倉吉、法勝寺各町を御通過あらせられたるに　陛下には途中の中をも顧はせ玉ひ始終恙なき儘にてあらせられたるは只々恐懼措く能はず御旅館より停車場に至る十數丁の間數萬の群觀右往左往して靜に御待容を弄し中には合掌して奉送せるもの殊ら手見受けぬ程くて九時過ぎ停車場に着御あり此處には亦た構の内外數萬の群觀者奉送者整列し先づプラットホームには有爵者、文武高等官、從六位勳六等以上、米子縣長、同縣役、收入役、町會議員、赤十字特別社員、代議士、縣會議員、學識者、日野郡會正副議長、郡會議員等百餘名、又た停車場待合には高等官婦人團構内には赤十字社員、愛國婦人會員、米子作業局高等官、同構外には各學校生徒數千名整列して奉送申上げけるを　陛下には御機嫌麗しく一々御會釋あらせられ午九時十五分御召車に入らせ給ふ列車の順序及び裝飾等全く前日と同く五分の後列車は御名殘を惜む數萬の奉送者を殘し一聲の汽笛の下に徐々進行を始め齒て急速一時して美麥を飾せつる花の如き列車は終に東方に遙走し去れり時に御附の列車に從へる井上西部郡長、淸部米子町長は倉吉驛、石丸所長は鳥取驛迄扈從申上ぐべしと承る數發の煙火例の如く燈に奉送しまつれり

米子倉吉兩驛の光景

各停車場には思ひ〳〵の裝飾を施し奉迎共觀人は何れも立錐の餘地なき有樣なりしも靜肅と熱誠を以て奉迎し慥駕、淀江、御來屋、下市、米崎、八橋、由良各驛のプラットホームには學校生徒、軍人退族、屆兵、高

勲章、愛國婦人會員、赤十字特別社員、縣郡會議員村吏員等其他勅奏官會衆等には赤十字社員、神官、
僧侶等整列し橋外附近には各村氏神に奉迎し其數高を以て數ふべき壯觀なりし
　奉崎及由良村にては煙火を打あげ敬意を表す

倉吉停車場御着車

五月十七日

糸子より倉吉までは一面の平砂空濶にして平穩の日は素捨つべからざる眺望なるも此日拂曉より天氣險惡即ち列車の進行する時と暴風と相和して時には雷鳴の如く時に疾雨を携ちて汽車をも吹き飛ばさん事を勢ひなりき　陛下には之れをも厭ひ給はず各驛通御の際は特に數分間御停車あらせられ玉顏麗はしく奉迎者に對し車中御會釋を賜はりつゝ午前十時五十一分といふに御着の汽車は汽笛を吹き白砂を蹴りて始んど眼下の間に御安着あらせらる　兵隊出張村由緒に詣て煙火數發轟々として着御を報ずるや奉迎の官民歡然として整列す

元弘當御追懐

　陛下には車中倉吉地方元弘當時の事蹟に思召され御手づから車窓を被かせ玉ひて時々御形を指はされ種々御下問あり御追懐の情一入勝ゐさせ玉はさるものゝ如く供奉の人々皆しく感激に堪びたりと承る

倉吉町着御

　陛下停車場へ御着あらせらるゝや石丸所長の御先導にて御降車直ちに馬車に召さる御首馬車には本戸倉吉長御陪乘、中山大夫、村木武官長閣下の供奉の文武官之に續き列外宍道大將閣下側の如く隨從す西村警視關本倉吉署長先導し警視當々として倉吉町に向て進行す停車場には内海軍御陽長を始め桑田兵旅疾議員、尾崎市長、町公會員、赤十字社員、愛國婦人會員、在鄉軍人其他農學校生徒谷小學校職員生徒等整列數十町に及び停車場より倉吉町に至る間兩側余く人垣を築きたり此時風益烈しく玉ゐ飛ばし屋根を葺るの大竹倒れにて光景凄

絶たるにも拘はらず御氣色更に平日に異らせ玉はず御馬車の幌を擧せられ來迎の萬衆に對して夫々御會釋あり群集の奉迎民は皆御恐悦に感佩し何れも聲振に堪へて袂を濕はさゞる者なし斯くて午前十一時三十分打吹公園に新築せる御旅館飛龍閣に成らせらる着御間もなく内海郡長、區裁判所長、其他高等官に拜謁仰付られたり

御旅館飛龍閣

位置及眺望

本館は打吹公園中央の地にあり背面は鬱々たる老松茂る打吹の深山を負ひ前縁湖の如く前面一眸すれば湖街の人煙諸川の流れ遠山の風致眼前に展開し其風景の壯麗下の扁指たり又公會堂を其傍らに建て名けて有親館といふ共に今回行啓中の旅館に充てたるものなり

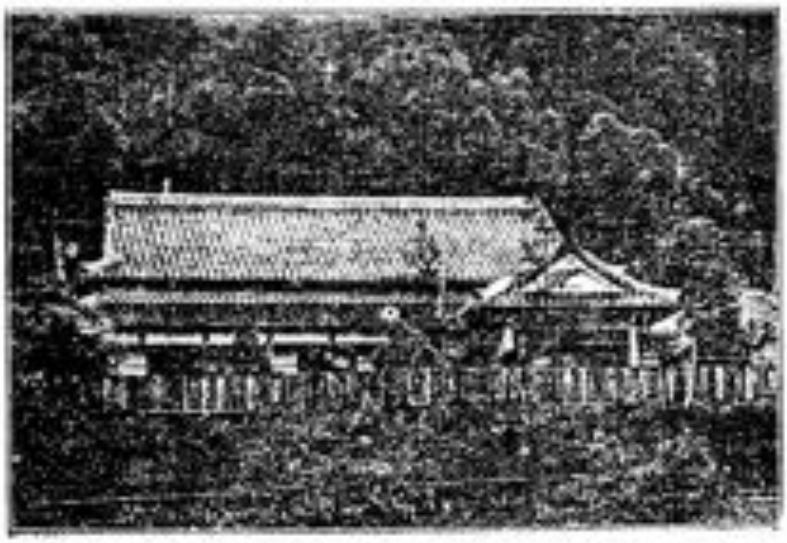
建築工事

御旅館及有親館は共に和風の建物にして工事は明治卅六年五月の起工仝卅七年四月竣工せり敷地坪百三十餘坪其經費約一萬三千餘圓御旅館は倉吉町山田市平有親館は勢山鳥取縣技手の設計に係り材料は悉もに地材を用ひ總べて大阪より取寄せしもの前者は町有後者は邑有なりといふ

御旅館及有親閣間取

御車寄より玄關を過ぐれば中央に通りあり前室と後室とに分ち先づ玄關の左側前一室を常侍室控所に次室を御食堂に其東前側を御應所に續ひて後側の室を御寢殿とし其次きは御化粧室と御浴室次の一室を二分して供進所、調理場に御化粧室の裏庭に突出したる所は御厠所なり玄關右側前室を内含人出張所と爲し更に區下を通じて有親館に至れば左側第一を副長室第二は武官侍從室第三内含人室第四事務室に前通り左側前室四間突出し事務室其次き大夫室酒の方角室を地方官出張所次き應接所其他藥劑室、銀行、

閣龍飛館旅御吉倉



社會絲製陰山　御使差遣

（吉倉郎伯東）

郵便局、仕人、使夫、溜室、新所あるも省略せり

御旅館の門柱は何れも花崗石を用ひ其頭に瓦斯電燈を装置せり

御旅館内の装飾

玄關廣間に菊御紋章入の大提燈を吊り車寄正面は紫縮緬に菊御紋章を染め抜きたる幕を張られ御旅館、公會堂の周圍は紫縮緬の幔幕を以て美麗に装飾せり

又御座所へは簾を吊り左の通装飾せり

御正殿御床

文晁青緑山水双幅　（桑田圓藏所有）

唐物青貝高卓　（桑田勝平所有）

白磁香爐　一個

蓬萊松盆栽（鉢丸形古朱泥紫宿ノ丸臺）　一鉢

珠柴香合　一個

御寢殿御床

直入青緑山水幅　（桑田圓藏所有）

銀臺製若松ニ五羽鶴ノ置物　一對

御小屋詩繪ノ臺　一個

御食堂御床

不老長春　（桑田勝平所有）

松年富貴長壽双幅　（鳥長右衛門所有）

右色紙銅鳥乘人物置物　（市橋鉦盛所有）
外無地金屏風　（桑田勝平所有）
同　（桑田熊藏所有）
金地絵屏風數双　（桑田靜平所有）
外數名所有

農學校行啓

仝　日

午後に至り風雨々暴く農學校へは約一里もあれば必定御見合せと相成べく非常せられ人々皆千古の遺憾と爲しつゝありしに引くも　殿下は此の暴風を衝きて行啓仰出されたるは全校の爲め無限の光榮とこゝに申すべけれ午後二時三十分奥羽巡回御出門此際倉吉町長尾崎忠平氏外六十四名へ門内拜謁の榮を賜はり御列は例の如し御順路を經て二時五十分此村なる鳥取縣立農學校へ行啓あらせらる該校には校長久道の入口に大國旗を交叉し中程には高二十四尺幅二十六尺見上る許りの大緑門に「大旭日を描かしめ便殿には新築の講堂「輝雲閣」を以て充て玄關は緑葉を以て作れる緑の幕を張り國旗を交叉し又數本前よりの御手植を隔ふ可き爲め設けたる當所は閲兵の中央にあり之にも緑門を構へ國旗を以て裝飾を爲し便殿前には無數の小國旗を以て裝飾を爲し便殿内部は總て金屏風を以て飾れり（因に右金屏風は市橋鉦盛組長右衛門氏の新調供御せし者）門外喜久道の左側には全校生徒生徒父兄中學水砂少尉指揮の下に若劍棒鼓の禮を爲しラッパ君か代を吹奏す鳥取門内に入るや軍樂隊あり君か代を吹奏す校長以下職員は玄關左側に整列本迎す　殿下には校長の先導にて新築講堂の便殿へ成らせられ同處に於て山陰校長委任教諭河原亀輔・西谷清次郎氏等に單獨拜謁を賜ひたる後砂庭を渡り農場をも廻覧あり農場中央に出御金松を記念の爲め御手植あらたる後、校園場に繋きある種畜場牛馬十一頭（外

國產種牛及び國內良馬二頭）並に生徒の農業實習を御覽あらせられ便殿へ入御同校へ御寫眞及金三十圓の御下賜あらせられたる上還御仰出さる校長以下職員の奉送樂隊の書か代等奉迎の時に異ならず門外には各生徒實習の儘直立敬意を表し校旗隊のみ捧銃として整列奉送ラッパ君が代奉迎同校儀衛堵々御機嫌勇ましく御發輦ありしが小鴨橋は風荒き爲め御徒歩にて東郷大將風を捲て御渡り相成り四時四十分無事關へ還御あらせられたり

全校の獻上品

學校統監二、職員の事一、扁額の事一、勉業碑の事一、農事實習の成績品アスパラガス、甘藍、二十日大根、草いちご、草苗、玉ナサ一籠其他花籠御臺盤に入れ御持歸りを願ひ御賞用あり

光榮を紀念せん爲め學校の高地を太子丘道路を新路と稱へ不朽に傳へんとす

本校は此村の高地にあり行啓の際は陛下より御徒歩を願ふの外あらすとの事なりしを山脇校長は深く之を憂ひ在村田中喜一郎氏に謀る所あり喜一郎氏は私費を投し陛路を新築すること百三十間其形「く」字形を爲すより喜一郎の書を冠し吾久道と稱し御路を通はせたるなり

打吹公園御遊遙

陛下には學校より還御の後打吹公園へ成らせらる此日天候漸く和ぎ薄曇に微風戰き新緑滴る許りにて湯新の風趣一入賞すべき光景に　陛下には御景色勝れさせ玉ひて七八丁許りなる園內隈なく御歩を運ばせ給ひ松の御手植あり夫れより物産陳列所に入らせられ御覽の後門阿遊りの御休憩所に憩はせられ柱に凭れさせ給ひ小學校生徒の綱引を御覽あらせらる此綱引は古來當地特殊のものにて陣所と稱し町民の二組に分れて決戰するものにして其結果弊害を醸す事あるが爲め近來禁止し居たるものなるが今回は小學校生徒のみをして演

せしめたれは其給々として勇しく對陣せる樣　殿下には一入御感あり時々莞爾として御盃芙を賜はせ玉ひたり

因幡打吹公園

若狹路にして打吹山と稱す「傳へ云ふ天文下り歲を打ち笛を吹き樂を奏す因て名とすと」城は武田氏の支城にして家老豊尾氏の守る所なりしが維新後悉く毀ち今猶天守閣の基礎を存す）日露戰爭前　殿下山陰道へ行啓あらせらるゝやの御内議ありし際是が準備として三十六年五月今回の御座所に當てある兼望閣と有隣館（公會堂）建築と同時に洞疏を剪り樵莽を拓き崖を穿ちて新道を通じ園池噴水等を設け山下數町歩を開拓して公園となしたり南原にして閑雅なる處は養し山陰道有數の名園なり

園内には兼望閣、有隣館あり南方高地に招魂社及青銅の招魂碑ありて物產陳列場は今回新設せるもの其前に高さ一丈餘巾八尺東宮殿下行啓紀念大石碑あり（此石はもと岩城村字三明寺の岩窟と稱する洞窟の戸なりしといふ）碑文左の如し

打吹公園之碑

侍從長兼内大臣

從一位大勳位伯爵　德大寺實則篆額

伯之倉吉有山焉曰打吹乾艷廻首於郡巒垂峴之上鳥水走其麓田疇莊其外墅於福岳降東則遙瞰馬山於滄海之右西則望船上大神諸嶺於雲烟縹緲之際亦一勝地矣」庚子夏　皇太子納妃東伯郡民相議設公園以志慶事不能得地而止癸卯冬知事寺田君祐之令郡長曰嶺岡剛年夏　太子蒞山陰過倉吉宣旨傳行證郡長謂不如拓打吹山麓其公園以營行證是一舉兩得者謀諸郡民皆曰然於是悉督更役刈棘莽殞

打吹公園内部

場關係當局者ニ於テハ常ニ之ガ保護ニ努メ以テ其ノ發展ヲ圖ラレンコトヲ望ム

植樹掃除ニ關スル件

一、植樹ハ成ルベク春季ニ行フコト

一、植樹ニ當リテハ土石ヲ除キ地味ヲ肥ヤシ植付ケ後ハ充分灌水ヲ爲スコト

一、植樹ハ成ルベク雨天ヲ選ビ

山陰製絲會社へ御使　五月十七日

本日午後一時十分有馬侍從を御使として町長れなる山陰製糸會社へ差遣はさる行列は島取警察部免許し林原縣技手傳令し次き有馬御使松根東宮職幸掛事務書記總一名關從會社へ着せらる門前には社員桑田與藏黒井甚三郎及傳員一同整列御出迎を待し黒井社員先導階上の休憩室へ案内せり同社へ對しては生糸は國産第一等のものなれば益改良の進歩發達を計らざるべからざる旨の令旨を傳へられ次で工場を黒井社員の案内にて親しく巡視あり終て、貯蔵室、繭取扱所等一々黒井社員より原技手御説明申上げ再び休憩室に入り製業上及會社の現況等種々御下問あり會社より此回會社の沿革及績業報告表等を捧呈し尚製糸を御覧に供して揚方、工女寄場法等詳細陳述せり御使は鏡がて行列前の如く御旅館へ還られ復命せられたり

頌徳表

内海東伯郡長は東宮殿下の行啓を迎へ奉り左の頌徳表を奉呈せり

鳥取縣東伯郡々會議長從四位山本春藏等誠恐誠惶頓首々々伏して以みるに皇祖文武天皇陛下不世に國命に膺り風に基貢を厳み萬機を親裁して幣絹を宮殿に收め百度を革新して鴻勢を宇内に播み天壌神器を授し坤を轉し給ひ罪を大邦に問ひて版圖恒れ拓け傷を強國に假きて威武四に振ひ舟車の及ぶ所橋能の通ずる所風を聞きて畏怖し譯を重ねて光を觀る況んや儲君聖明倫比を絶ち仁育偉力ある盛徳皆に顯宗に光り大業益々來葉に振ふる儲臣　春藏等誠恐誠惶頓首頓首恭しく惟みるに皇太子殿下環接秀を抜き養德淵中學に齒課して三善遵守く正と居處して脩楚習ひ慣み親慈生器當に儒章に準由するを勉め進軍豊國尤も將に古道を揚厲し給はんとす朝綱の事殷んなるに遭遇し心密勿に盡瘁して覆さあら寧時に玉體を方隅に奉げ常に叡念を民瘼に軫ませしめ給ひ百僚重曜の師を仰ぎ高庭淸雷の響を聞き深く眼體の盛を企

望し尤不承の至を仰期す加るに臨幸数々被房に兆し瞬証殊に青宮に集り維城幷び植し園本益々固し微臣重禹等鼎窟に伏在し上日月に遠く毎に盛事を聞き歓喜に堪へず拮据の遑くも至るに遑び風雲の末民を照るを得遠近黎心の望を切にし士民が願の慶を賀く聊か鼠芹に擬し謹みて里歌を撰び以て聖感を布き伏して下記に奏す微臣　重禹等誠恐誠惶頓首々々拝上

明治四十年五月

拝謁者

殿下著御の後拝謁の栄を賜はりしもの左の如し

東伯郡長　内海　淡（単独）

倉吉区裁判所判事岡村　通

貴族院議員　桑田熊蔵

仝大尉　山田幸太郎

仝　坂本長蔵

仝　岩垣勘太郎

仝　池田豊穂

仝二等軍医　景森直太郎

鳥取県技師　宮崎政之助

仝判事　内山辰三

陸軍騎兵大尉　木幡俊三

豫備陸軍中尉　土師保嘉

豫備陸軍少尉　酒井真治

後備陸軍少尉　戸崎集蔵

豫備陸軍二等軍医相谷伸治

後備陸軍大尉　植田登（以上通例）

奉拝者

倉吉町長尾崎忠平○仝助役中村鶴蔵○東伯郡会議長山本幸蔵○仝副議長三枝礒二○郡会議員秋田芳蔵○仝尾崎国太郎○仝吉田岩太郎○仝益田傳吉○仝北岡善蔵○仝牧野牧蔵○仝重信百蔵○仝小川貞四郎○仝桑田勝平

○仝山科友藏○仝山本幸吉○仝太田源藏○仝山本國藏○仝小泰雄藏○仝石黒喜一○仝安藤長太郎○仝山本彌藏○仝小矢野庄藏○仝加藤康藏○仝永井甚平○仝豊田太藏○仝近池彦次郎○仝福山利平○仝仝光六平○仝松本武次郎○仝足立藤藏○仝小谷與之吉○仝山根彦藏○倉吉町會議員藤原定藏○仝小林長吉○仝會坂福平○仝堀友藏○仝小松源次郎○仝医師淨○仝戸島金藏○仝安藤惣平○仝齋木吉三郎○仝船木邦治○仝中原文藏○仝安藤谷藏○仝西島猪藏○仝高橋平一郎○仝妻藤省吾○村旅館業恒功勞者岡野勘藏○仝奥野庸平○仝倉光必明○仝篠井甚三郎○仝西谷金藏○仝桑谷國藏○仝三島信吉○仝桑田榮藏○仝金田彌三郎○仝高田平吉○綠綬章佩者中井太一郎○仝渡邊信平○藍綬章佩者岩本陳所○赤十字社佩有功章者市橋榮藏○仝福島長十郎○赤十字特志社員市橋昌晴○仝伊藤彌壽九郎○仝本多岩藏○仝本田政藏○福島猪藏○仝仝長右衛門○仝仝保太郎○仝河本長兵衛○仝河本猷藏○仝高田四郎○仝堀岩吉○仝中井義其○仝山本市藏○仝山内德兵衛○仝尾崎指○仝佐伯友光○仝船越篤吉○仝福井友藏○仝日置定藏○仝杉本善六

扈兵者　大嘉納太郎○仝畑民吉

御下賜

紋章入三組銀杯　壹組　　御旅館へ下賜
稍地　壹反　　内海東伯郡長へ下賜
添料　壹對
金百五拾圓　　倉吉町へ下賜
酒肴料　若干　　東伯郡奉迎關係者及
御菓子料　一包宛　　鄉使局派出員一同へ下賜
金子　若干　　宮崎種吉拉師へ下賜

金子　若干　鰐上神社神官池田周逸

金子　若干　牛乳納人其壹仙次郎
　　　全　豫備其壹　定一下賜

献上品

一酒　壹箱
一製糸　貳括
一羽二重　大巾　壹疋
一納本綿　二十反
一紬長　四匹
一製　壹龍

一精撰製糸　壹箱　山陰製糸合名會社献上

一太刀　一振
階記全郡出身御用鍛治宮本重則の鍛へしものなり
一大麻（三尺餘あるもの）二十枚　東伯郡献上
一鰹　二四

一羽二重　二本　東伯郡由良、瑞穂、常葉、御手、葵の五村献上

一本縣產鵜山白米　一箱
一テーブル掛　一脚
一旭掛　一箱

鳥取縣農會献上

白木綿一反　八橋　魚網地若干
帛紗一　同　豊田うめ　同　宇野
繻絆三等　同　中井つる　同　同
白木綿八尺　西郷　太田かね　綿木綿一反　倉吉　米
同一反　同　倉繁きぬ　同　同　松原よし　河原
同一丈　同　生部ひさ　白木綿　同　安藤いし　伊木
同一反　同　杉本なを　同　同　小林さん　八橋
同　同　笠見せき　同　同　八橋
同　同　山本なを　同　同　吉田すゑの
同　同　瑞穂田熊とも　算綿十二枚　遠東　山本せき
同　同　田中こと　白木綿一反　綿木綿　西田ふゆ
同　同　常盤　同　同　潮手　明里あき
同　同　表きみ　同　同　榮村　平信うめ
同　同　会人　同　同　常盤　山本たけ
同　同　遠藤たみ　木綿糸若干　同　向井ふゆ
同　同　北村いき　同　同　下北條
同　同　谷田しつ　同　同　日沢いわ
同　同　河崎ちん　木綿糸五十匁　日下

白木繩　一反　　同　角　まつ
同　同　同　生野はる
同　同　同　岡部しめ
魚網地　若干　　字野　高須彌七
同　同　同　坂田とめ
同　同　同　伊藤仙三郎
同　同　同　伊藤彌三吉
同　同　同　竹中豊三郎
同　同　同　中川りき
同　同　同　伊藤わき
同　同　同　松嶋ちよ
同　同　同　尾島彌五郎
同　同　同　河原さめ

倉吉町より御料理に供する爲めに左品献上

七面鳥　一番を農學校にて作りたる野菜にて能話として

御買上品

公園内物産陳列所にて御買上品左の如し

羽二重　一本　東伯郡倉吉　桑田岩藏
繩　同　同　同

仝	一本	由良村	福本 源蔵	納	一反	倉吉	桑田 松藏
仝	一反	倉吉	鰕本 長藏	仝	一反	仝	増田 代吉
仝	仝	仝	鰕本 產藏	葡酒	五瓶	小鴨村	中井善七郎
生姜	一斤	三朝村	官業革新會	煎餅菓子	三瓶	仝吉町	山下 ヨヲ
煎餅菓子	一瓶	仝吉町	吉本治三郎	山葵	五鐶	鼎村	入江 イソ
仝	五瓶	倉吉町	佐伯新一郎	鶏活き子	五箱	鼎村	入江 イソ
蒸饅頭餅	一瓶	社村	大森喜一郎	初雪	五箱	鼎村	大西 榮吉
雷鮎菓子	五箱	倉吉町	堀川 仲藏	三度笠	五枚	長瀬村	田後製笠合資會社
手拭	四反	倉吉町	妻藤千代藏	焼物玩弄物	三種三組ツヽ	仝	森岡貞永郎
墨計製敬器	一個	小鹿村	秋山 文吉	雲丹	五瓶	下中山村	渡邊 信平
雲丹	五瓶	赤崎町	牧野茂三郎	御目物ノ内菓子盆 一種盆山		仝吉町	米田 貞一
煎餅	一瓶	鼎村	大西 榮吉	鶏冠御幸	一瓶	下中山村	渡邊 信平
陶器	一組	瀧手村	前田 要人				

奉迎位置と裝飾

倉吉町奉迎者位置

倉吉停車場より倉吉公園に至る奉迎送者位置順序は左の如し

▲道路左側（南方）　高齢者　各官衙員　赤十字社員　上北條校　中北條校　北條校　日下校　農培

校　河北校　羽合校　淺津校　橋津校　河南校　穴鴨校　西郷校　高勢校　三朝校　鼎校　加茂校

竹田校　私立精志塾　上灌校

▲道路右側（北方）　赤十字社員　武徳會員　神官　僧侶　倉吉孤兒院　農學校　軍人遺族　在鄉軍人　岡山縣高等小學校

▲公園入口　高等官夫人　愛國婦人會員　赤十字社婦人會員　篤行者　高齢者　小鴨校より農學校に至る間の奉迎道者并親位置の順序は左の如し

▲道路右側（北方）　高齢者

▲道路左側（南方）　南谷校　鴨川校　上畑田校　矢送校　山守校　大鴨校　小鴨校　北谷校

倉吉停車場構内の柱其他總てを青杉葉を以て包み天井裏には小旗を立て入口には杉葉を以て造れる高さ三十尺の大緑門を建て之に題するに天揃無窮の文字を掲けたり

大緑門

倉吉町の入口には上部に菊御紋章を掲したるものを付し下部の島組には赤色にて奉迎の二字を顯したる宏壯なる四門足型の大アーチを設けたり

裝飾

町の入口よりは青竹の垣を造り之には日章旗を立て小旗を浮山に飾り恰も満艦飾の体裁頗る人目を惹けり

町内には各戸國旗軒燈幔幕美々敷辻々には大國旗を交叉し頗る麗しく飾られたり

打吹公園は園内隈なく清掃され砂を布き出入を禁じたり

御通筋本道には總べて白砂を敷きて清淨せり

設備と雑況

仮設電話と郵便局派出所

東伯郡衙より御旅館迄仮設電話を架設し以て両者間の交通に便せり又倉吉郵便局派出所は御旅館の一隅に設置し官用に限り取扱をなせり

倉吉町の儀典準備左の如し

一、煙火十七日午前十時五十一分倉吉驛へ御着の際奉祝の爲め西郷村山根字一本木積に於て打揚く

二、煙火十七日午前十一時三十分より午後二時迄字向積に於て奉迎の爲め打揚く

三、旗行列十七日午後五時より成徳小學校運動場にて同校生徒体操を爲す

四、綱引競爭十七日午後五時三十分右同場にて同校生徒綱引を爲す

五、煙火十七日午後魚學校より御泛御後五時より七時迄前煙火場に於て打揚く

六、吉倫樂十七日午後五時陳列館へ御成の際奏樂

七、提灯行列十七日午後七時より九時迄縣立農學校、社小學校、小鴨小學校、成徳小學校、河北小學校、生徒小鴨川堤上を行列す

八、向山點火十七日午後八時向山及小鴨川堤一帯に於て點火を爲す

九、煙火十七日午後七時三十分より同九時三十分迄前煙火場に於て打揚く

十、煙火十八日午前七時頃より同八時五十分迄前煙火場に於て奉送の爲め打あく

十一、煙火十八日倉吉驛御發車に際し西郷村山根字一本木積に於て打揚く

十二、十八日松崎村御通御の際東郷湖邊に漁獲を御覧に供ふると

倉吉町の至誠

倉吉町は僅に御一泊のことなれば如何にもして奉迎の誠意を表し本らんと種々計劃を爲しあうしが朝來

の強風にて折角準備せられある餘興も如何あらんと我も人も天を仰ひで氣遣ひしに午後より次第に風もなき小雨もやみて青天を現はしたれば町民の歡喜頂上に達し何れも我皇の徳徳と崇みし

夜の光景

市街の四方より煙火は數一億神天を割るの間に御旅館正面の向ふ山一帯を基地とし數限りなき色提灯を配布して雪花を散きたる本通門を左方に現はし右に御座所の芝上迄には六千の高燈を以て周圍約百三十間の距日を映し出だし更らに其の山麓を繞くる小學河畔には御日の屑かせらるゝ限り果てもなく珠數を張りたらん如くに燈燈を点し裏の方遙かに幹を放て甘農學校成徳校其他河北、江、小學の五校聯合のカンラン行列は次第に堤上を登進し來り御旅館正面の位置となれば堤上を西に東に列を正して行き交ふ樣の美觀たとふるにものなし此際各生徒は整列して高歌を奉祝し其聲四邊の山河を震撼せり

雜踏

話衛門前及び本通筋は群衆の雜踏織るが如くなりしも御旅館附近は比較的靜穩を保てり而して門前及び高等、尋常兩校に於ては階上階下に數百の提燈を吊し白晝に相映じて美觀を呈したり

寄贈品

東伯郡より各高等官衆官及新聞記者等へ東伯郡誌、打吹公園圖等を寄贈せり

侍從及各高等官宿泊所左の如し

東宮大夫（桑田熊藏方）東宮侍從長（桑田岡藏方）東宮武官長東宮侍從、東宮武官侍從（第平亭）東宮侍從兼武官（全主事侍從東宮事務共他（石原開助ち公園但樂部）東郷大將（桑田藏平）師團長（金田彌三郎）內匠主事（齋木善三郎）警保局長（桑田熊藏）騎兵聯隊（戸島雄藏）憲兵隊長（高田幸治）憲兵隊（尾崎旅

館）主馬寮二牧田ひめ、松風樓）本縣知事以下（風月樓）等なり

記者招待會

郡と町とより行啓に隨從せる新聞記者二十餘名を松月樓に招き昼餐の宴を張れる後待委員日置秀眞氏の挨拶に次て一場の希望を述べらる縣外記者は交々起て謝辭と謝辭を述ぶ

縣内記者代表としては鳥取新報記者は　東宮殿下行啓を忝ふすると全時に山陰道の澁滯に陷れたる因伯を天下に紹介せられんことを各地來遊記者に望む云々と述べたり

因に倉吉町にては記者を高等官全般の優待をせもと

新聞記者宿泊所

岡本　岸本　金田　風月樓　東屋館の各旅館なり

倉吉御發車

五月十八日

今朝は昨日程の暴風には あらざれども風尚烈しく供奉諸員の心配一方ならざりしが　皇太子殿下には御機嫌麗はしく御豫定の如く午前八時五十分旅館御出門御序列前日の如く整々として倉吉驛に向はせらる倉吉にては午前七時三十分の頃より御發車時刻まで煙火殷々として引續き輕氣球の中空に飄るあり來遊者は早朝より夫々所定の位置に就きて靜肅に整列すれば應て御列は停車場に到着し殿下には供奉の百官を隨ゐさせられ九時二十分御着驛直に御召車に御移乘來送驛伴の裡に九時三十分御發車あらせらる途中東郷池に於て御休憩をなし殿下には車中より御覽あり青谷以來各驛にては停車場構内何れも裝飾嚴重を表し着車毎に煙火を打揚げ拜謁人堵をなして群集せり

秋田県師範学校全景

鳥取御着

五月十八日

漸くて十時五十分盛裝せる御召列車は古海の假停車場に入り來る　陛下には直に御下車本邊の夫々に對して御會釋あらせられ御馬車には本井侍從長御陪乘中山大夫村本武官長其他の供奉員の列例の如く列外直衞大將其他隨從し市内若櫻街道筋より大名小路に折れ區裁判所前通より御堀筋御通過午前十一時二十分久松山下の新築御旅館屆に成らせらる著御の後午後一時三十分第一の廣間に於て文武高等官に拜謁を賜はり午後は御休憩あらせらる

本日停車場には舊鳥取藩主池田侯爵、津川少將を始め高等官、有位有爵者、赤十字特別社員、受賞者、代議士、縣會議員、鳥市長等奉迎し八本下騎隊長は歩兵第四十聯隊全部（軍旗は第三大隊中の中隊にて護衛す）隊長大橋大尉、旗手は半池少尉）を引率して奉迎しラッパは君が代を吹奏し兵士は捧げ銃最敬禮の姿勢にて奉迎せる樣勇ましき戰勝國武夫の面目を發揮して實に壯觀を極めたり

古海停車場より御旅館屆の沿道は各町奉迎者夫々豫定の位置に就き一般非觀人は堵の如く集り煙火は御着の前より打續き打揚げ頗る盛況なり

御旅館屆邸構造及裝飾

本邸は片山工學博士の設計にして明治廿九年十月起工本年五月十一日竣功池田侯爵家の建造物にして四萬四千圓を費せしといふ程ありて頗る宏壯なる二階付洋風建てなり間口拾三間半奥行拾二間坪數百六十二坪なりといふ

地は舊城跡久松山の麓屆御殿の跡なり御見晴しの前面には湯山の若葉今を盛りに茂り出でゝ眺望を見る山の美なる此今や時なり外濠土橋前には大扉門を設け夫れより五間にして圍門を構ひ右側平家造り

には郵便分局左側衛兵休泊所夫れより四拾間許りにして正門に達し御座所は是より東四十間許りある正門右側は儀仗兵詰所左側は九拾余坪にして廣前邸内の敷地約一町位

本館には菊花御紋章ある紫幔幕を掲げ御座所玄關を見れば緋羅紗なる金銀屏風立て廻めぐらし其間瓶花活栽もて之を裝飾し正面には大夫兩長主事の控室あり右に當個官控所東宮職事務室あり左に御道具置場あり玄關の兩側には右に應接所縣官出張所藥局（藥物箱ジック）左階段を挟みて御風呂場物置あり（ゼロードセン敷）階上には階段右に陳列場侍從武官控室内令人室左に御物置御厨あり正面に謁見所右に御食堂供進所（何れも緋緞を敷く）左に御座所御寢室あり（疊敷）御座所は金屏風二隻を立廻め御卓には赤地錦繍の卓掛映ゆく側に御椅子一脚卓上には金彩繪の煙草入銀製灰落しを備へあるのみ外に油場流二宮義子の插花をもて裝飾し又緋羅の上には青磁唐獅子の置物を据ゑあり謁見室は各方よりの書翰骨董品もて製飾され正面に赤錦繍の卓掛房々と垂れたる御卓夫れに亜より調製せる金彩繪の椅子備へあり盆栽は階下階段の位置に階上の樣上に陳列せられたり

以上は本館にして夫れより廻下を通り附屬建物あり左側は判任控所、仕人室、寢具置場、判任官浴室等外以下浴室右側は仕人詰所、全若侍所及寢室とす

本館裏手南へ三十間を距て三間に四間の建築小屋數あり此處は　殿下御憩みとして時代行列及盤工御意覽の際出御を仰くべき所なり

縣廳へ臺臨

五月十九日

東宮殿下には午前九時廣邸御出門本戸侍從長御陸乘第二馬車は本多高辻兩侍從伊勢侍補秩祿侍從第三馬車は中山大夫村木武官長桂主事山田知事列外屋從は東第大將平井鎭守府總長各高等官其他隨從騎馬へ行啓あらせらる（全路にては豫て第一應接所を以て御座所に充て此處には何れも新調の敷物を布き金屏風を引廻し稻垣

鳥取縣廳

鳥取縣師範學校

の梅楊谷の猶二輪を揚げて裝飾し）縣高等官、各郡長、藤岡市長、縣會正副議長等は門内に判任官其他は門外に參列奉迎す　殿下には山田知事の先導にて玄関に入らせられ暫く小憩の後各高等官縣會正副議長に紹介詞を賜はり山田知事は謹て左の數種を捧呈したり

鳥取縣統計書　縣治概要　因幡白兎　香合石　菊蒔繪煙盆　木象數点

渡邊縣會議長、藤岡市長よりは中山大夫を經て頌德表を捧呈し約四十分間にして御出門第一中學校へ御着あらせらる

頌德表

渡邊縣會議長の捧呈したる頌德表

謹　皇太子殿下御遊山陰道

明治四十年五月十八日、恭遇　皇太子殿下御遊山陰、恩賚民情　臣鳥取縣會議長渡邊澤水誠謹誠惶、頓首、頓首、按山陰天下之僻土、國治又山陰之僻陬、大海當北橫其北、峻山逶迤峙其南、是以自古、王化不浮、是陸未申、頹乎敦龐相踵、對建爲治、八州之道、七百之載、有後鳥羽上皇幸隱岐、既固金甌、猶牧民頌美皇澤愈著、又忠播遷、若夫昇　鳳翔于青天白日之中、仰　鶴鳴于瑞雲祥靄之外、周史既不載、臣等固未、嘗目睹　皇國乙未、同時　天子乙民　面不克與他州民衆俱霑雨露、共仰日月、蹔陪蓬莊庶幾可、亦逆勢不使然、何他邦人之多屬、而我州民之不幸也、謹惟今上天皇陛下繼天統日新、提四十五箇國之乾綱　敬七百餘載倒持之太阿、轉否爲泰　撥亂反正、無爲之治普于四海、慕義之風震于萬國、於戲盛矣哉、今又鸞旅遐莅有道治、深念邊民或失所、特　勅　皇太子殿下觀察民情、伏以　皇太子資素聰明、材兼文武、天委主副、英德淵深、純孝之德修于內、慈仁之聲溢于外、憂勤惕勵、何貨一日之安省採詩、不憚千里之

遠、於是乎、舞士由川始養重光藩臣草木、亦涕厚澤、嘻乎已達　聖意又親　皆事、第例以答　皇德、當如何報　慈恩、忠敬不錢於風夜、須臾臨補於萬誤聚水等誠意誠性頓首頓首、謹上奉陳謝、

藤岡鳥取市長の捧呈したる頌德表

乾元貢始天日宣光
聖主御極萬物威明　郡基棠固　德澤滋洽　皇武宜遷威稜振八荒道傳堯舜德邁夫湯
帝子臨茲
祖靈笠降祥悉惟
皇太子殿下詩書圖裡夫地鐘岐嶷資元良純固神人仰　叡明成孝內遵英武外榮是　皇運無疆之期乃　國家隆治基夫吾市之地海陽山遊交通不便雖運劃亟是以風化之行當後於他邑々民區區來拜
聖華今也人文都々闚步岐々蛾眉凌澎湃航貢鳴鉛於是　金鉦鼓和筆輪出　承華門彩旄翔　儀容秩秩海濱微花細草轉溶　天日和照恩普生悉子恭拜　謝日生頓基尊　皇恩於是益洽風化從今愈新臣等生遭　昭代觀拜盛儀光榮無極益盡愛表市民謹奉頌辭

明治四十年五月十八日

鳥取縣鳥取市長
從六位勳六等　藤　岡　直　虔

誠惶誠恐頓首謹上

第一中學校行啓

謹くて　殿下には縣廳より直ちに第一中學校へ成らせらる仝校生徒は運動場の入口に整列奉迎し職員は玄

關前に奉迎し松島の着するや田中校長御先導講堂に設けられたる玉座に入らせられ御休憩中田中校長、田崎、片岡、山村の各敎諭（奏任待遇）に拜謁を賜はり夫れより校庭に於て生徒の鞦韆及短艇競漕競技會を御覽遊ばされ供せる菓樓様は頂上と周に土器を入れ其中に白紙の刻みたる多く入れたれば一撃せらるゝや土器破るゝと全時に其刻みたる白紙は飛散し又別に一刻の紙と白赤の紙を縒りたるものとを能に入れ双方に備へ置き試合に勝たる方が負けたる方の能を打壞すや突然紙の飛出すと共に美しく多數の切紙雪の如く飛散せしは美事なりし右終つて生徒の成績品を御覽あらせられ全校へ御寫眞并に金子若干を御下賜十一時二十分還啓あらせらる

師範學校行啓

御列は午前の如く午後二時御旅館御出門師範學校へ行啓あらせらる全校にては土井校長の御先導にて講堂に設けられたる御便殿へ入御土井校長以下奏任待遇敎諭に單獨拜謁を賜はり御少憩の後全校生徒の徒手體操、銃劍体操附属小學生徒の旗体操等及成績品を御覽相成りたる上紀念松の御手植あり全校へ御寫眞并に金若干の御下賜あり約三十分にして御出門其際名譽職員、受賞者へ奉拜を賜り夫れより縣立高等女學校へ成らせらる

全校成績品の内入點は御持歸りを願ひしに許容せられたり

女學校行啓

茲くて　殿下には二時五十分高等女學校へ臨ませらる校庭には花の如き女學生黑髮の上に揃の白リボンにて整列御召車の近付くや一斉に首を垂れたる有様美しく　殿下には殊に御機嫌麗しく校長の先導にて講堂の玉座へ着せられ宮崎校長以下奏任敎諭に拜謁を賜はり御少憩の後体操場へ成らせらる御架の左右には藤棚をしつらひ便殿前には剪綵造花等を陳列せり体操場にては補習科女生井尻としゑ子井上ちせ子等鈴木敎師の

薙刀、太刀の型、女學生の連續徒手体操及成績品（四三十三點御持歸りの栗を得しといふ）調査覽の上全校へ御賞與と金貳御下賜ありて還御あらせられたり

鳥取聯隊行啓

五月二十日

東宮殿下には本日を以て鳥取歩兵四十聯隊へ行啓あらせらる同聯隊にては本日行啓の際は閲兵、分列式のみの御豫定を變更の計畫なりしが十八日　殿下鳥取着御八本下聯隊長奉迎を賜りし折　殿下には聯隊長に對して二十日には閲兵分列式の外營舍、被服庫、炊事場等をも御覽あらせらるゝ樣御内命ありし聯隊長は事の意外にして　殿下の軍事に御熱心御精勵遊ばす思召の斯く厚きに恐懼措く處を知らず退出後直に歸隊して御到着校一同を集め深く　殿下御思召の存する處を傳ひたるに一同は至誠の高大に感激し日夜を擔して其準備に孜々として努力せしがため準備全く完整を告げたり

斯くて本日は朝れり午前九時を以て御豫定の如く鳥取御出門あらせらる御召馬車には村木東宮武官長御陪乘中山大夫本戸侍從長以下文武供奉員例の如く供奉し聯隊よりは聯隊長前官山縣歩兵中佐新成司令官代理として面談に列し面談堂々順路を南方に立川村なる歩兵第四十聯隊に向はせらる

聯隊にては先着の安東第十師團長、津川第八旅團長、近衛騎兵中尉池田侯爵、八本下聯隊長以下將校同相當官は營門外に整列奉迎す下士卒以下兵卒は早朝より練兵場に整列し面談の營門に入るや排銃の禮をなし君が代のラッパは嘹亮として響き渡り一同恭然として最敬禮を表す　殿下には御下車直に將校集合所兼用なる御便殿に入御あらせらる

此便殿の間には生花一瓶盆栽二鉢を飾り簾を垂れたり次の間は勤任侍奉員の接所とし此間には戰死將校の大寫眞三枚戰死將校大橋少佐以下二十枚下士卒以下一千枚の寫眞帖、戰死者戰歷等を陳列し次廣間は一般供奉

員の控所に充てたり

斯くて御使殿にて御休憩中八木下聯隊長以下將校一同に非酒を賜り八木下聯隊長より聯隊教育の狀況聯隊將校の氏名等を言上し戰死將校芳名帳、戰死者戰歿を捧呈したり

暫て　殿下には八木下聯隊長先導申上げ北側門より御馬車に召され練兵場に出御あらせらる此時君が代のラッパ再び起る　殿下には檜隊に整列せる各中隊を首實の部より順次御閱兵あり始終拳手あらせられ軍旗の敬禮に對して御會釋あり夫より東側中央に假設したる白木造りに紅白幕を張りたる御座所の前に於て御乘車の儘にて駐らせられ分列式に移る分列式は八木下聯隊長之を指揮し中隊は前より北に向て檜隊にて進行す此時八木下聯隊長は騎馬にて御馬車の左側に侍立し中隊旗手の氏名を一々言上し第一大隊より順次「誰右へ」の號令に依りて敬禮を表しつゝ行進曲のラッパにつれ行進するや劍先旭光に輝き胸章相映し其壯麗美觀言はん方なし軍旗は第二大隊の中央にあり半破れ其縁片隅かに存するもの不思當年の壯事を想起せしむ終りて　殿下には御座所に入らせられ東雜大將、有馬侍從、相澤原田兩侍醫、山田知事其他使殿の後に隨從す少時にして小學校生徒の運動隊四千有餘名は手々日章旗を捧げて隊伍堂々入場し來り御座所前面遙かの處に整列して一齊に君が代を合唱し夫れより萬歳一呼を發したるに　殿下には能へ御覽あらせられ御滿悅の樣拜せられたり遠藤高等小學校々長の指揮にて　殿下の萬歳を三唱す其聲天地に轟き壯觀を極む

夫れより再び御馬車にて營内に設御炊事場より營舍營倉監獄六町に亘る間を隈なく御閱見あらせられ戰死者の寫眞帖幷に戰歿等御携帶ありて午前十一時三十分聯隊へ還啓あらせられたり此時君が代のラッパあり山縣中佐は衛戍指揮官代理として再び隨從したり

松樹御手植

五月二十日

殿下には御旅館扇邸庭内御散歩あらせられ四方屋へ成らせられたる際全部内へ紀念の爲め小松を御手植あらせられたり

御使差遣

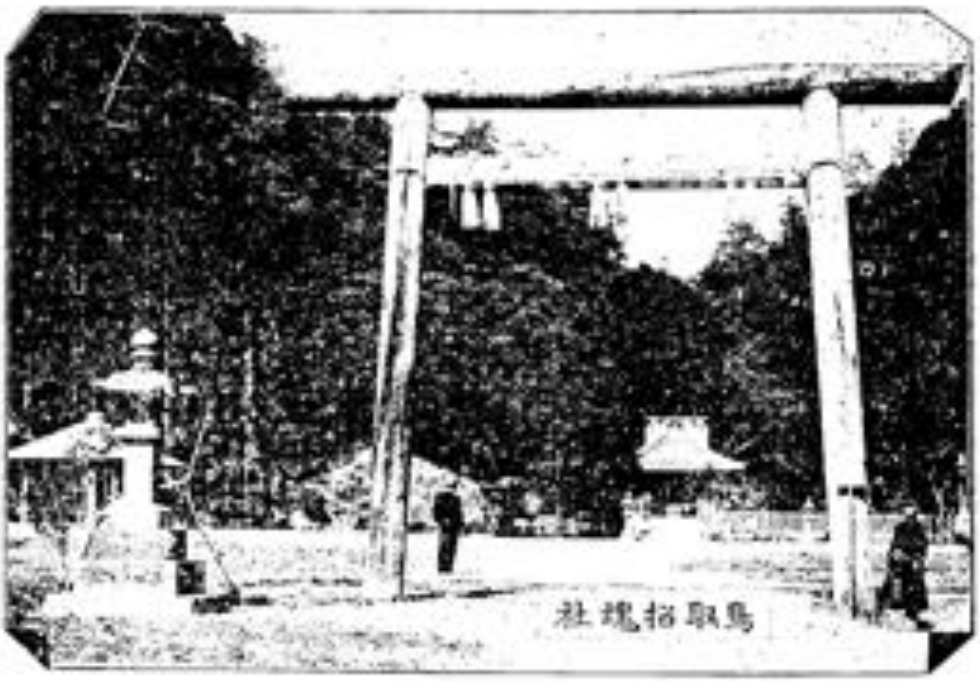
宇部神社へ御使

五月十八日

岩美郡國府村なる國幣中社宇部神社（祭主武内宿禰）へ御使として高辻侍從を差遣はさる御列は鳥取縣警部先驅全縣屬の嚮導にて仕人其他隨從午後三時御着ある村外には村長、赤十字社員、村内有志者等鳥居外には先着の水谷郡長、翁榮郡書記、伯田縣官、建部主典、榎本宮司は手水社前に出て迎ふ一行は伯田縣官の先導にて休憩所（神樂殿）へ入らせられ宮司の挨拶あり主典茶菓を進む御使より幣帛料及神饌料を呈せられ小憩の後縣官の先導にて參詣あり神社にては御案神殿を裝飾し夫に儀式を張られたり御使手水等の式ありて昇殿玉串を獻し降殿再び休憩所に入り小憩中直會の饗あり列次前の如く諸員隨從安德帝御陵參考地へと向はれたり

安德帝御陵墓參考地視察

午後四時御使の一行は宇部神社より直ちに國益村安德天皇御陵墓參考地へ視察として向はる御通過道路は各戸日章旗を掲げ道路を掃除して砂を撒き大字國益村には三ヶ所に緑門を設け敬迎の意を表せり聽て御使一行の長通寺門前に達せらるゝや此處には附近村有志者各公費團体員整列奉迎せり門内にては先着の水谷郡長始め部書記村吏員長通寺住職得明師等の出迎を請け休憩室へ入り小憩中郡長及得明師より安德天皇御陵の沿革等縷々開陳ありて御參考地の圖面、長通寺繪葉書（三枚一組）五十組（一箱にして紐付）を献呈せり夫れより住職の案内により御墓地を視察種々御下問あり得明師一々說明申上


鳥取招魂社

鳥取縣物產陳列館

門には國旗を交叉し玄關は靑の幄幕を以て飾れり而して御使の着せらるゝや前門内には美保村農友會員其他有志者整列し玄關には阿部場長場員一同と共に御出迎を爲し阿部場長の案内にて奉迎室（應接所は奉迎室事務所は隨行員其他の休憩所に充てたり）へ入らる此處にて參場會員の御禮を悔へられ場長之に奉答し試驗場の沿革幷に成績書（農場圖入）を捧呈せり夫れより場長の案内にて場内試作物及び場内林産物附近農産物等の陳列室へ臨まれ再び奉迎室に復し茶菓の饗を受け午後三時過ぎ歸館せられたり

物産陳列場御使

五月二十日

本多侍從は高島仕人を隨へ御使として午前十一時二十分縣立物産陳列場へ差遣はさる島縣當部の先導にて大村縣屬吉原御使仕人其他隨行あり全場へ着せらるゝや場長東條晴友其他職員一同門前に出迎し場長の先導にて一行を階上應接所に招じて當場の沿革及現況等を捧呈せり夫れより場長の案内にて物品陳列場へ臨まれ親しく御覽の上再び休憩室に入り小憩中茶菓の饗あり○時三十分歸館復命せられたり

官祭島取招魂社へ御使

仝　日

午前十時御使として黒水東宮武官は高田宮内屬を從へ島取招魂社へ參向せられたるが當天當御列は左の如し

當場福山警部補は佐野島取縣屬後衛としては諸野全場書記等御使は石玉垣外にて御下車せらるゝや當社神殿左側招魂社協賛會長は御出迎先導して御昇殿あり本社大床に於て神饌料を神職に授さる神職之を神前に供饌し奉告の式あり神職は當社の沿革を大奉書に淨書御使者へ奉呈す果て休憩所へ入り茶菓の饗あり（休憩所は境内西方屋に一段を高く設け增築し幕を張り卓椅子を備へあり）終て列次前の如く歸館せられたり

殿下の御下問

殿下には御昼食の際にても詳細供奉員知事等に其種類、起源、流派等御下問あらせられ直ちに御側の者に記錄せしめ時には御手づから寫眞を撮らせらる例へば唄歌ならば其曲名を採薇品に紀念の文字あれば其由來を御下問あらせらるゝ等何くれとなく御下問あらせらるゝやに洩れ承る

殿下の御健康

某侍醫の談に依るに　殿下には最も御壯健に渡らせられ昨年頃より山陰行啓の御思召あり侍醫さへ召させ給へ配慮に及ばれとの御沙汰ありたる又　殿下には御記憶力の強く渡らせらるゝ事は格別なれども何事も一々御手帳に御認へ置かせらる

殿下の御滿悅

皇太子殿下には本縣へ御着啓以來官民共に熱誠を盡して奉迎申上げ玉車の過ぐる所何れも御仁慈の深きに感泣しける至誠の程を御覽し且つは侍臣より言上せる縣長歡待の情況等を聞召して非常に御滿悅あらせられしと漏れ承る

御陪食者

十九日午後七時鳥取偕樂館にて陪食仰付られしは左の諸氏なり

池田侯爵	安東第十師團長
津川旅團長	山田鳥取縣知事
井本第二部長	和田第一部長
	川越第四部長

二十日午後六時三十分眉山會館に於て立食に召されたるは左の諸氏なり

平井鐵道記總長	野村遞信技師
山岳陸軍中佐	安島憲兵少佐
荒木憲兵大尉	東雲技師
大野技師	杉山技師
井守主事補	西村警視
井上西伯郡長	藤岡鳥取市長
野波全商議長	箕田中尉
田島技師	阿部技師

拜謁者

十九日晩餐にては左の諸氏なり

鳥取縣知事山田新一郎○鳥取縣技師伊藤愛造○全事務官和田俊民○全技師平田秀靜○全技師東條壽友○全警察部長水谷忠一○全東伯郡長內海添○全氣高郡長友成直○全溝口郡長井上孝直○全日野郡長井上廉治○全米子税務署長村重人○全技師田島順俊○全事務官川越壯介○全事務官井本端助○全技師阿部巖○全技師奥谷千代恵○全技師大野鱗三○全技師永山純德○全入組郡書記井澤良次○鳥取市長藤岡貞藏○全商議會議長渡邊勝平○全商議長野波令藏（以上原駒拜謁）

石丸米子出張所長
內野檢疫事務官
竿田技師
山根警五位
內海東伯郡長
渡邊商議會議長
川村神戸郵便局長
奥谷技師

全日第一中學校に於ては左の諸氏なり

鳥取第一中學校長田中德助○教諭田崎晏○全山本茂次郎○全林守彫夫

仝日師範學校に於ては左の諸氏なり

師範學校長土井重之進○仝教諭石渡省吾○仝兼習園次郎○仝高橋直義

仝日高等女學校に於ては左の諸氏なり

鳥取縣立高等女學校長宮崎貞藏○仝教諭島雄益造

屆邸御旅館内に於て拜謁せし諸氏は左の如し

侯爵池田仲博

仝檢事丸茂榮五郎

後備陸軍中佐佐木詩人（以上單獨）

鳥取區裁判所監督判事西本清輝

退職判事正六位勳六等谷政治

從六位岡崎幸內

仝檢事黒正太助

後備二等軍醫從七勳六北垣小三郎

仝加藤豊

後備步兵中尉從七位勳六牧野鈴雄

仝西尾豊吉

仝宮脇義篤

仝勳五小椋竹藏

仝松島隨敬

鳥取地方裁判所長判事宇佐美利和

鳥取聯隊區司令官步兵中佐長木儁八郎

正五位勳四本間泰

仝判事豊原壽一

仝佐々木亮

後備一等主計正六位勳四野田正孝

仝地方判事村松藤吉

豫備二等軍醫從七位勳六地原壽

仝二等軍醫從七位勳六原田正廣

鳥取現番署長稅務官須田弘夫

仝三等藥劑官正勳八六山崎篤代治

仝田中信一

仝功五小島重太郎

仝後藤良三

仝檢事正筱岡親

後備陸軍步兵少佐小倉小次郎

從五位勳五羽島清輝

正六位勳六天野萬次

從六位勳六梶川孟温

鳥取區裁判所判事小谷源太郎

仝唯倫次郎

仝步兵中尉從七位勳六澤田房夫

仝二等軍醫從七位勳六小迫茂敬

豫備步兵少尉正八勳六大呂萬壽太

仝三等醫正八勳六平木篤吉

仝大倉鐵一郎

仝正八西山良一

仝步兵少尉武部良一

鳥取地方裁判所判事補津路嘉十郎　仝石川雀平次
仝三上嘉藏　宇部神社宮司榎本克

鳥取縣民現役將校同相當官并論者左の如し

陸軍歩兵大佐從五勲三功四　八木下　純
同三等軍醫正六勲四功四　小澤竹之助
同從六勲四功四　植松義太郎
同　境　嘉平
同功五　中井正十郎
同　石原淳太郎
同　金川義影
同　大熊二夫
同一等軍醫正七勲四　權藤於兎丸
同一等軍醫正七勲六　和田　定
同中尉從七勲六功四　黒坂靜一
同　櫛崎芳藏
同　細口敏郎
同　中村猪太郎
同　高濱忠藏

同中佐正六勲三功三　山縣寓吉
同少佐正六勲四功四　大橋治太郎
同　坂上庄之助
同大尉正七勲五　大谷廣
同　吉田勇
同　三宅精吉
同　宝賀定治
同　奥田清藏
同功四　小金井吾良
同大尉正七勲六功五　駒井定哉
同二等軍醫勲六功五　津村奎三郎
同功五　藤田善雄
同　西村勝美
同小尉正八　柴田道政
同　田原武

勲六等堀政太郎
衆議院議員石谷傳四郎
（以上通御）

同勲八　原　嵩定　同正八位　宗原郁弘
同　福原二一　同　岩崎若二郎
同　今仁豊　同大尉従六勲四功五　渡邊弘毅
鳥取衛戍地在郷将校同相當官并姓名
陸軍三等主計正従五勲四　稲村房二　歩兵少佐正六勲四功五　小倉小次郎
同大尉勲五　澤正明　同勲四　山口鋼吾
同従六勲五　石川浪彦　全正七勲四　内野定規
同　河越禮人　同一等軍醫正七勲五　酒川清三郎
同　林秀造　輜重中尉従七勲六功五　石谷房吉
同中尉従七勲五功五　川戸岩治　同勲六　三田合造
同二等軍醫従七勲六功五　戸田馬喜盛　同　井崎精一
同　吉田武経　同三等軍醫　夜久義市郎
同中尉従七等五　入江善太郎　同勲六　石井雅規
同　太田垣健治　同少計正八勲五　牧野直身
同勲六功五　小宅重幸　同功六　眞田常盛
同勲六　村瀬遙経　同　岸本茂吉
同　高田重治　同　竹村憲門
三等軍醫正八勲六　櫻井重一　同　谷澤竹治

奉拜者

奉拜を爲はりしは左の諸氏なり

縣會議員　澤田虎藏　同　田中永治　同　角田德吉
同　安東傳藏　同　長谷川万藏　同　岡井元次郎
同　渡邊新藏　同　足羽吉兵衛　同　田中喜十郎
同　横谷金治　同　磯井千賀次郎　同　足羽吉兵衛
同　佐原昇治　同　青砥吉郎　同　井上敏
同　末下義之　同　廣富政藏　同　蒲田牧藏
同　山本熊吉　同　山口官藏　同　大森鐘三
同　田中嘉藏　同　井上長次郎　同　赤川長藏
同　神波信藏　同　田淵秀藏　同　岩本鼎藏
鳥取市助役　鳥谷玉次　同收入役　小谷甚次郎　鳥取市參事會員　山本吉代藏
同　佐口榮太郎　同　山内北藏　同　吉村鼎平
同　松崎幸之亮　同　和島豊雄　市會議長　小玉長次郎
市會議員　森岡善太郎　同　八村八太郎　同　由村貫
同　青木源次郎　同　藤井源藏　同　中川時太郎
同　大濱秋平　同　木川桑藏　同　大村文太郎
同　谷口源太郎　同　戸次秀章　同　谷澤重太郎
同　吉田入得　同　持尾龍吉　同　高松久治郎
同　米田岩藏　同　五藤直義　同　鵜山岩藏

同　宋谷信藏
同商議長　倉持金治
岩美郡參事會員　西尾梅衛
氣高郡同　德田音藏
同　吉村吉造
同　田邊幸治
同　山中雄豐
同　佐野君卿
同　木村繁藏
同　井關幸藏
同　林田小市郎
同　川上幸治
同　川上千賀
同　安木永貴
同　福島常藏
同　福田起藏
同　石谷源藏
八頭郡同　來田富藏
同　田中藤吉

岩美郡會議長　西尾音一郎
氣高郡會議長　原弥太郎
同　谷口靜吉
八頭郡同　八村八四郎
同　岡島正喜
同　樋崎竹藏
同　福家思義
同　遠藤荒
同　木部千代子
同　石谷良藏
同　西尾釜藏
同　谷口鹿樹
同　入江駒造
同　牛尾得明
同　山田梅藏
同　太田春藏
同　大呂甚平
同　岡井繁次郎
同　高木儀實

八頭郡會議長兼賀田音一郎
同商議長　岩中庄三郎
同　柴田甚七
同　吉田善治
同　土田喜太郎
同　安川信藏
同　油谷喜八郎
同　稻場國藏
同　林田榮俊
同　西尾傘太郎
同　田中貞雄
同　黑田莊吉
同　松尾長平
同　細田哲藏
同　井戸垣貞視
同　衣原憲太郎
同　小倉清逸
同　武田猪十郎

同　中尾儀次郎
同　福谷正温
同　澤田春造
同　下田勘次
同　山本勘重郎
同　垣田兵次郎
同　石尾保太郎
同　富川岳
同　大塚松太郎
同　上山昇
同　村上治郎
同　長谷川綱藏
同　田中虎藏
同　勝山豊治
同　山本德次郎
同　西川光春
同　菊谷信治
同　中原好雄
同　鳥谷與一郎

同　中谷集治
同　寺谷義治
同　君村當之
同　吉田富敬
同　下條貴哲
同　河田長應
同　伊藤萬吉
同　奥田德藏
同　笠雄平
同　松本政吉
同　石井官藏
同　谷口宇之吉
同　萩原集藏
同　森本宗次郎
同　江藤真三郎
同　竹田政和
同　富川留太郎
同　前波久太郎
同　敬野茂幸

同　久山道敬
同　芦谷繁延
同　木島可恵
同　德永長藏
同　太田茂論
同　井上孝彦
同　原田愛治
同　松田平鍵
同　谷川保夫
同　木下六藏
同　山名秀庶
同　谷本鋒譲
同　西尾勝藏
同　豊岡長平
同　岸本万英
同　竹田平六
同　山本岩藏
同　中村虎譲
同　西原吉平

御下賜

一金　若干　鳥取縣

同　生野鍾楠　同　山田繁造　同　山本其旅

今般
皇太子殿下山陰道行啓に際し其縣下慈善事業御奬勵の思食を以て金千圓下賜候條該基金種充に充つへく
此段相達候事
明治四十年五月十九日
東宮太夫侯爵　中山孝麿

一金　若干　鳥取市

一御紋章附花瓶　一對
一全三組銀盃　一組　池田侯爵
一紅白縮緬　二匹

一御紋章附三ッ組銀盃　一個
一全銀製莨煙草入　各一反　山田鳥取縣知事
一羽織地及袴地
一酒饌料　一封

一酒饌料	一對		
一羽鰭及肴地	各一反		
一酒饌料	一對宛	川越事務官	和田事務官
一肴地	一反宛	井本事務官	
一酒饌料	一對	竿田縣技師	
一御菓子	一包宛	藤岡鳥取市長	
一酒饌料	一對宛	東儀技師	
一酒肴料	一對宛	伊藤、宮崎、奥田	
一御菓子	一包宛	大野、田島、阿部	
		杉山、各技師	
		酉村警視	
		丹羽八頭郡長	
		鳥取縣屬以下功勞者	
		八頭郡書記以下八名	
		鳥取郵便局員一同	

一酒肴料　一對宛　　護送騎兵隊長
　　鳥取郵便局長
一神饌料　一對　　神戸郵便局長及隨行員
　　鳥取市本通功勞者助役以下六十八名
一菊御紋章入銀盃　一個　　招魂社
一金百圓　　第四十聯隊將校團
一軍服地　一着　　八木下駄問屋
一御菓子料　一對宛　　高齡者五千四百二十八名
　附
一御菓子　一包宛　　歷兵、戰病死者遺族千〇三十六名
　　牛乳納人　大嶽秋平
一金　若干　　豫備納人　小林熊三

御上覽

鳥取の權現祭行列

鳥取市にて舊て行啓當日の御覽みにもとて計畫準備したる權現祭行列は十八日午後三時より執行された

も鳥取にて權現祭と云へば封建時代には國伯二州にて又無き盛典なりし事とて在りし昔を回想して感慨を催せる老人物珍らしき若者打ちまぜて此の行列を見物せなと其の沿道に押し寄する者幾万なるを知らす頗る雑踏を極めたり行列は本間泰、堀川正温二氏の如き元老自ら總指揮者として先頭に列し五藤氏其他主任市會議員も列して行列を監督したり動くて午後二時頃より佳境祇中に行列を整へ豫定の三時を以て列伍整然堂々として鳥籠を出で徐々として馬場町、江崎の上の町を経て知事官邸前を御座所の裏手に向つて進みたるが　殿下には此時扇馬南方の御到檢に臨御ありて壹覧あらせらるる筈でイーヨイヤナーの雅語共行列の先登は沿道諸の如き群衆の視線を浴びて進み来りぬ行列の次第は引笠、町役人を先登に大日付の騎馬振めしきあり揃一番、東帯神主神樂の一隊金幣鳥高面のたすけたるあり三階笠鳥印の物珍らしき神馬騎馬神主大鳥毛僧侶と云ふ次第にて金光燦然たる神輿は數十人の人夫に運ばれ来る次で太鼓笛の雷樂東帯神官の一連引馬大手振寺社奉行徒目附下走行と續次練り行く大時代の風俗繪、面白し昔の權現祭は藩主自ら祭主となり大目附全隊を指揮して祭事を進めたる事なれば却々に日ざましき事なりしとなん夫れより列は徐々進行して女子高等の處に於て壹覧の舞ひ、大鳥毛振りなどあり終はりて進行を起し堀端を下りて鹿野街道筋に出で川端通りを上りて智頭街道筋に上り左りに折れて本町筋を上り大工町通りを上りて停車場へ歸り散會したり順路は殆んど一里に亘るを以て酷暑小學校に休息し此處にて祝盃を挙げたるが是れより酒氣を帯び且つ疲勞したれば列伍稍々亂れたるも甚しきに至らず山なす見物人は滿足したるが其の列は約三丁餘に亘り器具万端流石大名仕事たるに恥ぢず順次なる壯觀を極めたり其の行列次第書を左に記さん

鳥取權現祭行列次第書

行列

引馬一人　町役人一人　供一人　警固頭一人　警固一人　大手振一人　口取一人　若黨一人　鎗持一人
引馬一人　町役人一人　供一人　警固頭一人　警固一人　大手振一人　口取一人　大目付騎馬一人　草履取一人
　　　　　　　　　　　　　　　警固一人　大手振一人　口取一人　若黨一人　傘持一人

手代ヲ一人　挟箱一人　唐櫃一人　大手振一人　口取一人　若黨一人　鎗持一人
手代ヲ一人　挟箱手代ヲ一人　唐櫃一人　大手振一人　口取一人　町奉行騎馬一人　草履取一人
　　　　　　　　　　　　　　大手振一人　口取一人　若黨一人　傘持一人

挟箱一人　唐櫃一人　徒目付一人　下奉行一人　警固一人　鑓拾六人　太鼓撃一人　笛吹一人　先供数人
挟箱手代ヲ一人　唐櫃一人　徒目付一人　下奉行一人　警固一人　御奉行二人　太鼓持一人　笛吹一人

供一人　傘持一人　祝子四人　供一人　鎗七人　鎗七人　鎗七人　鎗七人　鎗奉行一人　手鎗一人　面掛十人
東帯神主一人　挟箱一人　祝子一人　供一人
供一人

面掛宰領一人　面掛奉行一人　鑓廻十人　鑓廻小頭一人　弓十人　弓小頭一人　長指十人　長指小頭一人　金幣鳥高面一人
面掛宰領一人

羅々一人　獅子二人　太鼓打一人　笛吹一人　鉦一人　獅子宰領一人　天目鉢二人　天目鉢二人　鷹一人　鷹一人　笛持一人　笛持一人　弓一人
　　太鼓持一人　笛吹一人

口取一人　神馬壹疋　口取一人

力士五人　陣太鼓二人　法螺貝一人　銅鑼一人　半鐘二人

弓一人　金幣俵一人　具足櫃一人　三階笠馬印一人

口取一人　供一人　鎗持一人

鞭持一人　騎馬神主一人　履持一人　沓籠一人

沓籠一人　口取一人　供一人　傘持一人

口取一人　供一人　鎗持一人

力士五色揃壹疋二人　太鼓打一人　太鼓打手代ヶ一人

日輪馬印二人　五色揃壹疋二人　轅拾人　轅小頭一人　大太鼓持四人　鉦打一人　太鼓臺持二人　三河徒十人

供一人　鎗持一人

大鳥毛四人　太刀持三人　隨身六人　隨身供三人　惣侶二人　神輿寄領六人　神輿舁六十人　神輿奉行二人　東帯神主一人

供一人

傘持一人　太鼓撃一人　笛吹一人　輿臺持四人　後供拾人　雅樂　口取一人　供一人　鎗持一人

履持一人　太鼓持二人　笛吹一人　騎馬神主一人　履持一人　沓籠一人

口取一人　供一人　傘持一人

口取一人　若黨一人　鎗持一人　箙一人

引馬壹頭　大事髪三人　寺社奉行騎馬一人　草履取二人　傘持手代ヶ一人　挟箱手代ヶ一人　挟箱一人

口取一人　若黨一人　傘持一人　挟箱手代ヶ一人

音　詰一人　　従日附三人　下米行三人

音階等代り一人

擊劍御上覽

高等女學校より師陽館あらせられたる後は本武德會鳥取支部の組しにて屆出志師館内庭に於て擊劍試合を御上覽に入れしが當日光榮に浴せし劍客は左の如し

正田流劍術定中之卷

相外、仕掛、前飛

鮭遊、打合、必勝、三當兩段

新陰正田流杜術剛刕之卷

殺定、仕掛、三重

六徳、打合、相落挟

雙剣鮭流劍術形

錫杖、仕掛、稻妻

曲能、打太刀、碇、高浪、小鰐返、玉座、鷺乱

劍術試合

（濱淵直藏）　（西野武雲）　（中島庄司）　（音合恒雄）

（多田虎彦）　（稻垣甚藏）　（藤丸金市）　（坂音合恒雄）

（竹内龍藏）　（山尾幸治）　（松田秀彦）

（增高喜藏）　（砂川喜武）　（河村武彦）

刀鍛冶御覽

二十日午後二時半屋臺内に散歩松の御手植ありたる後本縣名誉の刀工日置兼次氏の刀劍鍛錬の事ありたる　殿下には屋臺内御山屋敷にて御覽あらせられたるが燃料は松に普通石炭を以し鎔鋼半にして水に漬し冷却せしめたる後之を叩き割りて銅の目合せを驗し上中下の三に別ち上を皮金と爲し中を鋒金となし下は等分に鐵を合せて眞金と爲し更に鎔鍊前後九度に及びかくて京都稻荷山の土肥後天草の石四幅の堅炭を細末となして等分に混じ之を水に捏ねたるものにて刀身を塗り再び火中にて熱し更に水に漬し此の如くして燒刃を入れ後研磨にて研ぎ鋒に寸金を噛ませ反を附けて最後に「明治四十年五月吉日久松山麓に於て兼次作」と銘を切り全く終へたるは午後三時五十分　殿下は終始熱心に御覽ありたりと承る兼次氏の名聲も大なりと謂ふべし

因に日置兼次氏は仁平と稱し先代は宗先と稱して鳥取藩の刀工なり仁平氏幼より父に學び長じて長船に到り後江戸に技を研き松座藩後備里に居りしが先年陛下の伊勢大廟に御參あるに際し倉吉の宮本包則氏と共に召されたるなり當年六十八歳の老體なり鍛劍御覽の向ふ槌を打ちしは左の四名なりし

福嶋伊平實路　△同人門人林芳造　△鍛冶原町植村榮治　△同人悴秀雄

献上品

山田鳥取縣知事より軍艦へ伺候の際献上品左の如し

一鳥取縣管内地圖　一鳥取縣治一覽　一因伯紀要

同縣巡臺臨の際に献上左の如し

一因山伯水　一鳥取縣概要　一鳥取縣統計書　一香合石　一漆塗硯盆

師範學校より献上
一道徳経済論　一報徳教の精心　一武士道　一因幡の武士道附録
鳥取掬芳台より献上
一和歌集
因伯海事談話會より献上
一因幡誌　一因伯沿岸寫眞拾貳枚
鳥取縣和田事務官外高等官九名より献上
一鰒二尾　一鱈三尾
鳥取市献上
一杉苔寫三斤　一竹形海松製洋杖　一寫眞帖壹冊　一白珊瑚拾葉書差二個　一香魚五百尾
岩美郡献上
一白鳥若干　一白浪鳥若干
八頭郡献上
一半切紙五束　一鱈五尾
氣高郡献上
一コッピー紙拾連　一美濃紙拾束
高島者献納品
白木綿一反　鳥取市　高田やを　麻糸三把　明治　露木ろよ
杯一　同　牧野善慶　同　同　中丑都　河村この

一因伯海事談話會沿革
（川越、井本、竿田、東條、田島、集谷、大野、杉山、岡部）

| | | |

御買上品

陳列の物産中御買上の栄を得しもの左の如し

品名	點數	住所	氏名
白瑠璃箸	一點	鳥取市	岡田長太郎
海松洋杖及パイプ	二點	同	右同人
白瑠璃洋杖及箸	三點	同	八尾治太郎
白瑠璃寫真掛	一點	同	老門　清次
同　箸	一點	同	右同人
白瑠璃箏	二點	同	花岡　梅藏
硫産茶入	一點	同	松森　省藏
白瑠璃鳥籠	一點	同	右同人
玩具	十一點	同	松源　彫藏
結土燒	四點	同	鵜飼　清次
カステーラ製	一箱	同	中谷千太郎
古瓦煎餅		同	米谷　信藏
久松潟見木瓜	一瓶	同	米谷　信藏
パタ半打		同	大邊　秋平
彫刻品	二點	同	佐々木勝治
繪葉書外箱入	九十組二瓶	同	森　勝藏

品名	點數	住所	氏名
彫刻品	三點	鳥取市	長谷川熊藏
友仙染名紗	六點	同	津川吉太郎
百合羊羹	一箱	同	小谷治郎平
繭	袋十一點	同	右同人
四幅	飾六箱	同	田邊　律三
白羊羹半打		同	廣谷　竹藏
二尋饅頭	一箱	同	右同人
莞製米筵	一箱	同	右同人
干菓子	二箱	同	右同人
干菓子	一箱	同	寄谷　卯吉
亞麻仁油紙	二百枚	同	古澤　七郎
硫産細工	五點	同	大澤　貞次
紫鵙	彫六點	同	小泉　德藏
同	上一點	同	清水　鋼吉
諸越石硯	一點	同	木川　來藏

香水	一點	同	武林	熊次	鳥取市十六
ビンクリーム	十點	同	右同人		
繪葉書	三十組	同	右同人		
上	二十組	同	山縣長太郎		
紙工	廿四點	同	山谷茂雄		
茶盆	三點	同	山田保藏		
同	二點	久德寺村尾崎安五郎			
同	三點	同	尾崎	良藏	
刻	品三點	正條村	田中民太郎		
木細工	一點	御來屋村西村莊太郎			
鑵詰	四點	米子町	荒木	惣平	
ペイルク鑵詰	一點	同	右同人		
貝鑵詰	一點	同	矢野市郎兵衛		
貝鑵詰	一點	同	右同人		
丹	一點	青谷村	竹中周三郎		
瓶詰	一點	古海村	小林	富藏	
肉鑵詰	一點	同	右同人		
酒	三瓶	小鴨村	中井喜七郎		
丹	醬油	小二點	下中山村渡邊	信平	

傘	一個	同	足立	市十郎	
繩	一點	同	右同人		
貳	一點	同	平井	登道	
傘	一點	同	柳合	幸一	
香合	一點	同	筆	惣助	
石	一點	同	門脇	八重	
一貫	張一箱	同	坂本	よし	
御殿足袋	二足	同	勝田	傳六	
山葵	漬廿一點	倉吉町	佐伯新一郎		
白羊	羹二個	米子町	本島與太郎		
萬金丹	廿二點	牧谷村	福光小次郎		
美人ノ母	十點	米子町	福谷金次郎		
登ノ友	十點	同	右同人		
カステーラ	一箱	境町	田中高之助		
漬	三點	日沼村	益	榮雄	
行	李	三組二點	用ケ瀬村伏塚	虎藏	
紫水	晶一點	根雨村	近藤喜八郎		
千	鮫三點	田儀村	上村平三郎		
白	鶴冊點	下中山	渡部	信平	
特許算盤	一點	淀江	吹野昌三郎		

一番馬一匹　舘富　吉岡秀造　半切紙一點　口佐治　西尼幸人
葛籠一箱　大村　龜田家五郎　水晶二點　米子支店川島勝造
同上一箱　同　鯉田龜藏　器一點　同右同人
同上一箱　同　伊福長藏　葛籠一箱　同伊田伊三郎
同上一箱　同　細田吉太郎　書院紙二束　同中谷誠治
美濃紙十束　佐治村　中谷竹藏　半切紙一繩　五箇村　澁原定吉
半紙一繩　御用掛　前田峯藏　半紙二束　速一點　智頭村　石谷傳造
同上半紙一繩　鹿野

奉迎送位置と設備

停車場内奉送迎位置

鳥取假停車場に於ける奉送迎はプラットに於て為し東側に赤十字特別社員、武官（現役、非現役共西側に有爵者、高等官待遇者、非役文官（高等官）従六、勲六等以上、衆議院議員、貴族院議員、市長、助役、收入役、市參事會員、市會議員、受奬章者、郡會正副議長、赤十字佩有功章者、特別功勞者整列する由尚第四十聯隊儀仗兵は構内南側に第一中學校生徒は線路北側に整列奉送迎すと云ふ

聯隊の奉迎送事項

當聯隊に於ては當地御發着當日及御滯在中左記諸隊を出し奉迎送其他の任務に當てられたり

▲御發着當日の出兵隊左の如し

（一）奉迎送隊、一個大隊半

山陰街道に沿ひ鳥取市西端より東品治村に至る間に位置す

（二）儀仗隊、二個中隊

右各海停車場に出す

又當日聯隊長は衛戍司令官の資格にて御往復共に車中に扈從し奉る

▲御駐輦中左記儀仗衛兵を軍旗と共に御座所に出す、二個小隊

▲聯隊に　行啓の節將校團和當官は營門外に奉迎送すべき事

將校集會所與の間を便殿とし次の間を勅任官供奉員の控所とし次間を一般供奉員の控所とす

▲當聯隊に於て獻上せんとする書類の重なるもの左の如し

（一）明治三十七八年戰役に於ける野戰及び後備步兵第四十聯隊内地戰死將校准士官下士兵卒の寫眞帳

（二）右戰死者の戰歿

同練兵場に於て閱兵並に分列式を奉覽に供する際差支なき限り其拜觀を許さるゝ樣なるも何分所定の範圍狹隘（百六十間程）にして多數の拜觀者を收容する能はされば止むなく左記の團體を限り收容することゝなせり

官吏、市町村名譽職及吏員、篤志看護婦人會、愛國婦人會、國防婦人會、鳥取婦人會、赤十字社員、鳥取婦人會、赤十字社員功者及特別社員、希望者、新聞記者、軍人遺族、退兵者、會式會員等なり

煙火

殿下著御より還御までの間鳥取市にて奉祝萬々壯觀を極めたる煙火の種類は左の如し

○印二八寸玉　●印二六寸玉

十八日

晝ノ部（鳥取假停車場（吉海）附近に於て打揚）

○凧　號　砲（倉吉御發車の時）

●雷　鳴　旗　●柳　狗　●乙　姫　の　糸

●金　花　山　●雨中分砲　●浜　焜　龍　間　流　星

●庇　の　尾　●變　通　星　●姫　吐　龍　●遊　鯉

●黑　雲　雷　●流　星　糸　●日　本　男　子　●美　徳　龍

●伊　吹　山　●大　和　魂　●柳　に　白　蘇　●雷　後　段　々　龍

●野　菊　○車　遊　旗　●双　變　龍　●星　出　柳

○御　幣　○夏　柳　○柳　分　星　○風　越　後　の　曲

○國　旗

夜の部（今町揚烟火附近に於て打揚）

○彗　星　○柳　に　葉　隱　月　●白　頭　火　○花　見　遊　龍

●亂　蝶　後　の　月　○結　柑　婦　に　栗　鼠　●玉　追　群　龍　○雷　後　龍　間　流　星

●彌　月　後　停　止　星　○大　輪　菊　●三　眼　星　段　々　群　龍　○源　平　つ　ゝ　じ

○火　龍　星

十九日

晝の部（今町揚烟火附近に於て打揚）

●黑　雲　雷　●遊　鯉　○柳　に　遊　魚　●夕　立

●楊　柳　●段　龍　○遊　龍　玉　取　●柳　駒

●廣　紅　龍　●噴　煙　旗　○親子遊　鯉　●濱　田　川
●群　龍　●柳　現　旗　○柳に亂　蝶　●黑　雲　龍
○御　園　の　景　●和　生　枝　垂　●雨中五色吹　貫　○柳に玉の　曲
●濱　の　響　○花中分　類　龍

夜の　部（今町掛　臺附近に於て打揚）

○柳　蛉　●聚　離・琵　○宇　治　川　●遊　鋒　月
○柳月後金　絲　糸　●花　中　の　濱　○鮎　章　花　●二　段　霙
○雨　後　蓮　龍　●秋　の　野　○奇　妙　な　夜　○玉　柳

二十日

晝　の　部（今町掛　臺附近に於て打揚）

○雨中黑　雲　雷　●雪　紅　葉　●蓮　龍　●段々柳
○雨中群　子　龍　●髮　休　龍　●雪　中　雷　●孕　子　龍
○濱　の　露　●二段紅白糸打分け　●類　激　砲　●佛　化　龍
○雲　消　龍　●濱　屋つゝと　●風　船　○雨中三　其分子龍
●彩　現　龍　●立　田　川　●糸　捌　き　●消　現　龍
●奉　柳　○滿　旗

夜　の　部（今町掛　臺附近に於て打揚）

○受　ち　櫻　○柳　飛　龍　●吉　野　嵐　○枝　柳

●朝　顏　○月夜豊年花　●月間流星　○片山時雨
●田舍の月　○雨中蛙　○金　鯉　●火龍星
○夕　立

廿一日

壹の部（鳥取假停車場（古海）附近に於て打揚）

○祝號砲　○祝號砲　●狂　獅　●花　嵐
●千筋糸　●白雨黒雲雷　●樽　御　●龍田流星
●雷鳴糸の曲　●雨中青嵐　●彩　雲　旗　●山　龍
●雨中雷　●遊　現　龍　●滝の時雨　●花間昇降龍
●枝　打　柳　●雷後變体龍　●立　田　川　●紅　龍
●雪　楓　●落　下　龍　○奉　迎　旗

御警衛の警察官

鳥取警察署長第四部警部及巡査部長以下巡査百八十一名は　皇太子殿下御行啓中警衛す

奉迎事務所開設

縣廳、警察、鳥取市の各事務所を鳥取高等小學校内に開設諸般の事を所理なせり

臨時救護員の設置

臨時救護員を左記の三ヶ所へ派遣晝夜詰切にせり

東町元御標館へ十八日より二十一日迄看護婦四人、東品治村野口方へ十八十九兩日間看護婦四名、立川町四丁目大雲院内二十日看護婦四名

岩美郡役所の警戒

岩美郡に於ては一里以内に於ける各村に諸事警戒の爲め自身番を置き不都合なきやう各部更を監督として各村へ派遣注意警戒せり

市内の装飾と緑門

全市は至る所喪章燈美々敷飾られたるが就中若櫻街道の如き御通過筋には白浅黄染分けの幔幕は全様に絞りあけられ軒上の振掛けには一様に日章の提燈を點したる等殊に美麗なりし若櫻橋、智頭橋、市役所、北の御門前、高等小學校、立川町大橋等何れも各様趣の異なる御旅館北の御門前は菊大の御紋章を第一中學校は中の字を、高等小學校は高の一字を、岩美郡役所は奉祝の二字を、縣廳は櫻の花を師範學校は國旗を交叉せりを千高等小學校には幔幕を張り夜電燈を點し市内各小學校には豊陽は國旗を掲け夜は球燈を点す、大手橋には萬國旗及び提燈を點し、鍛物師町、吉方温泉、大手橋にはアーク燈を点する等何れも装飾に壯観を極めたり御座所北門前の大緑門は其高さ三丈餘然として其偉大なる姿を半空に書き久松山と對時して聚論らん許りなり之に對して高等小學校前の緑門、中學校橋前の緑門、岩美郡役所前の緑門竝立の姿を呈し高く標頭に翻る國旗を中心に萬國旗は翩々として風に飜れり高等小學校は許に赤褐色と緑葉られて各處に交叉せられたる國旗又綺麗にして生憎の雨は今を最りと場々しく降かにして一種の異觀偏はれり

道路行啓筋の區劃は整然たり軍人遠族、屯兵、軍人幼兒保育廿、孤兒院、新校兒人、愛國婦人、赤十字社員杯何れも夫々立證せり御通路二間半幅両側に鐵張を爲したり

盆栽等の陳列

殿下の御臺覽に供し奉らんため山田知事、長野氏、金田氏より盆栽數十鉢を鳥取裁縫女學校よりは造花數鉢を御旅館内へ出陳せり

御座所内の屏風軸物

御座所内の裝飾及御臺盤に供せんため左の數品を出陳せり

屏風部　楊谷、稻嶺、稻阜、一峰、曲水、讀處、元旦、

對從一位慶德公の眞筆軸物の部　幽蘭筆權現祭行列圖三幅

扇邸のアク燈

御旅館扇邸前に貳個のアーク燈を建設せり一は緑門より第一門に至る間一は第二門内なり

雜　況

十八日夜の光景

東宮殿下が我が鳥取へ行啓の當日よりは天候頓に回復して夜に入りては殊に上にも快く晴れ渡り滿天の星は燦々として輝き弦月は西の空にかゝりて美々たる市中を今日を初めて照らす電燈の光は智頭街道筋二階町角と大工町筋とに何れも二千燭光の白熱燈を輝かし川端三丁目入口には連燈に裝飾せるものあり裏寺學校の屋上には「奉迎」の二字を現はし電燈株式會社の前にも數個を點燈し各戸何れも日の丸の提灯に點燈したれば其壯觀言ふ許りなかりければ　東宮殿下拜觀の爲めに來集せし群衆は初めて市内を照らす電燈が如何に鮮かなるか之れをも見んと右往左往するもの頗る賑はしく別けても堀端附近は　殿下奉迎の爲めに點せるイルミネーション多數なるを以て此處には一層群集したるが御所内は見々として輝き居たるを見たるも固より入るを得されば其の詳細を知る事を得さるも縣廳緑門より第二門に至る間に

二千燭光の白熱燈一燈第一御門内にも同しく二千燭光の白熱燈一燈は御座所の白亜に相映してひとしほの光景を増すらん心地せられたり外廓なる石垣上の松樹の枝には數十個となく點燈し高等小學校の縁門にも十數個を点したるが岩美郡役所の「奉祝」の二字を現はしたるは最も目を惹きたり洋觀の爲めに群集せる民衆は約七八万なるべしと云へり

十九日夜の光景

前夜同樣御座所附近の電燈裝飾及び市内各學校の屋上には電燈もて「奉迎」の二字を現はし其他官衙及び各要所の縁門には夫々電燈にて裝飾せるに當夜は各學校生徒の提灯行列ありしとて此の美觀を見んが爲め四方八方より繰り出す老若男女は陸續として要所々々に詰め掛け一時は押しも分けもならざる混雜を極めたりし

提灯行列

東宮殿下の行啓を祝し奉つるが爲めに催さるゝ當市の提灯行列は八時頃より挙行されたり其の學校師範學校、第一中學校、附属小學校、私立興徳學校、市立高等小學校、市立三等當小學校の外、岩美郡の小學校も亦參加したるが多かりしにより都合十數校となり其の人員は約一万内外となりしが一旦招魂社に集合して之を二組に分ち列伍を整へ規律正しく嚴々として一方は師範學校を先頭として馬場町より江崎町を經て知事官舍の前を高等女學校の前に到り、他の一隊は大工町筋を下りて堀端に到りて前記先着の一隊と並びて整列し土井師範學校長の發聲にて　東宮殿下の萬歳を三唱し奉つりたる上、種々列伍を變化し終はりて夫れ〳〵分散せしが附近の電燈と數万の燈火と相對し反映して其壯觀云ふべからず見物人は到る所に山を爲して市内は前夜にも増して一時通行のならざる如き雜踏を極めたり

尙其順序書は左の如し

▲午後七時卅分迄に招魂社内に參集午後八時頃同處出發

▲師範學校、中學校は上町より下り馬場町より江崎町に出で第一中學校運動場に入る

▲市内小學校、附屬小學校は大工町筋より市役所前を經て縣廳前より第一中學校運動場に入る

▲各學校に中學校運動場より御旅館西方に整列し萬歲三唱す（萬歲三唱の前に喇叭にて君が代を奏することあるべし）

▲右終りて裁判所前より隊列場附近に出で此處にて解散す但し師範學校は裁判所前より直に歸校す

▲萬歲を三唱するは凡そ午後八時四十分後萬歲音頭は師範學校長萬歲の相圖を提灯にて指揮す

廿日朝の旗行列

午前八時頃　殿下の聯隊に行啓あらせらるゝ前を以て盛んなる小學校生徒の旗行列は擧行せられたり之に加はれるは市立高等小學校、師範學校附屬小學校、及市立遞信、燈風、鐘上の三尋常小學校にして其の數は約四千餘の多數なりしが何れも一定の小國旗を手に持ちて列伍整然として進々御座所の下なる堀端に到りて　殿下の萬歲を奉祝し夫れより聯隊の練兵場へ向つて進行したるが何れも壯觀を極めたり

全夜の光景

午後七時半鳥取市高等小學校兒童及各尋常小學校兒童六百余名は縣會議事堂前庭に集合し同八時整列して隊編に出で奉迎の唱歌を唱へつゝ遊戲を爲し同八時半　殿下の萬歲を三唱して引揚げたるが同日の夜景は前日にも異るなく久松の墨色に相映じ松間のイリユミチーレヨン、アーク燈と共に無比の壯觀を極めたりしも當夜は雨模樣なりしを以て直ちに解散したり

山田知事の光榮

山田知事は昨秋鮑上山登山の際小楓樹の木振り面白きを發見したれば遥り採りて鉢植として愛培せしを今回の行啓に際し御旅館内に飾りて　殿下の御覧に供したるに由緒ある鮑上山の生木なるに御思召に適ひ東京へ御持帰りの儀仰あり又回知事は元弘帝遺跡に關する口碑傳説を各郡市に命じ調査せしめて編纂したるものを差出し叡覧を請ひ奉りたるに　殿下には深く御嘉賞あらせられ是亦御持帰りの下命ありしと

献上の岩鏡

千谷前鳥取地方裁判所長は最に因幡國氣高郡絹見坂より持帰りたる岩鏡一体を山田知事に托し御旅館内に陳列したるに御思召により御持帰の栄を得られたりと浦氏の光榮はいはずもがな因伯の草木一時に榮園に入るは本縣の光榮と謂ふべし

因に右二鉢の盆栽は縣廳中尾房藏氏特に保護して御用へ持參東宮殿へ引渡されたりと

山田知事恩賜

東宮殿下には當市御發車の當日届邸に於て特に山田本縣知事を御前に召させられて最後の拝謁を賜ひ本縣下に於ける奉迎を御滿足に思召す旨の御諚ありしが、恐れ多くも御紋章付銀製巻煙草入を御手づからポケットより御取出しありて之を山田知事へ御下賜ありたれば知事は縣下一般の光榮として深く感泣せられたりと云ふ

知事の記者招待會

山田本縣知事は十八日午後七時より大工町の花月亭に於て新聞記者招待會を催せり其の出席者左の如し

△萬朝報　小林天龍　△報知新聞　遠尾健順　△中外通信　倉長彪　△大阪朝日　五十嵐甚太郎　△大阪毎日　曾田享　△時事新報　金子十郎　△大阪時事　淺岡留吉　△大阪毎日　岡崎鴻吉　△電報通信　小山正一　△大

阪新報　宮崎三郎△中外通信　數中喜太郎△山陰新聞　岡本金太郎△松陽新報　清江梁太郎△角盤日報　上島龍太郎

右の外、當市の三新聞社よりも社長以下三名つゝ出席したれば相當盛會なりき山田知事は來迎に忙はしきため代つて和田第一部長の挨拶あり曰く今回東宮殿下の行啓を仰ふし縣民二十年來の願望を達し得たると同時に遠く東京大阪記者諸君來縣あり依りて以て隱れたる國伯が天下に紹介せられんとするは縣民の喜ふ所なり之に對し岡本氏一同を代表して挨拶し終りて酒宴となり何れも歡を盡して散會したるは十時頃にてありたり

鳥取市の記者招待會

藤岡鳥取市長は十九日花月亭に於て新聞記者優待會を催ふさる外來記者（病氣其他の事故にて兩三名の欠席）及び地方新聞社員合して二十餘名席定まるや藤岡市長市を代表して開會の挨拶を述べ大阪新報記者宮崎三郎氏各社總代として謝辭を述べ各自盃を擧げ快談數刻盛會を極め十時頃散會せり

鳥取縣の寄贈品

鳥取縣より中山東宮大夫、木戸侍從長、材木東宮武官長、桂東宮主事及び東郷大將には純金メタルを又新聞記者、高等官には純銀メタルを進呈せり

市の紀念繪葉書

市に係る記念繪葉書は　殿下最近の御寫眞を東宮職より拜借し東京第一美術家及び技藝家の考案に依りて製作せしものにして優美精巧を極め且つ市の記念スタンプをも押捺配布せり

郡設の奉迎艦隊

殿下御軍港御發艦の當日十四日岩美郡の主管に係る本邊艦隊の讓艦傭員船百隻を提出し奉迎し奉りたるが右の七ヶ村は鳴富、大岩、服部、網代、牧谷、田尻、東の各村にして百隻の漁船は鳴富を去る五里沖合に漕出し舞堤間風路の中央に直線形に並列せしめ艦隊の中央（鳴富村に當る）に指揮艦隊として水谷郡長の乘船したる一隻の司令船は其より約三十間程西方に差し次に補助艦隊をして郡選出の縣會議員、郡會議員、各村長及び有志家等約三十餘名之れに乘船し何れも萬國小國旗（二尺四方のもの）を以て滿艦を裝飾し　殿下御通過の際司令官たる水谷郡長大國旗（二間四方）にて之れが相圖の下に各艦隊は一回萬歳を三唱し奉迎の意を表せしといふ

因に云ふ鳴富村澤田庄藏氏は金百圓を寄附したりと

八頭郡雜記

▲殿下奉迎準備委員　八頭郡書記編谷正福、今井口筆治、仝小島光造、技手小谷百藏、郡視學藏田慶藏の五氏なるも專ら奔走の勞に服せしは編谷、小谷、猪口の三氏なり▲酒肴料を拜受者　金貳圓編谷郡書記、金壹圓五十錢宛猪口、小谷兩郡書記、阿部川原村長、齋藤智頭村長、谷本用ヶ瀬村長、金壹圓宛小島技師、藤田郡視學▲誠進者　大きみの御壽命ふかき千代の表（用瀬村筆川甚六八十二）松に鶴龜は最に座を占めて（社村井上治平九十才）栄ゆく御代にすむさへ樂しきに我なからへて今日にあいけり（五條村前田治平八十三）あきらけき光りにあひて岡幡山松も千歳の齡ひのふらん（八東村中村鳳宗八十九）▲行啓記念章を請けたるもの　丹羽八頭郡長、編谷郡書記、安東傳藏、岡井邦次郎、田中嘉十郎、田中泰藏の各縣會議員▲八頭郡通過に付設備及經過　圭鳥宮鳥及儀仗騎兵本郡通過に付智頭村大字智頭宿に旅舍を用瀬及河原村に馬繫場を建設何れも馬糧と所要器具を準備せり▲斯くて五月九日圭鳥宮第二班一行十六人鳥匹八頭宮十日儀仗騎兵第四中隊一行二十二人鳥匹二十四頭宮十一日憲兵

六人金十二日主馬寮第二班一行二十一人共計十四頭何れも岡山縣より來り昨歸宿すべて主馬寮の一行は前後とも智頭宿旅館、進谷旅館に儀仗兵及憲兵は用瀬宿德田旅館に投宿し翌日は何れも河原村に小憩晝食をなし鳥取市に着せり　右一行歡迎の爲め奉迎委員總代、小倉、福田の三氏は國境昨歸宿より河原村郡界迄の間に奔走し接待の事に盡力し一行の諸差を得たり井羽根長も亦出張して盡瘁に怠らざりし

越へて二十三日主馬寮第二班の一行歸還の際川原村小學校前に於て委員總代等一行を迎へ歡待せること來時の時に全し▲奉迎運事務所　八頭郡奉迎運事務所員鳥取市本町警察分署に於て五月十七日開始せる用瀬驛長外委員五名出張して奉迎運の事を處辨し二十三日之を閉つ　八頭郡各學校數員生徒の宿泊所は旅舍、醉鳳の二校を以て充てたるも尚不足を告げ最寄の寺院及民家を借りて收容せり

神戸局長の出張

陛下御滯在中神戸局長は管理課長、工務課長、監督係長を從ひ鳥取市へ出張各般の諸事を監督指揮せり

行啓供奉員の旅館

東宮大夫一行由中村管△侍從長小倉侍△武官長山本△武官侍從同上△侍醫、侍補、武官同上△儀仗兵指揮官安野△同上下士以下梅木△同上憲兵指揮官、同下士以下、主計官安野△東宮大夫一行小谷清次郎△御用掛一行、藤田長一行米善△掌典補加藤△鳥取縣知事一行有澤△神戸縣使用一行米善△勅任參與官木△奏聞記事平岡

東宮大將手植

東宮大將は二日當市高等小學校及び松籟神社境内へ記念の爲松の手植を爲せり

東鄕大將へ贈品

伊吹植物園ハ明治十六年中ノ創設ニシテ鳥取市薬師町ニアリ新鋳物師町劇場實際ノ前ヨリ東北約二丁ナリ○鳥取市伊吹庄藏氏ノ私設ニシテ面積七千餘坪ヲ有シ内外各種ノ植物ヲ蒐集栽培シ殊ニ材木果樹ノ苗○觀賞植物○庭園用樹木○若シクハ

學校園ノ標本植物○等ヲ培養シ廣ク世ノ需用ニ應セリ特ニ巻ノ遠運ニ伴ヒ大小庭園用ノ樹木花卉類ノ需用大ニ増加セルヲ以テ當園ハ庭園用諸材料等ヲモ蒐集シテ世ノ需用ニ應セリ

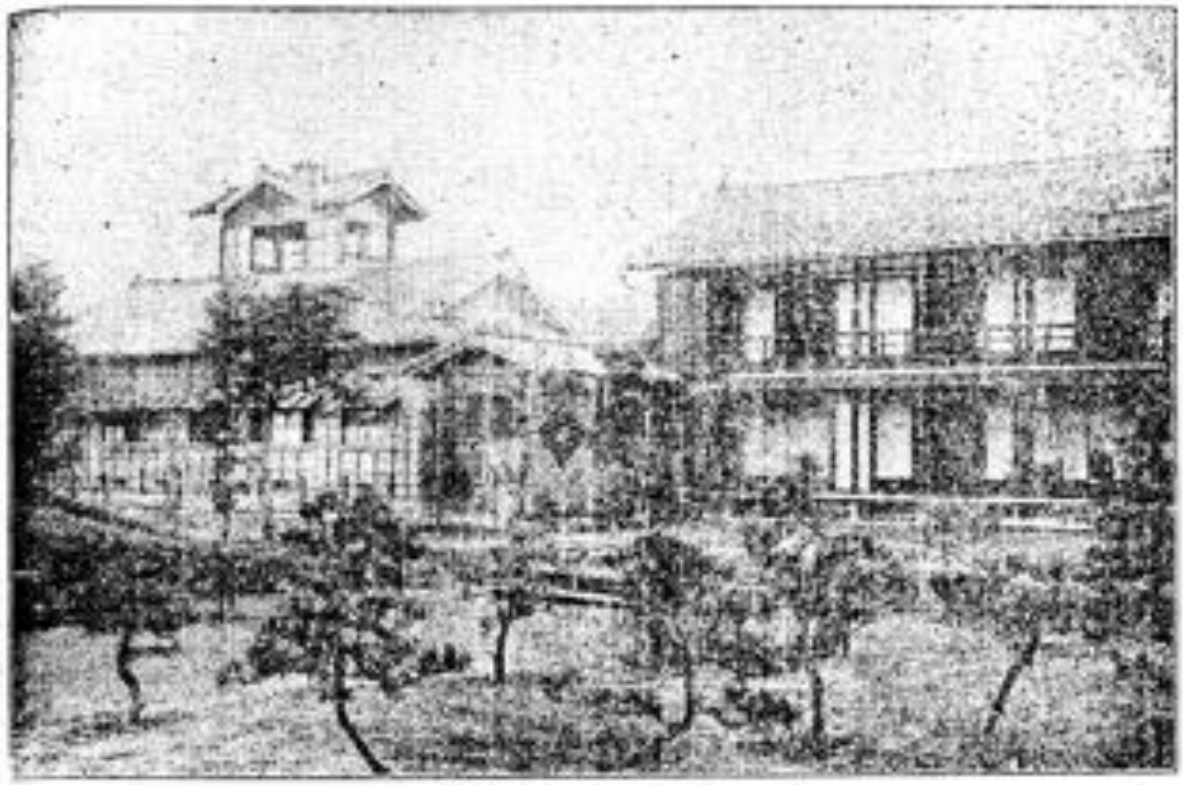
鳥取市伊吹植物園
（其之一）

図　物植吹伊市北島
（二之井）

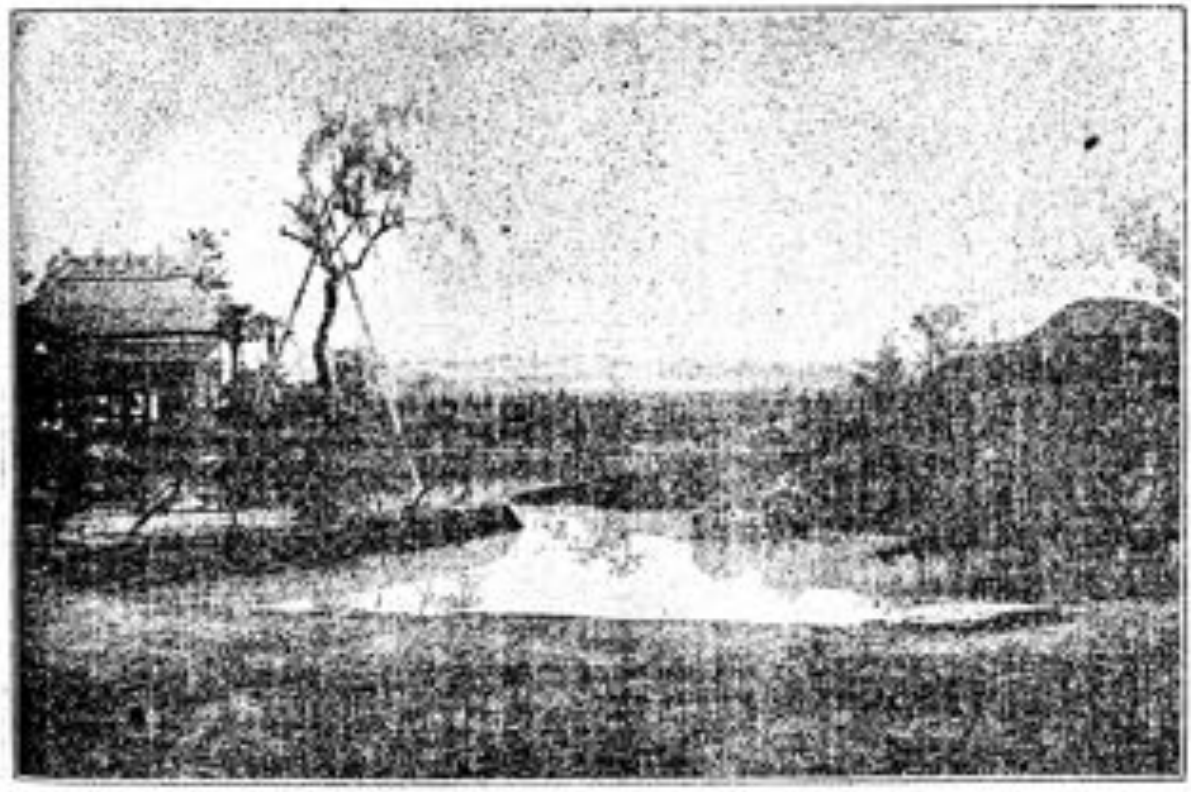
白岩眼書院（紀伊名所図会巻之四）　図書館　名古屋市立鶴舞中央図書館蔵

白岩眼書院（紀伊名所図会巻之四）　図書館　名古屋市立鶴舞中央図書館蔵

白岩眼書院（紀伊名所図会巻之四）　図書館　名古屋市立鶴舞中央図書館蔵



鳥取温泉旅館部



鳥取温泉内庭部

国治安事談話會にては兼て欣慕せる東郷大將の來鳥を機とし聊か歡迎の微忠を表すべしとて本部會長自ら岡嶋清潔、楢柴竹造の二氏を率ひ大將を其旅館に訪問し同會の沿革書及び菓子器を贈りたりしに大將は喜んで之を受領されたり尚は牛田副官を經て海軍奏樂の爲めに演奏の勞を與へられんことを懇請せしに大將は之を快諾し歸京の上、適當すべき旨を約せられたりと

鳥取御發車

倉吉行啓の十七日は悪しき暴風荒さみたるも　殿下の御盛德には後石の雨師風伯も避易きて引續き晴れ渡り鳥取縣下の行啓は御豫定の如く御無事に終始せられ縣民未だ滿足して遑慊なきを得たり然るに昨曾夕刻より天候俄然變調暴風雨加はり來りしに或は今日の御發車如何にと盛り市民は之れを呼んで暴雨と云ひ傾に玉車の隆別を惜みて愛情の情幼兒の慈母を慕ふに異らず

本日は朝來一天晴れ渡り煙火は殷々として今日の御發車を報ずる所て　皇太子殿下には御豫定の如く午後零時三十分と云ふに扇邸御出門御召馬車には中山東宮大夫御陪乘村木武官本戸侍從長以下文武百官供奉し東郷大將以下扈從し由路は直々東町裁判所前より智頭街道を順路國道に沿ふて古海停車場に向ふ停車場は前日の如くに盛飾し池田縣督、安東師團長、津田歩兵團長其他縣官郡吏を始め有位有勲者赤十字特別社員、愛國婦人會員各學校生徒在鄉軍人消防等整列奉送し聯隊よりは奉迎の時の如く同樣整列捧銃の禮をなして奉送し　殿下には一々御會釋を賜ひて一時二十分御機嫌麗しく御發車あらせらる

御召列車には供奉員、扈從者の外、安東第十師團長、津川第八旅團長、八木下聯隊長、山田知事、和田川越兩事務官等隨從奉送申上ぐ

米子驛御着發

本日午後零時五十分屋島御出門途中の拜觀者連續として絶ゆるなく宮に人垣を築て迎れりと謂ふも尚ほ形容詞に窮す鳥取假停車場邊くには例の如く各團隊學校生徒等多々奉迎し又步兵第十聯隊の將士も奉迎の際に步らす奉送せりかくて同時二十分菊花御紋章をもつて飾られたる臨時列車にて鳥取假停車場より御發車あらせらる列車には本戶侍從長陪乘し　陛下には殘の外御機嫌麗はしく奉送者に御會釋あらせられたり

鳥取來子間には總て十五驛を有せるが各驛共驛に差しかゝらせらるれは直ちに奉迎送者をして謹足せしめんと御の思召にて汽車の進行を緩かにせしめ給ふ事行啓の際に異ならす各驛とも又何時御乘發を拜し得るやも定かならされは奉迎送共近日來其比を見さる程盛況なり

かくて四時二十分來子へ着御あらせらる來子驛にては御召列車の近付くや煙火數十發墓塲の中空に轟きて御着車を報し又乘況す御召車は前日鳥取行啓の際に於けると同く菊花御紋章の神々しき紅白の小花の華美なる唯だ日數を計りなり此時御召車を拜するに　陛下には遙早くも車中に起たせられて附近の光景を御覽しつゝあれはす又御召車内の次の間には村木武官長、中山東宮太夫、柱圭侍御召車の前列の一等車には東郷大將其他あり又た御召車の直後に續ける一等車には安東師團長、由田知事、平井總監、古賀局長、堀田警察長其他各高等官等列車内に過立して出御を俟つ此時右九鐵道局來子出張所長は進て御召車の御扉を開き先頭申上げ　陛下には直に御下車あせらるプラットホームには

松永知事、鹿本本岡兩事務官、篠谷少將、中島第五憲兵隊長、中村濱田憲兵分隊長、須藤師團副長、井上西伯郡長、渡邊米子町長、作業局の最上、下村、加賀其他の各長師、其他

奉迎し　陛下には御機嫌麗しく一々御會釋あり隊て御休憩所に充てあらし二等待合に入らせられたり御休憩かにして本戶侍從長御陪乘各文武官最從勤奏事あらせらる驛前廣場には奉送の居在各文武官、各公共團体員各學校生徒等整齊整列の中を由御室々垣造風の如き雪白の國境なる青柳村へと進せ給ふ

安來着御

五月廿一日

東宮殿下の東部御發車の途に就かせられしより已に何日を超へ山陰道行啓もはや半ばを過ぎさせ給ひぬる今日午後一時二十分島取市を發車し給ひて四時二十分米子驛へ着御あらせらるゝや此處にて

島永島根縣知事、藤本、本間兩事務官、熊谷少將、中島第五憲兵隊長、中村濱田憲兵分隊長、須藤能義郡長、井上西伯郡長、濱邊米子町長、鐵道作業局の最上、下村、加賀、其他各接待等

奉迎し　殿下にはいとゝ御疲勞し〳〵一々御會釋あらせられ憚て御休憩所に充られし二等待合所に入らせられ僅かに五分間御旅勞も癒やさせられまと思ふ中はや御發車仰せ出され御召の馬車に乘らせ給ふ木戸侍從長御陪乘にて御列の順序は賀山警部先驅し次は保田警視、憲兵儀仗隊三名前進し前導之に續く第二の馬車は中山東宮太夫、村木武官長、桂主事、伊勢侍醫、侍奉し儀仗隊又之に亞ぐ山田島取、松永島根兩縣知事は第三の馬車に同乘して愚從し又列外には栗鄕大將、右賀警保局長、吉田內藏寮主事、其他東宮職、高等官、御荷物車、中島第五憲兵隊長、中村濱田憲兵分隊長、藤本、本間島根縣兩事務官、和田、川越島取縣兩事務官、須藤能義郡長、井上西伯郡長、西村島取縣警視、縣屬、郡書記、憲兵（騎馬）新聞記者、等順次行列に從ひ保田警務長後衞を勤め米子町長及び全町各奉迎送委員は安來まで奉送すべく特に御列に從ひ安來神園長、津田旅團長、鎌倉憲兵隊長、の三氏は何れも當驛にて御暇を申上たり斯くて四時二十五分御發車あらせらる沿道には大小國旗は申すに及はす幔幕軒燈緑門等遺憾なく裝飾せられ　殿下は坐ろ後際を拜して離情已み難き奉送者を實はしつゝ徐ろに過させ給ふ兩側には米子中學校高等女學校日野西伯兩郡各學校生徒各團體及び一般奉送者數万は蝟集して御奉送申上く函詰遑々米子町を離れ出雲伯耆の國境なる島根縣能義郡島田村大字吉佐に御通輦の一歩を踏させられんとする其處には縣民の擧て奉迎の誠意を表する一大綵門の裝飾として天空に聳へるあり路

傍には三十間毎に松樹を立て提灯には悉く小旗を結ひ附んに行啓を奉迎するの赤心を表せるあり又恒松、向坂、河上三代議士、竹原縣會議長以下議員、能義郡各町村長、能義郡及ひ安來町の各奉迎委員、能義郡各小學校生徒等

は遑然として整列奉迎せり夜陰は更に進みて海岸に出れは纖雲方さに斜陽を覆ひ本色蒼茫として空穆かに波靜かに中海の風光目前に展開し來る美景を　殿下は御馬車の中より賞はせられて御賞美あらせられしやに拜承はりぬ畏くて夜陣は午後五時卅五分安來町に着直ちに御旅館安來尋常高等小學校に入ら給ふ此處には

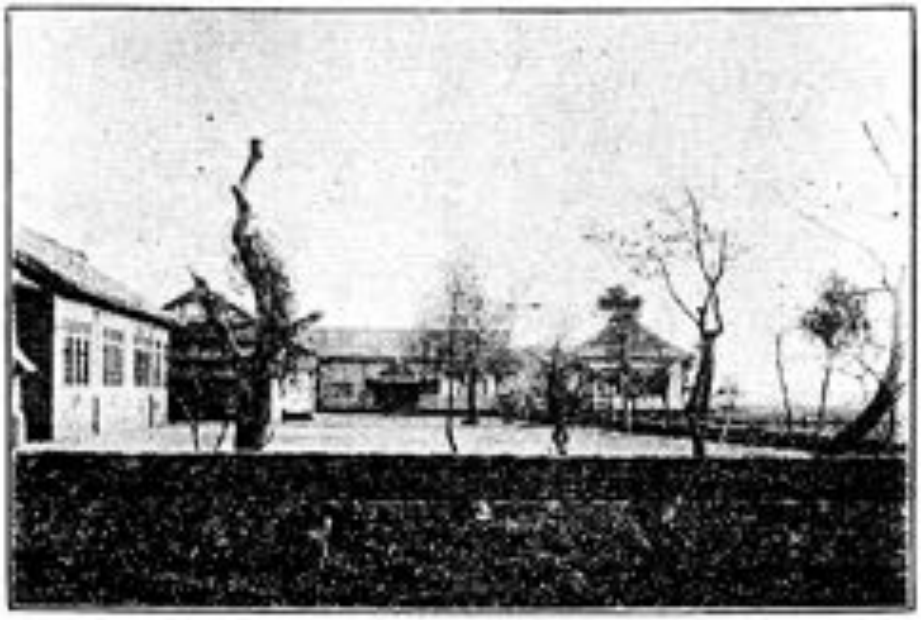
在鄉軍人、廢兵、軍人遺族、郡町内各官吏、赤十字幹別社員、赤十字正社員、愛國婦人會、紳士、曾根能義郡立農業學校、商業補習學校、郡内各小學校生徒、帝國海事協會、町村吏員

等順次に整列して奉迎し殊に町内に在ては階道村は申すに及ばず數十里の奥部より出安せし婦方の老幼打交りて御通筋に幷ひ道路として御尊容を拜し何れも　殿下の御盛德を欽し奉りき

御旅館の構造及ひ裝飾

安來尋常高等小學校を以て御旅館に充つ位置は安來の市街を西に距ること約二丁、伯太川の畔り田圃の間に在り四面開豁、風趣に富む數地鎭調にして校舍は二十七八年頃の建築なれども御旅館に充つる部分（大小六間及び浴室、圍圓）は今回の新築に係り昨年十一月起工、本年二月竣成せしものなり校庭入口即ち國道より北數間の處に棟門を設くる之を入りて左方に三間に四間の馬小屋、十二間に二間の厩舍（竹木葺）あり西に舊校舍、東に田圃を見て行くこと四十間許りにして中門あり目孫を安受す門内右側に御貳膳奉藏所あり是れ行啓記念として今回新設せし所なり（能義郡に於ては行啓記念として各町村一般に校舍より稍離して奉藏所を設くる事とせり）なは西に舊校舍を見て行くこと三十五間許りにして正面玄關あり蓋し校舍は南なり北に長く橫たはり鍵の手に曲つて東に延ぶ玄關は間口三間にして其の東に延びたる所の中央に新設

安来御旅館　尋常高等小學校



荒島御少憩所　尋常高等小學校

され頂優美なり、南に向つて聳ゆ延長八九十間の校舎対面は紅白二段の幔幕を以て繞ひ御玄關には御紋章ある紫幕の中を穿つて掲げらる（御旅館玄關の幕は宮内省より貸渡されたるものを用ゐ御休憩所なとには奉迎地に於て調製せしものを用ゐる事となり居れり）

御旅館の外觀は概ね以上の如くなるが左に内部の模様を記さん

御便殿其他

玄關を入りて七間に四間の廣間（舊校舎）あり板間にて縁ケットを布き詰め其上に一帯の白布（玄關より通ひて）を布きて　殿下御出入の御踏臺となせり此の廣間には壁上壁下に能義郡の物産郡内各小學生徒の成績品を陳ぬる狭きまで面も類る美的に陳列す此處より東は暫て新築にて清麗を極む

先づ入口十疊の間あり右方即ち南に一間の窓ある左方に御浴室あれども仕切りありて此處よりは見わす此間を其直に入りて十五疊の一室あり各室の通ひとなり居れり其の奥が拝謁の間にて十五疊、東に一間の窓あり之を中央として南に御便殿あり北は御寝室なり

茲に御便殿の御模様を弁し奉るにこゝは十疊の間にて壁は黄土にて塗り天井は杉の半柾を用ゐ白地に小紋ある木綿縞の疊を布き上には布物を用ゐさせられざるものゝ如く水はり四但し御旅館用の椅子二脚は本部より大阪に注文して新調せしものにて之を御便殿にて用ゐさせらるゝと云ふ南に三間、東に一間の窓あり勘廣地に花模様ある厚きカーテン裏にレースを重ねて掲げられたりカーテンの際より水の如く勝れたる硝子戸越しに見渡せば東には築〳〵角築の秀嶽峻嶺として雲表に聳え動きなき代の瑞を呈し南には近く一帯の松蔵木鬱蒼として千歳の壽を誇す實に双幅の圖畫其に迫る者の其にして御便殿に御床の設けこそ無けれ天然の床は淨明なる硝子戸を通して備はれり殊に雲上に在す　殿下に一種珍奇の趣味を奉るべきは我々下民に取りて却つて平凡とする所の田圃作物なり御便殿南窓の其下に蒼秀漸々たるを當はされては自ら天

智帝の御歌をも偲ばせらるべく東窓の前一面に油々たる柴雲草を敷設せられては都花の馨へさへあるを交通開けぬ昔しならば帝京の塞の越しかるべきになぞ思召さるゝ事もやあらんと推し奉るさへ最畏し

御寢室は同下〳〵十疊にて東に一間、北に一間の窓あり（天井、疊、窓掛等各室一樣）御寢室、御夜具等は宮內省より差廻しの御品を用ゐらるゝ由承りぬ御便殿の西に並びて御食堂あり十疊にて南、西に各一間の窓あり御寢室の西に並びて御更衣の間あり八疊にて北に一間の窓あり此處より西二疊の通ひを隔てゝ御便所あり入口一間にて勝箱子戶二枚を建つ御便所は一間半に四尺位にて疊敷なり此處に差荷りの便器を置かるゝやに承りぬ圖して此處の裏手に三尺の開き戶あり御扈從人の出入口とせり御便所の西に一間半に二間の御宿室を設く

玄關より入りて左に五間に三間の部屋（是より以下悉く舊校舍）あり事務室に充て職員十七名、次は高等官五人の部屋二十一疊、次は仕人十三人の部屋二十一疊、次は調理室四間に四間、次は御用物置五間に四間、次は高等官及び判任官の食堂五間に四間（中央を仕切る）次は憲兵の部屋四間に四間、次は地方官休憩所四間に五間、次は主馬寮物置五間に四間、次は主馬寮十八人の部屋五間に四間、次は主馬寮小者十八人の部屋三間半に五間、次は主馬寮判任官八人の部屋五間に三間半なり

御便殿及び御寢室に用ゐらるゝ御屏風は金無地に限るを以て能表郡にては六枚折一双を新調せり構造は紺地に三枚摶金箔を以てし骏節は金襴にして裏は緋羽を用ひ緣は黑塗夜圓のともしびは總て行燈なりし

拜謁者

安來御旅館着御の後拜謁を賜りたる人々左の如し

松永島根縣知事、山田島根縣知事、藤本島根縣事務官、松平直平子、千家大社宮司

小野日御碕神社宮司、北島壽季男、石丸鐵道廳米子出張所長、平井鐵道廳總裁、古賀警保局長、熊谷休職陸軍少將、中島第五憲兵隊長

右は何れも單獨拜謁にして其他の拜謁者左の如し

細田、本間兩島根縣事務官、和田川越兩鳥取縣事務官、井上西伯郡長、須藤能義郡長、中村濱田憲兵分隊長

御使差遣

能義郡安來町雲伯鋼鐵合資會社

秋澤侍從武官は高田東宮扈從を隨へ天野安來署長先導し倉岡縣屬昇先能義郡書記隨從し同會社に臨まれたる會社にては役員一同門外に出迎えたり休憩室に於ては床上に陳列せる砂鐵、製鋼に就て社員伊部喜作氏より一々說明をなし夫より工場を巡覽され再び事務所に於て小憩の後砂鐵製鋼を携帶して出門直に出發途中に於て直帶に追從せられたり

御下賜

安來御旅館に於て須藤能義郡長に酒肴料若干と特地一反を御下賜ありたり

擧道に就て盡力せる各員に酒肴料を御下賜ありたり

安來町に金二百圓御下賜ありたり

並河郵便局長外二名に酒肴料と御菓子を下賜さる

安來小學校に御寫眞と金若干を下賜あらせらる

能義郡内に於ける主なる準備委員六十三名に對し御菓子を御下賜あらせらる

献上

松平島根縣知事より左記の三点を捧呈せり

一、島根縣圖（明細なる島根縣地圖にして大版のもの）
一、島根縣圖（同地圖にしてポケット用の小版のもの）
一、皇太子殿下行啓御道筋及名所舊跡一覧
（島根縣下に於ける行啓沿道筋を特に詳細に記載せる地圖にして其裏面には沿道の名所舊跡の由來を簡明に記載せるもの）

能義郡より献納品左の如し

一　國産廣織飛白　二十反

高齢者献納品氏名左に

木綿　廣瀬　平井ヨシ（八十六）　木綿小紋　同　小村兵吉（八十四）
小林ハナ（八十五）　木　履　安達善市（八十三）
木綿　飯梨　山崎フユ（八十三）　同　伊藤セン（八十）
同　荒島　角　タニ（九十五）　木綿紡績　赤江　永田ミツ（九十）
木綿　廣江　クマ（八十五）　同　奈良井タメ（八十三）
同　安來　丸山キト（九十七）　白絹縫揚抄　釜河ミヨ
麻糸　仲佐ミサ（九十二）　木綿　庄司ナカ（八十一）

霞網　石井其蔵（八十四）　木綿宇賀荘　井上ハヲ（九十四）
仝　組田メキ（八十一）　仝　楯田タルノ（八十六）
仝　岩崎モン（八十五）　御手水盥　母里　三浦茂蔵（八十五）
視箱　稲田米蔵（八十四）　財布　稲田ヲン（七十九）
木綿　井尻　戸崎ツル（八十三）　仝　幕　ワタ（八十八）
仝　稲田ヲン（八十一）　木綿　白根マク（七十九）
白絲子　荒島　原田チカ（八十六）　絣縞袋　矢田ユキ（八十二）

御上覧

當町御旅館一室に左記の同郡物産を陳列し須藤郡長は一々詳細御説明申上たり

鞭米、鰈、線香、温飩、菓子、銑鉄、椀、紙、
漆器、廣繊絣、生糸、鋼鉄、火箸、醤油、木炭、御食籠

雲樹寺寶物御上覧

雲樹寺住職の御願にて桂王那の手を經て左の十一点を御覧卑前　殿下の御上覧に供したり

一　後醍醐帝の宸翰　一巻
一　後村上帝の綸旨
一　將軍義政公の捨證入の証文
一　萬壽寺伯辰の紀文細川勝元證書
一　後村上天皇勅書の寫
一　樣櫛帝の御筆　一巻
一　御経裏古銅釣燈
一　雲樹寺開山三兄國師の畫像一幅（以上二点國寶）
一　後醍醐帝勅願宮願本　一幅
一　後醍醐天皇勅書の寫

一　小野高實、佐々木高権、尼子、毛利の書類　　合計十一点

友聲の書上覽に入る

堀江友聲の書は漸く世に知られたりといへども書人傳等未だ之を公表するものなかりしが今回圖らずも殿下の御上覽を煩なくするを得たるは光榮枯骨におよべりといふべきなり本書は頗る丹精を凝らして画ける波に鷺の圖にして　殿下には詳しくその傳記等を聞し召させられ特従をして筆記せしめ給ひたりとなん

御買揚品

御旅館内物産陳列場へ御成在せられ親く御台覽の上御買上あらせられたる其品名及び人名左の如し

廣瀬絣	貳点	廣瀬町	古川虎太郎	仝	參点	仝	大森榮藏
仝	參点	仝	廣瀬絣合名會社	仝	貳点	仝	和田榮三郎
紙	壹点	仝	祖田甕兵衛	仝	五点	仝	加藤太郎門
仝	壹点	仝	小笹伸市	米	壹点	非氏村	程平銀市
鉄製火箸	參点	廣瀬町	春木與吉	生	糸	壹点	安來町　並河理二郎
平田織	壹点	仝	渡部茂右衛門				

紀念御手植

幷に東郷大將手植

安來尋常高等小學校御旅館内に松の御手植あらせらる

東郷大將は須藤能義郡長の請に應ず仝旅館に月桂樹を植えられたり

奉拝者

安來御旅館御出門の際奉拜を賜はりし篤行者左の如し

一　敎育功績賞拜受者　　泰江村下十神尋常校訓導兼校長　齋木百枝

休職泰江村東泰江尋常校訓導兼學校長　服實

一　老養受賞者　　足立長太郎　田村忠善　川井源次郎　神田ヨシ

石井シタ　足立由右衛門　板垣幸兵衛　永岡富次郎

奈其井トク　稻田イシ　鶴見福三郎　加茂久右衛門

原イク　野々村長兵衛　畑金次　仙田スミ

一　貞節受賞者　　松河彌イキ

一　孝貞受賞者　　越川サタ　内田ヨウ

一　戰病死者遺族　　森山隼雄以下八十名

設備

郵便局出張所

安來郵便局は御旅館内に出張所を設けて御用の郵便事務を取扱ひたり

郡役所出張所

能義郡役所は小學校内及び安來町に出張所を設け安來町役場も御旅館に近き本戸ヶ所に出張所を設け鎭座祭當日來詰切日夜執務せり

救護所

奉迎の日は安來町外れと島田村に各一個所、奉送の日は赤江、荒島二村に本部救護所を設け詰合醫員は簸郡郡醫會の引受にして郡内各醫師殆ど總出なり

裝飾

東堀東小路より左折し本町通りを突當りて郵便局前と大市場を通りぬけ御旅館に達するまでの御通路は清掃されて白砂を布き御通路及び其他各町、海岸通り悉く道の兩側一間はさめに高さ七尺位の木柱を建て上に横木を渡し紅白木綿を以て段だ折に卷き上部に日章を並立し其下に數千の球燈を掲げたるは實に壯觀なる美觀なり且つ各戸白、紫兩二段の幔幕を張り極めて壯觀を呈せり

御慰

殿下の御慰みに供する爲め準備せるもの五あり

（第一提燈火）　書五發、夜二十發、滿谷橋の下手堤上にて打揚ぐ

（第二提燈行列）　御着の夜六時より十時迄の間を以て安來町外一里以内各小學校生徒一千人の提燈行列を行ふ

（第三提燈火）　御便殿の前面松原と國道との間に數百の球燈を掲げ五色の彩火を變幻無窮せしむる裝置をなせり這は曾て聯兵野校として火工術に精熟せる籠谷少將の發案に係るものなりと云ふ

（第四萬燈）　愛宕山を中心として南は八幡山、北は十神山の畔りまで一里餘の間竪横きに青竹を立て其上に千餘の記號を點す

（第五月の輪祭）　是は一名大念佛とも稱し盂蘭盆會に於ける安來町右來より有名のものにして婦人に限り半月形の大行燈を擔ぎ廻り笛大鼓を鳴らしエンヤ〳〵、アァアットーヤと囃し立つるなりエンヤは

慕歸アァアットーヤは『出て來よ手傳へや』の詞言なりと云ふ今回は約百名の婦人を出せり

因に記す月の輪神事式の由來

本町氏神として祭祀するは加茂神社社殿にして創者は本大字安來村加茂に後者は大字安來宮内にあり光仁天皇寶龜貳十年の創立にして當時の鄕長藤原之重および直弟實廣二人の勸請せる所なり毎年陰暦七月十四日より十七日迄四日間大祭あり所謂月の輪神事式を施行す其席次極めて嚴肅とす後地に昇り龍降り詣を染抜きたる帛輪數流を先守とし當町酒造家之を捧げ次に數百の等身格扉燈をなし高低變差あり氏神祈願の壯男之を持す其次を神輿とす兩社の神流を興上に建て其上に金色の鉾実あり大旗小旗標註をもつて彙を奏す一隊の見物は揃醉を合せ之を持し本町漁業を專實とせる新町のものこれをなすこれに次は本町農業を主とせる後小路の各戸これを捧ぐともに酒農の豐穣を祈る最後に月の輪あり只見る弦月形の紙燈にして宛然長蛇の如く盛粧せる女兒これを持し小より中中より大竒も其席次を紊さず最後の大なる者に至ては始ど街路の巾に均しき者あり初夜は午后十一時頃に終り漸次深更に及び最終の夜は終に曉に徹す近郡より來觀する者數千人地方有名の祭祀となす傳へ言ふ往昔安來の鄕長の臣猪膽其愛娘を野魚のために失はれ天地の神祇に號泣祈願して其復仇をなせり婦人仍て此遺火を造り以て神事となせりと詳しきは出雲風土記に見へたり

夜の安來

燈花と萬燈と提燈は安來一郡を始んど不夜城たらしめたり就中月の輪祭は其特有の風習を發揮せり

記者團遊會

安來町長橋山榮之助但見榮次郎、黒田房三郎、渡部佐一郎、松浦彌太郎、山本豐三郎諸兄の發起にて京阪新聞記者島取の兩新聞記者を始めとし地方新聞記者を愛宕山上に招き團遊會を催し山上より山下に掛

け無數の球燈を點し殊に全山より南八幡山北は十神山に至る一里餘の篝火と當夜市街の盛況と併せ中々の壯觀を極觀したるは頗る美麗壯觀なりし

鳥取縣官一行

安來迄拜送せる山田島根縣知事、和田第一部長、川越第四部長並に井上西伯郡長、渡邊米子町長は直ちに御暇を申上げ各歸任せり

安來御發車

五月廿二日

昨日全で打ち續きたる晴天に引換へ今廿二日は拂曉より朝々曇天を示せしかば一時は大に氣遣ひしも殿下御威德の致す所か幸ひにして天氣次第に開け行き御發車は午前八時と豫て仰せ出のありしかば井端を許さるへき效育功績賞拜受者、老農受賞者、貞節受賞者、孝子受賞者は御門内に軍人戰病死者遺族八十餘名は御門外に整列して出御を待つ　殿下には御豫定の如く御旅館御出門あらせらるや至町を始め近在近郷よりの拜迎參者數万人は雲霞の如く駐下御通輦の首途の事とてけふの御行色を旺盛たらしむへく期せずして互に先を爭ふまでに定刻前より詰々と押し寄せ來りぬ須臾にして天柱も碎け地軸も折けよと計りに萬々轟き渡れる歡聲の凱旋を相圖に齒降は遖々坦道快走の途に就かせらる先驅として賀山警部は自轉車に跨り保田警視は騎馬にて先驅す次て菅田中尉は騎兵四騎をして嚴然擁護の任にあり威風四邊を壓して車塵濛々たり

當日は木戸侍從長陪乘し次の馬車は有馬、原侍從黒水武官搭乘せり次には中山東宮大夫と桂主事と相機侍醫便乘せり最後の馬車には松永知事與されり列外の扈從は東郷大將を先頭とし村木武官長（非番なれば直衞外に列す）村山少將、古賀警保局長　吉田內藏寮主事、非番侍從、武官、侍醫、松平子爵、北島小野田男、德谷少將、中島憲兵隊長、中村分隊長、宮內屬、藤本、本間、堀田の各事務官、恒松、江角、二代議士新聞記者等何

れも勇しく馳車を馳りて隨從す

荒島村御少憩

斯くて八時四十分荒島村尋常小學校に御着須藤郡長の先導にて便殿に入らせられ御休憩あらせらる此間生徒の成績品を御覽あり御寫眞と下賜金を賜ひ約二十分の後御出發あり其の際成績品は悉く御持歸りとなり松永知事の說明にて箱詰となりし荒島砂を御覽あらせられたり

學校の構造及裝飾

荒島御小憩所は尋常小學校にして大字荒島の町を東に距ること約一丁餘國道の北に在りて南に面す門前アーチを設け國旗を交叉し玄關には柴木綿綿の幕を掲ぐ玄關を入りて正面に金屏風を立て扉架にはズックの上に白布を敷けり玄關内より左折して數回、階段を登り扉架を通行して御休憩室に到る御休憩室は玄關の上に今回新築せし十疊の間にて緋毛氈を布き杉板天井、白漆壁となし南に四尺の開き戸、其の左右に竪小窓を設け東西に各一間の口あり硝子戸にレースを懸て

扉架を隔てゝ御休憩室の前に小學生徒の成績品陳列所を設く能義郡内十五校の成績品を二十帖に製して隔置し壁上には荒島校生徒の書三幅を掲ぐ此の陳列所の裏に供奉員室あり

揖屋村御少憩

九時二十分八束郡揖屋村尋常高等小學校御着右川八束郡長先導申上げ便殿に入らせられ荒島岡模成績品御覽御寫眞と金員御下賜あり約三十分御休憩御機嫌麗はしく御登車あらせられたり尚八束郡内學校五十九校兒童成績品全部（約六千點）御持歸り相成りたり

學校の構造及裝飾

御小憩所　縣常高等小學校にして大字東醫屋の町、東に寄りたる處にあり町の南側、學校入口に總門を建設し校門まで十六七間の間左右の屋壁に紅白五段の幔幕を打ち實當り正面玄關には新調の紫繻絨幕を揚げ柱は紅白木綿を以て卷み校舍前面（十八間）二階窓下より紅白五段の幔幕を張る玄關を入りて正面一帶に同幕を張れり廊架を左折し行く七間にして階段を登る縞マットの上に白布を敷きたる十一間の廊架を西に向つて行き詰めたる處即ち御休憩室なり

御小憩所　該校舍は明治三十四年の建築なるが今回の御小憩所に充てん爲め西に延ばして四間に五間の二階造りを建增したるものにて昨年の十月二十二日を以て落成せり階上なる御休憩室は將來諮詢室として永く記念に存せん等なりとや扱て愛しく御休憩室の御模樣を伺ひ參るに室內縣ズックを布き詰め壁は青く塗りたり西に三間窓一、南に一間窓二あり北壁に縣內各尋常高等小學校生徒の書畫十四幅（室內廊架にも數幅）を揭げ其下には小學生徒の成績品、縣內各補習學校生徒の製作品を陳列す東方には金屏風を立て恐れ多くも　殿下が之に臨して御着席あらせらるゝ樣、室の中央に椅子卓子を安置し傍らに岡村の富家越野岩次郎氏が愛培せる松の鉢植ゑを飾れり

陳列の製作品　右殿下の御覽に供する各補習學校生徒の製作品は意東村補習校より出せる繩子塊に鶴龜、松竹梅の刺繍を首として各種織物十七点、手巾七種、色糸四点、竹細工十点、造花四点、其他數々あり盆花中牡丹、百合、櫻及び黃菊、薄赤菊の如きは御室內の裝飾ともなりて最と美し御休憩室の東に隣れる一室を供奉員室とし一隅を仕切りて御便器を設く樣用意せり

東鄕大將手植の松

紀念として校庭に東鄕大將の手植ありたり

揖屋御少憩所　こうぞう小学校

恩賜の御菓子

紀念學校

本村にては行啓紀念として今回實業補習學校を設置せり

郡衙出張所

醫屋町松本次助方に設け委員十一名（視學一名、郡書記十一名）詰合つて事務を執れり

津田村御駐車

十時三十五分津田村大字西津田の尋常高等小學校御着、校庭に御駐車のまゝ、五分間御小憩あらせらる

學校の構造及裝飾

同校舍は明治三十八年の建築にて相並べる實業補習學校は三十一年の建築なり今回御馬車出入の便宜の爲め普通校門の外、東西兩端に石柱の小門を設け御馬車東より入り西より出でさせらるゝ樣なせり兩校より西側なる村役場にかけ前面約六十間の處に紅白五段の幔幕を打ち兩校及び役場の玄關には紫メリンスの幕を掲げ前方廊內に盆栽三十盆を陳列して展覽に供せり

自安來
至松江

沿道の光景

安來町附近より能義郡各學校生徒は國道左側二列を爲し校旗を捧げつゝ整列し町村吏員、赤十字、在鄉軍人、武德會、愛國婦人會、消防協會、神官、僧侶其他の各團体列を爲し赤江、荒島、意東、排屋等町村に接する附近もまた拜觀者夫々所定の位置に着し入東郡境に入るに及んでは入東郡の奉迎委員を始めとし島根半島大根島西は大野、伊野の各村より各種の團体ろれ〳〵所定の位置につき誠心奉迎し其數幾十万なるを知らず殊に安來町境に於ける在鄉軍人津田村以西の入東郡在鄉軍人奉迎の擧さは非常の長列

を爲し異彩を現はせり

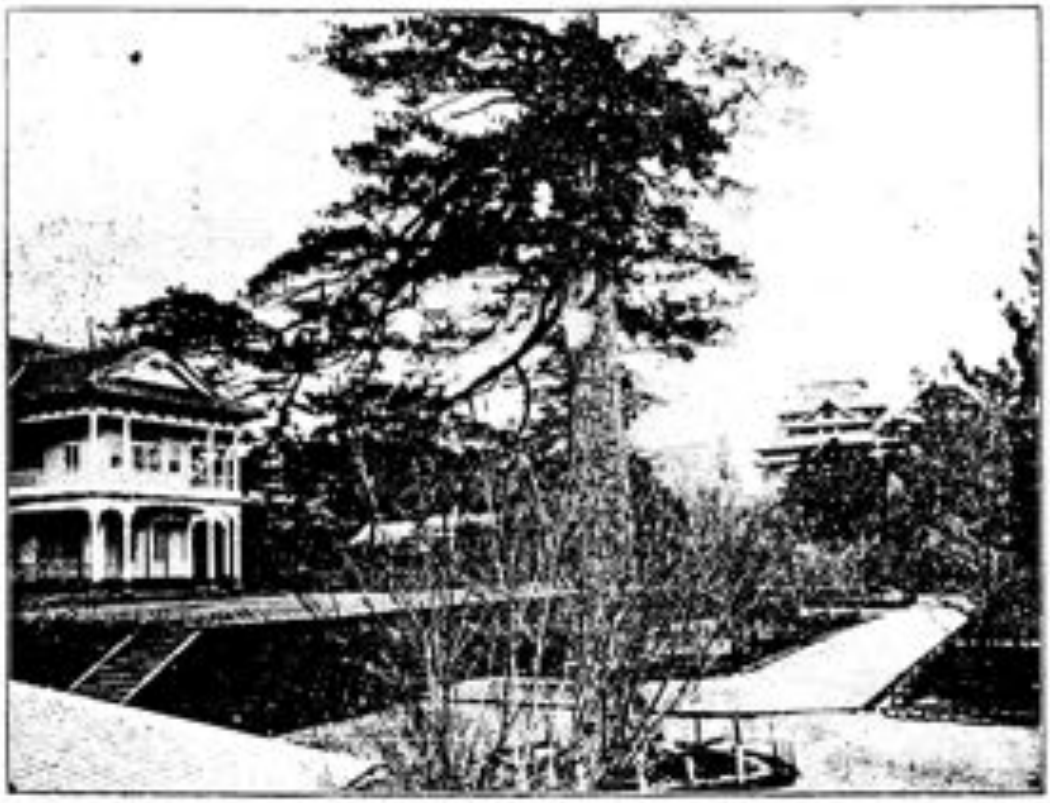
▲伯太川橋畔の奉迎門の体裁は四角柱に米の俵にて隙なく飾り付けられ額面に捧せし奉迎の二大文字前と絹との配合にて巧妙に出來上り餘にも捨べからざる見榮を放てり▲赤江小學校の裝飾校門には牡丹花を造り傍に孔雀の尾と稱する草を点綴せる裝飾は實に過りて宛かも自然花を散くが如き觀を呈へ玄關には金屏を廻らし生花一對を陳列し萬國旗を樹て更らに校内には限りなき皇室の御寵るべき叡慮に因み三羽の鶴を設け又た校門内の一面に小規模ながらも珍奇なる種々の盆栽を集むる處は清娯掬すへし▲荒島町は安來と同さく高さ七尺許の青竹を一間置に樹て上部に橫棒を打ち紅白の布にて段々に卷き國旗と球燈をつらねることと無數目さばゆき迄に飾られたり商掛屋筋東は紅白の幔幕と球燈にて裝飾し水を打ちて市中を清めたり▲沿道筋は各村共救護所を設け醫員看護婦詰切り救護の準備あり▲入來能義の郡境には大鳥門を設け入來郡吏員、町村長奉迎委員等出迎をなし津田村學校以西に至りては師範、中學、商業、農林、工業の各學校生徒武裝して左側に整列しられより松江市圖殆んど際間なく人を以て埋め靜肅に奉迎し松江市に入るに至りては境御上陸以來各所に比して裝飾等格段のものなるも自ら山陰第一の都會として規模自ら大悠揚として過らず他の何となく嚴肅たるに似ず人衆の多數厚の靜其當目を瞠めさるを見る

松江着御

五月廿二日

斯くて御沿圖もあらせずと聞えしかば十時五十分頃より數發の煙花は打あげられ市民は愈よ御着よと期せずして打どよみ松平不昧公の菩提所たる御馬路津田街道より竪町天神町中町京店前殿町を經て城山大手前に出でさせられ有爵者、高等官、貴衆議員縣會議員等の奉迎に對して一々擧手の御會釋ありて恙なく御假御座所に入らせ給へり時に十一時三十分なり

松江御座所より天主閣を望む



松江御殿館

城山御旅館

所在地は舊松江藩主松平伯の舊城内にして龜田山千鳥城といふ

御旅館の位置

本館は城山内松江神社に隣りて洋館造りに建造せられ階上の御座所よりは若葉越しに南意宇の山を望み宍道湖東西半面の水容を瞰瞰し所謂松江の山紫水明を一幅に收め得べく又東に東雲表を照せる出雲富士の壯大、白練を布けるが如き大橋川の眺觀は更にも言はず若葉に光る一万の甍と指點し得べきの美景なり

御旅館の間取

車寄を過ぎ玄關を通りて階下に入れば中央に通りを設けて前室と後室とに分ち先づ玄關の左前側二室を通ずて事務所に、南角の一室を侍醫室に玄關の北側を應接室となしあり後側にては西角（松江神社に接近せる方）の一室を調理室（殿下に供すべき其の南一室を二分して仕人室、應接室となし其の次（玄關の衝當り）左手を御廁、其次湯殿、物置と並び更に西南隅の一室を二分して大夫、主事室及び應接所となす、階上亦た中央に通りを設けて前室後室に分ち南隅前室を以て御座所に充て北に隣りて御食堂、調膳供進室、内舍人出張所（玄關の眞上）前長室（侍從長と武官長とを指して前長と云ふ）と並び又た玄關の眞上より庭上に突出したる一室に松江市の物産二十三点入來點の二十四点を陳列して御覽に供す裏に後側に移れば南隅を御寢室に充て非常を期るものは御寢室と御座所との中間室を以てす北に隣りて御次の間御廁と續き更に北隅の一室を以て侍從室となしあり松江神社に沿ふて高等官及び判任官の湯殿、便所又た松江神社の構内に割込みて調理場（御付官吏に給すべき）釜屋等を設けたり

建築工事

御旅館の新築工事は明治三十五年十二月二十六日工を起し翌三十六年九月十六日全く竣工せり建坪總數

百三十九坪三合八勺（今回建増の坪を除く）

庭内の模様

新道路より庭内に入る所へ正門を設け松江神社境内に沿ふて更に通用門を設けたり正門前には菊の御紋章入の大提燈二個を吊し之と並びて左右に二個の警衛巡査詰所を設けり車寄の周圍には繪縞の緋地に菊の御紋章を染め抜きたるものを吊されたり庭内には一面に荒砂を敷き右方東伏見宮殿下の御手植あらせられたる月桂樹の看板は日に光りて特に神々しく裏に庭内の南隅新に土を盛りて　東宮殿下の御手植松の柱標とし則ち御手植あらせられたり

園内各亭

先祖以下各模擬店の看板札は悉く撤せられて各亭悉く事務所其他に充られたり先づ二階亭の前室は登殿を控列し更に前室の奥部及び後室の奥部及び松平家御用達所とは悉く供奉員の寝室に充て、松江神社前の陶器店（野津金之助）は本陣事務所に、天守閣上り口の饅頭屋（中村長之助）は松江市役所の出張事務所に、松江神社右横手の饅頭屋（鳥羽ヲキ）に供奉員特等夫の休憩所に、天守閣坂下の雑貨屋（隅村國次郎）及び友松庵は共に供奉員の寝室に充られたり御供中村亭の石坂下に當る掲示場の右側に儀仗兵の控所を、新道路と友松庵との中間に電信取扱所を共に今回新設せられたり

御旅館内裝飾

生花は右流の宗匠長谷川新兵衛氏の高弟米田万四郎氏なりしが其次第は左の如し

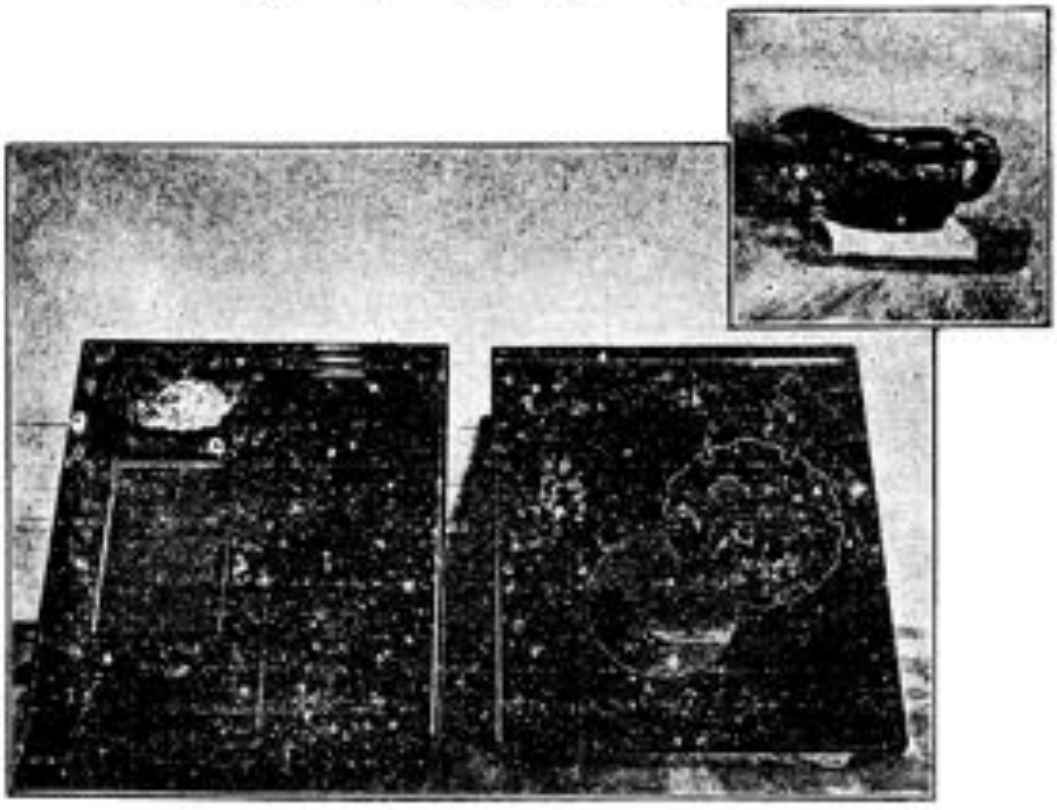
廿二日

玉座

一花瓶　中興名物右銅鑄大口　　松平家蔵品

城山の松江神社

松江市献上品



花　蓁子花

一花瓶　古銅象嵌形　岡崎連兵衛氏蔵品

花　魚柳　夏菊（名取鶴）

拝謁室

一花瓶　古銅櫂圓形　森島儀兵衛氏蔵品

花　老梅　苅薬

廿三日

玉座替花

一花瓶　金紫銅　岡崎連兵衛氏蔵品

花　車輪梅　赤薔薇

廿四日

玉座替花

一花瓶　染附蕪形　同　上

花　若松（名朝日）　白薔薇

但若松は高橋市助殿経前の愛翫なりしが　殿下の爲めなればとて佐野常世のそれならて暮て根元より截断せられたるものなりしが東宮太夫より洗れ水はる處によれは却〳〵も　殿下には該瓶を特に御賞美あらし由米田氏の光榮は勿論なれども高橋氏においても實に榮典のこと、思はる

御料廐舎其他各舎

新築の各舎は場内通路の東に沿へる南北三十三間五分東四十七間五分の地内に建設されたり中央四間に

三間の杉板葺は御馬車舎にして總建物中最も手の入りたるもの又此前に板圍ひの一間半に十二間の御料馬厩舎あり又た御馬車舎の北方に當り道路の一間半に十二間の騎兵馬厩舎二棟、其以北に一間半に八間の憲兵馬厩舎あり御料馬十頭、供奉騎兵馬二十一頭、憲兵馬四頭都合馬正三十五頭を收容すへく其他馬丁當番所三棟、釜屋一棟、都合九棟の建物は配置よく建設せられあり外部は何れも板塀を以て圍をなせり

縣廳へ臺臨

五月廿三日

東宮殿下には木戸侍從長御陪乘第二馬車は本多、高辻兩侍從、伊勢侍醫、秋澤侍從武官、第三馬車は中山太夫村木武官長、椎主事第四馬車は松永知事、列外扈從は東郷大將、牛田副官、村山第五師團長代理、中島第五憲兵隊長、吉田內藏主事、中村濱田憲兵分隊長、右賀警保局長、藤本、福田、本間の各事務官其他隨從申上げ午前九時松江城山御旅館御出門本縣廳へ臨御あらせられ暫時御休憩の上松永知事以下高等官に單獨拜謁を賜はり終りて松永知事は地圖二種、統計一班、孝子義僕節婦名簿、藍綬褒章受領者名簿等を奉呈し終りて頌德表を奉り次て竹原縣會議長は松永知事立會にて頌德表を中山太夫の手許まで差出せり石終つて九時二十分縣廳御出門師範學校へ御向へあらせらる縣廳門內四側には高等官、判任官各郡市長東側には縣會正副議長、縣會議員等整列して奉迎奉申上げたり

頌德表

松永島根縣知事の捧呈したる頌德表

謹而言　伏して言す我が島根縣の地退方に僻在し加ふるに交通機關の未だ備はらざるを以てす故に進新以來

車駕一たび蒞幸のあらせられんことを翹みしも来だ
恩光に浴するを得ず縣民當に恒遠の情に堪へざるものあり
殿下至仁深く攀慕倹后の懐を偲させられ今茲五月畏くも金枝玉葉の
御身を以て山紫水綠の邊境を履ませられ遠く此の地に行啓あらせらるゝ洵に是れ大旱の雲霓にして蒼生来蘇の歓ありて踴躍非常至誠を挙遊に捧ぐるもの亦宜なりと謂ふべし臣幸に
鴻休を荷ふて乏しきを知縣に承け此千秋の盛會に遭遇するを得て感恩懽欣の至りに堪ふるなし謹みて要賞者名簿一冊孝子順孫節婦名簿一冊管内地圖二葉縣治の一斑を窺すべき志表一冊縣史要一冊雲陽誌一部出雲風土記一冊寫眞帖一冊繪葉書數組　行啓御道筋及名所舊跡一覧一葉國産數點を上る要賞者名簿等は此の千載一遇の時に當り其善行の天聞に達すべき光榮を得しめんことを希ふの誠意に出で地圖志表は本縣現時の廣袤及施治の梗概を表し史要は今茲新に僚屬に命ゝて編纂せしめしものにして縣下三國史蹟の概要を採録せり雲陽誌は黒澤長尚の所撰にして出雲重要の史料風土記は現存九風土記の一にして實に一千年以前の雲國を偲ふべし御道筋及舊跡一覧國産品等に至りては臣等が瞻右の盛儀を欣歓奉迎せし記念の微意を表し奉りしなり
台覧を賜ひ管下今昔の概観を縦覧あらせらるゝを得ば獨り臣が幸榮のみにあらず縣下の國土草木亦當に光輝を添ふべし激切屏營の至りに堪へず謹みて表を奉ゝて以聞す

明治四十年五月二十三日

島根縣知事従四位勲五等　臣　松永武吉

竹原縣會議長の奉弔したる頌徳表

臣言す伏て惟るに

聖上陛下
　德乾坤に象り
　明日月に併ふ是を以て
　聿揮率土に流む
　恩波實海に溢る獨り山陵の地祖山て海絶するを以て土壇未た
車駕の軫を卽せす蒼生切に倹后の翠を懐け9歳の五月
　金輅
　九重を出て月の念に
　警旅橋江に駐る是に於て蒙塵來蘇の情あり山川因仕の忱を是せ9遐邇顒手喜慶せさるなく老幼或は感思
　垂泣するに至る臣 誠惶誠喜頓首々々伏て惟るに
東宮殿下
　至性
　天爽に遡かれ給ひ
　慈仁
　直系に累け給ふ
　主鬯
　孝恭の美を彰させられ
　撫軍
　神武の功を建てさせらる竪惟當今侍親の

主器たらせらるゝのみならむや洵に是れ翼日俊彦の
帝主にまします臣等幸に
聖明の
恩賜に浴し已に士民の代表たり愛に盛儀を迎へて親しく
英姿を拝し奉り扶護敬徴の至りに任ふるなし蒼く菲官を擬り具に誠状を陳ねて七十萬蒼生か紺芹の微衷
を效し雲石限無民か聖皆の芳懐を捧け奉る
明治四十年五月廿三日

島根縣參議長　臣　竹　原　源　市
議染議員領首々々謹上

福岡松江市長の捧呈したる頌徳表

前略御を開きて
休氣四海に盛し
重輪瑞を表して
太和萬里に治し　臣等議員領首々々伏して惟るに
皇太子殿下
英姿天縦加ふるに聰明剛健の質を以てせさせられ令聞風速自ら仁孝恭儉の資を備へさせらる夙に庠序に
入りて閑子に講し給へば堪修時敏の君あらせられ厚く師傅を敬して善言を聴き給へば遊當日課の規あら
せらるゝ況や黄離の象あるを以て
神器の重きを荷はせらるゝ訓俗の際をなす固より紺園の尊に當らせらるゝし是を以て宸儀の表する所

鬼神祭に參り既に幸啓を傳へさせられ玆を非宮に主り給へば縣々たる重光國基益固く又眞援を揮ひて妃を名門に擢し給へば縣々たる爪天讃益遐き洵に是れ邦家の榮福億兆の幸福を期ふべし今年孟夏兮月吉辰省屋岡安の條を以て山河跋涉の勞を厭はせられず

金幣はこの山陰の邊隊に遊めさせられ恩波を吾か島根の蒼生に被らせ給ふ珠に吾松江市には數日間鸞輦を駐めさせられ親しく縣廳物産陳列場等を臨覽あらせらるるの光榮を荷ふ所謂長右未曾有の盛儀にして千載不可遇の嘉會なり登會に感奮歡白の額手當呼するのみならひや島獄草木亦當に謳歌排舞すべし世德芝しきを松江市長に承けて敢右の昌運に逢遇し親しく玉希を拜して敬敬謹謹の至うに禁へす謹て表を奉下て以聞す

明治四十年五月二十三日

島根縣松江市長　臣　福岡豊德

議獄議員頓首々々謹上

師範學行啓

仝　日

新くて　殿下には縣廳より西へ御順路内中原交叉點を經て九時四十分縣立師範學校に成らせらる兒玉校長以下教員一同は門内左側に整列し生徒一同（三年以上は武裝）は門外南に整列し御通りの際は勤敎論心得加藤少尉の號令にて喇叭にて君ヶ代を吹奏し拂銃の禮を爲す斯くて兒玉校長の先導にて便殿に入らせられ兒玉校長、宮田、後田、吉岡、加藤の四教諭に單獨拜謁を賜ひ校長は知事の手を經て學事狀況書を捧呈暫時御休憩の後教育品陳列所御覽ありて運動場に成らせられ茲て拂へらる杉白木造の便殿に入らせらる大野教諭の指揮にて生徒の普通体操を當せられ　御寫眞及び金御下賜ある玄關南面の庭上に整

松江師範學校

宍道湖上嫁ケ島ノ景

松江市街ノ一

（長さ四尺許）の御手植あり十時三十分御出門小岸原、土手、末次、学町、茶町、末次本町、殿町の御順路を經て城山御旅館に還御あらせらる沿道は前日と全く〳〵拜觀人堵の如くなりき

東郷大將の手植と訓話

東郷大將は兒玉師範學校長より紀念樹手植の要請を快諾し午後四時過　殿下の女學校より還啓を城山御旅館に迎へ奉りて直ちに副官牛田海軍少佐を隨へ同校に赴き職員は門内に生徒は門外に出迎を爲し大將の直ちに手植を爲すべきかと云ふをしばしとて校長は樓上の一室に案内して休憩を請へり大將は一抔の茗を喫したる後徐ろに玄關前校庭に現はれ手植すべき位置は午前中　殿下の御手植相成りたる邊よりやゝ西方にして手植を請ふべきアスナロ樹（二尺許）は入東郡法吉村關屋の植木屋より寄贈せられたるものなり此時生徒一同は大將を中心にして圍障を作りぬ大將は鍬を取りて土を堀り手植を濟したる後大將は校長以下教員に對し懇篤なる一場の訓話を與へたり其要は今日長くも　殿下臺臨あらせられいと御滿足にて還啓あらせられたり小學教育は國本の基礎にして國家有用の人物を作るは小學教師の任最も重ければ最も努力を要む云々と述べられたるに一同は水を打つたる如く鎭まりて無限の感激に打たれたりし

中學校行啓

仝　日

皇太子殿下には午後一時五十分御出門二時十分松江中學校に行啓あらせらる午後一時三十分より西村校長は坂下に御待受を爲し職員一同は門内に整列し生徒一同坂下機馬場に整列（三年以上武裝）し　殿下の御着あるや喇叭にて君ヶ代を奏し萬歲の聲を發せり　殿下には坂下より御徒歩供奉員と從へさせられ西村校長の御先導にて講堂なる便殿に入らせられ西村校長、中村教頭、幕目教諭（歩兵少尉）に單

獨井謁を賜ひ知事の手を經て學事情況書を奉呈し御寫眞並に金の御下賜あり御休憩の後習村校長の先導にて教育品陳列所に成らせられ生徒の成績品數百点を台覽あらせられたり尚同室には全校出身の戰病死將校下士卒遺族少佐小倉覚二郎氏外二十餘名の寫眞と經歷とを陳列せり　殿下には一々御覽あり其經歷に就て御下問あり第三年生の一人一字づゝ淨書したる厘頭中佐正氣の歌は特に御感覚あり次で運動場に出御遊天体操場前の便殿に入らせられ供奉員東郷大將以下前列に扈從し兵式体操中隊教練撃剣柔道の台覽あり御退場の途次玄關前にて知事の御渡し申せる鍵にて親しく松の御手植あり再び便殿に入御御休憩の後二時五十分御機嫌麗しく還御あらせらる東郷大將は玄關に奉送して玄關右側に御植せる樫樹の手植を爲し鍬を取り七鍬ばかり土をかけたり斯くて臨御の際と全く教員は門内に生徒は門外に整列し生徒は喇叭にて萬歲書ヶ代を奏し奉送せり尚成績品は總て御持歸り相成りたり還御の後教員生徒一同運動場に整列し習村校長より行啓に就て謝示し　殿下の萬歲中學校萬歲を唱へて散會せり

中學校ノ光榮

皇太子殿下には行啓の際製作品陳列所に在りし厘頭中佐正氣の歌、撃剣の歌の淨書せるを特に御目に止められ知事に對して種々御下問あり陳列品取々御持歸りの儀仰ありたる中にこの二品は特にまねらすべき由御沙汰ありけるとぞ又運動場に成らせられし際にも色々御下問あり當日少尉が五年生の中隊運動を指揮し次に矢島曹長が四年生を指揮せる時知事を顧みさせられ「特務曹長なりや」と御尋ねあり知事は「いやとよ曹長に候」なと奉答し尚撃剣柔道教師等の資格を御下問あり御還啓の當坂下道を歩させ給ひつゝ松永知事より「此學校は體育よう運動を奬勵し撃劍柔道の競技にも出場して優勝旗を得て歸校せることも候ひき實に視白著のろろひに候へば」なと言上しければ　殿下は御興に入らせ給ひけん御機嫌麗し

く玉の御聲を聽きして打笑ませられたりとなん

松江高等女學校臨御

仝　日

殿下には松江中學校より直ちに母衣町の高等女學校に成らせらるる時に三時五分生徒は門外に整列し最敬禮をなし黒井校長以下職員一同は玄關前に奉迎申上たり　殿下には御小憩后松永知事は同校の狀況書を捧呈し同校生徒は　皇太子殿下行啓の唱歌（千家尊福男の撰し奉れる）春の御山を奏し本校の光榮を喜ひ　殿下の御健勝を祝し奉れり次に校長及妻任教諭に拜謁を賜はり且つ御寫眞金若干御下賜ありたり夫れより生徒の製作品陳列所に御台臨の上製作品御持歸の旨仰せ出さる同校訓導教員加田眞之助氏の庖丁料理方に付き御覽を給はり御機嫌麗しく還御あらせられたり

農林學校行啓

五　月　廿　四　日

皇太子殿下には御豫定の如く午前九時御旅館御出門縣立農林學校へ行啓あらせらる木戸侍從長御陪乘申上げ其他仝く前日の行列と同じく御順路を乃木濱に出でさせ給ふや湖上一波揚らず四山一片の雲なく麗るが如く嫁島のあたり小舟の去來する所此風光殊の外御意に召させ給ひし由にて御陪乘の木戸侍從長を顧みて何事か打語らせ給ふ所市郡民の弊しく光榮として感泣しつつある所なりき松江市の牽馬門を過きて入來郡に入らせ給ふや乃木村各團体員は右側松樹の下に小學校生徒は農林校就く前側道路に整列して奉迎申上げたり農林學校生徒は半原橋以東三十間の所より北面して整列し又た同校各教諭及び本田事務官、山本仁多、四宮大原、藤田飯石三郡長は門内左側に章旗校長は車寄に奉迎申上げたり九時半直轄校門に達す章旗校長直に樓上の應接に設けられし御便殿に御先導申上ぐ此便殿よりは校下の田圃を通りて松江市

の全景及び十六紅の絶勝を瞰下し得べく　殿下には珠の外御機嫌麗はしく少時御憩遊あらせ給ひたる後校長草場榮吉、教諭河村精八、德富永治郎、田野千剛、農原庄三郎五氏に拜謁を給ふ終て講堂内に設けられし教育品陳列場に成らせらるる此處には農産物種子、生徒の成績品を始めとし園藝協會員友（主に松江農友會員）の出陳せる盆栽等陳列しあり　殿下には教育品に就て種々御下問あり松永知事及び草場校長より交々說明申上げたるに　殿下には專攻科卒業生の論文二帖、農事調査報告二帖と生徒の成績品二十餘点を御持歸り遊す事となり尚は各盆栽中落葉松（殿町村田正吉氏出品）八房紅葉（白本今村龜太郎氏出品）白丁莘（寺町坂本街太郎氏出品）の三鉢に御目を留めさせられ之れ亦た御持歸り遊す事となる次で運動場に率かれし牛馬を御覽あらせらるる松永知事及び田部長右衛門兩氏の乘用馬（共に濱州産）を始め縣種畜場其他の仁多郡産馬數頭と八東エーアルヤ牛三頭、大原アヴオン牛五頭都合十九頭駢列して繫がれありしを　殿下には特に畜牛の骨格太きを愛させ給ひ御手づから其の額を撫で試みさせ給ひたり又た今回紀念圖として新設されし中庭に於て松の御手植あり松永知事鍬を把て盛土すれば　殿下には三揖ひ計り土を掛けさせ給ひぬ此松は該校第四五兩回卒業生の寄贈に係れるなりと君終て更に御便殿に入らせられ御少憩の後十一時半還御あらせらるる各教諭は門内北側に、知事以下各部長官、各郡長其他は南側に整列し草場校長は卓等にて奉迎し又た各生徒は牛原橋以東の道路に南面して奉送申上げたり同日同校にて　殿下に奉呈せしは草莓一籠、パーセリー、花野菜、獨活、二十日大根、玉葱、アスパラガス、大角豆、七種を盛れるもの一籠、緑茶一罐、七面鳥一羽にして君は何れも同校各實習部生徒が　殿下に奉呈すべく昨年頃より飼養し若くは栽培せるものゝ由當日校庭に日露戰役の戰利品なる列砲數門を飾り大國旗萬國旗を吊せり

商業發行啓

午後二時十分　殿下には直ぐ東郷以下供奉員を随へさせられ殿町本通りより須磨を順路縣立商業學校に成らせらる全校玄關には背景を以て設飾し玄關迄下には盆栽數鉢を陳列し校内御通路の外は白布を以て蔽ふ等準備を爲し例の如く教員は門内左側に生徒は門外に整列して奉迎し直降の近づくや脱帽にて君が代を奏し最敬禮を行ふ玄關御車寄にて御降車吉林校長の御先導にて玄關階上の便殿に入らせられ吉林校長、會田、南附教諭單獨拜謁を賜ひ吉林校長は知事の手を經て學事狀況書を奉呈したり御小憩の後其隣室なる教育品陳列所に成らせられ習字、作文、商業簿記、日本、英文二種實踐體操、韓文習字を御覽あり習字は殊に御目をとめられたり（今習字は三年級前田武吉、金澤芳雄、二年生今岡謹一の三生徒が書きたるもの）尚韓文習字に就ては知事に就て種々御下問あり extra 永知事は島根縣と韓國とは商業交通の關係密接なるを以て韓語を課し其成績も頗好なること及び教諭韓人玄憲氏の履歴等を奉答せしに殿下には御首肯あらせられ二時三十分御出門物産陳列所に成らせらる臨御の時の如く教員生徒一同奉迎し吉林校長は生徒一同を校庭に集め謁示を爲せり尚全校にも御寫眞と金の御下賜あり成績品は全部御持歸りの儀仰出されたり全校は校内の設備不完全なるを以て御手植の儀は御辭退無き爲め休憩等も自覺に供せず万一の自覺を仰ぐため筆記科の授業を爲すべく準備しありき韓文習字を自覺に供せしは左の如し

本科三年　林　正枝　原　亮
同二年　今岡謹一　福田保一
同一年　長谷川誠　朝山重晃　中野龍郎

縣物産陳列所へ臨御

十日

東宮殿下には本縣商業學校へ臨御の後豫定の御順路にて本縣物産陳列所へ着御直ちに臨本所長御先導申上げ陳列品を一々御覽の上松永知事に御下問在せらる而して當日の陳列品は左の如くなるが其内場場製作品外四十餘點は御買上の光榮を賜りたり

品名	點數	品名	點數
繊維物	三三六	文房具	六七〇
陶磁器	一、一〇七	動物	一七
硝子類	七〇六	水産物	一、〇三〇
鹽糸類	一一	林産物	二
彫刻物	一一	紙類	四四、九八七
木竹製品	三九	叠表類	四〇
農産物	二三九	織物類	一
漆器	一三七	雜工器	一、六四〇
金屬器	八三		

附屬校行啓

十日

それより直に師範學校附屬小學校に成らせらる兒玉師範學校長は庭内其先に進みて御迎ひ申上げ生徒一同は校庭内御通路の兩側に、幼稚園生徒は東側に各教員は其の後方に整列し又た川上主事及び主席訓導

は御座所の入口に挙揚せり御座所は正門入口東手の作法室に設けられ兒玉校長の先導にて殿下御入御の後ち幼稚園生徒の鳩ポッポ、金太郎と稱する遊戯を御覽に供せしに極めて無邪氣なる態を露せられて　若宮殿下のことを思ひ出し給ひけん一微笑をさへ洩らさせ給へて本戸侍従長に何か語らせ給ふを見受け挙りぬ此遊戯終るや　殿下には直に御座を起たせ給へ十分の後ち還御あらせられたり附屬校にては尚ほ之れに引續き該校生徒の遊戯を御覽に供する筈にて豫じめ籠に若干の毬を投込めば其重量に依り龍の上部にある球二ッに割れて中より萬歳と書せる小旗の付せられし數十數個の風船玉は室中に飛揚するの仕掛にて兒童二組に分れ先に球を割りしものを勝者となし御還御の後ち之れを試みたるに聽て遊戯の勝敗決し萬歳の聲轟くと共に十數個の風船玉は室中に飛揚しつゝ吹く東風に吹かれて何れも御旅館の真上を西に流れ往きける旨しも　殿下には既に御歸館あらせられたるを御座所の御様に立たせ給ひ双眼鏡を把て覗し〳〵御覽あらせられしに該校教員等一同此上なき光榮なりとして感泣しつゝありと云ふ此日校庭に於て東郷大將の松の手植ありたり尚ほ御座所内に備付けたる卓子は別に其筋より設備ありしも該校に於て新調せるものあり記念の爲め特に之れを備へたり

萬歳遊

殿下が附屬校より御還御の後ち校庭に於て該校生徒の遊戯を試みたるを滋山の御座所より御台覽の栄を得しとて同校教員等の欣躍措く能はざる處の萬歳遊びは　殿下の御旅情を慰め奉らんとする微意の外尚ほ皇室の萬歳を祝きさつらん事に形取れるものゝ由にて該校にては左の如き說明を付したり何れも我　皇室の當弊堅都に動なき事出度を表彰したる好趣向なり

毬重せる個に若干の毬を投入すれば其の重量に依り個の上方にある球二ッに割れ中より風船球十數個室中に飛揚する仕掛の遊戯なり風船球には各萬歳と書せる小旗を付す兒童二組に分れて各他方なる個

中に毬を投ず先に球を割りし組を以て勝者となし割れて赤色の風船玉昇るは　日の御子のあれませ給ふに準へ挙れるなり風船玉の數許多なるは竹の御誕生の御祭祭を祈りたるにて特に十四個となしたるは九五の御位の意を寓せるなる競業を用ゐしは　皇室の當磐堅磐なるを祝し奉るにて杜の地狹く立ち天高く玉を擊ぐるは民津磐根宮柱太敷立高天原爾千木高知との御言業に基けるものなり兒童が籠に毬を投入するは國民が　皇室の御爲に誠心を注ぎ奉るなり兩組相競ふは國民が　皇室の御爲に我劣らじとおのもおのも其道々相競ふなう奏するにこれ　皇室の萬々歳を祈り奉らむが爲に考案せる遊戯なり

御使差遣

布志名製陶所　五月廿三日

黒水侍從武官は御使として岩崎警部の先導にて廿三日午前九時出發井川縣屬野津縣掾手の隨伴にて同時三十分八束郡玉湯村大字布志名製陶所着直ちに健右衛門氏方にて暫時休憩の上製陶所工場及び全氏別莊に陳列しある製品を觀覽に供し郡長代理栗原郡書記、組合長着本淺太郎の二氏一々説明を申上げたり尚ほ組合長は布志名陶窯の沿革書を提供せしに御使には原料および製造の方法等につき下問あり組合長は一々説明を申上げ終りて十一時過出發せられたるが長谷川村長以下村公務員製陶所組合員等は布志名入口にて遥拜をなしたり同入口には緑門の設けありたり

松江瓦業株式會社　仝　日

午前九時　殿下の滅山御旅館を御出門あらせられたる後ち尾藤侍從武官は御使として山田仕人を隨へ松浦警部の先導にて九時三十分外中原松江瓦業株式會社へ着せらる先つ松本社長は各重役および各係員

御差遣

松江織業株式會社

松平伯より　東宮殿下へ献上品

木象嵌技術の大家青山泰石氏（當市出身）作

●材料

地板　白杉柾　長五尺五寸　巾二尺

●黄菊の花　濃色ニガキ　淡色椴

●同葉及幹　同天梅各色

●白菊の花　青肌及赤肌

●同葉及幹　黒　油各種

●花　其　紅　柚

●縁　一入雲堆　菊唐草模様

一名宛同社門前に整列して御出迎を爲し墨かて橋本社長は階上の休憩室へ御案内申上げ會社の沿革書を捧呈し生糸一括を御目に懸けたるに尾藤御使には生糸は我國の重要品なれば尚は一層精良して歸國を促さゝる樣勉むべしとの御趣旨を陳へられたりされより社長は工場内へ案内し乾繭室、貯繭室、繰取揚所等を親しく御覽あり社長は一々說明申上けたる後再び休憩室に入られ種々會社の狀況を聽取し退出せられたるが當日の同社へ御案内申上けたるは橋詰、目佐、倉岡の三點屬なりし

山陰慈育家庭學院

仝　日

尾藤御使の一行は前項蠶業會社より前回樣の行列に依り午前九時五分内中原なる山陰慈育家庭學院に赴かせらる門前には慈本院主及び各教員一同院兒を隨へて出迎ひ直に慈育館樓上の圖接室に招ずたるに尾藤御使は　殿下御使として來れる旨を告げ尚は　殿下は常に慈善事業に深く御心を寄せられ當市に此事業ある事を御滿足に思召さるゝが故責任者は一層奮勉して此事業の目的を達し十分の美果を收めん事に勉めさる可らずとの御諚を傳へられしに院主以下一同感激し院内諸規則其他院内の現在を記述せるもの及び各建築物、教育部、實業部の寫眞等を呈出せしに御使よりは菓子七十二包　殿下より下賜の目錄書を傳へられたり又た院兒の成績品、院兒教育の成績其他を閲覽に供せしに洗濯館（感化部）教育生徒の製作品なる繩系及び封筒の二種は特に献納の手續をなすへしと傳へられ尚は實業部院兒の製作に係る花圃は特に製作の技を賞稱せられしを以て慈本院主は午後御禮の爲め御旅館個餐の節石の二種を携へ尾藤武官に進呈したり右終て御使は該院の設立及び今日迄の經過、現在の設備、其他に就き詳細の質問あり院主其他の役員より一々說明し夫れより御使は慈育館（教育部）洗濯館、二業館（家庭體式教習所）養生館（食堂炊事室）延齡館（病室）等の各室を視察し院主より一々說明あうたり尚は右生徒の教育成績品中清書、作文等を持歸り十時二十分同院を辭せしに院主以下何れも門外に見送れり同院にては爲に實業部

院見の製作に係る蘭の花及牡丹、菖蒲、菊、薔薇、樓等を裏ねたる二個の花籠を獻納すべく市役所を經て目下物産陳列場に陳列しつゝある因に同院主及び現在の教員は此事業をして更に發展せしめ十分の効果を奏せん事を期せんには現在の基金六百圓にては十分の活動をなす能はずとなし去二月開會せられたる評議員會に於て出雲國内各宗寺院六百寺より三万圓（一寺五十圓平均の見込）を募集し之れに依りて大に經營せん筈にて目下寄附募集中の所既に一万圓の集金を見るに至り尚は其の餘も略は見込立ちたりと云るが殊に昨日尾藤御使の傳達に就き該院關係者一同非常に感激し盟て御旨に背かさらん事を期すと勇み居れり尚ほ現在の院兒は洗濯部（裁縫部）教育生徒十一名、其他各部を通ずて五十五名、院外見習生六名にして建築物は近年經費補助を得て新築せるものにて敷地九百四十五坪建物坪數百六十九坪餘あり

松江盲兒院　　仝　日

御使は夫より午時三十分北田なる松江盲兒院へ來院せらる正門及び玄關には紅白五段の幔幕を引き大目章を交叉し同院の少年音樂隊は終始奏樂して奉迎の意を表せり先づ院長及び院兒は門前に院主編田平治氏夫妻は玄關に各出迎をなし院主の先導にて一行曾堂に入り院長一同を引見の上御使差遣の有難き御旨を傳達し且院内の狀態に就いて詳細取調ぶる所あり後御菓子の目錄書を下賜されたり夫より同所に陳列せる院内教育部生徒の手になれる習字、作文、院外通勤部生徒の手になれる印刷物、製本金屬細工物、團扇、帽、西洋洗濯、食パン盲兒の手になれる點字、裁縫せる衣服、ダロオン等三十点の成績品を一々親覽に親覽せられ後增建物落動場等を巡視ありしが今回特に御使奉迎の爲めに作られし左記の歌は庭内にて一斉に可憐なる盲女の口より迸り轉た人をして同情の念に堪へざらしめき在院約三十分にして御使は歸還せられ院見想代として孤兒双兒川角イタ子、同カメ子は花束を捧呈せり

一、出雲富士が望、影淸す、美保の浦曲の、波分けて、日嗣の皇子は、いでましね、見よ御光りに、

山陰の、民の草葉に、置く露も、恵の玉と、光めける

二、親失しなひし、雛の群、御光り仰ぐも、尊ときに、いや畏こしや、御使を、賑の我家に、賜ひけり、感涙胸に塞がりて、述へ奉らん、すべ〻なき、

三、思へば果敢なき、我等さへ、盛はせ給ふ、御心は、天つ御神の、御冒ケ、只畏こみて、いや賑み、夫御恵の、一つにも、報ひ奉らで、止むべしや

私立松江盲人會

盲唖學校

仝　日

十一時過ぐる頃一行は盲唖學校に赴けり門外には生徒一同各教員に引率せられて出迎ひ門内には松江盲人會幹事一同整列し更に玄關内には松永會長、岡崎副會長出迎ひ松永會長の先導にて休憩室に招ぢ兩會長より挨拶したるに尾藤武官先づ來官を告げ且つ各種慈善事業中至難とする盲唖教育を経營する事殿下の最も御滿悦あらせらるゝ所當事者は一層奮闘して十分の効果を上ぐべしとの御諚を傳へ御下賜の御菓子(二十五包)目録を傳へ夫れより各學科生教授の方針、教育の概況其他該校設立以來の経過及び創立者福田ヨシ子の経歴及び其他の創立者等に就て一々質す所あり當日本間二部長及び市内學校長等の各評議員何れも激忙の爲め出席せざりし爲め内田縣視學特に出席して御使の質問に答へ終て御使より特に盲唖生の實地教授を實視し度しとの依頼に直に樓上の唖生教授室に御使其他を招ぢ各科生を整列せしめ先づ唖生に對する發音法視話法等の教授を試みつぎに盲生に對する點字書取及び算方教授を試みたり尾藤武官は特に生徒の卓前に進み仔細に其の解答を熟視せられたり五分の後兩生の教授を終り武官は更に應接室に入り兩會長に對し成績の良好なる事を認むと述べ生徒の成績品二三點を携へ十一時半歸館せり引續き松永、岡崎兩會長御供のめ城山の御旅館に伺候したるに普通の伺候者は玄關に於て記帳せらるゝを例とすべきを特に中山東宮太夫の室に招せられ更に有難き御諚を賜りたるを以て正副會長は歸校して幹

事職員一同に其旨を傳ふる處ありたり

種畜場　二十四日

黒木東宮武官は仕人一名を随へ御使として廿四日午前九時四十分元農事試驗場跡なる縣有種畜場へ差遣せらる高橋警部先驅し倉岡縣屬、鈴江技手之れに從ひ來場場長代理田野技師一行を出迎ひて應接所に招ず種畜場一覽表を提出せしに御使は之れに依りて本場の沿革、事業の目的、現況等詳細に質す所あり田野場長代理より一々說明を與へたる上御使は場内各處に設けられし牛舍馬舍、豚舍、鷄舍等を順次に視察し一覽表に記せられしものと對照して更に質問を試み視察詳細に渉りて再び應接所に歸り視察の模樣を述べ　殿下に言上すべき旨を述べ十時二十分着一覽表御携帶歸途に就かれたり

同場に於ける現在の種畜は馬五頭（洋種四頭、ハクロー一頭）牛九頭（エーアシヤ五、デヴオン三、和牛一）豚三頭（バークシヤのみ）仔豚三頭（同上）鷄四羽にして嚴に分離せる種馬讓能質の仔馬は隨時に發育しつゝあり

拜謁者

廿二日　殿下城山御旅館御着後拜謁を賜はりし者左の如し

東郷大將、千家男爵、松平直平子爵、右實業局長、松永知事、藤本第一部長、熊谷陸軍少將、彦坂檢事正、玉造地方裁判所長、少佐高山康之助、同工藤才次郎、判事岸成茂三郎、區裁判所長山本次郎、同津村一郎、持部典獄、村山農園長、中村濱田農學分校長、（以上陪餐并扈從）

堀田、本間各部長、平井、長谷、原、長瀬各陸軍大尉、富田、吉岡、佐野各一等軍醫、

鷲津一等主計、三上、中島、鳥野、三原、清水、高田、野津、橋下、永江各陸軍中尉、
荒木三等軍醫、佐藤、片寄各三等主計、清水、阿野、源尼、武田、高橋、西田、小笠、
各陸軍少尉、岡田、杉原、池田、吉野、大田、池田、作野、小池、佐野各三等軍醫、
岩佐、池田、各三等獸醫、森田、川澤各檢事、宮內、和田、宮本、各判事、宮本、
柚木、高橋德本、各司法官試補、鈴田、平澤各縣五等警部、勝部松江縣書記兼警部、
有澤藍野神社宮司、横山萬祥神社宮司、西村市立鹽道館長、碧海郡長鵜飼農學校長、
正六位勳五等中村涓年、正六位勳六等高橋千代司、全從山百太郎、從六位渡邊廣領、
全杉江直三郎、勳六等井川精一、全井川洌、全青山卯三郎、全小谷捨松、
休職女子師範學校教諭久保田愛之亟、縣廳貴族院議員、向坂、岡本、恒松、石田、
河上各代議士　（以上通知并當）

晉三日縣廳にては左の如し

知事從四位勳三等　　松永武吉
事務官正六位　　藤本晃安
事務官從七位　　本間周忠
事務官從七位　　服田義次郎
愛岐島司從六位　　真女輔
技師從六位　　一野邊省三
仁多郡長正七位勳六等　　山本良次郎
飯川郡長正七位　　村上壽夫
飯石郡長從七位　　藤田幸平
能義郡長從七位勳八等　　須藤虎吉
技師從七位　　千石鳥太郎
邑智郡長從七位勳八等　　横山晉雄
技師正八位　　渡部謙吉
安濃郡長正八位勳八等　　助村一
警視　　保田乙吉
技師　　井口伸夫

美濃郡長正七位　千代延聰建
技師正七位　小笠原百三郎
鹿足郡長正七位　甘粕逸藏
技師正七位　藤井新八郎
邇摩郡長正七位　岸野淑人
八束郡長正七位　古川德九郎
大原郡長從七位　四宮杜

農業技師從七位　結城証八
林業技師步兵中尉　三谷平之助
從七位勳六等
松江市長　福岡豊德
縣會議長　竹原謙市
縣會副議長　山根馬之丈
西郡町外十一箇組合立　杉江吉治
隱岐商船學校長勳六等

御陪食者

廿三日午後七時城山御旅館に於て陪食仰付られし氏名左の如し

松永知事、松平子爵、千家大社宮司、中山東宮太夫、木戸侍從長、
杜主事、郡本第二部長、細田第四部長、本間第二部長

廿四日午後六時三十分城山御旅館に於て立食に召されたるもの左の如し

古川八束郡長、東隱岐島司、中村憲兵大尉、中島憲兵少佐、須藤能義郡長、
隈田等視、福岡市長、小笠原技師、竹原謙會議長、山根同議長

御上覽

武術御覽

廿五日午前九時三十分より城山御座所庭園に於て松平直哉家の世しに伝ふ貳派各流の武術仕合を御覽に

供せり出演者は二三少女を除く外何れも舊藩士族の中相當知られし面々のみにて尚も華顏白髮の極めて閑雅なる所老武士の面目躍如たり審判官大橋虎石薙門、服部一郎、永井卓一、足羽淳次郎各氏出張し是羽氏より呼出を掛けし順に從て左の取組仕合を試みたり此日　殿下には御座所（階上）の御椅子に御椅子をおらせ之に覽らせ給ひていと御熱心に御覽あらせられたるが仕合每に勸盃に侍せる鮫谷少將を召みさせ給ひて一々御下問あり少將は丘細御說明申上げたるに殿下には殊の外御機嫌麗しく殊に不二子、曉子、安子等の薙刀の型を試みたる折には始終御微笑を含せられて讃はし給ひ且十時十分全く終り出演者に賜し夫々金員御下賜あり尚は橋半子爵より出演者に對し南田の演武場に於て酒肴を供せられたり演武場序左の如し

第一回

管槍仕合　　居相相仕太刀

○×（道藤　清流）七十一歳
×○（栗倉仁平次）七十一歳

○×（田村　豐三）六十九歳
×○（內村龍太夫）六十五歳

鍵槍相鍵仕合

○○（勝　芳一郎）六十六歳
××（石田　貞廣）六十八歳

○×（重村　俊介）六十六歳
○×（山田　筠）六十八歳

擊劍仕合

○○（奥田　元夫）五十歳
×○（飯島善之助）六十一歳

柔道組二行

○（松下善之丞）六十六歳
○（寺田政之助）五十九歳

擊法短劍形

（豐豆把孝則）六十七歳
（春宋　梁淵）六十六歳

第二回

管槍長刀仕合

○○（永井　卓一）六十四歳
××（中林　啓藏）

○×（中林啓藏）六十三歳
×○（福山勉次）六十二歳

居相仕相（仕太刀打太刀打代り合）

×○（八木　榮光）六十五歳
○×（渡部　陽）六十五歳

柔道場

○×（藤井栄太郎（六十二歳）
××○（高尾周之助（五十三歳）

鍵捕格道仕合

○○（桧下善之丞
××（足羽中次郎（五十一歳）
××（勝部健之助（四十歳）

鍵捕薙刀形

大刀組（勝田不二子（十五歳）
薙刀奏（瀧生敬子（十八歳）
入回表（大橋安子（廿一歳）
各相手（勝　秀一郎）

兵法仕組

○×（甘上　春輔（六十六歳）
×○（岡　義美（六十一歳）

拳法組手形

（森本　栄蔵
（新宮清一郎（五十七歳）

掛演形

（新宮清一郎
（岡野　泉蔵（五十六歳）

杖演形

（原　波雄（五十六歳）
（中田野之助（五十七歳）

拳剣仕合

○○（平野　儀（五十七歳）
×○（秋山　男雄（五十三歳）

爰に右組演武演技台中第一回の一番仕合に於ける管槍仕合及び居相組仕太刀は共に伝統の形流にして最も興味せられし所なる由其他各流に於ける説明の便宜を準られば左の如し

槍術

一　一刀流管槍　　長刀陽局

此流の人伊東祀伊守結忠初め志摩之守良政之の頃に管を合せ並現の日在を主とす中興総本理左衛門入道一指なる者管の改良を計り且て由来一指流と称す

一　經原流　　薙刀陽局

下総の人經原五郎左衛門俊重治の頃に之を創し敵の実を語き業の早きを主とす

剣術

一　不傳流居相

近江の人浅山内蔵介馬術を鈴信し後世に傳ふ此流儀は業の早きと太刀筋の其通を主とし其運用能の著にあらざれば奥義を不傳

一 新當流兵法

上總の人飯篠山城守家直國を鈴練し後世に傳ふ此流は精神の修際を主とし時に應して動に活動を爲す

一 眞影流撃剣

高山峯三郎馬術を鈴練し明治廿四年出雲に来り此流を弘む専ら當耳を蒐以勝負を爭ふ

槍術

一 直信流柔術業術

出雲の人寺田助右衛門諭英國遊歴し体術拳の術を學び各流の長所を取り一流を起し直信流と號け其心の鈴練と業の旅従を主とせり

一 一覺流拳法

肥後の人佐藤一覺禹國を遊歴し體術を學び後世に傳ふ此流は捕手の業を主とす

一 龍島流棒術

因幡の人山崎弁記なる者棒を以て敵に當るの業を熟練し世に傳ふ

一 寄藤流杖術

因幡の人寄藤半彌なる者杖を以て敵を制するの術を發明し之を世に傳ふ

熊谷少將の名譽

眞山御旅館には舊藩武術を遊覧に供したるに　殿下には非常の御滿足ありし當日の御模様を記せば

殿下には御座所の傍に立出でさせ給ひ始めに松平子爵を召されて御下問あり中山太夫、植木平、木戸侍従長、村木武官長等陪席仰つけられ東郷大将も加て坐り其　殿下には熊谷少将の負傷のため足なへ居るを憐せられ「何處にて負傷しつるや」と仔細に御下問あり少将より赤天嶺の時弾丸の彼岸にて負傷せることを答奉れば「痛みはせずや持ずを與へよ」と御詞あり少将はるの昔きに感泣して涙のはふり落つるを禁じあへざる樣なり　殿下には武術の順序等を御覧ありて白髪の老人等がかけ声勇ましく呼ばはつて身かまへたる樣の勇氣溢々として見るに樣を御覧せられて御気色いと麗はしく見えさせ給ひ次に女子の武術を御覧せられて御氣遣美しく少将を顧みさせられ「何時ごろより始めたるや、熊谷娘が實歸しつるにや」と仰せらる少将は「いやと上に候はずこは主として看護手なる女兒有志の女子と雖も武術の心得を要すべきを旅中殿命以前より始めたるものに有之候」と女學生にして今は百人位かりも候」と言上しけるに「殊勝を聞れよ」との御言葉を掛けさせられ又取手の型を御覧ありて打風せて縄を打つ樣の振々しくしかも演技者が高論等として殊更御感あらせられたる御模樣にて中山太夫等を顧みさせられて「ちらしも技よ」との仰あり又十文字（管位一樣にして松江藩獨特のもの）を御覧あり「中山所かる技は東京にもあるや」と御下問あり太夫は畏みて「時々見當るも候はず」と申上たるに「音音かせ給ひ裝竹刀につきても御下問あり熊谷少将其構造等を言上し奉れば「ろは落ることならん卿も試みしことありや」との御諚あり「さん候若年の折は試みたることも候へき」と申上げ岡靜秀一郎氏が三尺武德會に出場して優等賞を得たることを申上げたるに「餘程出來ると見ゆ」と仰せありて「靜」の名を拝戴し給ひしを以て熊谷少将は斯くも圖らざる聞はしき御機嫌を拝し奉り殊に御椅子さへ賜りて一生の面目を施し感泣措く所を知らず御説明の不十分なりしを恐懼しつゝあり訂拾られし所置の氣度端なく嘉賞の栄を得て再び桔梗花咲の春にあひしも目出度く尚當松平家が武術を奨勵せられしことの証據たてら

るも關らざる光榮にこう

湖上御遊覽

廿五日午後は突堤湖上に於て勝平家の催にて御舟遊ばらせらる御乘船場なる氷屋の當所には假て緑門を設け諸には長橋を假設し附近を清掃せられありしを午後二時前桂主事及松永知事は御列に先ゝて實地を檢閲し復命の結果午後二時御出門相成候旨先驅し騎馬憲兵之に從ひ次に召馬車には本戸侍從長御陪乘申上げ村木武官長以下御次の馬車に陪乘遊ばす、列外供奉員等前日の行啓と異らず當日は御假行なりし爲め儀仗隊は全く加らず右の如くして御列は猛隊前より西中原を過ぎ安藏橋を渡りて小岸原に折れ中原字土手に出て御乘船場に向はせ給ふ二時十五分着御棧橋より僅て待ち設けたる御召船に移らせ給ふ斯て殿下には武閒の中程の御座に就せ給ひ特に御陪乘申上げたる東郷大將は舳の左座に本戸侍從長は右座に又た村木武官長、侍醫、武官各一名は艫の方より舷に向て座に就け御座船以下には

第一船　桂主事、松永知事、勝平手摺、吉田內務部主事、武官三名、運轉師、內舍人

第二船　牛田副官、右筆警保局長、村山少將、同副官、東宮職五名

第三船　縣本、本田縣事務官、長谷川、松浦、吉岡其他各縣屬十名、足羽家從

第四船　市參與員、鯖谷少將、富田中將、高橋局長、市會正副議長、同議員、市書記、

第五船　大橋縣花若縣門、鯖谷警察部、三島佐次右衛門、吉山泰右、山口家扶其他各平家の關係者數名

御差船（傳令船）　設治士族內田爵太郎外一名

等乘組御座船の船手は新潟士族一忠兵外七名にして忠兵は三枚羽織にて棹を操り櫂を取りて沖に漕ぎ出せば其他の各船成るべく之れに從ふ中須には艫舳前の舟網船十艘（漁夫二十名）又た井屋村より個來れる漁船網十

艘（漁夫三十名）午前より既に二手に分れて場所を搆へあるゐざ御座船の出御と見るや投網は風上より揚打を始め丈高は下手より試勢よく引き始めたり此日東風稍々強くザッ〳〵と小波の立てるを御座船は徐々進航の中央を進み辷くして各船共に順次前に移り處々にて漁獲たる鯉鯛鰡等の漁られしと見る間に御座船は一時間の後座が島近くに達しけり　殿下には夫れと聞はすや後處へ等せよとの御言葉あり乃ち嫁島の北渚に御船を着け奉れば　殿下先づ御上陸遊ばされ暫し島内を御逍遥あらせられたる後ち艮て御指揮の宮内員を採らせ給ひて先づ御座船と第一供奉船とを写させ給ひ知事を顧みて鰡も比中に映て居ると仰せ給ひ又申すも畏き事ながら　殿下には常に寫眞術を好せ給ひ今回の御旅行にも絶えず御撮影あらせらるゝ由承りしが此日は潮上極めて晴れやかなる上双方にて潮を打ち卸す態のいとゞ御意に召したりけん御身の中よりも御引く態及び嫁山御座所移御撮影遊ばされたり尚は着葉茂き四方の山々を指させ給ひ暫永知事を顧みて種々御下問あり知事は一々御答申上げたるに更に宍道湖の周圍に折り並れる山々の名を問れ諸共に取調べ尚は教育、慈善、水産教育の各事業を仔細に取調べて差出せよとの御諚あり知事は何時もながら　殿下の御仁恕に感らせ給ひ各般の事業奨励の御思召厚きに感銘しまつりたり御舟遊一時半許にして四時前御身舟遊はされ堂形の長堤に着せ給ふ御列全く只前と同くして四時十五分御還御あらせらる此日東郷大将は供奉第一船に乗せらるべく謀定しありしを特に　殿下より御座船に召させ給ひ「今日潮上の水面提督は御が為めぞよ」と仰ありけるに大将は謹厳の性質は必辞て固へども潮上の提督は勤り申すとき由申上げしに　殿下にはいとゞ興に入らせ給ひ御機嫌麗しかりしと承はりぬ

御座船の構造

御座船は屋形造りにして長さ五間幅一間二尺巾を仕組み船内には階乗室の椅子四脚を設け主座は東京にて造れり又御座船を作成したる藤岡愛助は先代より酒樽の御息船等を建造せし経験を有するより作製せ

しめられしと

縣立學校聯合運動會

師範、中學、商業、農林の四縣立學校は廿五日白河巽湖橋東湖岸の廣場に於て聯合大運動會を催したり當日は稀有の佳日和に恵まれ　殿下御上御遊船のことあれば万一御台臨仰出させ給ふこともあるべきかと場の東邊中央より湖上に面して御座を設け其左右を來賓席となし玉座の正面より湖岸へ向け御通路を作り湖岸には御上陸棧橋を設け場内は國旗球燈にて装飾し場の周囲を學校競技席に充て各學校生徒は場の周圍三面に列を為し東北の一部には芸妓場あり競技の為に芸妓を召し救護所には入戸野醫師出場して愈々手當の準備を為せり扨くて前夜來の強風と共に櫂雨を驚ろし來りしも夙ちに晴れて快晴となりしかば打揆ト たりし團も埒つて新緑を濃し早朝より各學校生徒は勇ましく入場し其數無慮千三百名と註せられぬ來賓は

北島男爵、恒藤、御坂兩代議士、四宮大島郡長、縣會議員、市内紳士、知事夫人を始め高等官夫人、

競闘記事

等にして午前十時西村縣立中學校長は運動開始の挨拶を為し競技を開始す各學校の選手は洋々の力を揮ひ勇氣を拳ひ歴授生は旗を振り各自の校色（師範帯、中學白、商業黄、農林緑）を呼號して激勵し觀客は場席たる處を忘して選手の士氣を鼓せり扨くて正午休憩現銀、午後二時より再開し二番の勇を競し　殿下御座船が湖上に現はるゝや教員生徒一同にお成は今か〳〵と日々に時びつゝいよ〳〵悦び勇み居たるも　殿下には遠臨あらせられざりき依て同時より登場を公開して一般の縦覧に供し午後五時撰定の決技を全く終了し　皇太子殿下の万歳各學校の万歳を称へて散會せり紅技番組は左の如く括弧内は一等賞を得たるものにかゝる其中學校は勝利者多きは生徒の數多きと運動奨勵の結果なるべし

午前の部　高飛(高)、四百ヤード競走(中)　二人三脚(中)、障害物(中)、二人一脚(中)六百ヤード(師)、
傳馬(中)、武裝(中)、マストレース(中)、
午後の部　雷中(中)、障碍物(師)、四百ヤード(中)、マストレース(中)、運搬(高)、六百ヤード(中)、
竹馬(高)、障害物(中)、千ヤード(師)、綱引(師)、

高等小學生徒體操御上覽

二十五日午前八時より二の丸入口廣場に於て市高等小學校男兒は橋本岡部指揮の下に隊伍體操を演ず
殿下の御臨覽に供し奉れり赤白の運動帽を被ける兒童が規正整齊一糸亂れざる動作は快活なる呼號と相和して
壯觀壁へん方なく狹いて全生徒赤白二隊となり直に團體の團體遊戲を同時に行ひたるが　殿下には終始
階上より御機嫌麗はしく御覽遊はされ尚ほ〳〵て花田校長の奉答にて殿下の万歳を歡呼して參詣なし〳〵歸校
せり

御覽の大名物

縣山御座所に於　殿下の臨覽に供したる松平伯爵家藏の書畫は左の八點なり

一、圓悟克勤禪師墨跡
蜀成都府昭覺寺に住す五祖演禪師の法嗣なり宋哲宗徽宗欽宗高宗の四朝に歷す
日本龜河天皇鳥羽天皇御代紹興五年崇德天皇保延元年なり今を距る七百七十余年

一、虛堂智愚禪師墨跡
運菴普巖禪師の法嗣にして杭州徑山に住す南宋理宗帝の紹定年代の人度宗帝咸淳九年に寂す
日本後堀河天皇より龜山天皇文永六年に至る北條時代今を距る六百四十年

一、定家卿小倉色紙

四條天皇仁治二年亭主藏實時代今を距る六百六十餘年

一、瓊浦雜興　　牧谿筆

牧谿は蜀の僧法常雪窗歸の號なり南宋理宗年代の人なり

日本四條天皇より龜山天皇御代北條時代今を距る六百四五十年

一、山市晴嵐　　玉澗筆

玉澗は許道寧の號なり南宋寧宗年代の人にして工天竺寺の書記なり

一、市裝之圖　　円無關筆

傳記審ならず或は云ふ無準禪師の弟子なりと無準師範は南宋理宗頃の人なり

日本龜山天皇御代頃なり北條時宗時代今を距る六百四十年

一、六祖之圖　　梁楷筆

梁楷錦風子と號し宮師者を經たり南宋理宗時代の人にして寶祐年中畫院待詔となる

日本四條天皇より龜山天皇御代頃北條時代今を距る六百四五十年

以上七点大名物

一、李白之圖　　全　筆

師範學校の陳列品

師範學校行啓の際同校の一室に陳列して高覽に供したる主なるもの左の如し

一、參考品　　天國劍、兵庫守太刀、高麗劍、甘四孝書（以上須佐神社藏）

濃茶々碗、松、竹、堀尾山城守忠晴書保、後陽成帝御繪旨（以上國政寺藏）

源頼朝寄附の証文、武將手帥（能野神社藏）

一、各學年共同製作品

一年　郡土地圖

二年　本縣主要物産概覽（實物共）

三年　松江附近模型圖

四年　北出雲陸地測量圖

講習科　忠孝と題する額、島根縣管內乘通圖、同人口面積比較圖

一、個人製作にては圖畫、作文、習字、手工品博物標本等にして右生徒製作品は其盡支なき限り全部御持歸の旨御沙汰ありしと

中學校演武場氏名

松江中學校へ　殿下着皆の際演武を御覽に供したる同校生徒の氏名左の如し

撃劍

渡部寛校、横山正夫、校長武藏坊、三浦源正人、後山享二、松崎金一郎、上田静、三代丹一郎、藤谷武、瀧澤榮、

柔道

澤田治夫、田中福之丞、岩田三登地、久保田甲一、杉坂正義、金坂昇、毛利貞、海津忠貞、大田國榮、青沢英雄、

鯛の水切を台覽に供せる人

舊藩の御料理方

二十三日　殿下が松江高等女學校にお成りありし時御前にて魚丁直馬第を以て大鯛の水切を台覽の光榮を

場はうし谷市雇士族加田寛之助氏は本年七十一歳の高齢者なるが全氏は舊藩御臺所御料理方を勤め調理に堪能の名を得五六年前より高等女學校割烹科教授囑託を命ぜられしにより老体ながら精勤を爲し全校第四學年生徒習科生に料理法の教授を爲し居りしが曾々今回　殿下全校へ御臨場を仰したるより御前に於て其技倆を台覽に供することゝなりしなり大鯛(目のたち尺三寸)の鯖を落し腹を割き手早に洗ひしものを俎に載せ(俎長さ三尺巾幅一尺二寸餘)御前にて氏は家傳の古代庖丁と直部磐を使用し鰭を切り落し開身を卸す水切の所作を御覽に供へたるに　殿下には始終御目を止め御覽あらせられしと元來水切の所作には其行事の所作あり當日は時間の都合上にて主として行の式によりしがこの御割烹なるものは舊藩時代にては特別の御好み又は大魚の献上物ありしとき神前に供進の場合に於て仰付らるゝものにして神前供進の際の如きは藩主より時服を給ひ居寺目長持にて水施、掛ろひなど嚴重の式あるものにして直部磐の如きは松江藩獨得のものなりとされば全氏は維新以來漸く斯道に遠ざかる人々も調落物故し絶えて久しく打すたれたる今日絶無くも　殿下の行啓を仰なうし親しく台覽に供し奉るを得しは老の身に餘る面目なりと稍く打喜び又當筵の爲めに説されたりと

殿下ノ漉紙臺覽

東宮殿下には本縣物産陳列所へ臨御の後ら同所階前に於て松平伯の御慫に係る八束郡乃木村大字野白の特産物なる和紙漉紙の現場を御覽あらせられたるが該漉紙は黒漉し、紅漉し紙、内曇紙にして技術師は黒漉し、紅漉しは野津清秀、内曇紙、色主雲紙は目次信一郎、下漉簡易漉は市其他助手二名にして説明は左の如し

紅漉し紙、黒漉し紙説明　　乃木村　野津清秀

享保元年(今を距る百九十余年前)藩主の奨勵により製紙業を開く△寛暦二年(今を距る百五十余年前)藩主

は製紙業野津吉蔵に命ト越前に赴て實地研究をなさしむ吉蔵七年間之れに從事し左の製法を修得す

紅、藍、墨流の紙、楮書、鳥の子、內曇り

吉蔵業代遠命を受け其用紙を調進紅紙、藍流、內曇ともつて白家の稱傳となせり〈漉紙の法を羽二重、甲斐絹、紬種等に應用し得ることを發明せり〈用途は短冊、式紙、襖張紙

北島男爵の供覽品

北島男爵には自家秘藏の寶物を携帶出發前四日准主事を經て　殿下の御上覽に供したるが其品名左の如し

一、菅公眞筆　　軸物

離宮三四月　落涙百千行　萬事皆如夢　時々仰蒼蒼

一、定家卿　　軸物

伊勢二見の浦　百首歌歌

一、劍　　一口

銘神正　　室町

右の內菅公眞筆と定家卿軸物の二幅は去三十年十一月男爵上京の際　陛下の天覽に供せしものにて實久世伯より傳來の經分手控を經て　聖上の天覽に供せしをもつて實久世伯より滿足を表する旨の感謝狀をまた香川皇后宮太夫は　皇后陛下より御滿足に御思召の趣の感謝狀を賜られしほとの逸品なりと

御上覽の牛馬

本縣長赤堀校行巡の際校內において御上覽に供したる牛馬及び所有主は左の如し

牝馬洋種　　橋永武吉

牡仔洋種　　橋永武吉

頌德表

牝馬洋種　飯石郡吉田村　田部長右衛門
牝仔洋種　同　人
牝馬ハクニー一回雜種　仁多郡橫田村　宮田吉五郎
牝馬同　同　村　堀江勝四郎
牝馬同　同郡八川村　根原組藏
牝馬四歲同有種　周吉郡吉田十二郎
牡馬ハクニー一回雜種　仁多郡阿井村　梶谷玄光
牡馬同　龜嶋村　勝部源太郎
牡馬同　本庄種畜地
牝牛ニーアシヤ九回雜種　八束郡岩坂村　長島嘉市
牡牛ニーアシヤ五回雜種　能野村　福島喜之助
牡牛ニーアシヤ種　大野村　奥原六太郎
牝牛アボン三回雜種　大惠郡岩倉村　原久右衛門
牝牛アボン五回雜種　同郡經屋村　渡部慶藏
牝牛アボン四回雜種　同　村　石飛後市
牡牛同　同郡益所村　渡部徳入
牡牛アボン種　大原郡産牛馬組合

縣社賣布神社々司菅戸建行氏は出雲國縣社以下神社神職總代として　皇太子殿下に左の頌德表を奉呈せり

我

大君天下御食てしようこのかたみせぬうかはんうつくしみの波八島のはかせてかよひて諸州の民ふす野邊も棒太の際すむ山邊も御惠の露かゝらぬかげなければ我山陰の國人等も此しるしある大御代に逢ひぬるよろこびは月に日にけに強さまり行くものから群山のたてなめたる曾友の國にしあれば世にあうがたいてせしの御ようはいを拜むことのみいつしかと待ちわたりしをこたひ

皇太子殿下九重深き御の宮居を出てましてこゝかたき荒山越をたどらせ給ひふみかたき野山のしめを分けさせ給ひて懸々の參とうもてる官人等のいろはく詞をはじめ百姓等が作りと作る業にいたるまでつはらかに見そなはして給ひ論ひ給へは國人等は葛のべの草むらなす靡きよりふし恐み奉りて

御壽長く天足しませと祈きこひのみことはきまつりきことに御夫の御前に御盤たて拾ひて書ふしかきの詩を記はせ給ひて花筵の里に御亭とゝめ給ひていなさの小濱の右筆かもはしめして八十の垣手の同もみちや廣く厚く神々と崇はせ給へは山川もよりて仕へて御武運長く久しく天地と共にきはみなかるへしと出雲國縣社貳下神社神職總代縣社賣布神社々司菅戸建行謹みて白す同詞申あけ奉らくと白す

城山ノ御手植

並に東郷大將松の手植

殿下は御始遊より還御の後ち御座所庭内に松の御手植あり松永知事、藤本准奏官、區長會長之れに侍し知事より鍬を把て差上られは　殿下には三四掬計り土を掛けさせ給ひ又た同時に東郷大將は記念碑側にて松の手植ある小具、松島所部書記之れに侍したり

御下賜

島根縣へ御下賜
御寫眞
金千五百圓
其通告左の如し

今般
皇太子殿下山陰道行啓に際し其區下慈善事業御奬勵の思食を以て金千五百圓下賜候條該基金補助に充つへく此段相達候事
明治四十年五月二十三日

島根縣

東宮太夫 侯爵 中山孝麿

松江市へ御下賜金
金七百圓

品物御下賜
松平直亮へ 御紋付漆杯一組 紅白縮緬各二疋宛
松平子爵へ 白縮緬二疋

御袴地及び酒饌料下賜
福岡松江市長 古川八束郡長 東京岐島司

松平知事、東部海軍大將、村山第五師團長代理、箕田騎兵中尉、木羅歩各部長、小笠原技師へ御下賜

生鯉および鮮魚　若干

酒饌御下賜

當本縣奉迎委員會委員長、區會市會連合委員長は縣山御成館に於て酒饌を賜はりたるが御料理は大膳職出張員の手に成れるものにて御盃は朱塗に菊花御紋章五個と異形の花紋を配せるものにして頗る美麗なるものなるが右御下賜は特別の御思召に因てしものなりと

晩餐を賜はる

縣山供奉員食堂に於て行啓事務に關係ある縣屬等三十餘名へ

酒饌料御下賜

一、島根縣江市島根以下同市奉迎事務關係者

一、安濃郡內入東郡書記以下奉迎事務關係者　一八東郡沿道各町村長

一、青山松江郵便局長及同局縣山出張員及集配人

松平伯爵家扶以下家職一同へ御下賜

酒肴料金五十圓

御菓子壹包つゝ御下賜

一、廳兵二百八十名及戰病死者遺族千五百八十三名へ

一、縣屬警部以下八十三名、巡査三百五十九名

一、松江市行啓關係者七十七名

八束郡同上（郡書記以下）八十七名へ御下賜
松江郵便局長青山卯三郎氏以下局員六名に御下賜

高齢者へ御下賜金

高齢者八千六十名へ金四千貳百七十三圓五十錢
（百歳以上壹圓五拾錢、九十歳以上壹圓、八十歳以上五十錢）

八束郡産牛馬組合へ御下賜金

金若干

献上品

島根縣知事献上品

訂正出雲風土記　一卷
雲陽誌　一部
島根縣史要　一卷
島根縣寫眞帖　一卷
行啓記念絵葉書　二十組
青嶋焼文鎮（硯屏造）　一組
紅色珪人形焼之魚　十尾
出雲焼花瓶　一個
八雲樂料紙文庫（兎模様）　一個

漆塗皮		七枚	
島根縣事務官獻上品	島根縣事務官	藤本光安	
		福田義次郎	
		本間則忠	
竹細工		六箱	
名所繪葉書		一箱	
松江市長獻上品			
入雲堂模箱		一個	（金澤高階製作）水入（盛井親次作）
青磁端筆洗		一個	（武田啓七郎製作）
出雲白蝋		三本	
古川八束郡長獻上品			
瑪瑙製勾玉管玉平玉		一箱	曲玉、古代の型飾曲玉にして延喜式に則り白赤青の三色瑪瑙にて六十八個を聯結せるもの（川島勝藏製作）
木彫置物		壹個	老人扱木の木彫（高さ一尺三寸、川津村足立碧圃作）
陶製花瓶		壹對	市志名焼（模模鶴の里窯）
同蓋物		壹個	全菓子器
同香爐		壹個	
同花瓶		壹對	栗山燒

八束美談　參通

山本仁郡長獻上品

白米　貳俵

仁多の雪寒晒粉　拾斤

牧場寫眞　壹枚

四宮大原郡長獻上品

木炭　壹箱

半紙　拾束

煎茶　五斤

織物　壹反

手帕　壹箱

東隱岐島司獻上品

鰒　貳個

雜貨　拾貳匁

松平伯爵獻上品

赤染眞綿（雲山幕右作）　一圓

青磁瑞花瓶　一個

鯵魚　一龍

高さ五尺幅三尺赤地に杉にして黃菊白菊の圖左右に八雲立

廣瀬絣　七反
海魚　一籠　（種々取交せたるもの）
川魚　一器　（能義郡山部の鮮）

北島男爵献上品
青銅花瓶　一個
全筆洗　壹個
全墨壺　壹個

松江稅務監督局捧呈
稅番一覧　十五部

殿下の御覧を好ませらるゝやに渡れ承りて須藤能義郡長献上
安來港名産十神海苔　壹斤

高齢者の献納品
松江市　荒　木　サ　ヲ　外九十七名
八束郡　中　島　ハ　ナ　外六十一名
仁多郡　森　山　タ　ニ　外二名
大原郡　松　本　栄　十　外廿八名
隠岐國　櫻　井　タ　ニ　外五十六名
（以上氏名と品名は巻尾に詳記あり）

墨流し紙奉呈

殿下本縣物産陳列所へ行啓の際御上覧ありし墨流の紙御持帰りの旨命により御廟前へ奉呈す

院兒製作品奉呈

山陰美術家協會院兒本院主ほるの製作品（藤花一龍、牡丹、芍藥、菊、若葉、山吹の造花一龍、縫繍五張、封筒貳百枚）を御廟前に奉呈す

奉拜者

廿三日正門内に於て特別奉拜を賜りたるもの

縣知事を首とするもの
重なる奉迎送委員
赤十字特別社員
廂兵
計百五拾壹名

仝日正門外奉拜者

松江市、八束郡、仁多郡、大原郡、隱岐國
軍人遺族、孝子、節婦、篤行者
計四百四十八名
（以上何れも巻尾に氏名表を挿入詳記せり）

御買上品

本縣物産陳列所へ行啓の際御買上の栞を張りたるもの左の如し

陶器煎茶器一組　玉湯村　角本合名會社　陶器
同上　同　堀内　梅太郎　同上
同上　天神　淀野　喜平　同大花瓶一個
同花瓶一對　玉湯村　下山　栄太郎　同煎茶二個
八寸盛菓器一個　天神　金澤　龍太郎　八寸卓
引分一組眼鏡入一個　米次本町壱丁目　作藏　眼鏡工業買入二個
絵ヶ〻一反　白潟本町七〇　遠乙助　羅紗　石本　林太郎
浴巾一反　堅町　西龍　伊三郎　浴巾一枚
白潟本町長岡　喜一郎　青磁花瓶一對
青磁置時計一個　同上三個
清酒壹升一打　濱治　柔田　金五郎　清酒壹升一打
同上　和多見　龍川　福之助　同上
同上　中原　青山　和太郎　合計五十六箇

鉱山物産陳列所支所内の陳列品中御買上となりしもの左の如し

花瓶一對　湯志淺太郎　水入一箇
大盛物　角本合名會社　花瓶一箇
茶子鉢　永岡住右衛門　友子付茶子鉢二箇

玉湯村　角本合名會社
同　福島　又兵衛
同　角本合名會社
同　角本　淺太郎
同町　新宮　庄太郎
米次本町壱丁目　作藏
羅紗　石本　林太郎
湯巾村　水産試験場
天神川島　勝藏
竪町　武田　勇七郎
天神　林　栄太郎
茶町　岩橋　清兵衛
米次　内藤　文藏

湯志淺太郎
同　入
永岡住右衛門

半紙堅帖
提灯一張
鋏二挺
花瓶壹共一箇
半燃草人一箇
香合壹個
盆壹個
羽二重一疋
縮緬一疋
詩堂反
筆（箔琴大字筆）二本
同（能良）二本
同（雛雲沙）二本
同（雲仙）二本
提灯百二十反
雛詰（段）二羽
雛詰（蝶紫）二羽

力石寧三郎　美濃紙一束
美珠園（美濃岐阜珠楽
鋏壹二箇
紺糸糸兵衛
京染一疋
長岡庄一郎
黒澤岩三郎
川合静歳
臨津親永
小林幸八
金澤鑑次郎
長江市朝二重箱詰所
土谷逸之助
同上同上
米田基助
冥辻九右衛門
足立梓一郎
冥辻九右衛門
川島茂一郎
福田慶太郎
三島由太郎
越江水産株式會社
同同

石原榮太郎
美珠園（美濃岐阜珠楽
鋏壹二箇
紺糸糸兵衛
川島静歳
同人
高麗伊三彦
小林幸八
同人
新宮虎次郎
杉原栄之助
土谷逸之助
黒澤岩三郎
都築恵一郎
鶴原基一郎
鈴原恵一郎
中油小十
高橋貞太郎
安達和太郎
鎌田才次

鐘詰(白魚)一鐘　三島山太郎　鐘詰(白魚)二鐘　松江水産株式會社
同二鐘　鐘田才次　同(鯵)一鐘　川中國太郎
同(鯵)二鐘　安達和太郎　同二鐘　魚山幸市
鋸背鰺魚九個　作榮恒　岩魚入一個　金澤金次郎
羊羹三棹　高見作兵衛　入重箱一　山口善右衛門
琥珀糖一　山口善右衛門　羊羹　中西栄之助
松江八景一　中西栄之助　線乳一　日本製乳合名會社
醫油桝の讃　三島和一郎　讃酒　朱田金五郎
讃酒　內藤文藏　同　篠田和十
同　青山和太郎　同　岩橋訂次郎
同　澁川品之助　時計臺　高麗伊三郎

奉迎位置ト狀況

八束郡の位置

八束郡に於ては學遊著夥く沿道(市田の松原)以東忌部村渡り橋間即ち揖郡村內に於て配置したる學童兒童は各個林の整列地点を示し最寄〳〵に參列せしめたり

東より掲れば

美保關(荒島渡り橋西詰)立東小學校生片江、手銘、森山、波入、二子、立東各個林、下立東下河分、掛屋川の東中詰に續す)東掛屋、右川組、西掛屋、新町川東、岩坂小學校生、鍋野小學校生、大庭小學校生、本庄小

學校生（寶龍山附近）雲梯小學校生、出雲郷村各組体、出雲郷小學校生（出雲郷役場東）持田小學校生、朝酌小學校生、竹矢小學校生二手、法吉小學校生、生馬小學校生、森山、東保部、竹矢、波入、奉庄、法吉、生馬、持武、持田、朝酌、川津、片江、野波、加賀、三津、忌部（津田村馬橋川の東）右忌部小學校生、右持武小學校生、川津小學校生、大芦小學校生、加賀小學校生、野波小學校生、（以上馬橋川の西諸氏野波小學校生の西に續きて津田村一里塚橋に至る間竝立四校生徒整列す）大芦、八束當人會、大野、伊野、長興、長江（川上亭の西）右甘志、森公、佐太、津田

大体に於て右の如く制定せられありしも團體若しくは個人の混雜に紛れて各處に散在せるもの亦多少ありし

松江市の位置

當市より津田村迄の參道者位置左の如し

一、有爵者、高等官、全待遇者、從六位勲六等以上及非役高等官、貴衆兩院議員、縣會議員、帶綬者

　　嵯山入口廣場錄門東基督會所角まで北側　一列

一、判任官、正七位勲七等以下、判任官待遇者、神職、

　　殿町茶子屋通り基督教會所角より東西ノ角まで北側　二列

一、日本赤十字篤人會員、篤志看護婦人會員、愛國婦人會員

一、日本赤十字社員、後備軍隊役員同員と

　　殿町茶子屋通り四ツ角より殿町通り角迄東側　二列

一、階層小學校、高等女學校

　　同し通りの西側　二列

一、寺院住職、諸學校教師、辯護士、商業會議所、區長會

宮殿町京橋角より北高等小學校通り角まで東側　二列

一、宮谷女學校、官立學校、西中原尋常小學校
　同通り市役所通り角迄西側　二列

一、北品寺尋常小學校、母衣尋常小學校
　白兎本町西側　二列

一、高等小學校
　天神町北角より半田屋小路角迄西側　二列

一、白兎尋常小學校
　同町半田屋小路より大國宮前迄西側　二列

一、文友會、育兒院、學館學院
　天神馬場南側　二列

一、鹽冶尋常小學校、軍人遺族、廢兵
　堅町西側　二列

一、在鄉軍人
　津田街道六丁目より堂森下角迄南側　二列

一、學組委員諸團記著、各町學組委員
　堂森下より西津田迄の間東側

一、師範學校、中學校、農林學校、商業學校
　東津田一里塚の東方二百間を起點として順次西に整列す南側　二列

廿二日拜觀者の靜肅

數ケ月以前より從に待てる市民と市附近村民のこゝろと御豊筒に集れるもの雲の甘きに就けるが如く各學校生徒の如き晩きものは兼ねて前夜より出發し勝隆より御豊筒に整列したるが前々近きものは午前一二時頃より續出せるもの步た歩らず市民、村民相混上各方面の往來にあつて失れ〳〵拜觀せしもの十萬餘と註せらる且つ拜觀者は御着前より　陛下を始め東伏宮殿下其他高等官の列前を通過せしを以て御通儀の際も別に異狀なく奉迎の敬意を表し頗る靜肅なりし

市內の奉迎者

縣山大將以前に於ける奉迎者、高等官を始めとして御豊筒に當る各町は失れ〳〵各官衙員、軍人會員、學校生徒、市公會員同依員等を整列せしめたる中に京橋より大橋に至る間其他の町頭挾き道は全部整立せしめざるき處町に於て縣山下より京橋に至る間街間に整列せしめたる外大橋袂詰より津田松原の馬市場に至る間道て片側となしたる各小學校生徒は南殿町の北入口より天神に至る（警官隊は整町の中央）の間とし何れも一定の服裝（絞江市の標章を染抜きたるもの）を先頭に翻し各校長其先に立ち各教員を監督し極めて靜肅に奉迎申上げたり縣町には軍人族、在鄉軍人整列し津田街道に在ては六丁目より北一丁目に掛けて在鄉軍人整列し（一丁目より五丁目迄は全く團体員の整列せるものなかりき）更に松原通りには市參事會員、市會正副議長其他市會議員、各町奉迎委員、新聞記者、市有志者等山の如くに並び馬市場迄に於て奉迎したり

縣立四校生徒の奉迎

絞江中學先づ出校し續て商業、師範、農業各校何れも校旗を先頭へ押し立て相續いして最定の拜觀位置（津田一里塚より東約二百間に當する間）に着けり整列の順序は南側二列に並び靜肅に奉迎申上げたり

煙火打揚

最下直藩の津田松原に懸らせらるゝや川津村吉川口に於て左の煙火を打揚げたり

日景　△奉迎旗　△赤雲龍　△遊龍　△錦乎二流星柳時雨の曲　△赤旗一流　△柳に燕　△紫旗　△春景氣　△孔雀　△錦旗　△柳に燕　△孫次　△錦龍　△金世界　△彩雲　△黄烟柳　△黄蔵　△子兎の紅　△光雷の昇

市内の装飾

沿街各戸は國旗行燈を掲げ幔幕を引廻し又た辻々には大國旗を飾り高國旗を出す抔一斉に装飾せり各官衙、團體等の装飾二三を挙れば▲市より設置せる各牛廻門中西津田の郡市境界に建られしものは竹籬を以て心棒となし之れに杉葉を接付けたるものにて高さ二丈餘頂上に小國旗五本を樹つ▲天部橋詰の奉迎門は只竹十數本宛を束ねて門柱となし小國旗を樹て電燈を点ず▲鍛冶支配所組合は鍛冶用地境界に高迎門を設け杉葉を飾れる屋根の下上下二段に分ちて大小無數の提灯を點せる所奇麗なり▲天部筋の奉迎門は銅板より建設せるもの高さ二丈に達し鳥井型の根迄にして白黒色に塗り上げ表裏に奉迎の二字を刻し頂上に長さ一間餘の木造剣を飾れり▲白潟本町の貯蓄銀行は店頭に奉迎を飾り無數の電燈を以て花形に造れる房花圓に值す唯だ時分ならぬを遺憾とす▲島根銀行にては扁額に杉葉を結びて其中にゃヤ付きの電灯を點ず尚ほ電燈を以て數個の花形を飾れり▲第三銀行は屋上二個の國旗を樹て之れより高國旗を引き綱は隊員より詰め掛の商店屋上に掛けて無數の萬國旗を飾し日屋上より屋前に掛けて装飾電燈を點したる所極めて華美なり▲大橋には假棚千餘に杉葉を以て包み數千の小國旗を樹つ▲田舎學校高等學校共に校門に生徒自製のアーチを造り大國旗小國旗數個の如し▲高等女學校寄宿舎庭内には青葉繁れる青葉の老樹に造花の花を造りて結付けたり設ふる且の眺め特に風情あり▲唐田時計商は例に依り設時計装時計を以て奉迎門を造れる所よく引き立つ▲嫁ヶ島には山形に球燈を飾り陸の洞に影をひたせる洞時の

設め又た一種の風情あり▲當市大橋下流泊の各汽船は何れも三數の國旗を吊し敬意を表せり

城山の大緑門

城山入口の大緑門は松江市に於ける各牟彌門中の最も大なるもの高さ六間幅五間あり檜葉を以て造れり中央の頂天には大國旗を交叉し尚裝飾電氣を點す

城山のアーク燈

松江城山に千二百燭のアーク燈式ケ所一は御旅館入口一は御玉座前に建設したり

盆栽陳列

殿下の御慰覧に供し奉らんため松江市における優秀なる盆栽數十鉢を城山に陳列せり

松江市救護班の設備左の如し

	出張所	醫師	看護婦
廿	雲濱出張所	大澤謹之進	富村金次郎 二人
二	天神	濱田三作方	濱田三作 小池深平 二人
日	殿町	西川自省方	西川末次郎 吉田菊市 二人
廿	殿町	仝 上	田中虎三郎 清水龍太郎 二人
三	西茶	入江豊太郎方	入江豊太郎 永井宣 二人
日	天神	濱田三作方	古瀬儀一郎 勝部龍之助 二人
廿	殿町	西川自省方	淺野賢之助 西川末次郎 二人
四	天神	濱田三作方	木村長三郎 旧代岩之助 二人
日	雲濱	森本文齋方	富村金次郎 小池深平 二人

廿　殿町　西川自省方　吉田菊市　田中虎三郎　二人
五　中原　曾田幸十郎方　永井　寛　入江豐太郎　二人
日　天神　濱田三作方　大澤誠之進　田代岩之助　二人
廿　殿町　西川自省方　清水龍太郎　淺野貫之助　二人
六　天神　濱田三作方　濱田三作　木村長三郎　二人
日　雜賀　森本文齋方　勝部德之助　右瀨儀一郎　二人

松江市消防組の警戒

松江市消防組（一二三四五部）は非常を應り昼夜共消防夫詰切り警戒せり

警衛軍隊編成

本縣警察部にては管内各巡査三百數十名を召集して第一部より第十五部まで一部毎に主監警部一人を置き行啓中警衛す

腕車屋入

本縣内行列乘車用として百數十臺を屋あげ車夫には徽章入り法被を着せたり

委員と記者の徽章

本縣にては行啓事務委員及各地新聞特派記者に對し左の徽章を定め何れも左肩部に佩用せしめたり事務委員は銀製櫻花、ヒゾに楕形のリボン（リボン色は區務係紫、接待係白、調度係赤、土木係青）特派記者は金色櫻花形徑六分のものなり

雜　況

廿二日夜の光景

未だ酉の刻に夕焼の晃れの頃早既に提灯行列を繰出せり学校生徒のみの勇しげなる態を見んとて宵の口より本通筋に押出せるもの引きも切らず練く觀に通路を埋めて到る處に込み合ひ却々に雑踏を極めたり▲處々に飾ける裝飾電燈の光鉾ゆく殊に今回は電燈に掛行を告げし爲め本町邊には提灯を點せるもの數々あり店のもの街の人成な青光りに光れる所奇麗にして凄いやうなり▲安來方面より引揚げたる警備部隊更に増して各町五七間毎に一名の巡査を配置し又た處々の橋詰め、四辻抔は數名打合て警戒せり最然として夜の松江市を整頓し無事ならしむるもの皆之れに因れり▲城山御座所庭内に飾ける一千二百燭のアーク市民皆しく飾り見ては其の詳に休らせ給ふ玉体のよ〳〵御肚能に渡らせ給はん事を祷るアーク燈金々丼合て盛々尊し

提灯行列

市内各學校毎合の提燈行列は挙行せり之に參加せる學校は市内各中等學校、隣尾小學校、市高等小學校、白潟、雑賀の二等當高等小學校、尋衣、北堀、内中原の各等當小學校四年生にして午後七時宇鄭市界なる津田の松原に參集して一同整頓へをなし夫より師範を先登とし中學、商業、農林、工業各學校順序に接續して本通り各町を經由し米子橋へ迫り一直線に城山の御成門前に至りて万歳を三唱して同九時臨次解散を告げしが何分生徒の數のみにても三千に上り各校特獨の華麗歌は一番に生徒の口より迸り各自赤誠を現はせる無數の球燈は蜒々として赤蛇の横たふが如く實に延長二十餘町に及びたるが　殿下には御成門玄關縁上に出御あらせられ終始御椅子に召されたる儘視しく御覧相成りて玉顔麗はしかりしとや

廿三日夜の光景

煙火數十發を當市種現沖にて打揚げしが該煙花は舊藩士等が各自御賞讃を博せんものと昨夜精撰して精

簡して製作せし丈ありて美觀極りなかりうろを見んとて濱岸の各所及び大橋等は人出山の如く前夜に相變らず雜踏せり又艦艇を湖上に驅せて觀覽せるものも尠からざりしが當夜の煙火は左の如し

六　寸　玉

一、星下り　打揚人富村組　森本　藤藏
一、千火分　仝大野組　大野　勝一
一、紅火勢　仝足羽組　中林　啓藏

五　寸　玉

一、登龍　三本　仝　大野　勝一
一、田毎の月　仝　中山屋三郎
一、柳に露　仝　中林　啓藏

五　寸　玉

仝　大野主之助　奥田　義智

一、千丈夕潮
一、時雨後の霰
一、雨夜の菊
一、雙龍玉昇
一、二條連玉

一、落引火龍星二段發　仝林組　中山屋三郎
一、田植の月　仝富村組　森本　藤藏

一、群龍　仝　仝　人
一、玉吐龍龍　仝　中林　啓藏

一、晴夜の月
一、詳光玉
一、青紅白三段發
一、紅星火龍
一、玉簾

廿四日夜の光景漁火と篝火

市御慰勞委員の計畫にて午後六時頃より中濱に漕出さるゝもの續々として絶へず豫定の七時に發揮ひせるもの三百餘艘、二隊に分れて一組は佐陀河口より發航し單縱陣を造り揚町鼻を目標として進行し胴心

に送したる頃左舷に廻りて婦島の南方に迂廻して天神川に入る又た一組は天神川口より登し單艇を送りて之れ亦た婦島の南方を廻りて乾陀川口に入れるもの合して三百の漁火水に映り附近一帶の洲嶼皆ら溶暗の如く又た之れと同時に宍道湖の南岸數里に渉り數千の篝火を點やして遙に中海の漁火に對するもの、如く湖上近來の壯觀なりき

尚は床几山に於ても無數の篝火を焚けり▲市内を陰歩するもの漁火を見るもの大橋、天神橋、末次の遊園地、天神公園、隱町裏手抔續々として引きも切らず九時過ぎ漁火も、火も全く滅し風情と衰ふなりしに湖岸の人出夥に街に歩う一時本通りは雑踏を極めたり

廿五日夜の光景湖上の提灯行列

先つ約二百艘の船には音樂隊を載せ午後七時過一番の篝火を以て末次松崎水亭沖合に集合し夫れより湖上へ陣列し凡そ十艘は軍艦に假裝飾船飾をなし球燈一万五千餘個を掲げ嫁ヶ島航路より西に向け航行し何れも万歳を三唱せり又他の一艘は湯町沖合より逆回して元の航路を進て大橋下に歸航せるが万歳三唱の間は亂玉火數千本を打揚けたり當夜の人出は非常にて湖岸に黒山を築けり

松平伯爵家

城山御屋敷道路新設（費用四千圓）他之れに伴ふ植樹、垣の新設城山内の掃除費等

城山御屋所裝飾費其他幷遊覧に關する費途を指定し金四千圓

殿下御奉送其他各種諸掛費を合すれば合計壹万貳千圓餘の支出になるといふ

東郷大將の揮毫

本月立面業學校はその校舍狭隘にして早晩改築または移轉の議あるを以て今回　殿下または東郷大將の記念御手植を願はさりしが同校長始め職員等是を願ふ懇篤にし苦心の末東郷大將の揮毫を得んとて右

林校長は種々懇願する所ありしに大将も快諾せられ将地に「登揚園盛」の四字を揮毫して惠られし

知事の記者招待

松永知事は廿四日午後七時より來松中の新聞記者並に當地新聞記者を松嶺水亭に招ㇾて歓迎會を催したり亭主側にては知事を始め藤本、本間、堀田の三事務官、高橋市助役、長谷川井川倉園の三縣屬出席して席上に餘興したり一同席定り配膳をなすや松永知事は席を起て懇々歓迎の挨拶を述べ次て嶋尾報知記者は京坂の各記者を代表し山陰島取新報記者は島取記者を代表して各個單に謝辭を告げたり此時恰かも湖上には遊火篝火の点々たる光景列をなして漕で出て對岸の床几山、圓福寺にも亦篝火を焚き上下相映ㇾて美観を呈し一盞の風趣大に酣を添ふ宴には校書十數名侍して幹旋尤も努め絃歌湧き安來節大に賞せられ各自歓を盡して罷散せしは十時頃なりき因に同席に於て記念品贈呈を夫々配附せられたり

松江市の記者招待會

御列に隨從して來松せる東京大坂及び島取松江各地新聞記者十八名を同夜臨水亭に招して歓迎會を催ふしたり其模様は先つ一行を嚴島大橋際より滊船數艘丸に招ㇾ主人役として市公舎員六七名乘組み殿は數名の紅裙をも混込みて嫁ヶ島附近に遊航し湖上晩春の風光を賞し頃合にして入時半頃一同は舟に移はれて臨水亭の裏濱に上り樓上に通れば福岡市長高橋助役等待受け居て接待し直に配膳す福岡市長先づ歓迎の辭を述べ次で萬朝記者小林屋三郎氏貧客を代表して謝辭をなし終て中外通信社長倉長忠氏は起て一場の所感を述べて曰く

去る明治十五年米子に於て島根島取兩縣人の懇親會を開きたる事あり其席上余は我山陰道へ　陛下の行幸を仰かん事を發議し直に賛成を得て歸來運動之れが請願に及びたるも交通不便等の爲め今日迄何等の御沙汰に接する無りしを今回漸く　御名代として　東宮殿下の巡啓あらせらるゝに遇ひ拮

に積年の宿望を達し余罪室に於葬に不拘豊葭に於て余は郷里の事情を察し且は山陰道を同業者諸君に紹介せん爲め今回特に歸郷せしものなり云々

當夜亭後には特に山形に球燈を吊し園は滿上煙火を催ふして興を添へたり

死後の榮

東宮殿下松江中學校へ行啓の際壁間に掲げありし同校出身にして日露戰役戰死者の左記九名の寫眞を親しく賜はされしばし御歩を止めさせ給ひて種々懇渥なる御下問あり尚御持歸りの旨御沙汰ありし死後の光榮之に過るはなかるべし

海軍少佐	小倉寛一郎	陸軍歩兵大尉	高井啓之助
陸軍歩兵中尉	安田繁藏	同上	小林勝彌
同上	少尉 藤原虎之助	同上	伍長 原和助
同上	板持國太郎	同上	高橋虎三郎
同上	廣江隆一		

鰓汁の供進

殿下には鰓を御好みあらせらるゝ由にて廿三日臨水亭は供奉員の命に依り鰓汁を御食膳に供進せしに殊の外御意に叶はせられたると

殿下御料牛肉

松江御駐屯中御料牛肉を調進せしは當市錦買本丁伊藤治四郎なるが同人は五月十日其筋より調進方を引受け十二日仁多郡ブラウンスヰス牛の優良なるもの二頭（一頭は四歳一頭は五歳）を買入れ十四日島根へ曳出し檢査を受けたるに別に申分なしとの事に直ちに飼舍に曳入れ七五三縄を張り毎日一頭に付き精米二升宛其他の食餌を供し十分に飼養せしが皇太子殿下は十八日より三日間同人の屠畜場に出張して消毒を爲し伊藤方にては同等矢点なき屠手三名を選抜し之れに白服、袴下、足袋、鳥打帽等を新調して着せしめ屠

殺の日は屠畜場附近に風呂場を設け屠手を入浴せしめ鈴江縣技手、桑原醫監督の下に十分消毒をなし屠場に用する諸器具は一切新調し二十日に一頭廿一日に一頭を殺し御料として調進したり

御料牛乳廐舍

八東郡産牛馬組合は當市西中組に廐舍を造り乳牛二頭を以て御駐車中高井警部、卜蔵縣技手監督毎日御料牛乳三升三合づゝ供進せり

縣史要其他送呈

松永知事は寫眞帖、地圖、繪葉書、縣史要、縣勢一班を東郷大將、千家東京府知事、渡邊山口縣知事、右賀警保局長へ發送せり

繪葉書配付

本縣より仕人十四人、廐丁四人、藥丁二人に五組宛使夫十四人、雇丁一人、馬丁十三人、馬方四人に三組宛計百九十六組を寄付せり

供奉員及新聞記者へ贈呈

縣史要、寫眞帖、地圖、繪葉書を行啓記念として各一部宛贈呈せり

東郷大將を語る（山陰新聞記者）

記者は二十四日東郷大將を其旅館に訪ふて行啓所感を聞かんことを請めたり大將は温厚として玉の如く犯すべからざる眼はキヌガに日露戰役を回想せしむ誠誤なる大將は容易に口を開かず記者は此細の事項を問質せんよりも事の御盛德に關することを掲げ地方民として猶が上にも御盛德を仰くの光榮を得せしめんことを欲す願くは供奉中にかける所感を洩されんことを得は幸甚なりといへは大將は漸く口を開けり其談片は左の如し

殿下の御聡明

殿下の御聡明にさしますとは今更申迄もなし現に江戸中に於ても名所古蹟等に就き其由来を一々知事に御諮問あり先きから先きへと御尋ねとなるより時としては知事が拝答に困しむるも珍なからず面して一旦御諮に逮したる上は決して御忘れになるが御きとは之れなしクに驚有次第ならずや

殿下の御随行

金吾の烈風の如きは供奉の面にすら此の烈風ではといふほどなりしに　殿下は至極御平気なる者にて已に何時を以て行啓と決したる上は地方の民も待ち居るとなるべし日程通り実行せよとの御沙汰ゆえには風の烈や雪かなるまで御依怙ありては如何と言上せしに何に之れしきのとを比方には程険あり盛岡に及はねとの御沙汰にて時間通り行啓あらせられたる次第なり

殿下の日程御随行

一旦日程に定めさせられる以上は必らず之を実行相成ること時計の針のクレのごとし御治定の時刻来れは必ず御起ちとなり若し時間を後廻のとあれは必らずその理由を具しその理由にて十分ならは御聡許あれど左なくては一切御聴届せらるゝことなし

殿下の御慈眼

名和緯此御巡覧の時のごときは何んでもなし天皇御巡覧の際のごときは峻坂の卑湿さで御治ひに相成り我等のごときは汗透潤たるより少し疲つくり御拾ひ遊はさせられてはと言上するとヨンな処は平気に登るべし云との御沙汰ありしために御容体にても出来てはと痛心に堪へざる所なり既の時天皇知事に先導して下山せよとの御言葉に記憶したる知事は大間日にて外の見る目も気の毒なるほど汗を流せしが　殿下には何の御屈託もなく御下山遊ばせられたり云々

古賀警保局長の談

万一にも警察事故の發生するやうのことありては、と聖躬上に關る痛心せしが幸にして地方民の至誠以て奉迎送に勉め規律正しく行儀宜しく、此の失態なきは特に賞すべきとなり、若し又　陛下の日程御變行に關しては實に何んとも申上様なきほどの次第にして、吾等下役の身を以てしても斯く關精事に當んことは容易に望み得べきにあらず、況して二日や三日の行啓ならば兎も角も御發車以來已に二週日を超過し今我尚は十日の御行程さへあり、時には御休養然るべしと、供奉より申上ることあるも、切角地方民が熱誠を以て迎送する以上、出來得る限り滿足を與へんとの御沙法にて、實に恐入るの外なし、現に倉吉行啓の際の如き、烈風砂塵を捲きしにも拘はらず、無蓋御馬車にて奉觀者を滿足せしめ給へしのみか、少時御休憩後更に砂塵の關を一里の遠き農學校へ行啓御出されし、當時、御帽も一回吹き飛び、御眼鏡も風の落す所なりしに、一切御頓着なく却て御笑ませ給へしが如きは、通例に御勇武にして御精關なるかを、日前の事實に證するものならずや、殊に万事に御注意の周到なる所々にて、試上品あるときは、何らに限らず供奉員の旅宿に還はさせられ下賜相成るが如きは、以て其他を推し、察るべきにあらずや、而して當地に着以來種々記念品の寄贈等ありて、未だ得到らざるなきは却て謝辭に窮する程なり、云々と語れり

供奉員其他宿舍

當市に於ける供奉員其他重なる奉迎員の宿舍左の如し

東宮太夫、東宮武官長、武官一人、侍從三人、千家男爵、千家宮司、千家官長以上（松美館）侍從長、侍醫二人（赤木館）東鄕大將、大佐一人　村山縣團長少佐二人、大尉一人、主馬寮屬一人（一文字屋）內藏主事一人屬一人（富田太平）警保局長屬一人新聞記者（大橋館）主馬寮屬一人（金藤ヰト）騎兵士官一人（岩田屋）憲兵士官一人（五京館）濱田憲兵分隊長（田村啓藏）北島男爵、金子男爵（三島節助）小野男爵（水明館）參議

院議員末次本町（朝日館）縣會議員（西谷ダイ）

松江市御發車

五月廿六日

朝七時前後の雲行怪しう折々雨を降らせる如き微雨は瞬時に拭ふが如く晴れ渡りて樹々の新緑は緑色濃かに、天氣さた樂如として神淸かに風更に爽快を覺へう新くて御出發を報する銅火は高う渡りね實にこの朝は御車道を淸むる雨なりけりと人々詩しあへりさは云へ東京御出發以來既に二旬に及びしかど雨の日とて無くよし少し雨降りても御車の出つる頃は直ちにやむ如きは御威德の不可思議なりと信ずるも何の不可あらんいで御發車の御模樣を記さんに午前九時御豫定のごとく城山御旅館御出門貫山警部は白轉車に跨り保田警視は騎馬にて先導先驅となり　東宮殿下には木戸侍從長御陪乘にて中山大夫、村木武官長、桂主事、侍從、武官、侍醫其他の供奉員及び松永知事を隨へさせられ列車には東郷大將、村山少將、高洲參謀、入江副官、中島第五旅團長、中村濱田憲兵分隊長、古賀警保局長、吉田內藏主事、宮內省高等官判任官、杉原島郵便局長、本縣三事務官、松平子爵、北島男爵、各郡長、福岡松江市長、恒松、岡本各代議士、縣會代表者山根副議長、難川郡の代表奉迎者高橋久次郎、山田議員、縣屬、島書記、新聞記者等或は隨從、或は奉送、或は奉迎の爲めに驛事を通ねて從ひ城山大手前より殿町、京店、白潟本町、竪町の御通路筋には奉迎當時の如き序列にて各團体整列嚴然として奉送し松江分乃木の市部境には奉迎委員整列し其他一般の奉送者は其數いくばくなるを知らず　殿下には御機嫌殊に麗しく始終各團体の奉送に對して擧手の御會釋を賜はりたり

湖岸の風光

乃木村より廣悔は遠々として國道を通御あらせらる沿町來待の各部落は國旗、球燈種々にて裝飾し奉迎者頗る多く仁多、大原の各學校生徒、一般奉迎者、八束郡內の奉送者は湖南各村は云より湖北一帶の各小學兒

盡も各所に記載せられ率爲せり沿道特殊の景觀甚し無きも湖岸の風光最も推すべく急天微風ろよくも日帆点々として治湖岸を打つ一幅半卷の畫圖しかも　皇太子の御滯この間を通御す無限の感慨なくんばあらず

林御野立所

殿下には十時二十分玉湯村大字林、千歳岡下に御着御馬車を降られ古川入來郡長先導申上げ御徒歩にて石階十數級を上り御野立所に入らせらる太夫、侍從長、主事、侍從等從ふ其他の高等官は岡下の小憩所に入りぬ

殿下には御氣色殊に麗はしく湖山の風光を指さゝせ給へ岡上と彼方此方遠望させ給うてこの御野立所成立の次第なと御下問あり古川郡長は卑職を以て逐一申上げ殊に村民が熱誠を以て夜を日に次ぎて竣工を告げしめたることを言上しければ　殿下は首肯かせ給ひていと御滿足の体に見受けられ斯かる故にや御休憩も約二十分に及びたり

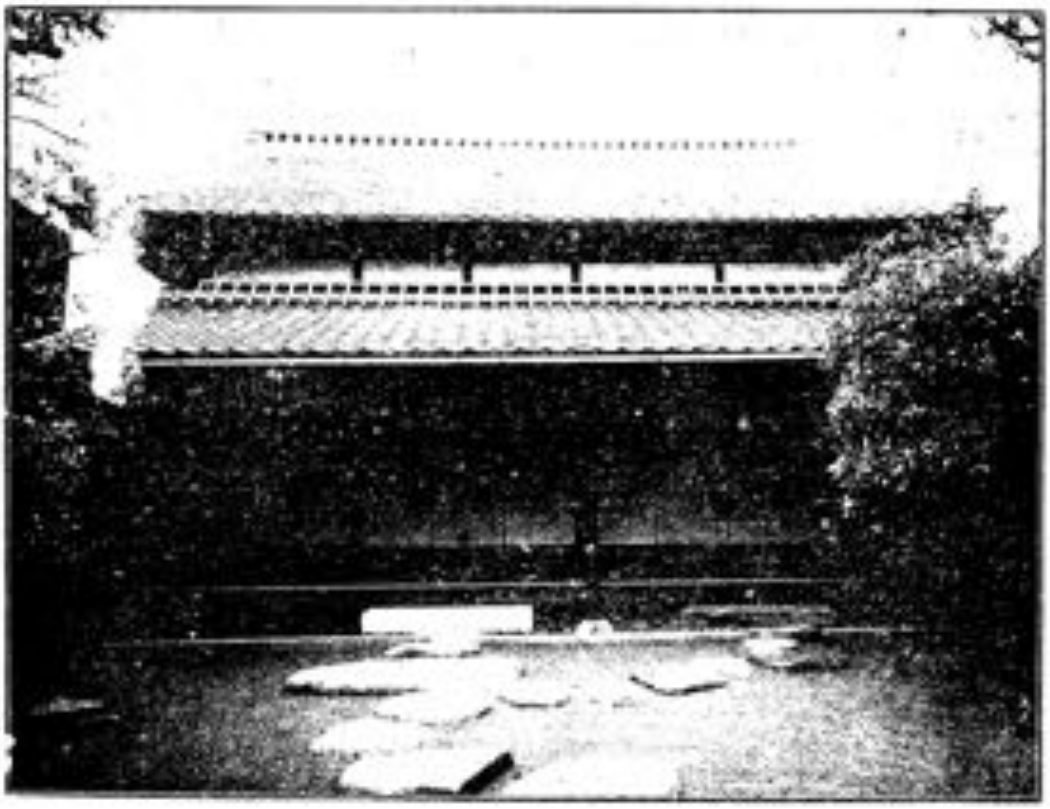
抑も御野立所なるものは縣下唯一にして殊に此處は宍道湖畔無比の眺望なりと聞ゆれば左に記述すべし

松江市を距たる約二里、湯町より十四五丁許り西のかた湖岸に沿へる國道の南側より僅かに二十歩許り登れば即ち御野立所なり試みに其畔りに立ちて眺むれば湖波縹渺の間に北岸一帶の靈巒を望み眼線を隔絶に馳いで湖の東端に放てば松江市街は水に映じて近く指すべく望、和久羅の二山、下半身を掩々の雲霞に溶するを見る實に是れ湖畔絶一の勝を占しうせさるもの、うも如何にして此の勝地を發見せしや

初め御野立所の候補地を林の字乃が崎なる照滿玉能能立場の附近に卜せり然れども未だ以て足れりとせず村上前八束郡長は縣官等と屢々協議の上熟考提案せし結果第二の候補地を林の学堂の後に發見して遂に御野立所を此處に定めしより村長長谷川定十、參校馬書記、村會議員松浦岩太郎、林區長伊藤增之助

玉湯目字林御野立所

邸氏門衛右久橋本　所参書御町辻央



等の諸氏非常の熱心を以て設計起工せしが工事は松江の和泉豊吉が受負ひ荒川福雲氏指揮の下に築造せり元來此處は森脇有の草刈山なりしが山の半腹を二間許り切り下げ十間四方位の平地を造り其の中央に直徑二間の六角形の阿屋を設く柱、桷、桁は杉丸太、隅棟木は松樹を用ゐ屋根心は檜の木、屋根は杉皮を以て葺き押えは黒竹屋根裏は杉丸太と青竹とを一つ置きにせり下は暗きさなし周圍には庫待石を敷き中央には右色鮮麗たる半盛の山石を置きて卓子の蹟とし一段下つて供奉員の休憩所(二間四面)を設く丘と國道との間に七歩許りの圓地(青本榮太郎、福富長太郎の共有地なりしを寄附せり)を埋め立て國道と平均せしめ之を御車寄とし直に十歩許り進み左折して東に十歩許りの道を造り且　殿下萬一の思召に適ふ御野立所の上方に數丁の山道を開きて登攀に便せり此處より東の方十數丁邊中に突出せる湯町川尻鼻といふに島石嶽共高く壹丈三尺の燈籠を建て御野立所の目標とせしは頗る妙趣向なり御野立の景石樹木等は悉く村民の寄附せし所にて之が運搬には數百人を要せしが何れも家業を抛ち歡呼雀躍して爭に奮りしは實に感泣子措して爭來するの有樣にて　殿下の御德澤盛なる思ひ見るへし斯くて三月廿二日起工五月十六日竣工したれは之を千歳が岡と稱し大切に保存して永く行啓の榮を記念すべしとなり

御持參と下賜

かくて卓上に備付られたる寫眞三枚と地圖一枚とは御出發の際御持歸り相成ることとなり玉湯村へ若干の御下賜を賜はりぬ

帆船の行列

殿下森村御野立所に御小憩中八束郡御代佐陀、右志邊の漁船數十隻を連ねて白帆に風を孕ませ馳走せしめ御覧に供せしに殊の外思召に適ひしやに洩れ承る

宍道町着御

全　日

殿下には御順路を正午宍道町着御、古川郡長の先導にて御昼餐所なる木幡兵助の御座所に入らせらる表門には菊綾蘇御紋章入の大幕を張り大國旗を交叉し壯厳の体に見受けらる供奉の高等官も全部に入り食餐を喫す

御昼餐所の構造及裝飾

御昼餐所は富豪木幡久右衛門氏邸(二時間御休憩)にて正門、通用門の二門あり正門は今回の新設に係る柱門にして通用門は舊藩主の御成門と稱せられたる屋根門なり御馬車は正門を入り斜めに竹垣を回りて五六間行きし處が御車寄にて此處より中門を入らせられ右松前寫したる庭園を歩せられて御座所に入らせらるゝ樣になり居れり御座所は十疊の間にて北に向ふ杉柾の合天井、南隣に附ふて金屏風を建て段通を敷詰め中央に幣の小段通を布きて白紋ラシャルを懸けたる白木の卓子を安す二間半二ッ割りの床の一間に一間の明り障子ある床の右手に黄緞子を貼へる臺の上に刺白木造りの御劍御鞘懸が置かる室の西南隅には伊豫燈り四足大花瓶の上に古銅の花器を置く御次の間は八疊にて矢張り北に面し貝上二室の中間なる欄間は青山泰石氏が行啓記念として熱誠を注きたる木彫にて表は鍾葵龍陵王、裏は立つ波に千鳥、之に用ゐし木材は氏が曾て小松宮殿の御用命に依り製造せしものゝ殘餘なりと云ふ御次の間より南に出で御座所の後ろ二間半の廊架を渡て御便所に達す御便所は安來御旅館と違ひ木造りなり御次の間の西、一段下つて六疊の間あり御話談室とす白木の臺に御食器洗ひの白木桶大小二個と古銅の瓶掛一個及び木炭が備へあるのみ(御召換し御食器御食品一切御持出に係る供奉員貝下へは同家より供餐す)

貝上は　殿下の御用に充つる爲め新築せしものなり

供奉員及び其他の隨從員は通用門より入り高等官は中門前より右に判任官は通用門内より斜め右に各休

憩室に入る様なせり高等官休憩室は控室横への五畳半を玄關として六畳と入畳の二間、判任官の方は十二畳と六畳、地方官事務室六畳なり

東郷大将手植

東郷大将は本幡氏の懇請に應と題し玄關前に植ゑ尺餘の手植を爲せり

末幡氏の光榮

末幡久右衛門氏は御着後直ちに拝謁を仰付られ金若干、銀製花瓶其他品々御下賜あらせられたり又懇の爲め生國に放逸したる鶴、鹿、雉魚は御猟場の儘御出されし直ちに今市に還ることゝなせり

殿下の御上覧に供し奉りし同郡の織品は柳里第の三幅對、竹田宮幅、伏見の額、支那畫の四点なり

末幡久右衛門氏　御昼餐所の主人末幡氏は實性温厚篤實の聞えある農事殊其に勞め公共事業に忠實なることは松江圖書館を興し其の現入東郷農會長なるにても知らる同家は氏にて二十一代の舊家なり御膳所設置に就ては二万圓を貸したりとの世評なるが實記者由藤右氏本件依の圖面のみにても千圓餘を投ぜしと云ふ

宗道町へ御下賜

御出發の際宗道町へ金若干を

小學校へ御寫眞金若干を下賜せらる

奉迎者

宗道驛入口には板橋自動車自ふよび宗陸商各停車場十字社員帶劍者數十人御乘車の前側に超立して警邏せり

裝飾

町内の装飾は紅白五段の幕を町内両側に通して張り廻し且つ軒燈を吊し日章はいふせも及ばず家に至るまで東風に靡かせて敬意を表し居れりその他餘興の飾物は町の両端に大國旗を交叉し小川橋の欄干には杉葉もて蔽へる數十の球燈を吊り下げ夫に服況を添へたり

宍道町の繁盛

仁多、飯石の奥郡よりは前日來來町し宿舍の拂底を告ぐるに至り當日は早朝より奥郡小學生徒等の到着するもの引もきらず宍道町未曾有の殷盛を示したり

出張所と救護所

御裏餐所の向ふ區田万次郎方に縣役所出張所を設け石原結平方に臨時救護所を設け醫師大坪省藏、坪内憲一の二氏、看護婦二名詰切る

御發車

殿下には午後一時四十五分豫定より先だつて熱誠なる諸民奉送のうちに御發車あらせられ意川部に向はせらる

拳道は宍道町各團体、公務員、學校生徒等町の両側に整列し町の西端には仁多大原郡部の各村小學校生徒整列し福岡市長、山本仁多、西宮大原郡長、縣會議員の諸氏はこゝにて御暇を申上げ村上意川部長はこゝに於て拳旗をせ

直江御少憩

斯くて拳道には例の如く各團体小學校生徒、官公署吏員等の拳旗翻飄る盛にして　殿下には一々丁重に拳手

の絶を せさせ拾ひ二里の旭途を荒川平原より吹き送る風に吹かれ給へつゝ午后三時五分直江濱等小學校に御着村上義川縣長の先導にて便殿に入らせられ御休憩あらせらる此間生徒の作品御覽賢村上縣長森に校長は御下問に接し一々奉答する所ある作品は一覽御持歸りを仰出さる

直江小學校へ御下賜

全校に御寫眞と金若干を下賜さる

東郷大將の手植

御駐車中校長の懇願に依り松の手植あり

學校の裝飾

同校は玄關にメヲンスの緑幕を掛け柱は白布を以て包み日章を交叉せり玄關を入り右折して階段を登れば左方に高く御眞影室あり〝軍旗至誠〟といふ故小松宮彰仁親王の額を掲げ右折して廊下を東に行き詰めたる所に講堂あり北部七間に五間を割して御座所とし縞メックを垂れつゝ南北に金無地の屏風を廻て東に五つ西に三つの燈子窓にキヤラコの窓掛を掲げ御室内二個所に松の投入れ二瓶を飾る同地に有名なる挿花師江月宗次郎が丹精を凝せしものゝ由にて松の枝振は殊はめて雅趣あり

自安濃
至直江

沿道ノ光景

安濃より津原間に於て軍人軍人遺族廣兵赤十字社自衛村公露具を掲示してヲレ〳〵の下に集る殊に寺常高等の男女學生が夫人しく敬禮に引率せられて兵式的に整列し居も愉容なりし安濃より津原一里の間に於て仁多大原の各部より遠くは武原佐香村等より來集するもの千五百人許すべ

き なり郡境の奉迎門莊原村の宍道村と接する所即ち八束簸川の郡境には一大装門厳然として起てりその構造の精巧にして形式の多の標を得たるは能義郡における伯太川橋頭のソレと東西相競とも稱すべきか松江の御座所前にかけるものほど美ならずといへどもその精巧に至りては決して遜色あるにあらず頂部に檜皮もて御紋章を印したるが如きは誠に最も妙なりその設計および意匠を見て推知すべし

莊原村の奉迎門

簸川郡莊原村の奉迎門は高さ八尺八寸幅壹四尺厚七尺二寸にして構造内部は木材を以て組み外部は杉の青葉を以て葺ひ其工費の如き實に四百八十七圓に過ぜりといふ

▲莊原より直江一直線に一里の道程は既よりも平坦にして左右二里邊く人ならざるはなし出東、東、福分、久多美、給山、久米、伊波野、西田、平田、國富、新宮、直江町村等の奉迎拝賀袋雲の如く此の間に盛列するさま遠く望めば錦のごとく近く寄れば高低はあれど黒頭を充に埋すれば宛然たる人垣に異ならず此の間には盛装を凝らしたる婦人會員等も亦揚なからず▲莊原村尋常小學校には路の周圍を大小無數の國旗にて飾り立てたり▲　殿下には二十六日午後三時御少憩所なる直江村外五村直江組合高等小學校に着御あらせらるゝや村上郡長および森脇同校長委員等校門内に生徒一同は町下にて何れも奉迎せり着御の際は貝螺の煙火を打揚げ又町内は例によつて賑はしかりき▲出西村役場庭に提燈數十を吊りまた應急治療所の設もあり尚は庭前に東郷大將の手植あり▲大津町光景　殿下御通車あらせらるゝを以て奉迎のため町内に紅白の幔幕を張り提燈は遠く軒端を連ね町内一定の場所には最も長き大提灯を掲よく吊し殿下御通車の際は町長一同敬意を表し奉迎せり▲大津義勇會救護班の設置あり▲家には國旗道には蔭なし如何なる賤が伏屋にても好個必らず國旗を掲ぐしかも汚れたるものなきは注意のほど察すべし若しソレ御道筋に至りては道に一條の草なし一本の屋を留めず松江より直江、直江より田儀までは盡し日本第

一の清潔にして平坦にして堅固に車夫の安業疑ともいふべきか那内注意の行届けるも亦大に称すべし▲
建碑幷幕張幕は到る所競爭ともいふほどに整頓せるが獨り本郡に称すべきは庄屋、直江幷一様にして二紅三白いづれ劣はさまは蓋し特色ともいふべきか

今市着御

五月廿六日

直江少憩所より三時廿五分御發車あらせらる沿道には藤川郡の學童各團体を始め各小學校生徒等整列し謹直の拜観者は愈よ集りて頭集せり　殿下は荒れ等の小國民等に寄られ給ひつゝ御機嫌美しく今市へと向はせらる暫くて御馬車は兩方の拜観人整列の中を過きて御豫定の通り四時三十分今市町へ着御あらせらるれば町の關門には安予師範學校高等尋常各小學校生徒並町村吏幷役員各團体等整列盡然として奉迎せり　殿下には天地に震慟せる歴火と熱誠共に溢れたる町民等とに擁ひられて御降車々々御旅舘に當てられし這邸なる右衛門氏の新築邸へ入らせらる

御旅舘

當地御旅舘は宮家旅舘なる右衛門氏邸内にて實に十五年の久しきに亘りて準宮設備せられしものなれば山陰道御旅舘中最も注視すべき価値ありとす左に其の構造、装飾の一端を記さん

御旅舘は這邸の西に接し南に面して建て正門は間口二間の杜門、杜は一尺五寸角の檜にして其の高さ一丈二尺、左右に屋根付の塀あり當日は菊綴菊御紋幕付の幔幕（御持出し）を正面十一間の處に打ち門の中央には高く段り上げらる正門の東に並びて間口四尺五寸の通用門あり供奉員其他の出入口とす是より東、本邸の前面二十八間には御玄關に這邸氏定紋丸に澤瀉を染め抜きたる幔幕（該幕は曾て這邸氏

が御旅館の建築設備等を一手に引受けて經營されしを德として今市町より感謝の意を表する爲め今度新調して寄贈せしものにて金長四十圓、京都にて製造せしもの）

正門を入り敷石にして中門あり之を御車寄とす　陛下には此處にて下乘せられ中門を入り給ふと正面に木沓おりて御玄關を昇ふ之を左に回りて御玄關に入らせらるゝなり（御門內の庭園七十坪）玄關は間口二間、屋根の反りを加へて三間、此處にも當日は御持出しの菊御紋章付き緞幕を打たる檜の階段三級に續延を布き御玄關の間は六疊にて中央に天花御筵を布き、其上に金襴地の御茵、縁は柔生地にて竪五尺）を置かる　陛下には此の御茵立の右より廻はらせられ御立の西手にて上座に召機へさせられ其處に入らせ給ふ尚は東宮侍從長、侍從武官長は御玄關の西、番敵より上らう、樣なり居れり御玄關の間よう一間の廊架（疊敷）を横ぎりて八疊の間あり此處に織川郡の物産、各學校生徒の成績品許多を奥くしく陳列す是より又た一間の疊廊架を隔てゝ御三の間、夫より御次の間、御便殿と奥深く續けり御三の間の東より御便殿の北に續けて幅一間疊敷の長廊架（陛下全体の疊數約五十疊）あり之に添うて外樣を設く樣外は八十坪の庭園にて寄植青石、築た風景の佳すなし景み深みて

御便殿の御椅樣を倒ひ奉るに十二疊半の間にて椅の台天井、北一間半、東二間半は紙張りの鏡高障子、西に一間半の床あり一間の明り床を設く床には筆子昭筆、佳源の國三幅對を飾く該書幅には左の如き略傳及び畧あり

一、雅號、金堅山水　字子昭嘉興魏塘人之人なり父は仕宦と曰へり能く詩を善けり盛世其家をつぐ詩を學んで是に過たる山水人物花鳥を善く始は趙伯驌を學び略其法を變宇福政にあまり石こと宜に巧に過たり書の上々筆たり

大宗の載詩より元の末子在に至る右二十五幅は日本畫傳に稱讃する所の其の一人なり

彩色棲鳳之圖三幅對今撰見候盛子眉其筆也誠以て精妙之至り珍重に候以上

一陽齋　狩野永納　印

書幅の前には梅の蒔絵せる冠臺の上に古銅の宇佐冠形香爐を安し中垣に唯朱の香合と鶴の羽の三羽を配置す床の左り一間の數込には青貝細工の袋戸棚あり棚の違棚には古土佐無名四十八枚の色紙書帖、全三十六歌仙書帖の二冊を重ねて置かれ明り床の框地袋の上には金蒔絵の模様（蓋表牡丹浮模様、裏吉祥）に御料紙（中巻書三十枚）を添へて貫かる當二間半の襖に描ふて建てられたる屏風は金地に狩野春卜筆雪降りの菊子猫の圖なり數込の方に寄せて御飼猫用臺を置かる

御次の間は十一疊にて西に一間の床あり友歴年極彩色牡丹に孔雀の大幅を掛け金蒔絵蒔畫しの花臺に古銅の砂鉢を置く當北面機に添うて鷲谷等顔の筆山水の屏風を立て西面同、御更衣室通ひ口の壁に荒川龜齋の彫刻雪老の像を掛く御三の間には春卜筆墨絵の山水の屏風を立てらる御次の間より西へ御更衣室に入れば八疊の間にて西に二間の高窓あり北、壁に添うて臺所の夫妻見傍らに古色逼鑑たる受註の花器あり（詩の花物を投込掛）小六の金屏風半双を備ふ御更衣室の北に御洗面場（二疊）御湯上り場（三疊）御浴室等あり其奥に本造りの御便所を設く又た御臺具置場の前に東宮侍従長、侍従武官長の詰所ある八疊の間にて二間床に雪舟樓山與筆三幅對（中白画に雪老、左右各に篇）を掛け青銅三尺の砂鉢を設け御硯箱始め各御調の掃花は違の坊の宮匠見立青半、曾原盛重の二氏が拾當せり

以上は御座敷の主要部のみを記したるものなるが此外各供奉員、隨従者、地方官、警察等の室二十二あり何れも設備に善美を盡したれども一々枚挙に遑あらず該御旅館は清新を旨とし且つ成るべく地方産の木竹を以て建築せんとの主人宮殿下の御意にて、障子に至るまで鳥牛は鹿川産の檜を用ゐた

り唯だ主人の思慮とする所は御便殿の構圖にて是は十數年前より荒川龍壽翁が彫刻を引受け居たれど果迚出來せし爲め完成する能はず圖は假りに障子を立てしまゝなり庭園の如きは庭師に計りつゝ主人自ら深く意匠を凝して經營せし由なるが松石盛衰の邊、石井を設けたるは頗る妙趣ありとて先頃來つて參觀せられし松平舊藩主は大く敷賞されしとなん左に建物、庭園等の坪數を掲ぐ

御旅舘庭園建物總坪數二百六十二坪建物百三坪、前後庭園百五十九坪、御旅舘總圖數十一（外に母屋の室二十二を使用す）御旅舘總坪數百四十四疊半▲御調理室は御旅舘より十間許り離れ此間屋架を架設せり室は四間に三間半にて極めて清潔に建設されたり

拜謁者

御旅舘入御の後直に拜謁を爲りたるもの左の如し

東郷大將	村山少將	桂水郎事	古賀警保局長	千家男爵	千家大社宮司
千家大社教管長	金子男爵	江間農事試驗場長（以上單獨）			
北島男爵	小野男爵	村上藏川縣長	藤田飯石縣長	佐草大社權宮司	
須佐須佐神社宮司	岡崎今市區裁判所判事	山口縣技師	古川富藏川縣長		
星野步兵大將	江角代議士	佐々田司法官試補	塚本聰兵少將	岸本陸軍二等軍醫	
竹原縣會議長	小野日御碕神社宮司	根倉步兵中將	福田步兵少將	米山步兵中將	
吉岡二等軍醫	安井三等軍醫	山田步兵少將	森龍兵少將	矢田龍兵少將	
河原三等軍醫	古川三等主計	今岡龍兵特務曹長	石橋龍兵特務曹長		
影山步兵特務曹長	曾田福重兵特務曹長	井上步兵特務曹長			

金子物部神社宮司
北島男爵　小野男爵（以上二名單獨）

女子師範行啓

五月廿七日

本日朝來供啓　東宮殿下には御擇定の如く午前九時御旅館御出門縣立女子師範學校へ行啓あらせらる本日の御陪乘は村木武官長にして其他の供奉員前日の如し學校にては玄關の前方右側（玄關に向て）に本間縣事務官を始め敎諭員一同同側の校庭に生徒整列し永源校長は玄關御車寄に奉迎す　殿下には御下車直に永源校長の先導にて階上音樂室なる便殿に入らせらる御座には二間四方の高さ五寸の臺を設け其後方には金屏風を立て室の隅には生花盛戴等を飾れり御小憩中校長永源伊一郎、敎諭廣島秀太郎、同鈴木竹香の三名に拜謁を賜り永源校長は勅事を經て學事狀況書を捧呈す夫より敎育品陳列室に成らせられ陳列品は生徒の製作せる習字、圖畫十二點に過ぎなして壁に懸け其餘等品は卷となし作文、裁縫、博物標本等は机上に陳列したるが御巡覽の後何れも御持歸の御沙汰あり終て校庭に於て生徒の體操遊戲の御覽ありて玄關東側なる校庭に松の御手植あらせらる（此松は元加茂沼村の山林にありしものを同校に於て培養せしもの）時に九時四十分還御仰出さる

東鄕大將手植の松

校長の懇願によりて全大將は全校左側の小玄關前に大松を手植せられたり

大社御參拜

全　日

直帰は女子師範より直に停車場に向ふ筈の今市本町より中町を經て停車場小路に折れ高瀨川に沿ふて西北す渡り橋

に出れば浦戸奉迎署御親署堵をなし沿道一帶拜觀者多し斯くて荒木村に入れば縣廳には牲薬中學校の職員生徒整列乘迎す進んで町の入口なる馬場橋に至れば大鳥門に大國旗翻風に飄り接遇よりは町村の吏員より公務員、各團体、小學校生徒等列を正して奉迎申上げ大鳥居前には無數の万國旗岸々として美觀を添え御道筋一帶日砂を敷き町内は緑暮日立旗高張提灯等何れも新調のものを掲けて盛裝す御列の馬場に達するや盛火數十發天空に沖して壯烈悲觀ふ

齋藤は遠々として大鳥居を過ぐれば列外は接遇にて駐車し供奉の諸員は荒神門外にて下車し御召馬車は境内に進み御小憩所に充てたる銅鳥居内右側なる會所に着す馬車の荒神門を越ゆるは全く密閉の翼例に屬すと云ふ

入雲の山嶽峰永に深く崇嶽碧雪に清く寂として太古の如し千家宮司は此朝早く濕巾神殿に參進し御霊を開き降りて楼門内の左側に跪拜奉迎申す　殿下には會所前にて御下車御小憩の後御徒歩にて假草標宮司御先導申上げ拜殿の右側の御通路を入足門に達せ玉へば陛下には島根宮縣知事典大麻御祓を奉仕し門内右側にて御手水進らせ夫より楼門を入らせ玉ひ本殿階段側なる御休所に着御あらせらる此時供奉の中山太夫、村木武官長、木戸侍從長、杜玉那は楼門内に奏任の各官は楼門外に侍從武官は申す迄なく宮司は内殿の御玉串を執りて

殿下に奉れば　殿下には御休所の上御統のまゝにて恭しく御立拜の儀あり畢て宮司は再び御玉串を神殿に奉奠して下殿し元の座に復す之にて御參拜を終らせ玉ひ夫より千家宮司御先導にて觀察檀に成らせられ神寶御覽ありて拜殿の北側に植の御手植あり之に對して南側には東郷大將植の手植を有す　殿下には再び會所にて御小憩直に御列元の如くにして大鳥居を出させ玉ひて順路を宮内なる千家男爵邸内御雲鎭所へ成らせられたり

御雲鎭所構造

千家邸に於ては門前大アーチを建て門の階段は土を盛りて埋め傾斜を造りて御馬車の通行に便す門を入りて正面玄關の右手に中門あり中門を入り十二間許り行き東向きの御玄關あり此處にて御馬車を降らせ

出雲大社

社會式株全南田平 御使差遣

給ひ玄關の階段を昇らせらるゝと紙壁を張きあり此處にて上靴に召換させらる（御椅子を備ふ）千家男爵の御案内にて風調館の大廣間、大社教組神の御前を過ぎさせられ西のかた御廊に出で給ひ右折又た右折して御控所へに御座所に入らせらる

御座所は北に向ひ十四疊半の御間にて東に一間の床、北一間の明り障子に接きて二間の障子立てり床の右に一間の戸袋込、金無地の戸ある袋戸棚あり西は二間半の襖、此の上に同の欄間あり天井は杉柾にて其他柱、長押、鴨居等都て檜を用ふ（是等木材、板材は悉く大阪にて精製せりと云ふ）御次の間は十疊、西に寄せて棚を設け御神酒を奉安す此間御三の間あり宮侍官三名の詰所とす

以上三室は今回工費を投じて新築（昨年九月起工本年四月竣工）されしものにて御座所の前には最も今回珍木奇石を集めて築造されたる御庭あり御庭を隔てゝ遠く御座所と相對するは大社の神山つゞきにて尊きこと言はん方なく神代ながらの緑りの色、萬古の風を奏する松風の音など　殿下の御感慨に深からんかと推し量るさへ恐れ多し

千家邸御休憩

稜威大將の海戰談　殿下には大社御參拜の儀濟ませ玉ひて會所にて再び御乘車�sれ内より大鳥居前に出させられ此處にて勅待申したる列外之に隨ひ大鳥居通りより北門に廻り宮内に入りて十一時四十五分と云ふに千家邸に着せ給ふ車寄には千家男爵出迎ひ新築の便殿へ御先導申上ぐ直に千家男及び千家宮司に拜謁を賜ふ其他御門内にて拜拜を賜りたるものは

千家男爵家族二名、家従四名、老女二名、大社教本院議員十八名

にして邸内各室には縣事務員の休憩室を設けられ　殿下御晝餐の後ち供奉員一同遂に縣事務員は各室に於て貴衆兩院議員及び各新聞記者は圓幅屋旅館に於て午餐を饗せらる　殿下には御晝餐後稜威大將、千家男爵を

召させ給ひ種々打語らせ給ふ内今日恰も大海戦の記念日に相當するを思ひ出させ給ひ種々御下問ありしに大將より當時の戦況を申上げたり而て　殿下には御寫眞機を採らせ玉ひて御便殿の庭園、後醍醐帝の宸筆を始め神寶數点御撮影遊ばされたる由承る

夫より東鄕大將は御座所を退出し別室に於て休憩中同室に右賀野侯局長松永爵事等あり談は同じく大海戦の事に及びて知事は一昨年の本日は石州より出雲隠岐何處とも絶筆の散々として開台比様樂町の賑きは殊に手に取るが如くに遙うたる處なる由を述べたるに大將には ポケットより時計を取出して一驚して曰く「恰度二時です今頃でした、敵の戦艦二隻を撃沈したので之で勝利は我にありと確信する事が出來ました」と打語られて不堪當年の事を回想して感慨一入切なるものゝ如く而して「波羅的艦隊のバルチック出航の當時日本では種々の説があつて來ないと云ひ來ると云ひ居なと迄もやると云ふ次第でしたが私(大將)は始から來るとは思つて居たが其後段々露國が種々な手で運送船を浮山買上げたから愈よ來るに違ひないと決心して此方では夫々其作戦方略を講じたる一事より活動力のイズムルート艦の敗沉したるを追逐したるに及はなかつたのは時間の後れたると我艦隊に此の運力がなかつた爲め修備なかつた事等の事共種々打語られたると

寶物御上覧

出雲大社寶物は千家宮司詳細に後醍醐帝の論旨外六通を對照して御説明申上たるに御感斜ならず御覧の矢は御手に渡らせられ親しく御上覧あらせられたり

弓術御嗜好

三澤宮司の大弓に就き　殿下にも弓を御嗜好あらせらるゝやに洩れ承はりし旨千家男爵より言上せしに　殿下には往る好びが云々と御満喜あり御微笑を洩らさせ給へり又　皇孫殿下博覧會に御臨の際

大社御參拜御豊饌所

千家宮司館

軍艦模型大砲其外教育品御覧ありしが殊に教育品に御嘉尚あらせらるゝ旨予案勇爵より宣上せしに
殿下には頗る御満悦あらせられしと

出雲大社の神宝

出雲大社に於て
皇太子殿下の御覧に供せられし御宝は左の如し

後醍醐天皇出雲大社へ王道再興精願の綸旨　一通

後綸旨曰

右具王道之再興者専尊神明之加護也況乎当社之災焉四海之太平仍垂感応臣為令復正理挙義兵所被企征伐也遥
得官軍戦勝之利可尋朝廷静謐之化旨応精誠可新申願願令成就給宜可依請者依

天気執如件

元弘三年三月十四日　　左中弁藤原

件綸旨神主館

後醍醐天皇出雲大社へ宝剣精望の綸旨　一通

為被用宝剣代御神宝内有御願状可参被者
綸旨如此悉之

三月十七日　　左中弁藤原

件綸旨神主館

後醍醐天皇出雲大社へ出雲國國富庄永室庄
御寄附の綸旨　一通
出雲國國富庄永室庄所被寄附也殊數大社興隆奉祈朝廷之安全者
綸旨如此悉之以狀
元弘三年四月十一日

杵築大社神主館

後醍醐天皇出雲大社へ本所號を停めさせられ神領等一圓管領神事を興行すべき綸旨　一通
當社事所被止本所號也神領等圓致管領可興行神事者
天氣如此悉之以狀
元弘三年十二月十日

杵築大社國造館

後醍醐天皇出雲大社造營を先例に任せ行ふべき綸旨　一通
當社造營事任先例可被致其沙汰者
天氣如此悉之以狀
建武元年七月五日

杵築大社國造館

勘解由次官肇押

宮内卿肇押

宮内卿肇押

後醍醐天皇出雲大社へ肥後國八代庄地頭分
内高田郷志紀河内村御寄附の綸旨　一通
肥後國八代地頭分内高田郷内志紀河内村寄進粁梁大社之由被聞食畢者
天氣如此悉之以狀
建武五年五月廿六日　　大　膳　大　夫　判
伯耆太夫判官殿

後醍醐天皇御寄附谷風の綸旨　壹面
元弘年中　後醍醐天皇より御寄附あらせらるる文政十一年十一月　光格天皇叡覧あらせらるへき旨　勅命に
より禁中に奉る爾後禁中に留めさせ給ひて同十三年九月御返しあらせられしか其際殊勝の古器叡感最も深
きの旨を以て更に御修覆を加へ新に之を納むる袋と　御調製あらせられ賞金貳拾圓を賜へさせられたり

火燧臼火燧杵
我國最古の發火器にして臼は檜にて作られ杵は密木にて作られたり此臼毎年十一月廿三日即ち新嘗祭に出
雲國八束郡熊野神社より出雲大社並平濱國造に調進するの古例なり是熊野神社に於ける熊野櫛御食野命
か初めて火燧臼火燧杵を出雲大社の齋主にして出雲國造の元祖なる天穂日命に授け給ひし由緒あればなる
へし天穂日命の受け給へし火燧臼火燧杵は平濱國造相傳の家寶として保管せらる出雲大社に於ては氏子を
御供の飯を焚くに用ひらるゝなり

國寶銅鐸埋蔵物
壹箇
壽永秋野の景　高倉天皇安元元年乙未十一月廿九日（明治四十年より七百三十三年前）出雲大社造営遷宮の

篠調製せられて我國に於ける鑑細蒔繪の成功せる最初のものなり明治三十五年七月三十一日國寶に指定せられたり此棺筒が嚴島神社寶物中の棺筒に比して優れりとは高村光雲の鑑定なり鑑細蒔繪の古きもの高野山帝にあれども唐製なり日本製にして大社の棺筒の如き頗る珍とするに足れりとは是非同人の批評なり

琴板同箱

上古の樂器にして頗る簡古なり出雲大社古傳祭典中新嘗祭（十一月二十三日夜）的射祭（五月十四日大祭）御澄井祭（十月十七日十二月二十七日）に之を用ふ琴板は杉にて製し箱は柳にて製したるものなり

琅玕曲玉　　壹顆

石質琅玕にして文學博士小杉榲村其他著名の考古學者はいづれも我國に類稀なる優秀の品なりといへり

筑紫鉾（無銘にして長さ九寸五分のもの）　　壹口

天孫人種の紀念品なり人類學者理學博士坪井正五郎九州において之か錆形を發見せしより筑紫鉾の由來判然たるに至れり

右親　經三寸六分裏面小菊の模樣あり　　壹面

鎌倉時代の作物ともいひ或は足利時代の作物ともいへり以上琅玕曲玉、筑紫鉾、右親とも寛文年中出雲大社造營の節御掘内の地中より掘出せるものなり

足利義敎の甲冑　　壹副箱入

後土御門天皇應元元年十月二十三日出雲大社假殿式遷宮を行はれし際將軍足利義敎の寄附にかゝるものなり

豐臣秀吉佩刀　銘光忠長さ二尺三寸　　壹口

慶長十四年三月二十八日出雲大社造營遷宮の節豐臣秀頼遣使君の寄附にして田森出雲守をして捧持供奉せ

しめられたるものなり

白生地　長さ二尺六寸二分　　壹管

豊公征韓の役明將李如松が青川駿河守廣家の武勇を賞して贈りしものにして廣家より國籠のため寄附せられしものなり

青雲羽矢　　五本箇入

寛保四年十一月徳川幕府老中板倉周防守勝澄の寄附に係る弓箭の稽傳を得たる者の用ふるものなりといふ

大弓　厚さ一寸二分　　壹張

出雲國大原郡三澤の庄城主三澤三郎右衛門尉爲幸の用ひしものにして同人の寄附にかゝる同人は尼子十勇士の一人なり

右青銅砲　　壹門

明治廿三年清國事變の戰利品北京の城門に据付けありしものなり熊本高等學校教授獨逸人ドクトル、アー、ハーン砲尾に記せる羅甸文字に依り取調へしに今を去ること二百八十五年前歐洲にて製造せしものにて今日に存するものは極めて稀なりといふ英國工學士ジェー、タレンツ、は此砲は歐洲にも類る於らしき品にて許來此砲を觀んがために特に渡清する西洋人も多々あるならんとまでに激賞せり

奇稻田比賣命神像　　壹軀

奇稻田比賣命は出雲大社大神の御母神なり此神像は松江市の美術家荒川龍齋の彫刻せし木像にて西暦千八百九十五年（明治二十五年）巴米利加合衆國シカヽの世界大博覽會に出品し一等賞を得たり出品前演藝室に於て　皇后陛下の御覽を賜はせり明治二十七年同人より寄附同人は材料の選擇各種の考證に苦心すること多年遂に此大作を成就せり

古代の厳美　　勾玉六個

厳美は古代祭事に用ふる物語にて其質によりて年代を分つ此三種の内一種は神武天皇紀に天之香具山の赤土を以て八十瓮を造るとあるそのものと同じく即ち時の國造か出雲大社の大神を齋きまつるに用ひしものにて最も古く一種は紀元二千二三百年頃のもの一種は紀元千五六百年頃のものなり此破片を發見せし洞所は出雲大社の御境内第一の御門櫓門より続らせる玉垣と第二の御門八足門より続らせる瑞垣との間にて發見せし人は福岡市江藤正澄なり同人は考古の道に精通し家に藏する考古學上の參考品極めて多しと云ふ明治三十一年　東宮殿下福岡市へ行啓右御物を西公園聚美亭に陳列して御覽に供し爭うし當時の黙知事の勘弁によりて御説明を申上げたり同人明治四十年五月十四日出雲大社大祭に參詣し十六日御門内の勾玉を許され御境内發掘の際圖らずも右三種の厳美の破片を發見し鑑識考査の上にて之を千家宮司に贈りしものなり

雷斧　　壹個

明治二十六年十月廿日工學士大原順之助出雲大社に至し御境内發掘の際之を發見して千家宮司に贈りしものなり雷斧は石器時代の遺物にて種々あれどもこれは磨製石斧と稱するものなり雨雷にて土砂流失し偶々此等の遺物人目に觸るゝまでに露出することあり之を雷神の投下せるものとなす是雷斧の稱ある所以なり

千家宮御上覽と御言葉

殿下には千家邸玄關より御案内御先導せられしに構造宏壯にして奇麗なりとの御言葉あり尚は御座所にても全棟御賞め遊ばされしと

全部の家室に付ては男爵自ら御説明申上げられしに　殿下には時々御笑顔を洩らさせられし程にて頗る御意に叶ひしといふ

千家家へ恩賜品

鏡川郡献納品木彫刻花ニ武士

（菱川師宣作）

御下賜

千家出雲大社宮司へ

御紋付（菊花）銀盃　壹組

御紋付（菊花金章）銀花瓶　壹個

紅白縮緬　貳疋

出雲大社々務所及千家々扶以下へ　金若干

大社教本院職員中へ　金若干

献上品

千家男爵并に大社宮司より献上せし品

一青磁香爐　一青磁風鎮　一写真帖

全管長より献上品

一青磁壺一輪挿花瓶　壹個

東郷大将手植

東郷大将は千家邸内及大社教院内に何れも松の手植せり

杵築中學へ行啓

午後二時三十分千家旅館御出門御機嫌麗はしく二時四十分杵築中學校へ成らせらる其観者堵の如く

殿下には一々御會釋あらせらる全校入口には杉葉造の大旅門を設け日章を交叉し生徒は武裝にて校門外に整列し職員は門内に最敬禮を表し奉迎せり校長は直ちに講堂内の御座所へ御案内申上げ加藤校長申村、並老名兩教諭特に拜謁を賜はる校長は曾て知事を經て次第書を添へ學校狀況一覽表を捧呈せり

夫れより教育品陳列所に入らせられ御臺覽直ちに生徒の運動を御覽はせ御思召にて機械の製作所に出御あらせられ四五年生の中隊教練および三年生以下の集体操を御覽あらせられしが此集体操は至極御意に叶ひさせられ体操教員の身分等を御下問あらき此時曾て知事は御退場を申上げたるも　殿下には御答もなく御熱心に御覽遊ばされたり御下問の際を辱ふせる教員は全校出身の伍堤正直（日本体育會体操學校卒業）及び福田一等主計の二氏なり

殿下は晉ひ御座所に入御少時御小憩の後校庭に松の御手植あり全校へ御案内と並五十回を御下問あり生徒成績品は全部御持歸となり御列例の如き還御の途に就かせらる

御憩所の后には藤間所有の金屏風を左右に立て生花を備へ最も嚴かに見受けらる其他供奉員等の休憩室には大村、和田、藤井、鹽井、諸氏の屏風數双備付たり

東鄕大將手植

全校には東鄕大將も松の手植せられたり

竹築町ノ設備裝飾其他

竹築町の煙火

殿下御着あらせらるゝや午前中に左の五發と

號砲に續發　水平日光分煙　時雨　鶴雷鳴黑煙亂流后の時雨　柳に五色の球

又午后には左の五發の煙火を打ち揚げたり

黒烟の曲　雲間飜れ五色花卓　陸軍旗　末廣　說部に黄烟三疋縄より分壘の曲

町内馬場の入口

杉葉にて造り上げたる大鳥門に奉迎の二字を松笠にて顯したる千家御芸妓所前も同樣の大鳥門を作り飾は奉迎の二字を松の若芽にて顯はしたるは常盤かきはに動きなき御代を諷ふく印象にて場氣濃々たるを覺ゆるなりその他國旗を交叉し或は軒提燈を張り廻はされて最も壯嚴に飾り立てられたり

提燈行列

午後六時より桂榮甲學校生徒を始め高等尋常校生徒の提灯行列あり町内高燈の巷と變ず盛なりき又當日は昨年五月廿七日の就任紀念日に當り日本大海戰に於て露艦を全滅し大勝を世界に謳かせたる日にてしかも其指揮官たりし東郷大將の來行ありしをもつて町民は非常に歡喜し紀念スタンプを給葉書に押捺して紀念とせり又同町高等小學校においても行啓紀念スタンプを押捺せり

▲大鳥居前に十二個の竿を立て萬國旗を掲ぐ▲御通路筋各戸に日の丸附提灯を新調して掲ぐ▲桂榮町消防組の事務所は大谷ワキ方▲北越組の尋常小學校内に警官詰所を設く▲荒木池田清之助方に藤川鄕私立衛生會の臨急治療所を設き醫師北峯太郎氏及び看護婦二人詰切る▲馬車置場及び騎兵馬繋場は大社發組電社庭、憲兵馬繋場は千家管長邸の庭▲桂榮町中御通行筋には一帶に白砂を敷きて淸淨し馬場、大鳥居、鳥居、宮内の各町角側には二紅三白の幔幕を引廻し藤川鄕御滯在中は町内全家に新調の日章旗と日の丸燈提灯を揚揚することゝし萬國旗を以て町内に裝飾を施せり▲桂榮郵便局は御行啓の當日千家邸内に臨時出張所を設け郵便電信事務を取扱ふ又警邏、郡役所の出張所は千家門前桑木方に設け町役場の出張所は馬場藤木卖市方なり

今市還御

五月廿七日

本日は朝來快晴にして一点の浮雲だもなく西よりの微風は鹽冷平原にうよ〳〵と戰き　殿下の幸福を祝するに似たり　殿下には御機嫌麗しく御列は昨の如く仕業中學校御發車あらせらるる沿道南側には山の如く簇簇迎者并學童の蝟集せるに對し御會釋あらせられつゝ午後四時三十分今市御旅館へ還御あらせらる

御使差遣

全　日

平田町平田兩全株式會社
同　町島根縣農事講習所
同町島根縣原蠶種製造所

〈御使

東宮御使伏澤武官の一行は暮鐘響渡先發し前日今市に出廻はれる山口縣農事講習所長、御使、仕入、會同縣屬、三島平田町長渡部氏等の列を立して午前九時三十分鹽冷平田町に到着先つ農事講習所、原蠶種製造所に入る同所には職員生徒門前に出迎へ御使は山口所長の案内にて休憩室に入り所長は同所並に原蠶種製造所の概況取調書二冊を捧呈し御下問に對して一々答申する處あり夫より所長の先導にて生徒の飼育せる蠶兒を視察し種々說明を聞きたる後再び休憩室に入り拂蠶製繭の御諭示を傳ひ約三十分にして退出奉迎前と同しく直に平田製糸場及羽二重傳習所に赴く同所にては木佐社長の案内にて工場を親しく巡視せられ小憩中社長に對して　殿下よりの有難き御說を傳へ終て來佐德三郎氏助にて休憩を爲し十時三十分出發せり　此日製糸場前には緑門を造り町內は大國旗小國旗を掲け幔幕を吊り新砂を敷きて敬意を表し各學校生徒、軍人、町內主なる人々等約千五百名は町境にて一般町民は町內に平田製糸株主は本町にて奉迎し總ヲ

燈火數十臺を打揭けて組る盛況を呈したり御使出發の後農事講習所にては山口所長平田製糸場にては木佐場長何れも生徒工女に對して御使差遣の聖旨を奉體して益勵精すべき旨訓示する處ありたり

農事試驗場へ御使

今曉御旅宿より熊川郡塩冶村なる勸立農事試驗場へ御使差遣あらせらる江間同場長は此日早朝より出勤の爲め御旅館に伺候し御使濱來武官は仕人一人、内田屬技手、掠木熊川郡書記を隨へ中島警部先驅して午前八時十五分同場に着す門内には掠本技手、田中八田分場長以下職員一同出迎をなし江間場長の先導にて休憩室に入る室内には四大綠章の掛圖、及び今を盛りと咲き誇へる甘藷、梁粟英、赤詰草、白詰草の鉢植、三十七八年種苗圃の生産物統計、稻種の種類別の現品菓實等を陳列して一覽に供したるに御使は四大綠章、稻作の種類、生産の數量等を詳細に質問し　殿下よりの御諚を傳へられより農作圃に歩を移して場長一々說明をなして圃内隈なく觀察され小憩の後御旅館に直に還啓申上げたりと

御陪食仰付

東鄕大將に陪食仰せ付けらる

御下賜

遠藤忠右衛門へ下賜品左の如し

御紋章附銀盃　壹個
御紋章附銀花瓶　壹個
御手當金　二百五拾圓

紅白饅頭　二匹
金百圓（仝家召使へ）酒肴を賜る
村上嶽川郡長へ、
一酒肴料　著手
一時　地　壹反
今市及柄窪町役場員外奉迎關係者へ、
一金參百圓　下賜
今市郵便局長と事務員及集配人へ、
一酒肴料　下賜
柄窪郵便局長と事務員及集配人へ、
一酒肴料　下賜
高齢者へ下賜
御菓子料（百歳以上の者壹圓五十錢づゝ、九十歳以上壹圓づゝ、八十歳以上五十錢づゝ）
廢兵及戰病死軍人遺族へ
御菓子一包づゝ　下賜
孝子節婦の受賞者中八名へ
御菓子料　下賜

御上覽

瑞鳥御上覧

嘉田伝石郡長は本年二月頃同郡波多村山林に於て捕獲したる白色なる山鳥の剥製となしたるものを上覧に供したり

嶺雲の御前彫刻

至大の栄誉

蔵川鉉の彫刻家荒川嶺雲氏は　陛下伴梁より御召あらせられ御食事の後御前一刀彫を御覧に供せり板巾は尺さ二寸直径一尺五六寸ばなる神鏡形に削き上げたるものにて之れに二見浦を書き波を配したるを一刀に彫り上げられし所極めて　殿下の御意に召し今一枚をとの御諚あり嶺雲乃ち鏡像としてありし富士形の地板に竹を彫りたれば　殿下には玉夢を驚させ給ひ彫刻室に御手を煩はさせ給ひて匿し給ひね恐くて出来上れば更に御詞あり是迄後にても今夜中に尚は一二枚彫り尽くべし何れも真て遣はすとの御あり依に即座に金二千疋の御下賜ありければ嶺雲絶大の光栄を荷ひ其の儘御前を退き御蔵前内の一室にて屏風形の地板に松と富士とを彫り長方形の地板に星の揺る絹を彫刻して掛軸したる由勿論氏が刻苦多年に渉れる斉精の結果なるべきも小刀の画目比上なかるべし因に氏の略歴を聞くに年齢四十四歳吉十五年荒川嶺雲の門に入り爾来二星霜の弟子となり嶺年にして一旦帰郷せしが三十年再び上京して四洋美術の研究をなし第四回第五回共進覧会を初め各種の美覧会競技会等に出品して銀銅の賞牌を受けたる事数次ある就中三十二年四月　皇后陛下の日本美術美覧会へ行啓の節届彫御上覧を賜りて至大の面目を施したる事あるに今回亦　東宮殿下の御前に御を繋り其無上の光栄として欣喜雀躍措く処を知らず益々精進の為めに刻精すべき旨語り居れり

献上品

筑川郡より左の品々を献上せり

一、木彫置き物（花と武士）　彫刻者　筑川郡久村　荒川嶺雲
一、生糸一括　加工者　筑川郡作楽町大字作楽東　無限責任作楽製糸買揚合製造
一、生糸一括　筑川郡平田町　平田雨金合社製造
一、薄絹（方言振日羽二重）二疋　製造者　右　仝　社
一、千温縮二反目　製造者　筑川郡平田町　原文吉
仝　仝　仝　町　飯塚才次郎

因に右平田温縮は天保十年始めて油不引千温縮を製造することを得しかは時の藩主に献せしに大に賞玩せられ御用温縮を命せらるゝと全時に御紋をも使用する事を許され以来油不引千温縮と称して世の高評を博したり明治十八年再び政其當今の御邦入千温縮を發明することを得大に世間に歓迎せらるゝ處となりし者にして明治廿八年第四回内國勧業博覧會に出品し宮内省へ御買上の栄を賜はり次て五二會全國品評會および第五回博覧會に出品して褒賞を得再び宮内省へ御買上の栄を賜ふに至りし者なり最近一ヶ年生産高は二千貫目にして其販路は東京、京都、大阪、廣島等なり

献納の内「花と武士」と題する木彫置物人物の製作は荒川嶺雲氏が六年間丹精の結果今回漸く出来せる者にて圖案は義家の勿来關なるが當て氏の大作として称せられし村上義光奉旗の作に比し更に一層の大作なりと云ふ（価格六百餘圓）

飯石郡より

被岸　　壹貫匁
美濃紙　　若干

高齢者献納品

總計四百七十八点内百歳以上は百二歳百一歳の女、百三歳の男の三人にして内譯左の如し

詠草及書畫	十五	生米類	百四十三
雜穀類	十六	米粉糸	八十五
織物		草履草鞋	百七十二

（品名姓名ともに巻尾に詳記せり）

遠藤嘉右衛門氏より蓬參献上

因に云ふ　殿下の御休憩は一切御旅宿より差出すべきにあらねど遠藤氏は村がな　殿下の御思召に適はせらるゝ事もと昨年來種々と按上頻ひたるに不圖　殿下尚姜を好ませられ時折御膳羹を差上る様思召の御係に御下命あらせらるゝ事を聞れ及びたるより無上なく打喜び特に御後の高野山より最も精良の蓬姜を取寄せ大切に保存し　殿下若御の節は供獻の最を盡上げ奉ひに御感許にも相成らんには今市一流の打方を以て精選し調理し進んで　殿下に參らすべしと誠て苦心せられしに全氏の赤心貫徹して今回御感許せられしものなり尚は當夜打者は今市本町當家店羽根屋事石原熊市が昨冬以來遠藤氏よれ之を預りて大切に保存し扱て　殿下御着當日の夕方熊市は沐浴して御調理室に召され十分手先の消毒法を行はれたる上御下拵しの白服を着し右掌料を用ひて入念に打ち盛にて黒塗り金御紋菜箱の蓋に盛り（約當地の二膳盛も位）たるを四個差出したり是より先供奉官の御毒見ありたれば茄でゝより約十分間ばかり經ちて　殿下には召されたるが味の分御意に適ひ満足三盛りを召させられ調理方宜しとの御褒めさへありしとは獨り遠藤氏の榮誉のみならず熊市は實に一生の面目を施したりと云ふべし

御旅館内陳列物産左の如し

簸川郡

八雲塗硯箱　　簸治村　吾郷房藏
木彫幼兒の置物金龍桂氣球久木村　荒川嶺雲
輪挿椿　　杵築村　勝島寛雄
花籠に椿　　同上　同　人
新雪掛木箱　　直江村　川井　六兵衛
譯前
生絲　　平田商全株式會社
糀木眞田　　大津村合資會社菱水社
生絲　　杵築村　藤井又右衛門
清酒白菊　　今市町　米原　秀三郎
紅葉に小鳥　　杵築村　勝島寛雄
清酒白梅　　今市町　山田金右衛門
煎茶玉露　　直江村　黒田　鶴五郎
生姜漬　　平田町　來間義重
茸　　同　平田商全株式會社
夏密柑　　遙堪村　古川　納三郎
食鹽　　杵築村　大村　貞藏
鐵詰岡田製鐵詰松茸岡論神浜今市町加藤　清三郎

八雲塗茶器　　簸治村　吾郷房藏
改眞綿　　直江村　川井　六兵衛
綿綿　　同上　勝島寛雄
八雲綿　　直江村　直江合資會社
懸手拭へ　　杵築村　勝島寛雄
菊菊に栗鼠　　杵築村　勝島寛雄
生絲　　平田商全株式會社長木佐助三郎
醬油玉椿　　今市町　米原　長五郎
清酒白雪　　同上　佐藤文造
清酒大山　　今市町　原　由太郎
三色縮緬黄　　杵築町　前島　與四郎
煎茶　　直江村　平井　茂市
千温泉　　平田町　原　文吉
玄米　　簸川郡
夏密柑　　遙堪村　佐々木　傳市
鐵詰岡田鉄　　今市町　小玉　常八
伏せ籠に金魚鳥　　杵築村　勝島寛雄

一番摺醫師　佐香村　山下　龜吉　河豚皮
十六島海苔　北浦村　渡部　金三郎　晒布
飯石郡
兒童書方成績九部　各小學校　裡葺
米（糯玄米）　郡農會　炭酸水
清酒　掛谷村　竹下　義造　葉煙草
經木眞田　三刀屋經木眞田製造所　申折
綱、紐　吉田村　田部長右衛門

御買上品

物産陳列所に於ける御買上品左の如し

八雲盆栽植壹個　鐵冶村　吾郷　房藏　八雲盆栽茶入壹個
經木眞珠木彫品壹個　久木村　荒川　嘉藏　改良箱壹反
貝細工蜜斗押壹個　杵築町　勝島　寬雄　貝細工一輪挿壹個
貝細工統挿壹個　同　　全　　人　　八雲論壹反
羊羹壹箱　杵築町　前島　與四郎　煎茶玉露壹斤
生姜糖壹箱　平田町　來間　善重　綱田振捨鐘
清酒白梅壹打　今市町　山田金右衛門　清酒白雪
炭酸水參打　飯石郡頓原村　片山　文次郎

杵築町　藤井又右衛門
鵜鷺村　杉谷千代次郎
綱山村　秦　豐市
頓原村　片山　文次郎
中野村　福田　半藏
飯石村　鐵川　與一郎

鐵冶村　吾郷　房藏
直江町　川井　六兵衛
杵築町　勝島　寬雄
直江村　直江合資會社
直江村　黒田　爲五郎
今市町　加藤　清三郎
今市町　佐藤　文造

奉拜者

赤十字特別社員三十四名　參與委員二百二十二名　御旅館所在地の廣兵五名　（以上正門內）
矯人會有功章受領者二名（內縣石部一名）　孝婦者節婦、義僕受賞者四十五名（甕川四十三名縣石二名）
教育褒賞受領者一名（縣石部）　教育功績狀受領者十五名（甕川十一名縣石四名）　戰病死者軍人遺族二百八十七名（甕川二百五十二名縣石部三十五名）　（以上正門外）
總計六百十三名なり（何れも巻尾に氏名を詳記す）

今市町ノ裝飾ト設備

甕川郡の用意

甕川郡にては今回恩賜の各新聞記者に對し甕川郡治一班、同地理歷史一班、甕川郡略圖、善行錄及び旅館宿舍一覽表、寫眞、御使御差遣場所の說明其他各種參照品に關する極めて詳細なる說明書を配付せり

應急治療團配置

甕川郡私立衛生會にては　殿下行啓に際し拜謁者中萬一の急病を慮り救治するの目的にて左の如く手配せり

町村名	場所	醫師名	町村名	場所	醫師名
莊原	鍋越芳之助方	吉岡心齋	荒木	池田清之助方	北巖太郎
直江原	莊藏方	高田靜齋	今市	根川柳四郎方	三原介人
今市	根川柳四郎方	泊傳四郎	細井宮林	助次郎方	武田忠之助

今市　根垣柳四郎方　小林　仁蔵　　江南　森山　トヨ方　中尾　淳蔵
高徳　高野　源市方　佐藤春之助　　田岐　岸　勘蔵方　春日　成義
田借　今村九一郎方　今村九一郎

今市町の装飾

町の東端上成橋南詰に高さ三間半の大アーチを建設す▲本町魚鳥會社の前に十間の竿を立て新調の本モスリン萬國旗を掲ぐ▲町内一般に掲ぐる爲め二紅三白の幔幕二千四百個（一里四丁）を新調せり▲商は各戸提灯に日の丸の提燈と國旗を掲ぐ

御慰み

（一）煙火御着の日午後四時半より九時迄に二十五發、二日目同時刻に二十發、御立の時五發を打揚ぐ（二）御着の日午後七時半より今市、瓶江、高徳、大津、鹽谷、川跡、四郷の七町村高等小學校生は八百五六十人ノ提燈行列を爲す（三）女子師範學校行啓の時今市特有の紙高四個、即ち『奉』『迎』『行』『啓』の文字を現はせるものに大呼りを附けて揚ぐ（四）荒川鎭雪氏の一刀彫りなり

二旅館の幔幕

東部大將の旅館大念寺には大將の定紋（丸に三蓋）淺黄に染めたる白天竺の幔幕を侍從長中山侯爵の旅館今園喜平氏方には候爵定紋（丸に蔦澁菱）を染めたる全上同幕を打つ

警戒と出張

殿下御着の當日及び御出發の日巡査十六人巡査行啓の日は十八人を町内各要部に配置し御旅館周圍は十五人（三十人中半數交代）を以て昼夜警戒す▲警防組事務所を本町佐々木又次方に設け二名づゝ五組町内を見廻りて昼夜警戒す▲郡役所奉迎事務所を本町佐藤甚市方に設く

奉迎送位置

今市町に於ける奉迎送者位置左の如く定め當日前夫々立札をなせり

▲奉迎　（大津村戰死者記念碑前を基點として西へ國道南側列順に揭ぐ）

愛國婦人會員（今市、大津、上津の三町、以下同ト）戰病死者遺族、廢兵、高齡者、帶劍者在鄉軍人會員、青年團員、武德會員、靑兵振興會員、水難救濟會員、海事協會員、僧侶（以下高瀨川筋國道北側上成場迄）上津村小學校、女子師範學校、高等女學校、今市尋常小學校（以下高瀨川向土手）今市町一般非戰人、今市區裁判所員、今市稅務署員（以下今市町字上成）今市町奉迎委員、有爵者、高等官、奏任待遇者有位帶劍者、受終者（以下馬役所前右折）鏡川筋在鄉軍人詰所（以下御旅宿向ふ側東へ上る）今市町女子高等小學校百四十人、仝町高等小學校三百八十八人

▲奉送　（字新町枠結小路を基點として西へ南側列順に揭ぐ）

今市區裁判所員、今市稅務署員、在鄉軍人、帶劍者戰病死者遺族、廢兵、高齡者、在鄉青年、鏡川、飯石兩郡者、仝上有位者、仝上高等官奏任待遇者、仝上有爵者、今市高等小學校、今市尋常小學學校、今市女兒高等小學校、高等女學校、女子師範學校、今市町委員

雜　況

▲菓物と生魚　節穀所にては御料食品中菓物は梨を最も多く用意せり又た鏡川筋鵜濱村大字宮内に大生洲を設け鯛、キス等の生魚を圍へり是は御入用の當日生きたるまゝ魚にて廻送し枠築對より柳川川に漕ぎ入り夫より高瀨川を溯り御旅宿の裏手より陸揚する筈は活船、活小鳥等を保管す▲御料清水は大津村淸心園より汲み取らる又御料牛乳は今市町にて最も信用ある牛乳屋大野傳之助が御用を命せられ三日間每日精

乳九合づゝを御旅館へ差出せり之に替う勝校所に於ては鎗川鳥出西村にて一頭（アラオメ一回搾程）朝山村に於て一頭（メボメ一回搾程）を選択し二十一日を以て天野方へ引渡したれば同家にては二回に四回の牛舎を新築して改宿し左の食物（一日分）を與へて大田獣醫監督の下に衛生油断なく飼養しつゝあり

大麥二升、麸一斗、生大豆一升、甘藷一貫五百目、ガス幸若干、糠米一升、乾草、藁、水は五井を限る

牛乳搾取の際、搾取者は勝校所より渡されたる新らしき白服白帽を着け靴を穿ちたる上乳牛を搾取場に牽き出し先づ攝氏四十度の温湯をガゼに浸して牛の乳房を清拭し次で石鹸を以て乳房を洗滌し又た冒進を以て洗滌し盡る上靜かに乳汁を搾取し硝子の牛乳瓶三個に入れ別々に三個の籠箱に收めて御旅館へ差出すものにて例れの御滞泊地に於ても牛乳搾取の手順は之と同一なり

▲成績品御持歸宮御旅館に陳列したる鎗川、仁多、飯石三郡の各小學校生徒の成績品は金花御持歸りの事に相成りたり

煙火打揚

桂梁より還御の後左の五發の煙火を打ち揚けたり

日の出に當　五色煙雷　物分煙双龍　雷煙双龍玉吹　雷后時雨大陽

又夜間には左の十五發を打ち揚ぐ觀る見物なりし

變色月入て雷　日月去て雷柳に蛍　時雨后日月　除眼月入て雷　五色變色煙品　玉吹鳳龍后雷

柳に變色橋遠星　登龍一詳揚て雷　金玉銀玉二段雷　雷中飛龍雷鳴　晴夜引分雷　雷后双龍玉吹

蓋龍玉安産　富士颪龍

陛下御發車前左の五發の煙火を打ち揚けたり

日光分銅双龍　黒雲光雷　時雨后日月　玉追龍　雷雲間大陽

提灯行列

今市、直江、高松、大津、錦浦、川跡、四部の七町村の小學生徒約五千今市小學校に集り整列の上順序繰出したるが凱る壯觀にして御旅館前に於て君が代を歌ひ夫より本町を東に向ひ大念寺にて解散せり

殿下には此行列を御車寄に於て御覽あり御機嫌麗しかりし

松平子爵千家男爵御暇申上たり

子爵松平直平は千家男爵と共に單獨拜謁を賜り子爵には更に特別拜謁を賜ひ「色々世話に成つた身体を大切にせよ」との有難御諚あり子爵は御暇乞を申上げて退出今市町界迄奉送しられより陰路玉湯温泉に向ひ同所に一泊の上發程せられたり

千家男爵は今市にて拜謁を賜り御暇申上られたり

新聞記者招待會

村上鄙長主催の招待會は東山公園に開かる主人側には鄙長を筆頭として、鄙會議長高橋久次郎、同副議長三島彌之助及び當鄙要三郎の諸氏にして後には藤本定安、本間則忠の兩軍醫も來り會せり高橋久次郎氏開會を告げて種々祝啓の盛事を說き此の盛事を天下に紹介し得るものは唯一本の筆あるのみとて招待の趣旨を演ふれば大坂朝日の五十嵐氏、京坂岡業者を代表して出席は名にし負ふ右朝廷の時にして來遊の意自ら禁ずる能はざりし此の時、祝啓の一大慶事に會せるは長く記念すべき事なりとて鄙長以下の勞を謝して宴に移る

岡本山陰記者も越て左の演說を述へたり

村上鄙長は鄙産物品に係る冠川温泉氏の大作「花と武士」の由來を紹介せられ吾輩は「喜ひと淚」といふ意味に於て一言せん

喜ひとは何んそ言葉は五味八珍の美詞を列ぬるなり其他の醜態の如き固より以て問ふ所にあらず唯通信の便宜さへ許し給はゞ操觚者を派遣するに於てコレ以上の歓待なし而るに今日此の地に来れば最初にして周到なる通信は実に神江以上なりしといふに悼らず是れ言葉の最も喜ひとする所なり

実とは何んそ今日此の地に来らんとする途次五六の老農老媼がマメ〳〵しくも御道筋の小石を拾ひ治ひては取除け以て御道筋の完全を計らんとす其志や優に称すべしコレ全にあらず真心よりしての慇懃溢れて此に出るもの亦以て行啓中の美談なるにあらずや言葉は実に此の事に従けり

云々と高橋氏更に郡民の誠意を紹介して各々感涙し随意に退散せり

聖尊の霊夢

昔には不思議の事もあるもの哉、明治二十五六年の比かと よ遠藤某右衛門氏が一夜の夢に何処とも知らぬ白露の中に古しの絵巻に見る禁庭様とも覚しかりける宏荘正しき貴人の道を開はせ給ふと見て忽ち覚めけるが何となう心怖ぢて胸の動悸はさり背に汗さへ浮びける明の日氏は慮りなくも

実皇陛下山陰道御巡幸の議ありと世の噂さを傳へ聞きければ既てはとばかり前夜の夢を思ひ合はせ且つ訝しみ且つ喜び果ては身体戦慄きて感泣するに至りぬ氏は心ひろかに思ふ様、天ざかる鄙の幸行を迎へまつるには行宮の備へなかる可らず已れにはけなくも新らしき御座の間を邸内に造り設けて待ち挙らんものをと思ひ決めて片時も躊躇はず行在所の設営に着きては後に尋ね是に礼して目度心を尽し演くにして設計のなりければ自ら出に入り袂をふさりて用材を運び明治二十七年六月工を起し宮殿の建造、庭園の経営に六年を閲して三十三年の十二月といふに竣成しぬ去れとなは心に満たぬ点あるより数寄を改め此度を期なとして数年を経たりけるが此間に日清及び日露の戦役などあり　陛下の行幸は幾度か御延期あらせられ遂に今年五月　皇子殿下山陰道行啓の事定まりければ遠藤氏は雀躍して打喜び昨年

來男爵三郎氏と共に製絲設備に力を盡し今や緒緒を見るに一点ばかり缺み憾きに至り後遠藤氏が歿く十五年來日も亦た足らねばかり實業の經營に肝膽を碎きたるは實ての誠忠に由るとはいへ彼の過きにし年の一夜の靈夢に感かされし所ろ振なからすと云ふ

以上述ふるが如く遠藤氏は既往十五年の間、實業經營の築造を續げたれば之に要せし金額三万圓に及べりと云ふは概算にて實は約五万圓にも達しつらんと云ふ昨年來災を罹けて製絲設備の上に心を盡しゝ要三郎氏は早稻田專門學校政治、經濟科卒業生にて今年二十七歳、父に肖て温厚誠實の聞えあり今遠藤志右衛門氏の略歷を得たれば左に掲ぐ

遠藤志右衛門氏略歷

氏字は親久壯時吉三郎と稱す弘化元年八月二十一日生る甲斐國下古志郡田助左衛門の二男なり長すの後今市町遠藤氏に養はれ嗣どらる家世々富めり曾て養父實德を長けて貴院を設け世の窮民を容育し傍ら生業を授られしも明治の初故ありて閉鎖す當主志右衛門幼天性養父に似肖し温厚直實にして忠實慈善の心に富む平生書畫什器を愛し又碁を好み技二段に進む世と爭はす名を求めす選舉に與らす推選を屢はすも勉めに紛擾を避く明治八年地租改正下調人となり又組同の任に就き十年八月選ばれて縣會議員と爲り十一年四月神門郡總代に推さる廿八年八月甲斐國會議員に當選二十七年日清戰役軍資金二百圓紙幣三十二年五月濕川郡貧民救助金四百圓又三十三年五月今市町貧民救助金三百九圓廿四年四月金二百圓を日本赤十字社寄附特別社員に推薦さる廿三年九月　皇太子殿下御結婚奉祝の贊表を捧けて紅綬褒四圓、高橋守雄と倶に市忠名燒花紙一對を歐納し令旨拜戴、三十七年軍資金五百圓歐納濕盂下鳥四十年五月日本赤十字社へ參千圓寄付有功章を受け同月帝國義勇艦隊建設資金五百圓出金海事協會特別會員と爲る其他公益及慈善に對する義舉枚擧に遑あらすと云ふ

今市御發車

五月廿八日

本日朝來一天晴れ渡りて微風上らず町内盛裝は巡道の時に異らず拜觀者各個休何れも靜肅に整列其位置に就く殿下には揃て御出まされし頃く午前八時三十分御旅館御出門御氣色麗はしく御發車あらせらる木戸侍從長御給乘申上げ中山太夫村木武官長は三の馬車にて其他供奉員列外東郷大將以下何の頃く隨ひ保田警視先驅し堀田警務長後衛して御進す　殿下にはいつもなから拜觀の群集に對して一々御會釋を賜ひつゝ過させ給ふ御仁慈の程今更申すも畏こけれ

御出門の際門内に於て主人嘉右衛門、長男憲三郎、ヲク、タミ、モト、キタ、ヤヘの各家族へ拜并を賜はりたり斯くて進博堂々夫宣は祖として祇石の如き御門の大平野を過し沿道には老幼男女を問はず山と川とを埋くの外は總べて拜觀慈の人ならざるはなく晃然一大長蛇の横臥するに似て蓮根詰ゆるなく何れも熱誠を拂げ敬意を表して御道の普に拜觀慈をなす宝に空前の大快事なり今市より鹽谷の間は板石郡各村小學校生徒整列拜慈し古志橋を渡りて暫時にして知井宮本郷なる御野立所に着御あらせらる

山崎岡御野立所

殿下には御少憩中御茶菓あらせられ間上より眞望開闊なる鬼怒川の平野を御覧あり御景色麗しく又知事より此邊縣下農業の最隆盛地なるを言上せり金子一封御下賜あり御休憩約十五分にして警車を進めらる

御野立所は國道の北なる山崎山といふ小岳を切り開きて影蒼たる松原の際に設けらる七尺四面の建物にして屋根は杉皮を葺き其上に杉葉を被ひ屋根裏にも杉葉を設へり國道より其直に幅三間長さ三十間の道路を造り右折して小岳五間を登る

この所の土地は山本氏の所有せるを提供せるものに係り其置路と野立所は磯川郡の事業として經營せるものなるが本日　殿下には岡上に御上りあらせらるゝ御豫定にあらざりしを松永知事より其由來を言上する所あり村民は非常に光榮として　殿下の供覽に入れし松と月桂樹を記念として岡上に移植して大切に保護する計畫なり

二部御少憩所

斯くて直路は山崎岡を登して十時廿分江南村御少憩所なる二部尋常高等小學校に入らせられ全校生徒の製作品御上覽全部御捧呈の栄を荷ふ御寫眞幷に金員を御下賜あり校庭へ東郷大將松の手植せらる

夫より十一時三十分と云ふに田岐村大字小田附近小字淨泉の路上御駐車の處にて御少憩遊ばされ此處より柑菜洞一帶の御展望あらせらる

此日朝來無風にして海波は油の如く近く指呼の間は砂白く遙かに日御碕山の翠巒樫鬱たる其風光眞に絶佳なり

午后〇時二十分田儀村なる田儀尋常小學校御晝餐所へ着御あらせらる

田儀御晝餐所

殿下着御あらせらるゝや村上磯川郡長御先導にて御座所に入らせられ御晝餐を召させらる全校にても生徒の製作品御上覽に供し御捧呈の栄を荷ふ御寫眞幷に金員の御下賜あり東郷大將は校庭へ松の手植せられたり

千家大社宮司、北島、小野兩步將、千家大社教管長、小野日御碕宮司、佐草大社權宮司等田儀遙拜所御晝餐所において拜謁を賜はり御祝申上られたり

構造及裝飾

御霊安所は全校に設けらる校舎は昨年十二月起工、本月二十日の竣工(工費六千餘百圓)にて階屋建物四棟は未成なり從つて未だ舊校舍より移轉せざる程なれば全部新築にて極はめて清艶なり間口二十九間の平家造にして國道の上の高地に在り西北に面す正門は北に設る筈なれども未だ其の見あらず仮りに出入口を西に設く(従門の代りに玄關前左右に松を植う(在鄉軍人會寄贈)玄關を入りて右折し一間半の廊架を行くと七間にして御座所なり四間に五間にて縞ズックを布き詰め東北に寄せて金屏風を建てプラシを布き御座を設く御座の正面壁に寄せて戰績品を陳列し側らに盤裏生花を飾る西面に隣れる四間に五間の室を仕切りて供進所及び供奉官室とせり

田儀村の設備其他雜況

▲二十六日より三夜間提灯を點す▲二紅三白の幔幕六百間と國旗二百を新調せり▲駐在所、村役場の出張事務所を學校附近の川上利太郎方に設く▲大字田儀背師今村九一郎氏方に縣川島私立衛生會の應急治療園を設け看護婦二人詰切る▲行啓記念として村有志十名より金三百圓を學校に寄附す▲同校にては記念學林三町一畝十九歩、學校附載地一町六反六畝十歩を設く▲校舍の裝飾、庭園移植は全村戰捷記念青年會の寄附▲事務本部所右志二部其他數ヶ所に設けあり▲電報出張所臨時設けあり▲二部學校は往還窓等一切青葉を以て其緑を彩り飾られたり▲本村學校は青葉裏にて一意得に國旗を交叉せり

本村奉迎位置は左の如し

東村界に奉迎門、田儀町の西外れより學校の方へ田儀一般并役人、田儀出口二村愛國婦人會、全戰病死者軍人遺族廢兵、全在営勤者、全在郷軍人、全赤十字社員、全武徳會員、全水産教育會員、全青年會員、全消防

歷史　御駐車中藤川全郡小學校教員三百五十名生徒一万四千人の詩歌にて煙火數十發を打あげ奉迎申上た

皇室榮えの松

田儀村書籍所に充てられたる新築小學校の校庭に皇室榮えの松といふあり其の由來を聞けば日出度き極みなるに依り玆に紹介せんに明治三十三年五月十日　皇太子殿下御結婚の御慶事を祝し挙り村民等今の學校々庭に當る處（當時荒地なりしも將來學校敷地となるべきを豫測せり）に高さ三尺許りの松を學校見當に曳かせ來りて栽ゑたりしが是が無事に成長するや如何にと一方ならず心配せり然るに松は健かに根をたろしゝと見ゐて勢ひ好く（翌三十四年春となりて緑の伸立好き折しも四月二十九日といふに　皇孫迪宮殿下御降誕ありしかば村民等は記念松の瑞祥を欣賞して子孫ささりける末れと村の經濟も左さで裕かならねば松の在る所に見込通り學校の新築何時成るべきにやと夫のみ思ひ惱みつゝある程に今年　殿下の行啓あらせらるゝと云ふに付き御書餐所に充てらるゝを無上の榮譽として村會は重き負擔を苦にもせず一朝にして巨額の工費を議決し遂に此の美麗の建築を見るに至りたれば今は松も處を得て一入色も鮮やかに見られけるに依り當處へ　殿下の行啓を仰うするは恭の五丈夫の古事も思ひ出でられて最と目出たし此松を讃言ふとなく皇室榮えの松と稱へ居れるになん

祝捷紀念日

小田村は日本海を一望の裡に收むる景致を占め且つ日本海の大海戰には礮聲を聞きし紀念の地にして殊に本日は其紀念日に當る事とて　殿下には特に御車を留めさせられ東鄕大將も何やらん屬々松永知事と語り玉ふ道候の念慮ト雖かりしものゝ如し

小田局長の名譽

田儀村隱道へ臨時電報取扱所を特設せられたる處を以て特別奉者各を下賜せられたり

波根御少憩所

午後一時四十五分出張御座資所と御發車あらせられ安濃郡朝山村字仙上峠に臨上御註車御少憩あらせらる田儀村各團体、熊川郡會議長高橋久次郎全副議長三島淑之助以下各議員、教育家等は境界にて奉迎す直潭の石見に入るや此處には全村の名産なる孟宗の青竹を以て緑門を造り奉迎の意を表するあり又恒松代議士、編田縣會議員、朝山村在郷軍人等波根東村には學校生徒、赤十字社員、愛國婦人會員、有志者等無數出迎ひ奉迎せり折くして雨霽は進々波根西村の掛戸橋々上を徐々通過あらせらるゝや右方國崖對岸の間より迫砲六發發射三十名を搭載し湖船數艘を並べたる儘手投網を御展覧あらせられて午後三時十五分波根西高等小學校に着御あらせらる全校へ御賜金貳圓の御下賜あり裏郷夫將は校庭に幕の手植をなし三時四十分御發車太田に向はせらる

御機嫌麗し

波根西小學校にて波根湖にて漁獲せる鮮魚を御覧に供したる際　殿下には御機嫌麗の外麗はしく侍從長の指を引かせられ幸福井觀著の手にも開き給らるゝまで御笑壁あらせられしと

構造及裝飾と眺望

今度は　殿下の御小憩所に當てられ今回新築せる者にして地高燥東に掛戸及立柳の背景を控へ前は波根湖を隔てゝ一帶屏立の霞峯上に屹立せる有名の三瓶山を望み其麓傍なる眺望は殿下この北郷なる學校の玄關には緑葉を掲げ柱は紅白木綿を以て段疋縞に巻く此處より入り緑葉を右折し小階を降つて下座敷となる長さ七間、此處に小卷を設きて湖を滿たし掛戸橋より御覧になりたる鬼網の漁獲物を此中に放ち遊泳たる鮮魚を親しく奉覧に供す緑葉を裏に登れば今回新たに増築せし十八間に五間の二階造りの校舎にて昨年十一月起工、本月中旬竣工し實に工費六千圓を投せりと云ふ南隅より階段を登り御座所に入る御座所は五間

に四間幅マットを布き詰め南上段（是は他日御真影室となすべきもの）の下に緋毛を布き御座を設く御座と相對し北のかた壁に寄せて成績品を陳列し四側には金屏風を建て盆栽二、生花一を飾る北に續れる室内を割して御便器室と高等供奉官室とに充つ

大田町着御

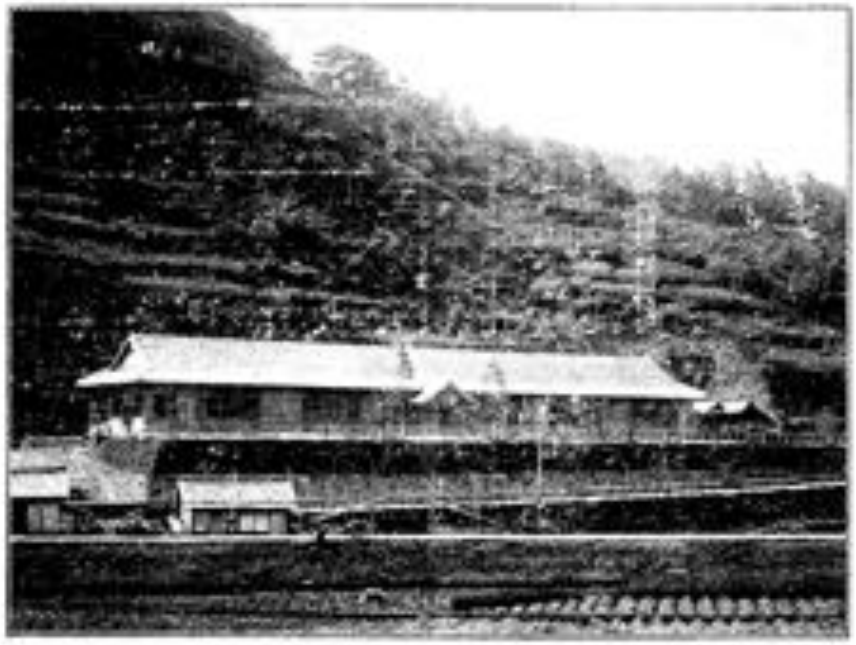
五月廿八日

波根高等小學校の御少憩所は午後三時四十分御發車あらせられ約一時間にして今回記念として植え付し松、櫻を御覽せられつゝ緑田橋北詰なる鉄門に迎ひられ拾いて大田町へ入らせられ直譯道々御旅館に當てられし安濃郡立農學校へ着御あらせらる御道筋には各團体、公務員、學校生徒等整列奉迎し拜觀者夥しく大山々下にては烟火十數發をあげて奉迎せり

御旅館構造及裝飾

御旅館は大田の町を南に距ること二丁國道の西に在り最近の新築に係り今回更に棚を新設して周圍に幕を打ち廻はし校内各室共に手落なく設備せられしに　殿下には若御あらせらるゝや御先拂申上げたる藤本部長を顧みさせ給ひ『よく出來たな』と仰せありし、と門前には大アーチを建設す門を入り正面玄關を上れば階段あり樓上は物産陳列所及び其他なり階下に屏風を建つ右折して北端が御便殿なる七疊の間にて南に二間の金襖（此上に金地の欄間あり）を建つ東北は障子を挟らし廊架には唐紙子戸を建つ便殿に於て出雲の各旅館にて見し所と趣きを異にせるは御床と壁なり御床は一間にして西の方中央に設けらる左右が疊敷なる故、御床は突出したる如く見ゆマヽ是は將來御真影室となさん目的を以て建設されたる爲めなるべし面して此の御間と御寢室とは雲絵縁の疊を布けり並れ出雲の各御旅館に於て見さる所當に歸りて御食堂あり西北銀襖、南東は障子なり御便殿の後に御寢室あり六疊にて此處も金襖、雲絵縁の疊

田氏御書記所



太田御旅館

用ふ此先が湯上り場にて六疊、續いて二間に一間半の浴室あり湯上り場の先に御厠あり御持出しの御便器を置く樣になり居れり御食堂の西に六疊の藍侍室あり

御便殿の南なる樓上の陳列所は五間に四間にて安藝郡の物産百二十五点、敎育處績品八百餘点を陳列す陳列の物産中面四個あり直徑一尺三寸位の大鬼面二個と荒神と稱する面二個あり金色の眼、亂髮の間に櫛々として異觀を呈す抑も此の特種物産ある所以は本郡の習慣に基因せり本郡にては古來女子生れし家には羽子板を贈り男子生るれば面を贈つて祝意を表する事となり居り又た正月五ケ日の間は家々面を飾り其數の多きを以て誇りとす此の奇習ありて此の奇産あり御見學を冒とせらるゝ　陛下に地方の風俗を御知らせ申上る好き材料にてこゝろあらんなれ

御展覽は五間より成り別に二棟造り五間あり今回の新築にして清麗なり

御使差遣

物部神社御使

廿九日安藝郡川合村なる國幣中社物部神社（祭神は天照大神の皇孫瓊瓊杵尊）へ御使として式多侍從を差遣はさる一行は原警部（大田署長）先導し中島安藝郡書記補助し御使本多侍從、倉澤仕人、大田驛出迎へたる佐々木村長、川合村有志丸清左衛門氏、還幸後備にして午前七時三十分大田を出發し八時物部神社に着十金子男爵は大鳥居前に金子宮司（比其經）は神前に出迎へ御使は先つ金子男爵邸に入り幣帛料壹圓を供進し小憩の後殿原縣宜の先導にて參拜夫那御靈の行事あり此時宮司は祝詞を奏して御玉串を採り御使は神前に奉る御參拜の儀は之にて終り再び金子男邸にて直會の饗あり宮司より御紋章蓋子一箱、物部神社寫眞を贈呈し八時卅十分出發大田に歸還す金子男、同宮司は直に大田の御旅館に伺候し御

を御覽申上げられたり

神宮展觀

金子男爵邸の休憩所には同社の寶物幾小幅、幾花圖、幾奈良、幾水尾四帝の宸翰を始め陽光院（正親町天皇の皇子）の御染筆及び光格天皇の御物なる御文箱其他刀劍右文書數点を陳列したるに本多侍從は之に就き種々鑑賞せらるゝ中に右幾花圖天皇の宸翰は皆從の緻奴なる松浦（詮）伯爵の寄附になれるものなりと聞き更に一層の感を深ふせられしと云ふ尚は同家には松浦伯の寄贈に係る幅ありて當日隨行官の休憩所に掛けたり因に同社の祭神宇摩志麻遲命は神武東征の際長髓彦を誅して歸順したる武神なれば武人の尊崇敬く現に靖國宮の正面に其銅像を建設しあるが其石版摺の摺物を本多御使に呈せり又當日同村にては各戸國旗幷灯を掲げ紙製の櫻花を枝梢に結び何れも軒端に差し尚は道路を清掃し盛砂等をなし愛國婦人會其他各團体總出にて御使を迎ひたり

石陽製糸會社

廿九日午前八時黒水管船武官は高田仕人を随へ岡倉縣屬出御使として差遣せられたるが同社長恒松隆慶氏御先導休憩後社長に對し産業奬勵の思召を以て御使を差遣せらるゝに至りし次第を述し製糸原料の供給地、糸質と其實擧、工女の養成法其他微細のことに關し下問を蒙し社長恒松隆慶、支配人守屋恭之助氏より答辯する所あり終りて武官は工場、技婦場、繰機室を巡回し皆來ます〳〵新業の發展を圖るべく、奉答の次第は遠一盲上すべき旨を告げられ表門左側に記念樹栢を植ゑ八時四十分退出せられたり因みに栢は支那の原産にして枝には刺あり其葉は桑葉に代用せられ養蠶に用ゐらる葉に害虫を受くること無きを以て頗る利益あり支那人は之を以て大に養蠶しつゝある由宮内省青山御所元御用係佐々木長淮博士始めて之を日本に持かへりものにして安濃郡蠶業技手中嶋榮太郎氏が其實用法を實驗せしに其有望なるを

謀り他日之が普及を計る目的なりと

拝謁者

御着後拝謁を賜はりし人名左の如し

松永本縣知事	金子男爵	縣本第一部長	村上蔵川縣長
東郷大将	村山少将	（以上單獨）	
助村安濃郡長	恒松隆慶	金子物部神社宮司	堀田第四部長
後備三等軍醫中島鎮造			
三等主計花田治太郎	騎兵中尉勝原友三郎	農學校長大久保鉦次郎	特務曹長渡邊晴之

（以上普通拝謁）

御下賜

左記の如く夫々御下賜ありたり

一、太田町へ金二百圓

一、助村安濃郡長へ特地一反及酒肴料

一、安濃郡役所員へ御菓子

一、和田太田町長、町役場員、其他官警事務員へ酒肴料

一、太田郵便局長へ酒肴料事務員松永以下七名へ御下賜金

一、安濃郡立農學校へ御寫眞并に金若干の御下賜

献上品

助村安濃郡長より献上

一　香魚五十尾
一　御旅館の寫眞一葉
一　風景寫眞帖一冊

安濃郡より献上

生糸　二括
經木眞田　十五反
海柳箸　五十膳
御料精米
安濃郡風景寫眞帖　一冊

邑智郡より献上

半紙　二梱
美濃紙　一梱
香魚　二籠

高齢者より献上

木綿　百反　長久村　山崎　カナ（百〇一歳）　草履　二足　長久村　森山三代平（八十八歳）
田圃　一枚　長久村　森山　助平（八十五歳）　盆栽　一個　大田町　福間　タカ（九十四歳）

特別奉拜者

御出門の際奉拜を賜はりしもの左の如し

赤十字有功章授與者（竹下弘、恒松亮太郎、石田林太郎）

鄕兵　七十一名

鄕兵　（以上門内）

實人道賊　五十五人

孝子遺婦　六人（大田中井岩十、波根西三谷人之、佐比賣和田富吉、川合中田盛記、那須又六、那須せち）

（以上門外）

（奉拜者氏名は巻尾に詳記せり）

又鳥非村細田ヲヱも奉拜を賜はるべきの處皆日のため參詣を許し能はざるより尊に御菓子を賜はることゝなり段仁慈の思召深きこと感泣すべし

御買上品

御逗所内の一室に安濃郡の物産は

米　麥

生糸　繭

豆　雞卵

海鼠腸

木炭　　椎茸

等陳列ありしか左の通御買上なりたり

疊表　四点
椎茸　二斤
三瓶牛蒡納漬　十点
筍鑵詰　十点
花蘆　三点
源輔著　四十册

生徒製作品

御旅館なる安養郡立農學校内に陳列して御臺覽に供したる生徒成績品二千九百點は御持參の御あたり

大田町ノ設備ト雜況

魚源堤防に高野卷の設備をなし小牛の花傘は煙霞として美觀を極む

因に是は例年十月十五日、大田町北組氏神鄽社入幡宮大祭に持出し倒を立て練り歩くものなり幟等の先に鈴を附したるが往行してチリン〳〵鳴るに伴うてヨーイヤサー、ヨーイヤサーと掛ぐなる聲を

なすにて餘程變な古式なり高野壑も是と共に背負ふて練り歩くものなり先づ赤幟百五十と高野壑十個餘りを魚振場坊に建並して豪覧に供す抑も之が起原を尋ねるに古し文祿年間豊太閤征韓の際り村民等氏神明に國家安寧武運長久を祈る爲め陣幟に擬したるものを造りて奉納したるに始まり後世景りに來美を盡ふに至れりと云ふ又た高野壑は古し高野山より珠數買りの信徒背負ひ來りし所の負櫃に形とり例祭日唯一の古式として行ふ八乙女神事に用ふるものなりと云ふ

炊火行列

御旅館なる農學校の運動場に代官山あり其の内より其の頂上に無數の目盛盞を並べ備てゝ之れに一々球燈を點ずるし日の暮るゝを俟て代官山の東手なる本田谷より炊火行列を繰出し代官山と五龍山との間に現はれ夫れより五龍山の絶頂に上り漸次右に降りて更に其の麓を迂回し解散せしが右の行列は同町民の外長久村より加はれるものにて其の數二千餘に達し爲めに半圓より加はれるもの抔あり非常の壯觀なりき

提燈行列

炊火行列と同時に安濃郡十三校兒童の提燈行を催ふせり生徒一千五百餘名同町尋常高等小學校に集り午後七時同校出發神田橋より新道筋を直線に御座所を中央に北の端を廻り曲町、舊道、中町に出で東郊大將旗盤前に於て萬歳を唱へ解散せり

煙火

夜に入りてより二十五發の煙火を大仙山の下に於て打揚ぐ該煙火は大阪へ注文して製造したるものにて後地より煙火師來り打揚ぐ今宵萬歳の聲と相呼應して湧くが如く壯觀を極めたり

大田町の裝飾

町の東端神田橋際に凱門を建設す▲町の兩側に柱を建て連ね上部に鐵線を渡し二紅三白の幔幕を張り渡

す其の町筋は神田町、米屋町、殿町、桂子町なり巷の延長千二百間▲街衢要所の高張提燈四百二十を大坂へ注文して新調す是は終夜點燈すど▲國旗は各自支辨にて千百五戸悉く新調す▲御旅館前山手に球燈二千許りを波形に掲列す▲又た大田町にては明治三十三年以來辻々に瓦斯燈を建設せるが今回行啓記念として百餘を增設す▲大田四圍の山々三十ヶ所に大國旗（旗の長さ二間に七尺）を交叉す▲隊門は二ヶ所に設けられたり一は神田橋にして頂上安濃馬の安の字に形どり金箔杉葉を以て飾り付け他の一は御旅館門前にして鳥井形に組み松葉を以て飾られたり▲煙火當の日より大仙山にて數十發の煙花を打揚げたり▲輕氣球殿下が渡欧前に業揚らせ給ふや訓練に於て輕氣球を打揚げたり

▲警戒事項當夜萬一を慮りて不盛の兵充ありたる時は直ちに御便殿を移さん爲め大田町尋常高等小學校を以て御遷轝所とせり▲警察署に於ては警官の配置巡視を嚴にして消防組は消防夫を召集して不盛に備へり▲救護所當町は本部より衛方に設けられ尚ほ醫師看護婦詰め切れると雖來救護を受けしもの六名何れも直に全癒す▲記念樹大田町にては行啓記念林として大田川堤田堤防に於、種各一百株を植う又た各神社佛閣にも記念樹を植付たり▲出張所整備、郡役所各同出張所を御旅館溜詰に建設す▲町役場向ふに大田町奉迎準備所を設け役場員出張して數日前より警護事務を執り居れり▲新聞通信機當町にては大田町新聞通信部なるものを設け御旅館其他より聞き得たる各種事項を摺物となし號外として賣らしつゝ配達小僧をして各新聞記者の宿所其他に配付せしめたり▲電信局出張所御旅館内に設け便信掌ある時に臨機として本局に走らしめたり▲調度御用掛大田町御旅館にて使用する椅子、机子は特に安濃郡より行啓記念として新調差出したるものを御用を願ひ出でたるにこの二品に限り使用の儀嚴重せられしと

▲奉迎應貨貸差の如し

▲奉迎　（大田町以東十五丁を基點として西北側）　大田町一般奉迎人、邑智郡一般奉迎人、川合村一般奉迎人、佐比賣村一般奉迎人、川合村小學校生徒、安藝郡紳職、全郡實泉寺、同郡郵便局員、川合村團体、佐比賣村團体（以下町に入る）大田町在郷軍人、同廢兵、戰病死者軍人遺族、同日本赤十字社員、同婦人會員、同漁事協會員、同神官、同僧侶同奉迎委員、大田町以東十二丁を基點として西へ（前同）佐比賣村一般奉迎人、川合村小學校、長久村團体、大田町一般奉迎人、佐比賣團体（以下町に入る）官吏、町吏、町會議員、各區會議員、各區長、各區長代理、奉迎事務係

▲奉送　（御旅館の西北側）　大田町在郷軍人、同廢兵、同戰病死軍人遺族、同赤十字社員、同婦人會員、同紳官、僧侶、各區奉迎員、安藝郡郵便局員、佐比賣村團体、大田町小學校生徒、長久村同上、島井村同上、朝山村同上（御旅館の西南側）官吏、町吏、町會議員、各區會議員、各區長、各區長代理者、奉迎事務係、大田町漁事協會員、安藝郡紳職、同實泉寺、其宗、大田町一般奉迎員、刺鹿村小學校生徒、波根西村小學校生徒、波根東村小學校生徒、富山村小學校生徒、佐比賣村小學校生徒、川合村小學校生徒

▲邑智郡の奉迎　本日波根村以西大田迄間には各村邑智郡の奉迎者多し

東郷大將手植

東郷大將は安藝郡立農學校校庭に手植を爲し又大田町高等小學校校庭にも川柱樹を手植されたり

恒松代議士外五十二名東郷大將に呈したる頌德辭左の如し

頌　德　辭

明治四十年五月二十又八日

皇太子殿下巡啓山陰道　當大田町　我詔軍々令部長東郷大將閣下嚮從前至不貳茱萸安藝郡長倉謹頌閣下盛德實我郡民之於閣下慈閨其像動著無男無女想聚其英姿著推老推少欽拜淺旅引領相望欽謹厚澤恭惟以

仮令叡慮今日正是陛下率半生開疆之鴻謀遥多年蕞窓之網略一挙覆大邦精剛之兵乃能被列國荒服之艦四海之外八紘之中皇威燄揚國光日升記元二千五百六十七年永統堂千百二十有三代宋有之降盛軍觀之大業也於戯偉哉當時忽開殷々手鼓夫之外曾以寡當衆精鋭鞠々手遊浜之上多知其勝遠乃登高而決雪境乗信以問狀而來得其相授寡臣群人皆謂々物議紛々翌早有急報傳所在日波艦隊全滅帥提督降乞於是人情即定物議立息水村山落皆水自帯番色千門万戸無能總閉就意於戯盛矣惟矣慧不一至謂長鯨終歌歌甲鯊妖氣銷散之期寡後促而安撫克為復之日自是縦然則日本海戦一捷之功世界戦史自代之光春秋非太高證實尚物證尋當備發之恒白歳告戒係上其克省哉庶之使下以開國家子孫之背不違不背等至願常為也盛所倒屬也臣昌謹啓申謝誠惶懼無勝感荷之至

明治四拾年五月二十八日

島根縣安濃郡　恒　松　隆　慶　外五十二名

海軍々令部長　東郷大將閣下

東郷大將と金子貴族院議員

金子男爵より東郷大將に對して證來の勞と縣民等の欣喜とを謝し爰に我が石見國人に取りては非常に悦ぶ譯は日本海の大戰は石見の國の沖にて戰はれとの結果として石見艦が出來しゆゑ石見國全國の有志者は相謀りて同艦に記念品として可美真手命の銅像を贈ることを決定し全艦長の承諾を得たるゆゑにこれが設計および製作の手續きを命の機會なる物部神社金子宮司に依嘱し宮司は上京して先年大婚二十五年祝典の擧行軍全体より試納して濱離宮に建設せられたる命の銅像の設計著なる鈴木常吉技手にこれを嘱託したる由を話されしかば大將には大に感悦せられ歸京の上は海軍大臣にもその由申述べしとのこ

となりき

東郷大將旅館スタンプ

安濃銀行にては銀行向ふの安田商社臨時出張所に於て販賣せし東郷大將宿泊繪葉書に記念スタンプの押捺をなし繪葉書は大盛況を呈したり又有志某風呂敷其他の物品へ押捺を乞ふ者市をなし非常に雜踏し其後二三日に至るも押捺を乞ふもの引きも切らざる樣なりしと

東郷大將萬歲と副官の挨拶

廿八日夜安濃郡各小學校尋常第四學年以上一千五百餘名の提灯行列は　陛下御旅館前に萬歲を三唱して順次大將旅館（本町安濃銀行）前に至り大田町尋常高等小學校長濱崎孝太郎は大將に

明治三十八年本月本日日本海々戰に於て露國バルチック艦隊を全滅せしめたる我帝國海軍聯合艦隊司令長官たりし海軍大將東鄕平八郎閣下

と奉唱一同は之に應じて萬歲東鄕大將閣下萬歲と三唱せしに續き閣下に在りたる副官は濱崎校長に向ひ「大將に代て挨拶致します」と申さる尙大將は

諸君の御厚意を謝します

と三唱せられ行列の通過する迄階上より見られ行列終らんとするや俄かせられたり尙は提灯の火を消し居りたる兒童を見て「可愛ゐうに燭燈がないと見へて火を消して居るわ」と申されたると

東鄕大將招待會

大將御滯在の際安濃銀行の梶野管外一同挨拶に出でたるに曾一々杯を頂戴せり其際和田甚二郎氏一同を代表して「御旅館も長た事狹にて料理向も粗末にて御氣詰のとに候はん」と挨拶したるに大將はイヤ〳〵さういふ譯にあらず二年前の今日を思へば掘り仆で居りしものを今年は厚き待遇を受けて有難しと申さ

る辺境方的御着場及名産の鳥賊の料理は特に御氣に召したる様子なりき始め大将の旅館に着せらるゝや恒松代議士は安濃郡有志者總代を代表して頌徳書を大将に呈し亦で安濃郡の神祇總代大田町郷社々司石崎正澄佐比賣村郷社々司福屋正信は本月本日（廿八日）の日本海戦大捷紀念祭に奉りたる神酒洗米其他の供物を大将に呈上したるに大将は喜んで受けられ神酒は直ちに召されて厚意を謝する旨いと丁寧なる挨拶ありたり

村木武官長の談

石見にては小學校女生徒及婦人の服裝甚だ能く調ひて白襷紋付なるには感に堪へたり云々

記者招待會

和田町長の主催にて午後七時より天神倶樂部に各新聞記者を招けり出張記者九名にして福岡貢遞民主人役として一行を迎へ更に左の如き開宴の挨拶を述へられたり「從來全く社會に知れざりし石見の地が此行啓を辱ふせしが爲め諸君の筆によりて社會に紹介せられんとする事實に欣躍措く能はざる所乃ち諸君を招待て其の微衷を表せん云々」と述へたり

大田町御發車

五月廿九日

朝來天氣穏ならず西風は強潮にして警報は傳へられ供奉の人々を始め何れも天窓を悩んで今日の御旅行如何にと偏に按ずる折しも御豫定の如く午前十時御旅館御出門御出發の昨日は九里二十町の道程にて今回の御日程中最も長距離の日なりしにも拘はらず　殿下には些の御疲れの氣色も見ゆさせ玉はず殊に御發車後は西の風強く路上砂塵を捲き上げて車上目も開け難き様なるも御馬車は幌も掛けせ玉はで郡民の敬禮に對しては一々御答禮を賜ひつゝ最と御健康の様に過ごさせ給ふ恐懼盲ふ所を知らず

社　神　部　物　　御使者造

大　森　御　書　斧　所　　所役部庫週

御臨幸は本戸侍從長にして其他供奉員竝に同日に同し御出門の發竹下、恒藤、石田の有功章佩授著恒藤代議士其他は門內にて宮內當局、馬術者等は門外にて拜拜を賜り農學校職員生徒は馬場に整列し郡町の公務員各團體は町內夫々指定の位置に郡內各小學校生徒は大田町より郡境に亘りて整列奉迎申上ど郡境には大緑門を建て國旗翻り四山の新緑今や發を競ふて今日の行啓を待つものゝ如し

久利村御少憩

暫くて午前十時四十分にして大田より一里四丁なる久利村に着御同村尋常高等小學校なる御少憩所に入らせらる御休憩中別室に陳列せる同校生徒の成績品御上覽あり御寫眞金員下賜あらせらる同所は山間の一孤村なるにも拘はらず其設備の整頓せるを嘗はせられて特に村長森山英作を召され設備完整せるを御嘉賞あらせられたるに村長は恐懼感激する處を知らず身に餘る至大の面目を施して恐る〳〵退出す此時校庭に東郷大將松の手植をなし十一時五分同校御發車あらせらる

大森町御晝餐所

南薰堂々正午前大森にかゝらせ給ふや町界には郡立農學校職員生徒を始めとして仁摩、温泉、馬路、大國、宅野、大森の各小學校職員生徒起立し町內には郡町の公務員其他各團体整列奉迎す此時煙火十數發轟然空中に躍ふ直に迎賓館役所なる御晝餐所新築の御座所に成らせらる御食事の後議事場に陳列したる教育品の御上覽ありて午後二時御發車あらせらる

金子男爵其他御暇申上たり

金子男爵、金子物部神社宮司、島根縣知事、郡會議員、濱崎大田町高等小學校長、和田大田町長等は大森迄

擧意し技癢にて御覽申上げたり

室内裝飾及構造

室内裝飾及構造前門アーチを建設す鄕倉議事堂の西に接して新築されたる四間に四間の室を以て御座所とす南北に各三間の格子窓ありレースを掛く座上緋氈を布き詰め生花一、盆栽二を飾り西のかた壁に寄せて金屏風を竝て御座を設け議事堂を以て教育品陳列所に充つ御小便中煙火十五發を打揚ぐ

御使差遣

大森銀山御使

尾藤實官は高田仕人、倉岡縣屬縣治行先廻菊田警部、醫員註長代理上野成次郎氏にして十二時三十分大森出發四十分の後ち銀山の事務所に着し少憩の後事務員全部を集め御使差遣の御詞を傳へ夫より各工場を觀察し現狀に就きて一々質問ある上野代理より答ふる所あり銀山の沿革書を捧呈し御使は少憩後出發行列に加りて六時三十分大家の御旅館に着し一々奉答申上げたり

因に大森銀山は周防國主大友宗麟が延徳年間に開掘せる事なり以後毛利尼子兩氏之を爭ひ徳川氏に至りて其直轄となり石見銀山として有名なり維新後多くの人の手に渡りたるも利益なく明治二十年始めて藤田組に渡りて大規模の採掘に從事し有利なるに至れり同本年七月より更に規模を擴大する筈にて發電所新設工事中なり目下鑛業五鉱ありて大森、大國、水上の三村に跨る鑛物は金銀銅鉛を含有し金銀の量他鑛に比して多し鑛業は概ね九尺より一丈に至る職工は四月一日現在調によるに男四百九十三、女百六十一、幼者三十八にして合計六百九十二名を使役せり工場内は頗る整頓せり他鑛に比して最も誇るべきは排水法の完全なるに在りと云ふ

東郷大将手植

滋賀郡役所と全所小學校へ楓の手植せられたり

祖式御少憩所

午后二時御機嫌麗しく御営舎所御出門あらせらる御道路は御豫定を變更して特に大森町を通らせ給ひて國道に向はせらる奉迎總て御着の如く殊なり此時午前來の低氣壓は益昇りて冷氣を覺ゆるが如くにして蒸熱あり風は愈上强く砂塵を上げて漲渡たりしが風の漸く和くに隨て小雨到る此間御召列車は山又山の間を縫ひて開墾せられたる國道を進みつゝ三時廿分祖式尋常小學校御少憩所に入らせらる

邑智郡の郡町村公舎員、各團体、各小學校生徒は總て祖式村の沿道に整列奉迎し横山郡長以下各奉迎委員は門前に奉迎す煙花數十發殷々たる天空に轟然として敬意を表す

同校にても生徒製作品を御上覽御宮内官員の御下賜あり御休憩約廿分にして御發車あらせらる

東郷大将手植

祖式小學校々庭へ楓の手植せられたり

邑智郡の奉迎

邑智郡は國道の經過するもの五十二丁にして之れが沿道に當る祖式村小學校は御少憩所に充てられし爲め同郡に於ては全力を此方面に注ぎて設備し東邇隣郡界及び學校庭前に緑門を樹て尚は學校入口の國道綱に三間半四方にして高さ二十二間の四足緑門を設く此處より御小憩所までを七十二間、御小憩所としては國道を距ること最も遠きものとす學校には庭内の高所に御座所を新築し其の庭に水槽を堀込み之れに江川にて獲せる鯉、鮒、沙魚、鯎、山椒魚等十五種の淡水魚を生かして御覽に供したり又同郡の奉迎者は殆ど此

五十二丁目に整列せざるべからざるが故學校以東に於て一部一般の拜觀者及び軍人會員其他各團體を學校以西に全部小學校生徒又學校入口には各村長、郡會議員、廢兵遺族等を整列せしめ尚は東西共に測候所各村に分配して奉迎せしめたり因に同郡の一瞥を掲ぐれば左の如し

村數三十、戶數一万二千四百餘、人口六万八千五百餘、八十歳以上四百八十一、九十歳以上八、戰病死者遺族百八十一、廢兵四十、孝子義僕二十一、在鄉軍人千八百、學校五十五

▲邑智郡の奉迎者、拜觀人約一万五千人（見込）は東西郡界の四一里七丁の處に整立す▲邑智郡役所の奉迎事務所は學校附近なる川上勝の持家に設けたり

故人野々口隆正の光榮

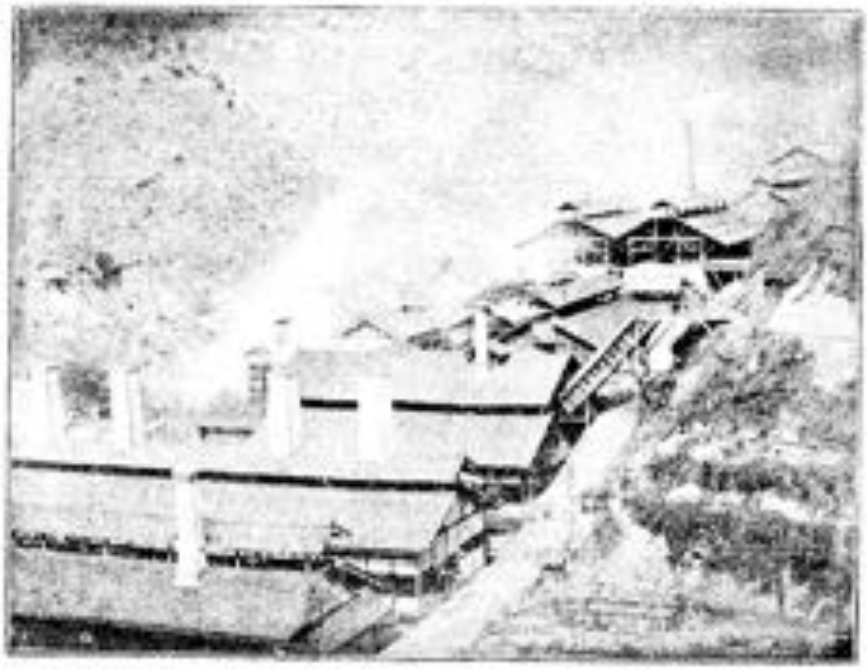
大森測候所役所にて御昼餐を召されし際便殿其他に有名なる歌人隆正の詠作を拜寫せる屏風を列べ立て最も幽靜の處なりしより其來歷に就き少時談話なりしやに承る歌人も地下に感泣するなるべし

沿道ノ光景

▲一直線の紅白幕大旗もなき簡川式にて一直線の長街は壯觀を見て家を見す家は幕と人とに蔽れて家なし米子のソレと對照して優にこれを凌駕するものあるが如し▲郡境のアーチ邇隊郡と記したり此處は大田を距る十餘町、十餘町は唯拜觀人嘗小學校生徒、郡には大田と久利村との境はあれど拜觀人には見えなくして久利村に入る十餘町の處は小國民と高齡者、廢兵遺族等あり▲久利村の拜觀五十餘、都圖、川合、大屋、宅野等所狹きまで兩側に列するさま晏如として長蛇のごとし頃て大森に近ければ大森町村は言はずもがな大國、三路、仁万、湯里其數町村より來集するもの頗よ多し

▲大森の歡迎場役所を以て御宿營所に供し門前の橋欄は總て青葉笹にして假るに足る道路には銀山砂を

山形市大字十日町（現在）



大家御族館（現在小学校）

數き町には大小の國旗をソレ〳〵交叉してけふを晴れと祭へゐ元來此町は人も知れる如く道路狹隘なるを以て御順路は國道に賴るべき筈なりしも町民の熱誠なる奉迎の微意いつしか御邪魔に迄しソレほどならば再應按分せよとのことに氣を取直し二三日前より市中は俄かに上を下への大混雜にて君の裝飾に出でしなりところ正午過ぎの若御あるや有志者數は直ちに車を驅りて御道筋を檢分せしにコレ位ならば僅かに御馬車を通過せしむるに足るへしと決定し竟に御通過の光榮を得たり町民の喜び知るへきのみ

大家着御

五月廿九日

三時五十分組式御少憩所御發車あらせらる此際き雨盛激しく　陛下にはられにもいとはせ給はすカーキイ色の外套を召させられ無蓋の儘にて奉迎の尖々に對して御會釋を賜ひつゝ進ませらる御盛德のほどころ有難げれ計外れにて復を召され大家村に近くに及んで暫し徹せられ沿道拜衆の奉迎を受けさせられつゝ午後四時五十分大家着御尋常高等小學校御旅館に入らせらる

御旅館構造及裝飾

尋常高等小學校は昨年七月起工、五月竣工せり敷地千二百坪、校舍は南二十二間、後二十八間の二棟より成り南棟の北端八疊の間を以て便殿とす東に二間の硝子窓ありレースを掛く南に一間の床、銀杏板にて床框は欅を用ふ天井は杉板、下に紙底を張む北に接して八疊の寢室ある座敷は大和繪を用ふ東に二間の硝子窓あり洋風室、食堂共に八疊、間は二間に一間半にてリノリームを布く御化粧の間は九疊、浴室は三間に二間、座板は檜、壁は漆を用ふ第二棟の北端四間に五間の室を陳列所とし郡内の物産二百三十五點、教育品八十五點を陳列す

御手植

當地御巡幸ニ際シ常小學校々庭へ樫の御手植ありたり

拜謁者

大家御着の後拜謁を賜りたるもの左の如し

松永知事　藤本事務官　東郷大將　右賀警保局長　村山少將（以上單獨）
木村護衛歩兵大尉　寺本輜重兵中尉　能美歩兵中尉　市原二等主計　松本大審院裁判所判事
片野選擧區　横山邑智郡長　金森司法官試補　佐藤選擧區立農學校長　石田代議士（普通拜謁）

御下賜

左記の如く夫々御下賜ありたり

横山邑智郡長へ
一椅地　壹反　一酒肴料　若干
片野選擧區長へ
一白絹地　壹反　一酒肴料　若干
選擧區大家村へ金弐百圓
選擧區役所員及大家村役場員一同へ金弐百圓
波大家郵便局長森通信事務員外二名へ酒肴料
邑智郡組式村役場員其他御休憩所設備員へ酒肴料
島羽丸艦員十名へ御菓子

陳列品御持歸

御成濱小學校内に陳列して縱覽を許りたる同校生徒の成績品は御持歸の御あり

頌德表

滋賀縣蒲生郡日野町大字村井字大谷眞宗本願寺派村井教會所

眞宗本願寺派石見國邇摩郡寺院住職臣蒲原等誠惶誠恐頓首頓首敬惟

殿下英姿天挺徳度幼彰嶷嶷淵冲夙貞玉裕即法隆右詞堂不倚武文折衷華洋監撫歐亞議險詳是以上繼丕業式光遺緒詳覽勤重歸之明衆庶感荷雷之響加之臨按配薦風御頒賞之備盛儀登評點關播旨之喜　皇基從是愈固芙實携何不克昌哉今也

殿下普賓婆德之門以詩民於　詣修閨安之殿廂觀書風于是輔弼臣等於前千萬比來于後鑑篤異域風方勤百城編還唯々思化可宣千里事既駕于往代臣等竊命山林明窗南窓徐探伏身紳芳厚拜檢簡牧座區區所願著　殿下諮者億年萬齡不旋之福本支百世至誠無窮之休奏頌效誠惶謹頓首首上　一閑詩呼三重不任歡抃踊躍之至奉表悲惟以聞

明治四十年五月

眞宗本願寺派石見國邇摩郡温里村瑞泉寺住職

臣服部智嶽誠惶誠惡頓首頓首外七十七名

献上品

邑智郡の献上品左の如し

美濃紙　半紙　製煙銅　含銅銅
含銅鉱石　含銀鉛鉱石　結十數尾

片野邇摩郡長より

西田鶏　貳箱

高齢者献納品

三拾六名より献納品は巻尾に詳記せり

寶物御上覧

邇摩郡大國村安井好尚氏より大家村御旅館において御上覧に供し宮取差出せとの御下命ありし寶物左の如し

一　後水尾天皇宸翰　色紙紙本墨書　堅四寸五分強横五寸一分

学之といひて世を飛たふるにそむかね事物かもひすら凶身とやなりなむ

右明治三十二年九月十四日寶物鑑査票第三十六號

一　後光明院宸翰　紙本墨書　竪壹尺九分強壹尺五寸六分

水の面に照る月波をかそふれば今宵そ秋の中なりけり

右明治三十三年三月二十八日寶物鑑査票第一二二號

一重稲川韶仁親王御筆　六歌仙巻物の内遍昭の歌　鳥の手紙金泥引　縦壹尺七分横壹尺五寸八分

僧正遍昭

あさみどり糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

右明治三十三年五月十一日賣物記事載第一三九號

（因云右は同氏より既に桂東宮主事の許に差出濟）

御買上品

大家御旅館内陳列品の御買上は左の如し

柳行李	一個	高橋仁作	
其揃	百反	秋内三郎	
鋼火鉢	一個	井川清次郎	
西田苞	百箱	能谷七十郎	
仝	仝	渡利忠吉	
鶏皐煎餅	二十罐	川口花月堂	
茶千罐	十箱	仁方村商業信用組合	
柳行李	三個	大原三次郎	
其揃帽子	四個	波多雄吉	
無名異焼十個完	十七点	肥田泰山	
西田苞	百箱	渡利入郎次	
菓子箱の御	二十罐	森山治作	
茶千罐	十箱	加藤亀太郎	
甘藷玉葱植		国際郡立農學校	

大家村ノ装飾ト餘興

御旅館前にて田植を御覧に供したり此催しは揮毫の人數六十餘名男女共に大き傘笠を掛け中には三番叟の烏帽子を頂けるものあり婦方は胸の所に五六尺廻りの大太鼓を抱へて庭に居並び別に二尺廻り位の鼓

を吊せるものあり右の内其の大部分は太鼓にして早乙女は遽に十餘名に過ぎず御馬車の去れと見ゆるや音頭取に依て唄ひ出したるは

今日植ゆる田主の門の上を見れば鶴亀が巢にする門の上を見たれば内田を植えるには蔵の戸を開き千石の米を積む蔵の戸を開き

今日の入婿の盃の小枝に鶯が巢にする松の小枝に

日は遠いやうなれど西の山端に蓮華の花やら水仕や小垂れたうんだと云ふ盛に太鼓が響き笠が鳴り唄の調子に伴れて早乙女の手は一齊に動くなり田植は右の一調子にて(上記の唄四句を以て一調子と云ふなりと)全く終り太鼓も早乙女も共に引上げたり

山腹の焚火文字(村人代村にて御旅館の東手に當る夫家前山の中腹へ「万歳」の二大字を組込みたる一字の面積約五十間四方にして其の割の中へ割木を詰め込み石油を注ぎて一齊に點火し置くして全部燈火を以て万歳の二大字を山腹に見るとを得べき仕掛にて今夕八時之れを試みたり一字の中に詰め込む割木は一万把以上を要せりと云ふ▲國旗と球燈は各戸何れも美く飾られたり▲郡内各高等小學校生徒七百人の提灯行列を挙行せり▲球燈の文字御旅館の正面なる林蔵寺の丘上に球燈を吊し之に依りて挙燈の二字を現せり▲豊年踊若衆の所謂盆踊にて八時より御旅館庭内に於て演せり此の際　殿下には御紋服を召して御手づから窓を開かせ御煙草を燻らせられつゝ踊子の手振り、足取に御注目を為ひ音頭取る男の歌に合はす笛、三味線、太鼓の音聞びて面白かりければ珠の外御満足おらせられ絶えず御笑を含ませられて御覧ありたりとなん▲経門上市と下市との境に大鳥門を掛つ経火若御の時より燈に打揚げたり▲御旅館附近の人出　殿下若御の少し前より小雨降り御召馬車も一時母衣を掛けさせられたる程なりしが幸観者は実に頓着する所無く傘に依り蓑笠に依り傍山の如くに詰め掛けたり御着御後も無く歌みたるを以て御旅館附近

に築る著極めて多く非常の混雑を極めたり▲是迎、勝授所の出張事務所及び大家村役場の奉迎事務所を正法寺に臨時救護所を醫師尚野利一郎氏方に赤十字出張所を渡邊二郎氏持家に設け學校醫大崎龍朗氏は救正寺に出張す

大家村御發車

五月三十日

今日は風ふき雨は霽れ四方の山巒も紅色黛彩き吹うて恰然いふへからす高く低く點々として軒端に舞へる日章國旗も一入鮮かに山嶺き彩雲ゆる此の郡に珍らしき光景を放てるは御行色を彩とれるものゝことく殿下には御機嫌麗しく御指定の通午前十時木戸侍從長御陪乘其他直隆列弁共も例の如く御發車あらせらる御嚴儀官方道路に沿ふては郡村公務員、各區体小學校職員生徒大森鎭山の一團等整列來送申上げたり

井田村御駐車

漸くて御道筋は殆んと勾配打ち續ける名にし負ふ峻嶺嚴堂たる石見路をも厭はせられす徐々御馬車を驅らせられ午前十一時過ぎ邑井田村大字上井田に到着御駐車の儀にて御小憩あらせられしが路傍川に沿へたる十坪許の小庭搆の内に池を造り噴水を設けて御息に供せしに　殿下には大く御感賞あらせられて暫て御馬車を下らせ玉ひて少時御覧あらせらる此時通譯郡西部の著二百十名に奉拜を賜ふ

こゝは字夫婦淵と云ふ處にて幅員狹迫の地なり美比川の岸に沿ふて二つ並びたる温あり嵯峩の絶壁めりと育ひ博へたるより夫婦淵の名あるものと思はる淵は道路改築の際發見したれと今もなは陰森として靈氣あり此の淵流は實に波の有名る岩窟寺院の水源たり

波積村御晝餐所

井田村御小憩所御發車あらせられ御晝餐所なる鄕原郡波積村に著く入らせられんとする折しも又々一陣の風は急に一方に起り砂塵を捲きて目を掠むる有樣なるにも拘はらせ給はず　殿下には無蓋の御馬車にて悠然御通過あらせられしには拜迎并奉送者をして感の身に餘る光榮に浴はしめらる御晝餐所は同村尋常高等小學校にして國旗より迂回する事約半町中央には臨門の設けあり　殿下には正門前の頓中に整列して奉迎せる同校生徒に會釋せられつゝ校内新築の御座所に著御あらせらる御晝餐の後別室に陳列の生徒成績品を御覽はされ御寫眞と金一封を賜ふ

東鄕大將の手植

本校校庭に松の手植せられたり

構造及裝飾

該校は國旗より三十五間の校道を設く校舍の前に接して四間に六間の建物を新築せり是れ將來紀念講堂となすものなるが室内を四間と二間に仕切り置き方を以て御座所に充つ前は三間の網子窓、北は鳥巢なる東のかた壁に寄せて金屏風（靜間間藩氏が特に新調せし所）を建て御座を設く生花一、盆栽一を飾る仕切りたる御次の間を以て供奉所及び其他に充つ該建物は富豪石田孝吉氏を始め村内數名の有志者より木材及び人夫の奉仕を寄附して成りたるが故に實際の工費千三百五十圓にて濟みたれど若し寄附無からんには二千圓を要せしならんと云ふ

淺利村御少憩所

内島武郎 横田忠

江津御小憩所

江津御旅館

午後一時三十分渡橋村御書案所御發輦江津に向はせらる沿道両側には拳銃旒の拜觀者を為したり此時風雨烈しみ天容快晴す蘇生の感あり甚く にして瀬戸部賀の郡界に達すれば幕處には大旭門を設け國旗は美はしく掲げられ又舊藏田溜圭桑平武幡子、濱原郡賀郡長等を始め同郡の拳銃委員並に沿道各村及邑智郡各村の各團体學校生徒等參集して奉迎す三時半郡賀驛後利村に着御豊農家として名ある島田恒二郎邸内の新築御休憩所に入らせらる

御休憩所は本年二月下旬起工五月に入り竣工せるものにして清潔として心地よく御小憩所としては異觀を放つ如し表は檜の柱門、左右は杉の板塀、門を入りて十間許り四間半に二間半の建物あり玄關を上れば六疊の間にて奥に一段高き四疊半の間あり之を御座所とす檜の台天井、一間半二つ調の床を設け敷込に御帽御鋼奈を置く

御使差遣

養蠶館へ御使

島田恒二郎氏方御小憩中全氏の養蠶館へ御使として秋澤武官を差遣せしめらる御使は全館に赴き

陛下の蠶業奬勵の思召厚き旨を傳へ島田氏より養蠶上の經歷並に狀況に就て逐一言上し次で御使は養蠶の各室を巡覽し同答する處ありたり御使の行列は歸還の時のみにして久保田警部の先駆、岩崎鳥書記隨從御使、隨行は島田重屬、宮岡屬、巡査後藤の順序にて四時江津の御旅宿に歸り差遣の模様詳細事答申上げたり

御下賜

島田恒二郎氏へ左の如く御下賜ありたり

御紋章入銀盃　壹個　　酒肴料　壹封

江津村着御

五月三十日

新くて御少憩暫らくにして淺利村御發車あらせらる此所より江津間には鐵道曲折して急坂險路多く戰丈の高き屋上に塗る所少からざるを以て護衞掛を附てられあるも供奉員中には坐ろ膽を冷すが如き中を殿下には御自若御平氣にて進ませ給ひ淺津村を經て中國一と稱せらるゝ郷河に架せる長橋を御愉快に御渡らせられつゝ四時御旅館に充てある町の西北端なる江津村尋常高等小學校に着御あらせらる

御旅館の構造及裝飾

該校は明治三十五年の建築にして當時右見隨一と稱されたり今回爰に着校舍の西部を大改修、鳥居、柱等悉く取更ふ）して御旅館に充つ學校入口國道路に接門を設けこゝより校門まで二十八間の道路あり右側に陶器製造場を設け其の周圍及び道路左側に吾郷花を植う　殿下には御着正面玄關より進ませられ一間半廊下を左折して行くこと六七間、便殿に入らせらるゝ樣構造せらる便殿は十疊の間にて東方に一間床、更に炒繰の疊床にて炒鉢を設く一間の數込には金地の紙戸襖、違棚あり前二間間仕切戸、北西各二間の白襖、金紙金の引手に朱房を附し頗る美麗なり北襖間檜板に松の透し彫り之を隔てゝ十疊の御次の間あり西に八疊の御寢室、其の北に八疊の御食堂を設く天井、柱等一切檜を用ゐ高間となせり右四室の西に一間廊下に沿うて六疊の御化粧室、二間に一間の御湯室、八疊兵隊衛の御詰並べり

拜謁者

當御旅館若御召の役人より賜りたるもの左の如し

東郷大將	村山少將	松平武將子
樞密顧問官	佐野陸軍砲兵大佐	樞密顧問官
樞密顧問官	井上陸軍工兵大佐	樞密顧問官
樞密顧問官	井上陸軍歩

滿悅の体なりしと承る御買製陶の光榮に浴したる職工左の如し

淺草大島安一、植木鉢川瀨龍吉、一井德利神田仙太郎、一井蓋物酉川幸太郎、花瓶山根庄吉、
桑井壺原善太郎、八井壺中村周二郎、三谷鑑司村田作市、片口豐田貞市、大德利三浦安太郎、
摺鉢山田林之助、湯呑梅田幸作

因に設計の苦心談を記せば右の職工は白襦衣白ズボン下、白足袋にて上には看護婦服樣の白服を着け（無帽）一列の通り腰掛にて列居並び前に轆轤を置いて各自別種の陶器を製す粘土は土を採るとなり此頃の氣候にては更に土が乾きやすきゆえ採つたものを保存し置くとて御通り掛け御覽のとゆえ土を採る間に御旅館へ入御に相成つては折角の計畫も齟齬に歸するなり扨（）は鄕川向ふと學校との間に電話を架設し置きて御行列の見合たらば直に通知の出來る樣したけれども、ろこまでの運びも付かず鄕煙を揚げて合圖するは恭遇卑猥を極るの嫌ひあるより鄕川橋に見張を置き御行列が見合たらんに全速力にて馳付け注申する事に定めたり扨（）て陶工所に於ては御行列の鄕川橋に差しかゝりたる時に土を採れば恰も御行列の江津町の中程へ來りたる頃に粘土は製陶臺の上に登り恐れ多くも殿下が陶工所前御通過の際は十二の轆轤は電の如く旋轉し盛上の土塊は或は丸く或は長く瞬間に變化を來し見る〳〵眩が惑らんで目の突超るものは一升德利となり尻がすぼんで矢鱈に口を擴げるものは摺鉢となるなど驚幻の妙、脇から見て是迄ゐ面白きものなけれども其代り又た失敗て是迄ゐ見苦しきものなし一つ圖鑑へば丸い壺がお供餅を許みつぶしたる如くなり烟氣が喫したり植木鉢が矢伸したりなどしては不依哉此上なき紋今回は當地の陶器職工六十人計りの中より腕利のみを選りに選りて出せしとや

成績品と水族館盆栽

御旅館の一室には那賀、美濃、能足三郡の各小學校生徒の成績品約八千点と盆栽を陳列し中央には水族館

ゲットイン直前のスタンド応援

に横臥して縦三尺横四尺の箱子箱に一は座、蒲、泥老等の川魚一は鯛其他の海魚を調製して其識別と認れるを御上覧に供せり

献上品

高輪著江津村梟長九郎（九十六歳）は左の品献納せり

一、花瓶　（八寸口）　壹個

島田恒二郎翁は

一、生鯛　三十尾

江津ノ雑況

▲設備調町内には総て紅白一様の幔幕を張り国旗球燈等を總て全式に新調せり▲並門鯽川西橋詰と御旅館前の兩所に建設せしが御旅館前は榊の葉を以て造り中央には榊の花を飾り付けたり▲煙火若御より澤芬さに二十發夜中十五發御發車の際五發を發す江津は三方は山にて包圍せられし地形なるが故に晝夜の煙火は未曾に反響して天地を震撼せん計り壯觀を極めたり　▲提灯行列江津村外十七ケ村學校生徒約一千二百名提灯行列を催せり集合地は鯽川橋上の筈なりしも百九十間の長橋に全部を整列せしむる能はず其半數以上を橋東詰の馬場に集めたり其多數の點火は下流の水に映して夜色の奇旋言ふへからす順次整列し終るや音樂隊と共に出發國領筒の町を練り歩行きつゝ御座所前にて君が代を三唱し夫れより舊道に入りて梟水西山を一巡し更に御旅館前の國道を出でゝ解散せり▲湯茶の接待那賀郡都治、後利、波津、都濃、都野津、川波、有福の諸村に於ては衛生上に注意し湯茶を用意して車夫等に與へ後利の如きは一般

拜候人にも接待せり▲江津附近の奉迎邑智島は御通路遥かに五十餘町に過ざる爲め一般拜観者は總て那賀郡内に於て奉迎せしむるを以て四郡十數村のものは郷川の川舟にて何れも江津に下り渡津村附近に於て奉迎せしが郷川橋下に集りしもののみにても百餘艘に達し數千名を算したり此夜樂留の儘に泊し翌朝更に奉迎の上歸航するあり又郷川に碇泊中の各船は橋下にあるものは勿論最も下流にあるもの共に滿艦飾をなし奉迎の意を表したり

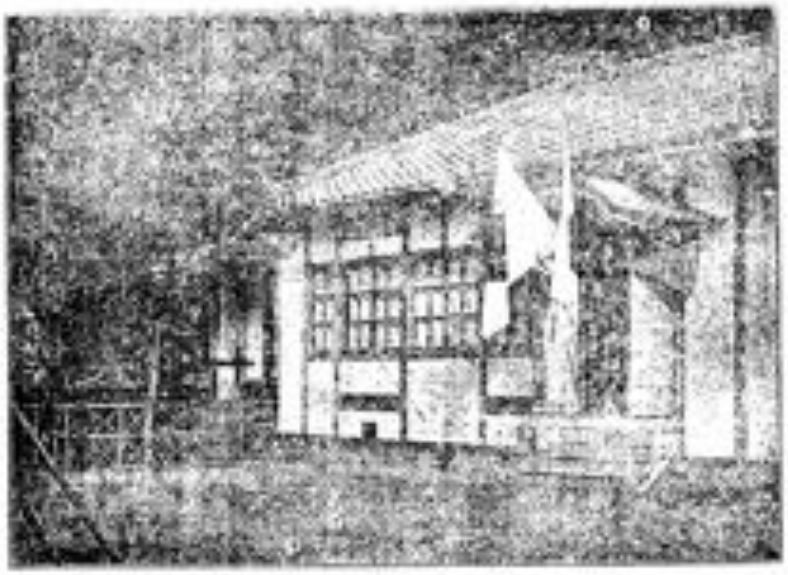
江津村御發車

五月三十一日

本日は朝來晴れ渡りて一天雲なく風も爽快を覺ゆ　東宮殿下には御豫定の如く午前九時江津御宿舘御出門御陪乘は本日は醫務所在地への御成なれば村木武官長御伴ある武官長の御陪乘は黙下にては安藝以來始めての事なり依て中山太夫木戸侍從長は三の馬車に隨ひ其他供奉の文武官・判外は裏郷夫將以下何の外に子爵桂平武將子を加へ村境より港道一帶に整列せる那賀、邑智兩郡の郡村各總代の熱誠を籠げたる奉迎の裡に御氣色麗しく御發車あらせらる

都濃村大字和木行く事數丁此處は一昨年五月廿八日露艦イルテツシの敗艦し來て艦長エールヂメール以下二百六十五名の上陸降服したる須時なれば其港道には石降伏將軍の乘組みたるボート、信號旗、蒸氣罐、パイプ、機械水雷、日用品、砲彈等の引揚品(中には會津の陣若せるものあり)を陳列し展覽に供したり右陳列品に就ては樣永武知事より預て寫眞に說明書を添附して捧呈し居たるを以て　殿下には特に御命令あらせられ御熟覽ありて村木武官長に種々御下問ありし由承る

敬川御少憩所



宇野御少憩所
尋常小學校

敬川御少憩所

午前九時江津より一里二十二丁なる川波村大字牧川に達し八幡河畔なる御小憩所に入らせらる建物は新築にして瓦ぶき清楚なり御膳みには御座所前の牧川の流れを約四十間堰止め其處にて鮎を網打ちて漁獲し台覧に供したるに　殿下には御感斜ならず河岸に立せ玉ひて親しく御覧あり「鮎は甘きものなるが肉縮が殊によろしき」由御言葉あり東郷大将と共に八幡近内を少時御運遊あらせられ去二十七日捕獲したる鮎を能々御覧あらせらる其時東郷大将は手植をなし約十五分にして御發車あらせらる途中邑智郡各村の幸迎通何れも劣らず盛なり

宇野御休憩所

十時二十分有福村なる宇野尋常小學校に着御到ふなる道側にては登火三發を揚け各團体學校生徒整列奉迎す校門には緑門を樹て玄關緑蓉を張り國旗を交叉す校庭には兎、山鳥、鶏等を陳列して御覧に供したるに皆御持前の冒御沙汰あり御休憩約十五分にして御出門あらせらる

濱田町着御

五月三十一日

斯くて打く學數丁にして敬川の上流なる同村魚切谷の檜莊御園に御岩の奇巌あり其上に大丹鶴五羽と長さ一間にも餘る大龜を飾りて奉迎奉祝申す是迄は海邊の開濶なりしに茲處よりは山勢漸く迫り十一時廿分にして石見濱神峯坂に達す此處にも奉迎の評衆多し山邊の樹間例の百千鳥を御聞に達す鳥は鶯眼鳥、金衣公子にして絶音筆舌相設ふて管戦する樣　殿下には茲の外御意に召され此處には御乘車の儘の御徐行なりしも特に御下車直に丘の上に登らせ玉ひ御聞に供したる鯉を取らせられて高らかに笑ひ興ずまさせ玉ひたる由水る松永御事は此の趣好は先日來當郡長が旌に苦心計劃致たるし旨言上したり

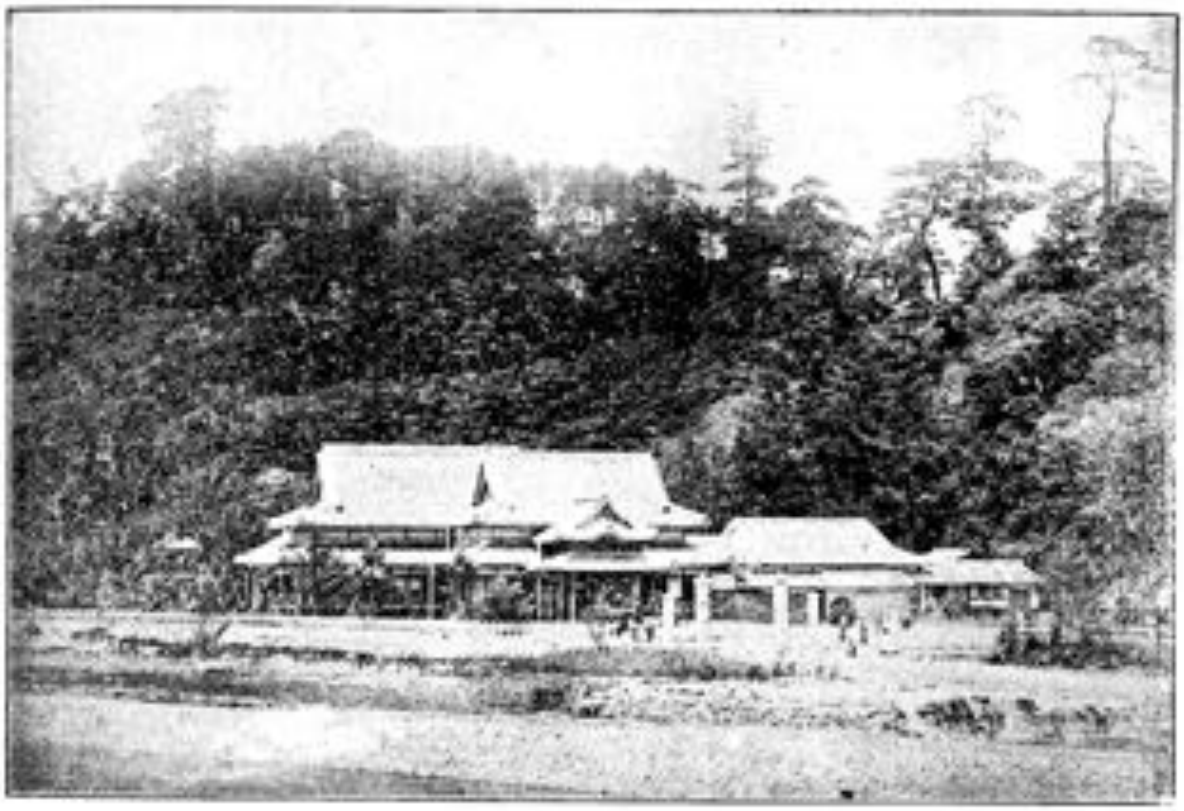
光榮の百千鳥

神在坂の百千鳥は頗る可憐なる御愛ものとして其評ありしが當日其最初に鳴きたるは雲にして該坂御着より十五分前より鳴始められにつれて雲薄くかくれの小鳥は一齊に囀りかはしたるより掛殿部長始め設備委員等は如何あらんと密て安き心もあらさりしに初めて胸を撫卸し殊に　殿下の御法色麗はしく御馬車を降らせられて緑林に玉歩を運ばせ給ひ鳥龍の葉かくれにつるしあるを發見せさせ給ふなど道外の光榮を得しよう非常に悦びたりしと而して此設備は主として石見村、上府村に嘱託せしものにして其費は數十金に屈し一金を下せば直ちに歸甘を發する遠物にて當日之を指揮し任務を完うせる技師は大迫正義大屋豊吉二氏にして鳥種の鳥は左の如し

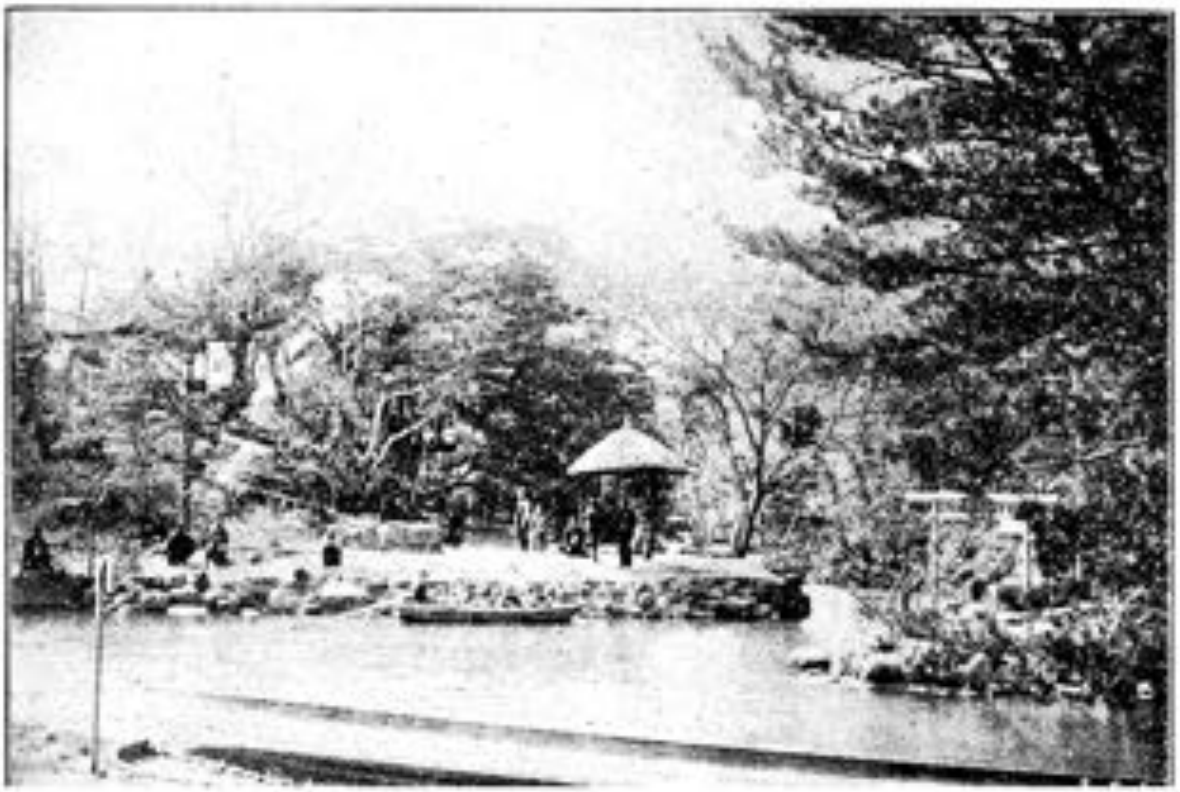
鶯三羽、野呂子全上、駒二羽、目白四十羽（中川金平）　鶯一羽、野呂子全上、目白全上
（津田周吉）　鶯一羽、野呂子全上、目白四羽（森田袋次）　鶯二羽、目白四羽（森小次郎）
目白三羽（上野龍吉）　目白一羽（木田正）　目白二羽、野呂子一羽（竹縄友一）　目白
二羽（中村陽次郎）　目白四羽（藤田定吉）　目白五羽（大屋豊吉）　目白三羽、駒一羽
（大迫正義）　目白十羽（石見村）

神在坂には歩兵第二十一聯隊長小泉大佐義道少尉を随へ騎馬にて奉迎申す直後は逐々として西行し津田町に近くや洋楽少佐の指揮する儀仗隊（第二第四の二個中隊）は練兵場より東北十町許りの國道の兩側に整列奉迎し君御を待つて君が代を吹奏し直後に加つて最後す其他の部隊は各中隊順に朝日町より鉄内迄十倍町に亘りて一列に整列排統の後をなし中學校、水産學校、女學校、美濃、龍足の小學校の各職員生徒、郡村公務員、赤十字社員、愛國婦人會員、篤行者、高齢者、在郷軍人等は瓦町より殿町、新橋至地の間に又有志者、高等官等は御旅館門内に整列準迎す遠方より來れるものは邑智郡、鹿島鉄山鉄路より來れるものありて其數總て無慮七万と稱せらる直後は石見村より津田町橋川、田町、瓦町、殿町を経て御馬地なる御旅館に着御あらせらる時に午前十二時二十分

旅館　御田漾



全景園



儀仗隊は直譯に加りてよりは行進曲を奏し歩武堂々として行進し盛觀を極ひ

濱田御旅館

流石は舊濱田藩主松平子爵が心を盡して建築されしだけありて雨基隠一の御旅館と稱さる大門を北に渡りて大玄關門の前を左折し濱田川に沿うて行くと數丁名も掬翠の樣濃かなる龜山城山を負ふて巍然屹立せる二重屋根の高臺、是れ濱田御旅館なり

構造と裝飾

四個の石柱に鐵扉を附せるもの之を御旅館の正門とす右方別に木造りの門あり『子爵松平武脩』の門表を掲ぐ玄關は二重屋根にて高く鏤谷天井なり玄關を上れば二間に五間の疊敷廊架にて中央に金地無落款、巢鶴の竹を畫ける大衝立を建つ左折して御次の間、十二疊にして二疊床に養川院法印筆墨繪の馬の幅を懸くこゝより四に一段高きが便殿なり八疊の間にて南に向ふ、一間の床に無落款花鳥の古畫を懸く東に一間の敷込、金無地の袋戸棚違棚あり四一間の明り床に掛きて二間の屏障子を建つ御次の間との間の欄間は桐に鳳凰の透し彫りなり、檜の谷天井にて東西南の三面御廊を掲ぐる所乃如何にも御所めきて見らる南より西へ一間幅の疊敷廊架を回らし其外側り様を設く御寢室は八疊にて床に文晁筆巴圖模彩の幅を掛く吉會無地袋戸棚、下右へ寄せて二尺五寸四方金地の地袋あり前壁にこうて曾我直庵筆の花鳥、山水、人物の書、金屏風一雙を建つ御化粧室は六疊にて床には應擧の記門の幅を掛く御浴室は二間半に一間半檜の二重座にて檜の谷天井に蒸氣扱を設す御食堂は八疊にて床に古狩筆花鳥の二幅對を掛く物産陳列所には郡内の物産六十点許りを陳列す此室は將來松平子爵が自己の居間にせん考へなりとかにて之を松の間と稱し十疊にて柱、鴨居、天井等一切松材を用ふ明り床の欄間に松に雀の透し彫りある比間にて最も

注目に價するは唐製玉の景物うなり古色愛然として掬すべし供進室は八疊にて床には雪舟筆春景山水の幅を掛く東方別に玄關を附し供奉官の出入口とす本館より少し〳〵隔れて東に　殿下の御湯沸し所、髙等官の揭拂し所、衣具入場、鄙役所出張所、儀仗兵詰所、宮內省御荷物入場、憲兵詰所、馬車繋場等竝立せり本館の後は廣濶なる庭園にてイルサクシュ艇より引揚げたるボート、器械水雷、砲身等を處々に配置す築山の上に四柱屋を設く林蔭蒼々たり泉池あり濱田川に通ず萬一　殿下の御思召に副ふへく新調の屋形舟一隻を備ふ以て海に浮ぶべし

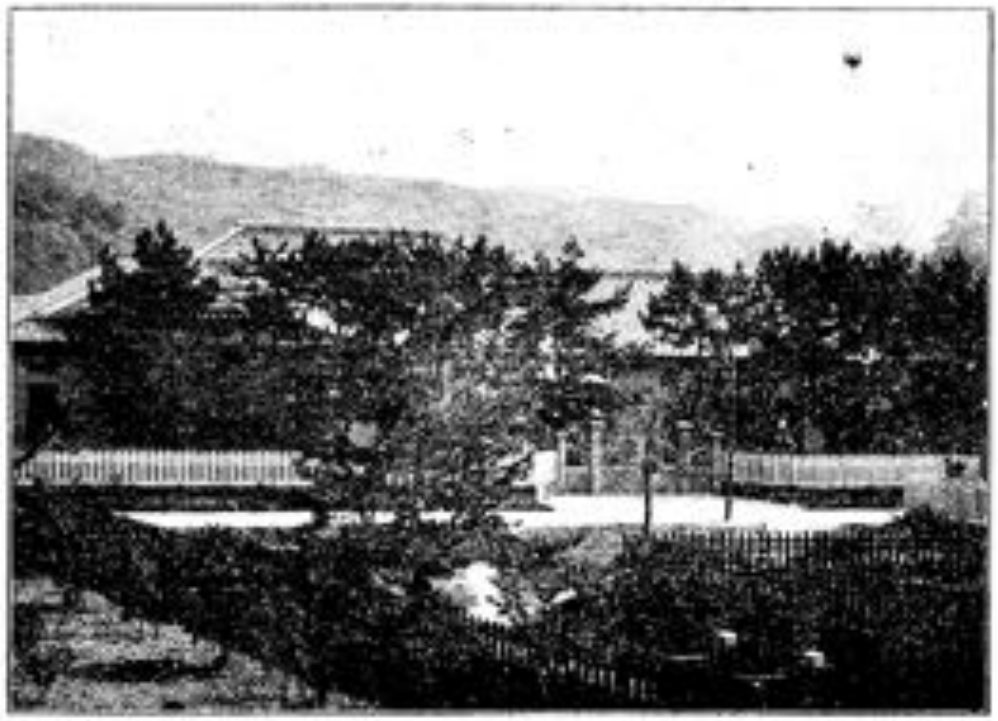
以上總反別一町、建坪百二十餘坪、濱田警這會社に嘱託して昨年十月起工し五月を以て竣成せり同會社に支拂ひたる建築費一万七千圓、松平家所有の城山より伐り出せし用材を金額に換算する時は約三千圓、庭園築造費、室內の裝飾設備費を加ふる時は約三萬圓にとるべしと云ふ

濱田中學校行啓

六月一日

眞宮殿下には御揃定の如く當日午前九時御旅館御出門濱田中學校へ行啓あらせらる村木武官長御陪乘申上げ中山太夫、木戸侍從長以下の供奉、東郷大將以下扈從し、行列例の如し學校にては生徒は門外に敎諭以下各職員は玄關側に整列、石原校長は御車寄に奉迎申上ぐ九時五分着御、藤本事務官の御先導にて御座所に入らせらる御座所には後方屏風を廻らし生花盛花等を配置す、御小憩の後校長石原和太郎、敎諭谷島喜太郎、同岸川肇、同德重平四郎に拜謁を賜り敎諭牧戸節外二十名に謁御拜謁を賜り次て校長は知事を經て學事狀況書を捧呈す夫より石原校長の先導にて敎育品陳列場へ御台臨あらせられたり此處には兼て同校に敎職を把れる故酉山步兵少佐、林同少尉及び卒業生にして共に戰死したる雷田、橋原、寺戸、渡部各中尉等の肖像を揭げありより又た同校生徒村上昇が濱田川の水源地にて捕獲せるハンデタ、三年生上村藤太郎の書けし東郷大將の肖像、四年生石原浩の書ける竹島

濱田中學校



濱田高等女學校

の演戦見取図拝揚げられしを　殿下には一々手を触れさせ給ひ中には御手に取上げさせて覧はし御下問ありしもあり知事より御説明申上げ又た裏手大庭には竹槍の調や大砲と附記せられたる背像拝を見て微笑を洩し屋内を一巡せられたり　殿下には直ぐ生徒の控所に成らせられ卓に就かせられて生徒の柔道撃剣を覧し給ふ柔道撃剣合せて二十組にして柔道より始め次第、林附番列に依り撃剣柔道を交互に試合をなさしめしを　殿下には最と御熱心に御覧あり拝永知事を側みさせ給ひて被仰は何に属するや教師は誰れなるや拝問ひ試みさせ給ふを知事より一々御説明申上ぐる内にも柔道試合の一組が組打ちて共に畳の上に投げコロ〳〵と折り重れるを特に興ぜさせ給ひ御酔を揚げて笑はせ給ひしに此事教員より御還御の後ち各生徒に傳へしに何れも非常の光栄なりとして感泣しまつれりと云ふ御前試合の光栄を拾ひしもの左の如し

柔道撃剣仕合番組

撃剣師範　助教諭心得　石丸一
柔道師範　仝　勤六等　竹田重市
撃剣審判　仝　大塚勢太郎
柔道審判　教師　林吉次郎

第一番　柔道　（二）田邊　優　（二）寺井義男　第二番　撃剣　（二）成重時三郎　（二）三上義文
第三番　仝　（三）山崎武夫　（二）田原雪吉　第四番　仝　（三）土田正臣　（二）和田耕三
第五番　仝　（三）藤岡宣作　（二）渡邊作成　第六番　仝　（三）清水末一　（三）堀江秀雄
第七番　仝　（三）大岡寛　（二）菅澤隆三　第八番　仝　（三）中本寛　（三）植畔栄
第九番　仝　（五）是光匡基　（五）小笠原富太郎　第十番　仝　（四）藤田善一　（三）大塚武男
第十一番仝　（四）井上澄　（四）中村俊一　第十二番仝　（五）三明慶治　（四）大庭隆章

第十三番梁瀬（四）金森　藤次（三）栗栖　幸穂　第十四番岸脇（四）松尾　芳造（四）坂本　精一
第十五番仝（五）山本　賢美（二）竹内　貫眞　第十六番仝（五）石田　春堅（五）黒部　正夫
第十七番仝（四）佐田　登誠（四）岩井　肇　第十八番仝（五）特本　茂（五）椋　貢
第十九番仝（五）上垣　淨爾（五）河野　正夫　第二十番仝（五）日野　四郎（補習科）岩本善一

（右圓書の數字は學年を示す）

それより仝校庭へ松の御手植ありて九時四十分御還啓仰せ出さる其際仝校へ御寫眞と金員の御下賜あり生徒成績品は大部分御買上の旨御沙汰ありたり

眞鍋大將も仝校へ松の手植せられたり

女學校行啓

六月一日

中學校より直に竝立濱田高等女學校へ行啓あらせらる同校にても生徒は門外に職員は玄關側に整列し渡部校長は御車寄に何も奉迎奉送申上ぐ藤本事務官御便殿に御案内申上げ校長渡部寛一郎教諭岡村鉞太郎に拜謁を賜ひ次て別室なる裁縫品陳列所に成らせられ生徒成績品に就て一々御下問あり知事は詳細說明申上げたり夫より校庭に於て生徒の体操舞踏等を御覽あらせらる第一回本科二年生の徒手體操より始め各年生の体操三回、竝踏三回、遊戲一回、最後の遊花を進らせる音樂堂よりは絶へずピアノの響聞えて皆白襷十文字に襷掛れる女生徒等入り替り立替り整然と立竝べる態極めて晴れやかに見受けしより　殿下には最と熱心に御覽あり茲に第二回本科四年生のコンクライゲンに擬花を飾く從白の女生徒が心持々しく高雅の花を手に持しつゝ目覺かなる音の調急に美音の流ぶが如く蝴蝶の翔けるが如く舞踏する所楚々として嬋娟の風雅へがたく願る御目に留りてあの花環はいと清麗なりこれへ寄せ見よとの御言葉あり渡部校長乃ち壇上舞踏場に昇り生徒の携へ居たる花環一

つ持ち来りて捧呈せしに　殿下には右手に取給ひて暫し打ち眺めさせ給ひしが御持ち廻り遊す事となれり御座所に還らせ給ひし後ち知事を召みさせて今日の舞踏は能く調へりとの御賞詞あり知事は恐懼措く所を知らざりしと云ふ此間伝操より遊戯、舞踏に掛けて殆ど二十餘分掛け様に演ト遊して御目を煩はせしに御退屈の色も見えさせ給はで御覧遊ばしたるは独り生徒の光栄なるのみならず一校の面目なりと各教員等何れも狂喜し御仁慈の程を感佩しせつれりと云ふ遊操舞踏の順序左の如し

第一回　混合遊操　徒手遊操（本科第二學年生）、短鈴遊操（本科第三學年生）、球竿遊操（本科第四學年生）、木環遊操（補習科生）、

第二回　舞踏タンヅクイケン第三段　（本科第四學年生補習科生合同）

第三回　舞踏ダアーマンカドリール第六段　（本科第三學年生）

第四回　動作遊戯芸ガ驚カ　（本科第二學年生）

第五回　舞踏コチロン第五段　（第四學年生補習科生合同）

斯くて　殿下には校庭へ桜の御手植あらせられ御列は前の如く直ちに還御あらせらる全校へも御寓其と金員の御下賜あり又生徒成績品全部御持帰りの栄を得たり

東郷大将も校庭へ桜の手植せられたり

城山御登臨

殿下には本日午後二時洋装の御軽服にて供奉の人々を随わさせられ桜永知事御案内申上げ御徒行にて城山へ御登臨遊ばさる此時風稍烈しく白浪狂波の寄せては返へす石見洋の風光亦一入のお慰にもと供したらんに少時御眺覧あらせられて知事に対して遠けき山々より尚々の名称由来なと御下問あり又招魂碑を覧はせ給ひ猪股孫

長に碑文を撰閲かす樣との仰せありしと承る

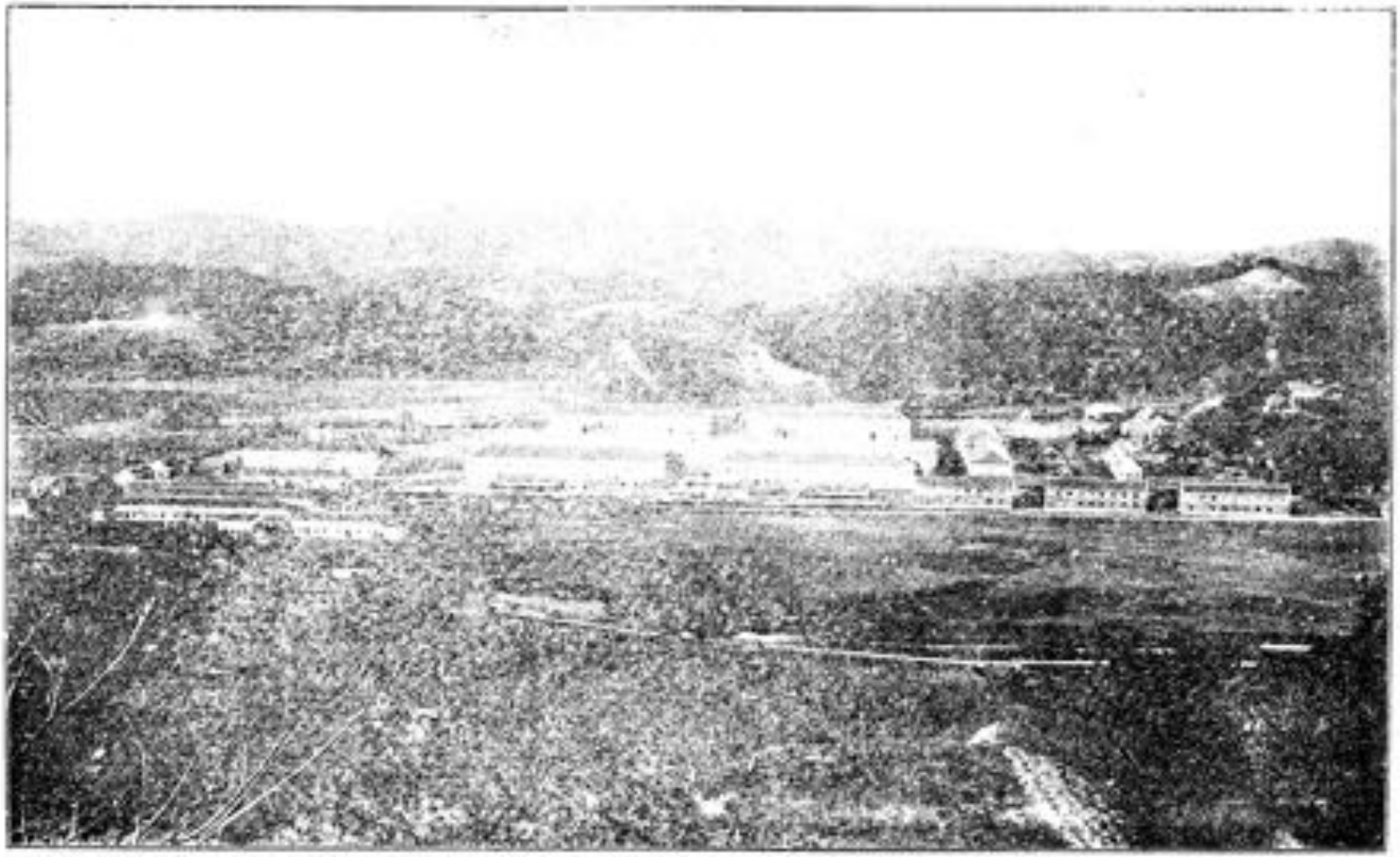
濱田聯隊行啓

東宮殿下には御豫定の如く午前九時御旅館御出門村本武官長の御陪乘其他供奉の文武官前日の如く歩兵第二十一聯隊へ行啓あらせらる當時は馬場を朝日町に出て中芝橋を渡て其先驅の營門に達するや朝日町南裏手に於て打揚けたる數發の煙火天空に轟きて壯觀を極む小泉聯隊長以下將校は營門に出迎ひ當時は直々として營門を入り聯隊本部の東側を經て將校集會所に達し玄關にて御下車小泉聯隊長御先導申上けて御座所に入御あらせらる御座所は將校集會所內の西隅の一室にして兵卒の作品數十点を陳列台覽に供したるに　殿下には巨細御覽あらせらる御小憩の後聯隊長より聯隊の略歷並に現在の狀況書を捧呈し次に第五師團長代理村山少將は本日執行する對抗演習の一般方略を詳細說明申上げ夫より聯隊長の御先導にて通用門より練兵場へ出させられ其南隅なる夕か岡へ御臨對抗演習を御覽す

對抗演習

是より先聯隊にては南軍（攻撃軍）に屬する第六中隊（隊長野中大尉）は筵分山に第八中隊（隊長河內山大尉）は將校集會所長に第七中隊（隊長柳谷大尉）第九中隊は第一大隊兵舍の北裏手即ち練兵場との中間の要地に伏し夫より東方經塚山には第五（隊長南大尉）第十（隊長林大尉）第十一（隊長西原大尉）第十二（隊長幸中中尉）の各中隊西方より順次に東方に連りて陣し南軍の第二大隊長星田少佐は第八中隊の右方練兵場通用門の邊にありて第六、第八、第七（第九は欠）の各中隊を指揮し第三大隊長濱利少佐は經塚山上第十一中隊の前面にありて同山上の前記四個中隊を指揮し佐藤中佐之を統率す小泉聯隊長は經塚山上第五第十中隊の中間に位置す

演田步兵第廿一聯隊營舍



第九中隊長は　池田大尉

北軍（防禦軍）は松江街道を隔て北方に亘る善兵山に堡壘を築き第三中隊（隊長笹正大尉之を守る其西方笠梯山より小松山に亘りても堡壘を築き第四（隊長渡邊大尉）第二（隊長桑木中尉）第一（隊長渡戸大尉但二小隊）の各中隊之に據り第一中隊の一個小隊は善兵山の北方後方なる陸軍墓地に置きて其警備を嚴にし淨水少佐之を指揮す兩軍の配置別くの如くにして午前九時迄に戰鬪準備全く成る

翌日各隊に下されたる想定左の如し

南軍戰況

一、善兵山より小松山に亘り陣地を占領せる敵を攻撃せんとする南軍歩兵第二十一聯隊（第一大隊欠）は六月二日午前九時までに國屋山より道分山に亘り攻撃準備の陣地を占領せり

二、南軍聯隊長は時機を待て攻撃を實行せんとす

演習に關する教令

一、北軍は帽に白帶を附す

二、空包は各人三十發を使用すへし

三、第九中隊は假設とし軍旗一本を以て標示すへし

四、南軍聯隊長（佐藤歩兵中佐）は戰況に基き六月二日午前九時までに配備を終り準備を以て統監に報告すへし

五、演習は再興の號音を待て開始すへし

北軍戰況　　統監小泉大佐

一、善兵山より小栗山に亘る陣地に據り兵營方面より前進する敵を阻止せんとする北軍歩兵第二十一聯隊第一大隊は六月二日午前九時までに防禦配備及諸工事を完成せり

二、同時優勢なる官軍の歩兵は落武して國崖山及道分山を占領し該高地に在りし北軍の監視部隊は悉く本陣地に退却せり

演習に關する敎令

一、北軍は帽に白帶を附すへし

二、塹包は各人三十發を使用すへし

三、赤旗一本は歩兵一中隊を標示す

四、北軍大隊長（澤本歩兵少佐）は戰況に基き六月二日午前九時までに配備を終り地圖を具て栽監に報告すへし

五、演習は再興の號音を待て開始すへし

栽監小泉大佐

殿下は菅部大尉を始め中山、村木、木戸其他の供奉官、倭永知事、藤本福田兩郡長等を隨えさせられ夕か岡に御起立御覽あらせらる御座所は警衛の爲め帶旗を樹て之を標示す午前十時一分戰鬪開始の號音響くや道分山にある第六中隊先つ發射し續いて南軍の各隊一齊に發射す國崖山の第十第十一中隊は第七第八中隊射撃掩護の下に小山に第十二中隊は若鼠山に前進して十時十五分此の兩山より猛烈なる射撃を試み其牽制に乘じて第七、第八中隊は共に進出して練兵場の中腹に伏し此時道分山の第六中隊は最も激射し第八第七中隊之に乘じて更に突貫したるに北軍の各隊亦之に應して猛烈防戰す殿て海鼠山なる十二中隊の一小隊は突進して國道を横切り北方陸軍墓地に向ひたるに同所にある北軍の一小隊（第一中隊）は驚くも退却したれば直に追撃ひて全く之を占領

す而して第八、第七、第五の各中隊は既に善戒山の敵堡塁に肉薄して前面高地の稜頭山に迫し小山沼鼠山の第十第十一、第十二の各隊亦善戒山の堡塁に迫り鼠分山の第六中隊も北方に進み実貝を試み十時二十八分雨軍の交射光も激烈を極め殿々爆を揮し地を蔽かし一望の荒涼駐屯快適豊べん方なし此時善戒山たる北軍第三第四の二個中隊は相連りて逆襲を試み遂に僅かに百米突の近距離に肉薄してアハヤ銃実相摩の白兵戦を演出せん計りの接戦なりしに十時三十分にして戦闘休止の喇叭一斉に鳴む

演習中　殿下には始終御熱心に御覧あり時々御微笑を洩らさせ玉ひて村木軍司令部附に御話あり戦闘終を告くるや各供奉員を随わさせられて夕か岡を降らせられ通用門より再び野長巣登所なる御座所に入御あらせらる

此時雨軍の各兵は同時に引上げて練兵場に集り又練兵場の東端には近衛師団高等小学校二十七校の生徒千三百二十名整列し　殿下の還啓を待て遥拝を開始せんとす

営舎御巡覧

御休憩中村山少将小泉大佐に拝謁を賜り師団長の先導にて第一中隊営舎と炊事場を通御親しく御覧あらせられ夫より御座所に陳列せる花瓶（花は第二中隊二等卒富田重助作、瓶は第十一中隊二等卒村上時右衛門作）絵葉書（兵営内の軍実を毛筆にて書き二十四枚アッタ入りにて一年志願兵三島恒次郎作）写真（稲葉松崎屋大尉其他三十一名日露出征戦死者及び現今兵営延長当時の兵営）等御覧あり将御持場うの御沙汰あり同所にては右の外一年志願兵内藤新の彫刻せる故有栖川宮殿下の木像（高さ四尺）鏡其他を御覧に供し且桜河上師団長より、連隊部員、廿組歴足、千代延英良の三部長、竹原山根附属長等も陪列せり

還　御

還らせ　殿下には午時御出門通用門より練兵場を過ぎさせらる此時各兵は馬内中央に面して整列し右二十七高小校生徒の一大団は旭鈴体操を御覧に供し君が代の喇叭は響き吹奏せられ最敬礼の中に直諸は西に還ら

習國道より廣島街道に出で右へ中山通りを經て御旅館へ還御あらせらる

右聯隊行啓還啓の際は佐藤中佐聯隊司令官代理として奉迎に列したり

演習の際は局圍の丘上、道路、畑境は一遍人を以て埋まり實に盛觀なりし

聯隊區御の際御持ち歸りに相成りし者左の如し

花筐（這花は第二中隊二等卒富田重之助、筐は第十一中隊二等卒村上助右衛門二給菓書「一年志願兵三島出

次郎の手になれる著各種の動物を毛筆にて畫きたる著外數種にして頗る美麗なる者なりき）

濱田聯隊略歷

本日當聯隊行啓の際小泉聯隊長より拜呈したる聯隊の略歷書の寫し左の如し

歩兵第二十一聯隊の略歷

（一）第二大隊は明治十七年廣島に於て新設せられ同十九年聯隊本部及第二大隊本部並に第五第六中隊を增設せられ同年八月二十五日軍旗を拜受し同二十年第七第八中隊同二十一年第三大隊を增設せられ始めて聯隊の完成を告ぐるに至れり

（二）明治二十七八年戰役に於ては公使館及居留民保護の目的を以て先つ朝鮮國に出張し同年七月王城に入り次で牙山に前進し成歡牙山の敵を壓擊せり其後平壤を陷れ九連城を攻略し牛莊及田庄台を屠り二十八年七月廣島に凱旋せり

（三）同二十七年十一月二十日屢くも　皇太子殿下當聯隊補充大隊に行啓あらせられ演習を御覽せらる此時銀盃を拜受せり

（四）明治三十年冬聯隊は新設歩兵第二十一旅團に編入せられ三十一年廣島より當濱田に轉營せり

（五）明治三十三年淸國事變起るや同年七月淸國太沽に上陸し其後兼行突進を嘗して天津に入り北倉附近の

戰鬪に參加し大築局附近の敵を攻めて大に之を破り殘るを追ふて北京城に迫り東直門を破壞して城内に侵入し夜襲を以て崇門城壁を奪ひ次て德勝門及西直門を占領し又西安門を攻撃して敵の包圍に陷りたる使館の救援を敢行し續て皇城を守備せり此間終始歐米各國軍と協力行動して列國環視の間に大に我軍の威武を發揮し三十四年夏歸田に凱旋せり

(六)三十七八年戰役に於ては三十七年五月電令を以て出發し清國盛京省營家屯に上陸し南山戰鬪に參與し次て得利寺附近の敵を攻撃して東龍口附近を占領し大石橋附近の戰鬪に於ては夜襲を決行して三元井西方高地の敵壘を占領せり又蛤蟆附近の戰鬪に在ては西馬架誇北方高地を攻撃して同地を占領せり同年八月遼陽附近の戰鬪に於ては先つ上征家峪を占領して敵を首山堡附近に壓迫し前戰激鬪「ヤオヤンスイ」の敵壘を攻撃し追撃の后終に遼陽城を占領せり

三十八年一月黑溝台の會戰に於せは首山支隊に屬し徐家溝樹及針筒附近の優勢なる敵を攻撃して之を撃滅し次て哈爾堡附近の敵を攻撃して同地を占領せり此戰鬪に於て師團は臨時派司令官より感狀を受く

同年三月奉天の會戰に於て李家溝樹附近の敵を攻撃するや戰鬪最も激烈を極め聯隊長大佐福榮謹三郎戰死せしのみならず第二第三大隊の如きは戰鬪殆んど三分の一減せるも尚攻撃を續行し終に夜襲を容れ日向の陣地たる砂山堡壘圍を占領せり次て北陵子及二台子に轉戰し又沙沱子を攻撃し多大の損害を與へ終に之を占領せり此會戰に於て師團は第二軍司令官より感狀を受く三十八年冬歸田に凱旋せり

創立以來の步兵第廿一聯隊長

明治十九年六月十六日より　步兵中佐　友田美喬

同廿六年二月十三日より　仝　武田秀山

同廿八年三月十九日より　仝　一戸兵衛

同廿八年八月五日より　歩兵大佐　武田秀山
同廿八年十二月廿一日より　〃　山中信義
同廿九年九月廿九日より　〃　中佐　竹中安太郎
同三十四年十月一日より　〃　長屋尚綱
同三十五年九月四日より　〃　小泉策郎
同三十七年九月四日より　〃　稲葉識三郎
同三十八年三月四日より　〃　太田米丸
同三十八年三月十八日より　〃　佐藤話次
同三十九年三月一日より　〃　大佐　小泉策郎

御舟遊

東宮殿下は中學校より還御の後午後二時御發行にて御座船内御水汲より後て用意の屋形船に御座船は瀬戸が島の富家小林喜一郎氏の特製に係る新調船にして長さ七間巾十尺の速力船なり當日はテントを張り紺の幔幕を廻らし三名の漁夫之を漕ぐ）に召させられ御座船には村木武官長、木戸侍從長、松王事および本縣知事供奉し御供船には松平子爵、藤本、原田の兩事務官、落合島長等乘組み松原沖にて網見御覽あり御歸は第三御傳馬船六隻に漁夫八十名乘組みて網を卸し拂暁勇ましく曳きたるに鯛十三尾、黒魚、鱚其他の數々漁獲あり直に御座船に持參し　殿下には果げに御覽あり「此網約三十分」ずつて右魚類は御旅館に廻う　殿下は外の浦に向はせらる外の浦滅山下にては島谷水産學校長指揮の下に曳網を爲し大鯛其他小魚を漁獲し川口より鳥羽丸に積み第一艦隊へ下賜せらる此日朝來無風海上波靜かに　殿下には御機嫌麗はしく種々松永知事に御下問あり四時半還啓

あらせらる

御使差遣

濱田孤兒院

黒木侍従武官を濱田孤兒院へ差遣さる檜山濱田警察署長先導し、生島縣賞勲書記、高田軍醫、垂久利歯醫隨ふ同院に於ては院主以下院兒等門前に奉迎す御使は育兒の狀況を下問し院内各室を巡視したる後院兒を一室に集め各年齢、姓名、志望を尋ね御菓子を下賜せらる院よりは現況書類、院兒狀態寫眞を捧呈し御使は午前九時十五分還啓復命せらる

園に目下全院に收容せるは孤兒八名、貰兒六名計十四名にして十五歳を最年長とし七歳を最低とす毎朝六時鞭鐘によりて起床するや洗面各室掃除を終り　團陸下に拝謁し院主院母に對し挨拶を爲し教室に集めて訓話を爲し終りて男女に分ち食堂に入らしめ食事の後通學生は夫々學校に赴り學校歸還後は男は工業品製作又は慈善行商に出で女は年齢に應じ夫々女の手藝を爲さしめ夜間は一應の學事復習を爲したる後訓諭を加へ寢につかしむ院主和田氏は孤貰兒の他兒等に遜色せられんことを恐れなるべく門外へは立出でしめざる方針なりと云へり面して未だ院内教授の設備をなす能はざる狀態なるを以て町役場と交渉して學校に通學せしむることゝなりしが意外に同情者多くまた倫理を受くる等なきを得て大に安心せり當日撮影せる寫眞十六枚は院兒各種の狀態を撮影せるものにして睡眠、夜學、挨拶、体操、禮讃其他種々の狀態を示し可憐なるものなりし

御陪食

六月一日午后七時御旅館に於て御陪食被仰付しは左の諸氏

東郷大將　　松平武將子爵　　村山少將　　松永島根縣知事　　藤本事務官　　村木侍從武官長

中山大夫　　古賀警保局長　　小泉大佐　　笠田中將

仝二日立食を賜はりしは左の諸氏

屋田第四部長、小笠原騎兵佐、濱脇郡長島長、千代崎美濃島長、甘粕属足羽長、佐藤中佐、

中島憲兵少佐、中村憲兵大尉、高砂塾諭少佐、入江判官、村田通信事務官、竹原縣會議長、

山根縣會副議長、保田警視、村上飯川郡長、助村安濃島長、橋山邑智島長、片野邇摩島長、

附記　村上、片野、橋山、助村の各郡長は道路の故を以て酒肴料を下賜せられたり

拜謁者

若御の後拜謁仰付られたるもの左の如し

東郷大將　　村山少將　　古賀警保局長　　松平子爵　　松永知事　　藤本屋田兩事務官

濱脇島賀郡長　　檢事田村光衆　　判事安藤淨造　　伺井上二郎　（以上單獨拜謁）

歩兵大尉　　橋本歩兵中尉　　千代延美濃島長　　甘粕屋足島長　　伊藤農事試驗場吉田分場長

内務省臨時檢疫官内野仙一　　田中知邦　　判事赤堀龜雄　　仝山田茂樹　　陸軍三等軍醫正強重剛美

三等軍醫正平見義一郎　　歩兵中尉大谷久則　　歩兵少尉竹間重市　　陸軍三等軍醫佐野喜三郎

歩兵少尉橋田保郎　　仝細田錄一　　陸軍二等軍醫江村作藏　　陸軍二等主計岡本俊人

陸軍三等軍醫大屋庄一　　歩兵中尉中村虎次　　歩兵少尉笠井常一　　陸軍三等軍醫安田進

歩兵少尉渡利友貞　　仝山下武雄　　仝荒木安吉　　依願歩兵少尉野島忠雄　　水産學校長島谷洋次郎

奉拜者

濱田中學校行啓の際
御正門内にて貳百貳拾九名
御正門外にて三百六拾三名

御下賜

左記の如く夫々御下賜ありたり

一御紋章入銀花瓶　一對
一御紋章附銀杯　一組
一紅白縮緬　二疋
一金貳百圓
一御紋章附銀杯　一組
一白縮緬　一疋
一酒肴料（貳百圓）　一封
一佛國製金御紋章附銀製巻烟草入　一個
一銀製御紋章附巻烟草入　一個
一白縮緬　一疋

（以上普通拜謁）

子爵　松平武脩

島根縣知事　松永武吉

島根縣事務官　藤本充安

一酒肴料（百圓）　一封
一羽織地及袴地　一反宛
一酒肴料　一封宛
一袴地　一反宛
一酒肴料　一封宛
一酒肴料　若干宛
一白地絽　一反宛
一酒肴料　一封宛
一軍服地　一反
一酒肴料　一封
一金百圓
一軍服地　一着

一酒肴料　一封宛

一軍服地　一反

外一品

島根縣事務官　服田義次郎
警保局長　右賀彦造
那賀郡長　落股定重

島根縣事務官　本間則忠
島根縣技師　小笠原百三郎

島根縣技師　渡部雄吉
島根縣警視　保田乙吉
前益川郡長　古川祖歳
前安濃郡長　岡晉虎太郎
美濃郡長　千代延聰建

第廿一旅團長　村山郁彥

府縣會所

第廿二聯隊長　小泉策郎
憲兵少佐　中島矩貞
仝　大醫　中村孝三郎
騎兵少佐　高須萬太郎
步兵大尉　入江顯三
憲兵下士

近衛騎兵中尉　菅田定吉

一金參百圓　一封　那賀郡濱田町
一酒肴料　一封　島根縣奉迎委員（島根縣廳、金指子、金野崎、金澁谷、金原三行警察兩關係者）
一仝上　仝　島根縣奉迎委員
一酒肴料（四百圓）　一封　那賀郡役所員
濱田町役場員
江津村役場員
其他奉迎事務に關係員
一金百圓　一封　松平子爵家々扶以下雇傭委員
一御菓子　一包宛　儀仗隊
（濱島警察署通信事務官村田寅之助
小村藤一郎外水夫一同）
濱田郵便局長岩崎俊輔
仝局事務員四名
一金子　一封宛　那賀郡役所員
一本杯　一個宛　島根縣事務官
福岡松江市長
片野副廳長
那賀郡長

附記之れは奉迎事務に關し特別の勞勵を著すべきものなりといふ

一御菓子　一包宛　　兼島那賀郡有福村長
　　長野宇野尋常小學校長
　　那賀郡行啓關係委員
一鮮魚　若干　　護衛艦隊一同
一牛肉　若干宛　　憲兵、儀仗兵一同
一浜物　一頭　　水産學校

之れは敬川より御持歸の分

献上品

一屋上の龜（銅製置物）　一個　　松平子爵（濱田）献上
一石見半紙　一九

附記　屋上の龜は城山の名龜山に因みて作られたりといふ明治四十年五月浜野美盛作高さ六寸五分長さ壹尺九寸あり

一香魚　若干　　松永知事
一貝類　一貫匁　　那賀郡
一椎茸　二十斤
一半紙　三帖
一半紙　二帖　　美濃郡
一半紙　二十斤

濱田翁土ヘ下賜品

同献上品
鍬の上部

烏ヶ戸湖畔澤

一箱
一具綿
十折
一生番魚
七足
一羽二連
一揃
一宮貝ノタタ
濱田町
是郡
一高輪峯試猶品　四拾九点
階記東京仕立桐箱入願美麗なるもの

御買上品

那賀・美濃・能足三郡物産陳列品の内左の通御買上の光榮を得たり

那賀郡

陶器　六点　江津村　泉乙吉　畳機
全上　五点　全　甘木島仙一　石見半紙
全上　一点　西鹿村　寺戸佐太郎　異形帽子
清酒（老松）　一点　濱田侯元右衛門　清酒（三ツ銀）
全（白梅）　一点　濱田大造　新作　椎茸
全　一点　波佐村　全　和田村　久保田豊吉　四点　全　田村　栗七郎　三点　全　粕野　栗次郎　一点　全　尾崎　茂一郎
銅　二点　濱田　舟田　益太郎　洋菓子
菓子　三点　濱田　石原　由太郎　全
片栗粉　一点　和田村　積徳　協合　片栗粉

片栗粉　一点　末田村　横野　助市

美濃郡

清酒　益田町　堺野　三藏
全　　乾砂村　河野　久太
醬油　益田町　右田　三吉
椎茸　二川村　領家　利太郎
石見半紙　美濃村　石橋　治吉
全　　都茂村　小椋　徳太
疊表　安田村　澤江　幹一郎
全　　豊田村　見明トメ
餅　　錦手村　龍原　作治
全　　小野村　村上　彌十郎

鹿足郡

三椏皮　小川村　木村比右衛門
全　　日熊　安兵衛
茶　　日原村　宮田　治三郎
蕨粉　青原村　椋　仲八
全　　太田　竹治
全　　岡崎　ヤス

全上（東部）

全　　高津村　植木　惣十郎
全　　吉田村　大畑　鑑三郎
全　　益田町　堺野　邦吉
全　　都茂村　河野　關次郎
全　　中西村　竹内與左衛門
疊表　吉田村　山本　寅吉
西洋手拭　安田村　原福　次郎
樫木眞田　高津、吉田、益田各傳習所
全　　小野村　村上　政太郎

全　　渡邊　芳藏
全　　日原村　廣田　鶴太郎
茶　　青原村　水津　周太
全　　吉松　兼治
樫木眞田　津和野　中路トミ
全　　山村　ヨシ

仝	馬鈴マレ	仝	原田タカ
仝	宮崎ミチ	仝	山村セイ
仝	原イチ	仝	大塚マキ
仝	湯原トレ	仝	中野ウメ
仝	田中トセ	仝	高木サヨ
仝	中田ヒノ	仝	米部村 岩本ヨシ
仝	弘中シナ	清酒	津和野 嶋本十四三
清酒	津和野 原魚店	仝	河村七右衛門
銅型	堀道村 原藤十郎	津和野	藪重平次郎
導火線	津和野 吉田三輔	殿木村	中田熊太
三椏半紙	日原村 村上豐太郎	柿木村	竹内壽太
仝	殿木村 永津榮太	仝	柿木村 吉松
仝	小川村 渡邊勇藏	半場紙	青原村 柳井ツヤノ
半紙	六日市 田村恭治	証許	日原村 神田芳太郎
証許	水津治三郎	仝	津和野 田中知邦
仝	朝倉村 小山國太郎	仝	齋藤與左衛門
仝	宗內市左衛門	仝	七日市 藤井信次
仝	津和野 大谷長治		
羽二重			

遺物御覧

松平子爵の光栄

全子爵の光栄を得られたる次第書を得たれば其要部を其儘左に摘録す

六月一日午後亀山右城山上の公園墓本丸跡に御登臨四方屋に方て拝謁し〻四方山の御話あり令弟亡中尉松平恒吉戦死の状御尋あり御煙草を賜ふ且更に畏き御言葉ありしには感泣の外なし御歩途愚花亭林四方屋にて御小憩夫より甲ノ島四方屋御小憩厳より擔護の衣帯鎧及銃砲、多陀寺の佛像とポートを台覧ありたり

中尉恒吉幼時御学友を勤めし旅を以て其感歎、写真、遺物等を台覧に供す午後七時御陪食を仰付らる時に遺物に付て御言葉を賜る

一感状　　一通

近衛歩兵第四聯隊第十一中隊長陸軍歩兵中尉松平恒吉（文詞省略）第一軍司令官男爵黒木為楨印

一軍刀　　一振　　在鎮衛戍長勲功光　　裏に文明の一年二月日

一短刀　　一振　　君の為めささらたけをのふみしたく

末へまもれの野に朝日さすらん　　恒吉

一写真　　一葉　　裏に明治三十七年三月五日征露紀念の為め厳島澄在中将校宿舎

山本理三郎方に於て

君の為めりく兵我身は山吹の

七重に八重にさきて散らさん

六月二日東宮主事より進物御下戻し白賢に相成る由申渡さる午后一時　殿下御前にて左記拝領品あり
畏き御言葉あり東宮太夫よりも言葉添あり（拝領品下賜品の部にあり）仝三日山島蝶様を紙山桜林へ放つべき台命あり島長手拭立谷之を放つ午後二時十五分　殿下松御手植あり子爵恩従す（以下略す）

御召艦入港

六月一日午前十一時三十分御召艦鹿島、供奉艦香取、警手、駆逐艦日雲、朝汐、追風、朝凪の諸艦入港す有馬司令長官は幕僚七名を随ひて上陸御旅館に伺候せらる清田湖畔は為めに異彩を放つて観覧を極めたり

設備

▲大橋北詰に奉迎装門、港戸が島に奉迎装門を設く（富町御通り筋南側に金巾二紅三白の幔幕を張る延長千三百五十間（町にて新調）△國旗及電形提灯各二千七百を掲揚す（各戸にて新調）御影みとしては（一）御着の日午後一時より五時まで煙火二十五發、八時より九時半迄十五發二日目より三日目まで同様、五日日朝より二十五發を例れも八幡山に於て打揚ぐ（以上部より）御着の夜八時より九時まで二十發を測候所附近に於て打揚ぐ（町より）右煙火は大坂より來りて製造（二）清田外附近各甘蔗等小學校生徒二千人は御着の日旅行列をなし同夜提灯行列をなして御旅館前面一帯の高地を固り御旅館西方に到り萬歳を唱ふ又た清田町を四隊に分ち各區民交代に四日間毎夜提灯行列をなす（三）石見、三階、大内三村の共同計畫にて御旅館對面の三階山に幅五間、長さ十二三丁に亘る富士形を設し人夫三百人をして篝火を焚かしむ尤も第二日の夜は日の出、第三日の夜は三日月と變換せしむ（四）　殿下御乗艦の際、町の催しとして沿家の婦人十六名に白浴衣、赤襷の裁ひをなさしめ造酒四樽に分乗せしめて清田港に於て饗應をなさしむ（五）

長濱に於ては御着の日と御乘艦の日盛大煙火を打揚げ檢迫各船組は滿艦飾をなす（六）六月二日午前七時練兵場内に於て小學生徒千百三十八人の奉迎体操を御覽に供し▲救護所濱田町に五個所の救護所を設く其他本願寺派の弘宣講施藥院は田町元竹川宅に出張救護所を設く▲御座所内へ郵便電信局の臨時出張所を設置し又電話も架設せり▲縣廳舍濱田尋常小學校々庭内へ其一部を設けたり

供奉員宿舍

中山大夫、侍醫　清旅館　　村木武管長、木戸侍従長、村田廣島郵便局管理課長　佐々木旅館

吉田内蔵主事　丸川舍　　主馬寮一行　大和館　　東郷大將　俵元右衛門

村山第五師團長代理　竹吉善五郎　　右賢等係局長、代議士、縣會議員　藤田旅館

侍永知事　宇川屋　　騎兵一行　寺本旅館　　憲兵一行　澤屋旅館

餘興ト光景

卅一日の濱田町

大濱北詰に高さ三丈餘の大緑門を樹て大國旗を交叉し其他辻々には大國旗を張り各戸には軒灯、綾幕、國旗等を掲げ滿街一時に盛裝し本日を以て全町民の狂喜正に其の極点に達し町内活氣横溢す△各銀行會社は敬意を表する爲め當日は休業し又各商店中當日休業と貼出し店頭を片附けて盛裝す△郡賀各村は素より邑智邑鹿郡のもの皆濱田附近に來りて奉迎し又た美濃鹿足の各學校生徒一般有志者及び遠くは廣島縣山縣邊より來れるもの皆町内に於て奉迎し其の多くは市に宿せし爲め御着後の市内は非常の雑踏を極め葉桜無行列の各圖と合し人出山の如く實に濱田町空前の賑きなりと稱せらる

夜の光景

有志の提灯行列　有志者五百人の催しに係る行列は午后八時より真光寺馬場に集合して勢揃をなし夫れより各町を練り行き御旅館前に至り萬歳を三唱し解散せり亦小學校生徒も同様提燈行列をなし盛観なりし

濱田中學提灯行列　同校職員および生徒の一團は六名の音樂隊を先頭とし各自自製のポンポン形の赤提燈を手にし高尾山濱田測候所を去る西北約十六七町の低地より山頂に登り一字形に整列して樂隊を奏して瀬戸ヶ島道に出て萬歳を三唱せり

一日夜の光景

提燈行列　那賀郡内各小學校生徒聯合提燈行列を挙行せり之に參加せし生徒數約貳千五百人と註せられ一齊に軍歌を謳歌し熟誠なる歓迎振りにて市内は群衆の雑踏殺るが如く盛大を極めたり

色火煙光

山學校と水産學校と聯合して濱田測候所の東端なる高尾山にて三ヶ所に色火を焚く其原料は京都より取寄せたる者にして白熱電燈に照らされたり其時間迄燃煙を挙めて低く見るが如く光明燦然として附近はサーチライトに照されたるが如し頗る美景を呈したり

二日夜の光景

提燈行列　御警備の計畫に係る提燈行列と篝火は午后七時より挙行せらる先原町、三辻町、大元、瀬戸、濱田通の五區聯合にて提燈行列を挙行せしが右數千の區民は十念寺境内に集合それより各町を經て前夜の如く濱田商業銀行前廣場に整列一齊に萬歳を三唱して解散せり

富士の篝火　三階山は御旅館前面にあり此處にては石見村の催しに係るもの篝火を以て富士山の形を表はしその上に太陽を現して御覧に供したるが頗る壯觀なりし

砲臺陷落　日和山にては濱田在郷軍人三百名の主催により支那風の砲臺を假設し砲發三回にして砲臺陷落し總崩たる國旗高く其上に立ちしは頗る評判好にして痛快なりき其他中學校生徒の提燈行列あり晝間より引續きて打揚る煙火は絶へず中空に爆發し御旅館前より櫻馬場附近にて之を望めば火光濱田川に映して美觀極りなかりし

花行列

濱田高等女學校生徒の一團は三日午前十時頃花を附けたる傘を手に手に携へて行列をなし君が代を唱歌して前進し御旅館前に至りて君が代を三唱し傘が枝は櫻馬場の手摺に釘付になして果てゝ

滿船飾

三日御乘艦の艦頭より濱田浦の長濱、舟の浦、下市岸等の漁船何れも滿船飾をなして八百艘餘り一團となりて萬歲申上く是亦壯觀を極めたり

漁婦競漕

提燈行列、煙火、餘興列終に各地に於て催ふされて千篇一律なる事なれば何か一趣向を凝して御好みに供せんと當町舟ヶ濱の漁夫等焦心の末へ婦人の小舟競漕を企劃し　陛下御乘艦の目を以て御召艦前近に擧行する事となりそも婦人の漁業なるもの容易に出來得べからざるが如きも此地に於ける漁夫等當に對州著は歸國近洋に出漁し時には何時も女のみ居殘り個の藻草を刈り沖合に於ける被覆船を見る毎に夫に代りて救助船を盛出て波濤の中を巧に漕ぎ廻りて救助の目的を遂する事珍しからず殊更大の婦女のみなれは之れに依て小船の競爭を試みんとはなせしなり其競爭地點は瀨戸ヶ島碧内四百米突の間にして選手は十九歲以上四十歲以下の女都合十六名にして一隻四人乘四艘を仕立て何れも對の帶帶、白鉢卷、襷の色黑、青、紅、赤の四種に分ち出來揃の事故を當て各艘の表色其袂ひ勇しく艦橋、鳥居、表橋二艘の裝飾ある漁船に

分乗して三打の太鼓を相図に各スタートを発するや何れも負けず劣らず少時整然として進む決勝点前方の標識を一周して再び出発点に帰着するにあり雖て非常最も優勢なりしが四分間の後遂に帆を捲いて先着し柴、黒岩の順序にて之を御覧あらせ給ひて御満悦の体なりしやに洩れ承り以面して先着船なりし赤の提手は帝国新井ハル、乗組井崎トメ、新多ウタ、板谷カメの四名にして身は薄草苅る漁婦にして斯る面目を施せしを無上に喜びあひ四艘相並んで勇しく瀬戸が島に漕ぎ帰る当日の提手左の如し

船頭　宮崎マヤ　中村タマ　宅間フナ　新井ハル
乗組　宮野カヤ　板谷カメ　宅間モノ　横コウ　宮崎トモ　中島フウ
新多ウタ　井崎トメ　中島ハナ　前田ミナ　芦谷アン　新宮サイ

満艦燈

湾内の香炉、鬼島、磐手の三艦は三日の夜一斉に全艦のイルミネーションを点し採灯提を照らしたるを以て明光々として一大不夜城を現出し遠近の漁火亦之に従て減に点火し其壮麗美観恰に浦田始つての事なりと

三日夜況

漁火は浜岡より引揚きて数十艘を掛け夜に入りては湾内のイルミネーション相応して盛観を呈し比間提灯行列の通るありて之を観んとて町内人出多く相当に賑ひたるも　殿下御乗艦の後なればにやと何となく静寂の感ありし

雑況

▲御料食品の事に就き記さんに△御料魚中鯛、鰒の如きは大さ一尺二寸位のものと内局部に於て定めあ

るに依て濱田に於ては萬一不漁の時に備ふる爲め當田港の網部長岐といふ處に周圍二十四五間位の生洲を造り右大きさの鯛七十尾乃至百尾と外に諸種の魚類數十尾を生かし其の附近に小屋掛して常夜番人を詰し居れり△然るに我に困難なるは鯛を用意せよとの沙汰ありたれど濱田近海にては鯛の漁獲甚だ乏しき事なりされど　殿下の御料食品に寒つる事なれば如何にもして獲得せざる可らずとて殆ど寢食なくは思ひながら二十八日夜漸く漁師數名をして網を打たせたるに意外にも一尺三寸の鯛七尾を得たりとは天幸と謂ふべし△船は郡賀郡大内村に於て二十九日五寸位のもの許多漁獲し濱田御旅館に於て供給あるに依り幾部を江津御旅館へ送りたり△小鳥は濱田中學の陸創教師桑吉次郎氏に捕獲方を懇頼したるに氏は鳥荘しの名人とて一時間半づゝ二日にて雀百數十羽を得たり△野菜は前記頭作の農事練家石見村の長ヶ濱長次郎をして總野鳥賀郡農會技手監督の下に丹精を凝らして作らしめあれば供給充分なりと△御料米は郡賀郡濱佐村の篤志者物又一氏方に作りたる極上米を一粒選りにしたるものなり△鰡魚は石原開盛堂支店の製品を差出す▲　殿下小豆を好給ふ　殿下が香菜を好せ給ふゝより今回御旅館に於ては遠藤氏より香菜を蒔らせしが幾に又　殿下には小豆を好み給ふ由にて早くも此事を聞き知りたるより郡賀郡役所にては同郡石見村の最も頭作に長けたる長ヶ濱長次郎の作りたる極上小豆を供進せられしと

濱田御便殿挿花

花筵未生流家元目代識崇雪齋一花齋男總會頭柴龍齋雷玉は御座所幷御公室等に挿花を成せり

御座所へ　花万年生青色　七五三の傳

崇雪齋一花齋高弟（登時三個住總會頭里秀齋一枝玉は御召艦鹿島御座所幷御公室等へ裝飾の挿花を成し左の請獄を授與せらる

御座所へ　小菊一色洋式挿花

拝啓昨日は態々御来臨の上　皇太子殿下御座所外御公室等に製備の挿花被奏行満足を得候段に御厚意に対し御礼旁申述候也

四十年六月一日

須田港にて

鹿島艦長　海軍大佐　小泉栄太郎

戸津川総治殿

小林氏の光栄

御角道に御座船を献上したる小林勝一郎氏は其路水夫長として乗船を許され酒肴料を賜はり又水夫一同へも金一封の御下賜ありたり

新聞記者招待會

一日午後四時半を期し漁股漁業組長は在須中の各新聞記者を本営園に招待し慰労会を催せり五時頃までに来り集り曾するもの記者十餘人来人側には漁股漁長を始め石田前代議士島田郡会議長、岡本陵信氏、山下、千代延、桑原、森岡、岡本、三藤の各郡会議員参列須臾にして来賓中の小武時市、三宅松山、村上都治、小川川平、佐々木浅利の各村長、小林勝一郎の諸氏にして来賓は背河原の浜岸より船にて美機に於ける生洲に案内せられたり該生洲は周囲より開場に係るものにして方一　殿下の来臨を待うすることもあらんかと御待受の施設を為しつゝあるものなり生洲には鯛鰤鰹はも鮪、赤烏、若菜、つのさ、はしな、鯵等を放養しありとれより其畔近に設けたる天幕式立食場に入り漁股共一場の挨拶あり一同盃を挙げ須田花柳芸の接物十数名其間に幹旋するあり地は須田浦より日本海の沿海を望み加ふるに当日備崎より入港の鹿島、香取、鳳手、の三艦艇を眺し一大洋観をなし壮烈たる海大の光景人として覚えず歓呼を叫ばしめ遠

日の勞苦一洗朝來の苦熱を頓に忘れしめたりそれより絆を携へ一岩を渡り生洲に臨み魚族の拜突を試むるあり電燈の小山氏先つ突いて遂に逸し次に岡本山陰苦業一尾を突留す鳴柔の群しばしやまず其他の諸氏も次いで獲物あり後酣を夕風に驅し飲啖しうに湯く昔から香取の艦内より嘲哢たる笑聲暫し間合中山東宮太夫より召され一時場を去りたる渚股氏も亦再び來り合し嶋廻新開係中島、山岡二局も來合し與合甚に湧き益永知事、淵本部長は當日御陪食のため來會する能はず遠せられたしと傳言を傳へられ鮮魚を刺身として之を供する等非常の盛況を呈し午後八時過にて青柯原に惹られ一同旅亭を連れて歸宿せり

東郷大將揮亳

東郷大將と副官とは渚股島長に案内せられて其宅に遊び快談時を移し談尖に大將は「金比羅樣に斷髮をなしたれば幾四五日は御天氣ならん」等戯れ酒酣にして水墨潑潤「山陰の國のことはき松の葉に露の光りは萬代迄に」といふ一首の歌を詠みて渚股氏に與へ寢處けて歸館せらる

中山太夫の談片

殿下の御懇切にかはして御精勵なるは今更申迄もなく言ふ迄もなし御性格と言ひ御養愛と言ひ日增に御父君陛下に御似し給へり御日程御行の如きは御勉め遊ばさるゝには非すして御天性に備らせ給ひるなりされば今日に至る迄唯の一回も御日程を變更あらせらるゝ御事なく御豫定通り御歸行あらせられ參供の者すら尚台疲き程なり　第一皇孫殿下の御父君に似させらるゝも自然に御性質の相承け備れるを知るべしと中山東宮太夫語れり

供奉官の賞辭

島根縣の準備設備は十分整頓せりとて供奉官の賞賛する所なりと

愛國婦人會

全陛下を過ちて之れ無きはあらずと出雲の松江を除く外は盛り岡台しものあらず出雲各町村にあつては挙国の際何等注意を拂くものなきに反し直詩一度び石見に入るや各團体共に整列せるもの〻中に愛國婦會の令婦人、小學女等の建設して居並べる所何時も最も目に立てり土地の人に聞けば村内階級の上流と下流とを問はず婦人は悉く入會すべきものなりとして勧誘せらるゝさま〻恐くは多數會員を得るに至れりなりと云ふ並し石見に於ける公共團体の内最も發揮せるものならん

知事警務長

陛下には二日松永知事を御前に召され過日の勞を慰召され特に酒田にて御膳を賜ふ旨御諚ありたり依て酒田警務長は賀山警部を随へ御鶴荒屋旅舘申上る事となれり

標識設置

香取以下艦隊來航に付長濱浦手崎海中の岩礁字ヤタ〻瀬に標識設置方漁業者の嘗命に依り長濱村へ工事を命花したるに御召艦入港の際には完全に設置されたり

旗艦訪問

松永知事は艦内拝謁の後旗艦香取を訪はれしに有馬第一艦隊司令長官は三種酒を挙げて祝意を表されたりと

▲村山旅團長は長橋奉迎の後陸路歸團▲浜近東宮扈従一行は長橋奉迎の後大政商船にて鶴鶴に向ふ▲主馬寮及近衛騎兵一行は陸路歸京せらる

海軍將校の生洲遊び

酒田河内南手に設ける長候の流に最の舘立せるもの相連り之れに多少の差異を加へて著ゆる魚族を生かし漁船場長の主催に依り各新聞特派記者を此處に招き清宴を催ふしたる上陸を與へて最に此魚族を賞か

しめたるが此時目足しう魚族は略ぼ突き上げられし爲め裏に右田右文、岡本俊信、小林鄰一郎三氏より等閑的に多數の魚族を此處に投下　殿下の御來艦あらせられたる三日午後海軍將校三十餘名をこゝに招き前日の如く餌を與へて勝手に突かしめたるに百發百中怪我にも過つ事無き各將校等何れも手元狂ひて頻々に掛聲らすは如くては容易に埒が明かずとて一人宛を舷しドブと水に入れば各將校等皆左舷邊となり悉く生簀内に飛込みて插き廻すと見る間に無數の魚族一尾も剩さず掬み上げて其の儘艦隊に持歸れりとはどこ迄も軍人的なり因に此天然生簀は漁船島長の奬勵の下に湊田辻町円田德太郎の手に依りて修築せられたるものにて或る方法の下に維持せらるゝと

御使差遣

美濃足濃郡へ御使

仝　日

益田町御使來着美濃郡足立への御使有馬侍從の一行は今朝六時湊町新町長谷川方に集合し六時三十分益田に向け出發せり行列は尊嚴警部先驅し千代延美濃郡長警部長之次に有馬御使、高田軍屬、倉岡警屬、甘粕憲兵伍長、伊藤警部分馬長、通譯長瀧にして午後一時益田に到着有馬御使は下市河野義平方に入る當地の出迎人は町の入口なる谷口に三野判事山縣前美濃郡長を始め郡役所員、裁判所員、役場署員、土木管區員、各町村長、助役、内田の部台重副議長及下議員町公務員神官僧侶赤十字社員、在鄉軍人、軍人遺族、廢兵、有志者吉田、豊川、高津、其他、北俗監等各村の小學校職員生徒等整列し其數約三千名にして尚る盛なり町内には御使御旅館、新橋、村界の三個所にアーチを設て各戸國旗大提灯を吊り幾臺を張り乘を休みて敬意を表したり湊田より益田に至る沿道十里の間も各戸國旗を揭て道路を清掃し此處美濃の郡界には大緑門を作り其頂上に地忠宏大と題したる大額を掲げたり

郡役所へ御使　　仝　日

有馬御使は午後二時旅館出門行列は前の如くにして五分後美濃郡役所に到着す千代延郡長は玄關に所員郡會議員其他は門外に整列して出迎ひ郡長の先導にて應接室に設けたる休憩所に招ず有馬侍従は今回殿下本郡へ行啓の等なりしも御日取の都合にて其儘に至らざりしを詫た慇懃に思召され特に本官を差遣せられ當内の情況を視察せよとの御諚なりと傳ひ御案内の下問あり郡長より美濃郡狀況書を提出し郡會町村會議員連名書を呈出せり尚郡内の狀況について詳細なる質問あり千代延郡長より一々説明をなし了て御使は三時二十分退出す吉田分場に向ふ見送事前に同し

吉田分場へ御使　　仝　日

有馬御使は午後三時二十分郡役所より直に吉田村なる蠶農事試驗場吉田分場に赴く行列は前の如くにして伊藤分場長は安田村笠田境へ先導して事務所玄關に待受け職員は門外に出迎ふ御使は分場長の先導にて休憩室に入り御使差遣の御諚を傳へ分場長より吉田分場の概要書並建築物の案内圖の地圖を提呈す休憩所には桑病害蟲其の各種標本等を陳列しあり有馬御使の質問に對し分場長より説明し同場栽培の桑物を覽したる後御使は陳列室及び圃場を巡覽し分場長より一々説明する處あり再び休憩室に還り馬鈴薯より作れる澱粉を御使並に高田事務官其他に供する處即ち其處にて昼食を饗せらる一行は四時十分同場出發歸郡せり伊藤分場長は直に笠田の旅館に赴きて答禮を遂べ同時に京都二條離宮の中山太夫宛にて御着御通過の電報を發したり

御使出發　　六月五日

勅使御使有馬侍従は本日午前七時旅館河野方出發津和野に向ふ一行は警視警部の先導にて千代延美濃郡長の挨拶、御使高田事務官、仝同警部、甘雨地方郡長の順序にして見送人は町の四辻數町に亘りて昨日の如

く數千名夫々整列せり又沿道には各戸國旗を掲げ國所に大國旗の懸連するありて何れも最敬禮をなし有馬御使も夫々會釋する處あり暫くて青原村の郡界に至れば此處にも緑門を樹て大國旗を交叉し鹿足郡各團體小學校職員生徒、軍人等數千名出迎へたり九時十分青原驛に到着御使は原田新三郎方に立寄りて休憩せり見送りの掛本益田町長、伊藤吉田分當長、幕屋益田署長、齊川、掛本兩美濃郡書記其他は此處にて暇乞をなし御使を見送りて直に引返したり

津和野町來着　　仝　　日

有馬御使は九時四十分青原の休憩所を出發せり接遇よりは掛本等郡の先導にて甘粕鹿足郡長の誘導に代り又此處迄出迎ひたる亀井伯爵代理中山家扶、堀藤十郎氏代理服部氏、原、横山兩鹿足郡書記等隨從したり途中各所共出迎著多し日原よりは咱出哀々として至りしも出迎人は意々加る津和野の甘界には緑門を建て國旗を交叉し其内外には節付の裏員、兵事員、赤十字社員、愛國婦人會員、在鄉軍人、軍人遺族、應兵、小學校職員生徒等無慮四千餘名整列して出迎ひ暫くて一行は正午過頃津和野に到着せり此時町の南裏なる寺尾にて煙火十發を打揚げ賑ふ盛況なり

郡役所へ御使　　仝　　日

御使は直に鹿足郡役所に赴く所員は門外に出迎へ甘粕郡長の案内にて應接室に入り休憩中殿下より御使差遣の御諚を傳ひ郡長より鹿足郡狀況書並に同郡地圖を捧呈し御使は御寫眞並に郡長へ白絽一正の下賜品を渡し鹿足郡の狀況に付て種々質問する處ある甘粕郡長一々說明をなし終て雷雨と暫し郡より御使へ日原製の半切紙十梱、高田軍屬へ同入梱を進呈したり小雨の後御使は殿町第九師兵衛方へ投宿せり午後に至て雨益々激し

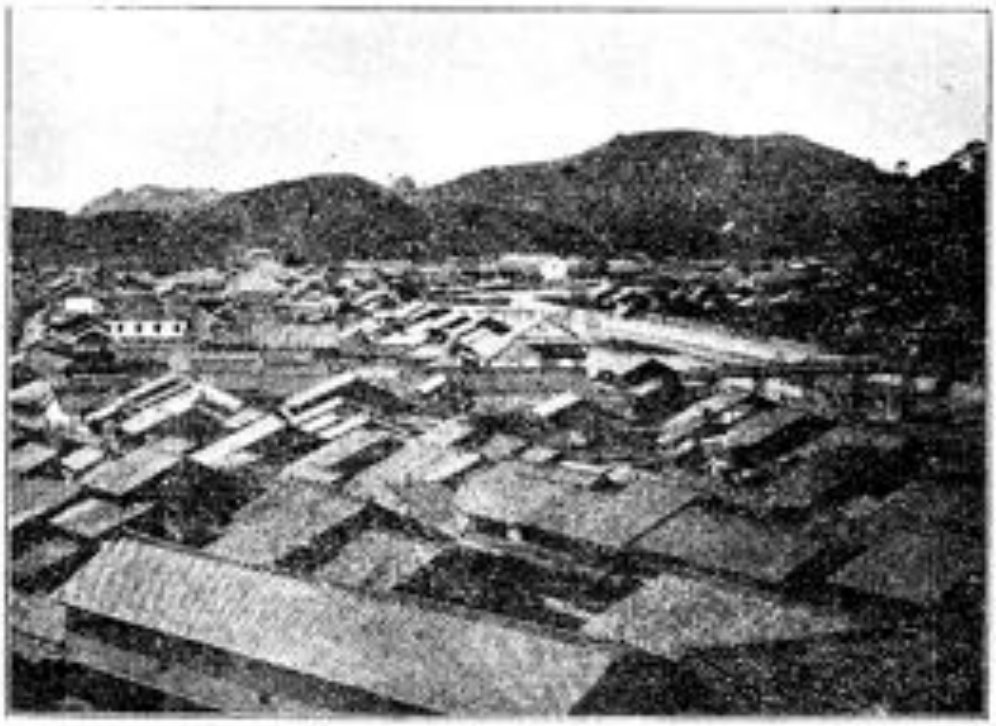
導火繩工場へ御使　　六月六日

御免なさい

鳥工火力発電所

野和津郡是庇

浜田市街



御使有馬侍従の一行は本日午前八時旅館を出で同八時二十分吉田導火線工場に到着す行列は前日の如し該工場は槇山の正面なるダーラ山の半腹にあり國道より一行は徒歩にて進む工場門前には鉄門を建設し大小國旗を交叉して歓迎の意を表す有馬侍従は吉田場主の先導にて各工場を巡視し且實地作業の模様を視察して種々質問を試み吉田場主より一々説明をなし了て有馬侍従の昼の手辨あり小憩後九時十五分同所を発し那賀員槇工一同は第四工場前に整列して盤鑑に見參をなしたり

吉田導火線工場　　東宮殿下より今回特に有馬侍従を差遣されたる就中和歌山縣伊都郡相野町大字中筋吉田三輔の経営せる導火線製造所は槇山の正面に當る昌谷谷にダーラ山と云ふにあり伊都野町よりは百數十尺を登れる所に五棟の工場を設け火薬系接の模様を掲付け何れも水車仕掛にて各分業の下に水中用、陸上用、及び温気に堪ふへき三種の導火線を製造しつゝあり販路は大阪、九州、北海道、四國等にして間接には朝鮮及び其他の外國にも輸出し殊に近年槇山事業及び其他各種土木事業の發達に伴ひ益々導火線の必需を来し昨三十九年中の産出額は二十四万七千五十把（一把五十尺）此價格三万八百八十餘圓に達せる由右事業は先代三輔の頃より着手せられ明治十九年始めて工場を設け苦心の結果漸く右導火線を案出し爾に導火用藁を發明せしが三輔は去三十三年事業中途にして没し現住太郎兵に三郎と改め亡父の業を継きて新規巻藁を發明し尋て現今の捲巻法を案出せしなりと云ふ實本總額五万三千二百餘圓第三回、第四回、第五回內國勧業博覧會に出品し何れも賞状及び賞牌を受け又た北海業博覧の為め該会賞を贈ひ三十七年博覧会にては名誉銅牌を受領し今回御使差遣の光栄に浴し其歓喜極りなしと云ふ

笹ヶ谷銅山御使

仝　日

御使一行は夫より直に笹ヶ谷銅山に向ふ當日は日曜日役場員には同村吏員、各團體、各學校生徒等數百名出迎をなし後方の丘上にて萬歳三唱を為ち鉱山の境には鉄門を建て山内各戸には大小國旗を掲げて夫々敬意を

表せり扨門内外には鋪山役員、赤十字社員、婦事協會員、愛國婦人會員、在鄉軍人、笹ヶ谷小學校生徒等出迎ひ當鋪山會社の人員のみにても約百名出迎ひたり一行は午前十一時十五分到着し小憩の後鋪主代理堀昌造主事長水津治右衛門二氏の先導にて各工場を巡覽し此處にても又實地作業につき種々質問あり扨、水津兩氏より說明し了て休憩所にて晝餐を喫し午後一時十分同所を發し扇藤十浦氏邸に至り同五時半浄和野に歸らる

笹ヶ谷鋪山　今回特に有馬侍從を差遣せられたる扇足飾畑迫村大字色麻組頭十扇氏所有笹ヶ谷の鋪山に就ては鋪物發見の時代等詳ならず堀氏は祖先より元津和野藩主吉見氏に從ひ數代鋪業に從事し後ち徳川幕府銀山奉行の支配に屬せしと以て該鋪山の經歷等今日に於て殆と知るを得ず維新後全然堀氏の直營に歸し爾々事業を進め工學士を聘して電氣的器械を利用し産額日を追ふて增大し一時從業者一千五百名、居住著戸數五百餘戸人口二千餘を有するに至れり然るに明治三十年頃一時鋪脈を失し之れが爲め三十一年に至り從業者僅かに百餘名となり鋪物殆と盡んとするの悲境に陷りしを其後四ヶ年の採鋪目的を遂し爾來引々發展の緒に就き目下の從業者四百五十名に達し生産額も亦每月平均二万斤（價格一万二千圓）を採鋪しつゝあり現在鋪區の總面積は四十二万六千七百餘坪、資本金三十五万餘圓、三十九年度中に於ける産出額二十六万二千五百餘斤此價格十三万六千五百餘圓に達し販路は主に大坂なり有馬侍從一行若山の時各團体員及學校生徒の山内に整列せしもの三百餘名（此他は總て從業中なりし）に達せしが右は悉く鋪山關係者のみにして此内尋十字社員二十三名、武德會員十七名愛國婦人會員九名、義勇艦隊員其他員百三十四名あり其に鋪主の私財を以て鋪山内に代用尋常小學校を設け現に正教員二名、生徒七十餘名を有し普通尋常校と同一の程度を以て施設せらる又た畑迫私立病院を設け醫員藥劑員等三名を置き全然此鋪山に依りて一部落をなせり因に堀氏の所有に屬する鋪山は山陰道内に於けるものは八束郡水郷邑

智場調ヶ丸、久喜、能足郡徃ヶ谷の四ヶ所にして縣令のものは山口縣美濃郡大田村長亞細山、河内國河郡長谷村多田銀山等あり之れが總工夫三千名以上なりと云ふ銅山王の名に背かずと云ふべし

寫眞撮影

津和野町より津和野川大橋、弥栄神社、喜楽園、津和野古城山、青野山、鷲原公園、白糸滝、喜時雨神社、同社神寶、惣兵衛山永明寺等を撮影し之れが說明書を添へ御使を經て掛見したり

有馬御使出發

六月七日

今朝は一天快晴し四山初夏の新緑鮮かなり東宮御使有馬侍從は御豫定の如く午前八時旅館出門歸京の途に上れり此時到着の當時の如く町の南方寺尾の丘上に烟火數發を打揚げ行列は例の如くにして加藤屬夫、龜井鉛代理中山家扶、福羽守人、原野書記、旅館主堀九郎兵衛氏等隨從し各小學校兒童共總一數町長は橋(津和野より八丁)に送會議員、町村長、郡役所、町役場、稅務署、區裁判所出張所、小林區署、郵便局の町吏員、在鄉軍人、赤十字社員、愛國婦人會員其他各團體は着服異なる故服(津和野より一里半)に整列す津和野町より此間の見送約五千名着服別の情を現はせり此處にて行列を解き廿箇郡長、橋本警部は個人として加藤翁、福羽、中山の諸氏と共に德佐山(三里半)まで見送り此處にて暇乞を爲し貴客は大原(津和野より七里川時間)の豫定にして總て龜井家よりの饗應に係り必要會員(會長は舊家老田子爵人氏なり)相川秀樹、飯島直義、堀九郎兵衛、郡書記原新七氏等全行全地にて接待參圓縣屬は三田尻まで見送せり

演出津和野間雜況

沿道の國旗演出を外れてより沿道各村旗幟を掲げたり更らに三隅に入りては個個日章旗の如く鶴川橋には大國旗を交叉せられたり

▲益田町の裝飾　益田町の裝飾は豫想外に整頓せり市内各戸は新調の幔幕、國旗、行燈を以て滿艦飾的に裝飾せられたり是等は殆んど都會、町役場の命令に依れるものにあらずして自發的に設備せるものなりと聞して御使の巡啓者は小學校兒童の一千五百名と其他を合して三千と註せらる申す迄もなく今回の行啓に當將を此點に遊ふる能はさりしを千秋の遺憾としせめては御使の巡遊に滿腔の熱誠を表し奉らんとするに外あらさるなり

提灯行列　益田町にて附近學校生徒四百餘名の提灯行列を擧行何れも步調を整ひて益田大橋を渡り町裏の川堤防に出て旅舘裏にて万歲を三唱して解散せり町内人出夥しく(空實の景況なりし亦御旅舘庭内へ無數の花を放てしに若葉より滴る夜露と相對して美觀を呈せり

津和野町提灯行列　は當町尋常高等小學校生徒五百餘名午後七時學校に集り萬歲三唱の後ち發足し本町より殿町に入り旅舘前を過ぎて今市に向ひ更に引返して學校に入り萬歲三唱の後ち解散せり

煙火も提灯行列と同時盛んに打揚けられたり

消防夫の警戒　旅舘庭園に三臺ポンプを据へ壯夜三十名の消防夫法服を着ひ警戒せり

書畫陳列

津野野旅舘内には幕末の津和野藩名士の書畫十九点を陳列し右作者の略傳と略解とを草して之れに附し加藤最夫君一々說明をなし御使の觀覽に供せしに有馬御使は其目錄書を持歸る事となれり出品左の如し

一多胡邊齋筆八仙之圖（三幅對絹本）　　細　藤十郎藏

一邊齋筆賣後壽壁圖双幅　　多胡　要藏

一椋邊筆花鳥小幅　　細　九郎兵衛藏

一同八十三歲の作蝸牛置物形彫一基　　橋本重平藏

一三浦紺絹半梅花北笙絹本大幅　　大谷金次郎蔵
一山本琴谷筆絹本大幅四図雅集の図　　同　九郎兵衛蔵
一大島椒洲筆花鳥二枚屏風半双　　多胡　繁蔵
一岡野洞温筆山水人物并留毛の半紙　　同　九郎兵衛蔵
一岡野洞山筆群鶏伴図絹本双幅　　永安　貞蔵蔵
一島田儡花筆布袋和尚の図紙本小幅　　同　九郎兵衛蔵
一大國隆正道号揮たけびの詞全紙一幅　　同　上蔵
一同上古語大字全紙一幅　　神代　久亮蔵
一神代蟠竜書七絶の詩全紙一幅　　同　上蔵

久亮の先代名は次郎兵衛中老格にて書に名あり

一岡藩臣道号扇面色紙合装一幅　　加藤　最夫蔵
一津和野三絶（大島椒洲の富士、牧村芙蓉の筆、豊田痴顛の書）同　上蔵
一婆娑羅形の水盤（亀井家第八代能登国矩貞の庭焼）　原　彦十郎蔵
一白鞘刀竹中祐信作一口　　同　上蔵
一折襖絵荒野走馳の図　島田長嶺留代製襖面

留代は長嶺号珍の二女にして甘て岡山美術学校を卒業し此技に長せり亦年四十歳なり

一同上製押潔の図　留代製　小一幅

若狭して此寛を受く　四日夜原舘河野方にて御使の暇乞申給も益田外二校帰谷の様打行列か益田川の野岸に出てし折柄原にありし千代延郡長より「今回の行啓中様打行列は到底に於て催しある最早御旅情を

懇するには足らざるも唯御便差遣に對し藩民至誠の微意を表せんのみ」と述べしを御使は直に之を打消し「余の爲めに留まるゝ除典の趣何卒は決て聞ふ所にあらず至誠の溢るゝ所此行列を見るに至れる事歟東の土具さに　陛下に言上すべし飲食しつゝ之れを受くるは決して　陛下の思召に非ず」とて俄に起て袴を着け椽先に出て直立して感謝に答禮し席に復したる上藩等の誠意は十分之れを受納したり藩長より此事を彼等に傳られたしと陳し置き漸く食事を終れりと云ふ御使の態度も亦た非常　陛下の御恩徳より出てしものなりとて藩民感泣したりとなん

名所寫眞圖會　美濃藩名所寫眞三十二枚にアルバムを添へ旅館に持出して御使の閲覽に供したり

濱田御乘艦

六月三日

東宮殿下には御豫定の如く此日午後二時三十分御旅館御出門御召艦筑島に御搭乘あらせらる　殿下には海軍通常服に菊花章を帶びさせられ侍米武官長御陪乘申上げ中山太夫木戸侍從長柱主帶は三の馬車に供奉し次に松永知事從し列外村山少將若宮保昌長松平侍從以下列の如く隨ふ直濱は櫻島より大橋を渡り新町片原町を經て濱戸から島道に出て三時三十分祝砲なる新設の御乘艦長濱に着す御乘場には中學校、水產學校、那賀美濃兩尼三藩の各小學校生徒、大橋通りには濱田高等女學校生徒、筑島道には師範一列に整列し其延長十二町に及ぶ沿岸には千代延美濃、甘酒屋尼各藩長竹原、山根綿會正副議長、石田、河上、恒藤三代議士其他縣會議員、赤十字社幹別社員、愛國婦人會員、最宗派衛兵、軍人等終列奉迎申上げ軍隊と中學校生徒は整齊の敬禮をなす

棧橋にては東郷大將先着して御先導申上げ棧橋より筑島の艦載水雷艇に移らせらるゝや同艇は皇太子旗を掲げ香取を始め各艦より二十一發の皇禮砲を發し香取の艦載水雷艇先導申上げ次に御召艦香取の艦載水雷之に隨ひ御召艦筑島に御移乘あらせらるゝより先き着島司令長官は山下參謀長以下幕僚を隨へて正裝して御旅館に伺候し

當日艦隊へ御下賜の御酒申上げ天機を奉伺して直に歸館せしが此時各艦長各縣長等と共に慇懃に拳擧し供拳して乘艦し奉祝砲を行ふ松永知事藤本事務官以下島羽丸にて御召艦に奉迎申上く此時香取鹿島磐手の三艦は滿艦飾をなし（飾燈には非ず）香取の檣頭に同令長官旅團る本日御召艦には皇太子旗を掲げず（御微行の御假泊中には掲げざるものとす）其他港内の大小各船舶は何れも奉祝照飾をなす此日天候清朗洋波油の如く凱旗の壯觀美景云はん方なし

艦内拜謁者

松永知事　藤本　服田書事官　澁谷監實　千代延美德　廿樂鹿足三郎長　石田、恒松、河上、岡本四代議士　村山少將　小泉大佐以下廿一騎隊將校（單獨拜謁）

濱田御發艦

六月四日

東宮殿下には御豫定の如く本日午前六時御發艦濱田に向はせらる發迪の砲は一齊に皇禮砲を發し其音山河に響き殿を送るの意を以て盤手先頭として先つ進み次に磐梯皇太子旗を飜えしたる御召艦鹿島悠然として續き供奉艦香取、白雲、初瀨、朝汐、追風之に隨之各艦檣に煙を吐いて單縱陣に列し雄姿堂々威風洋波を壓して進む長視陽近長濱沿岸一帶には奉送著山の如くに蝟集し万歳の聲は聲火と共に起き其壯觀實に言語に絶す艦て艦隊の朝儀の裡に終るや拜察は尚しく無限の感慨に打たれて落涙の禁ずる能はざる有樣なりき

別府灣著御

六月四日

本日朝來好晴風平浪に靜なり午前七時に豫定の如く神戸ノ氣船埠に滿ちて道民歡呼の聲は谷々の濱に湧ふ一時三十分の比ひ海岸に浮ある煙突隱むと忽ち見る海上村雲の島に二艦の波を蹴て先驅し來るを

衆相喫せり〳〵と既にして二艦の家督山沖に差懸るを見れば追風、朝露の二艦堅艦なり須臾にして黒山の如き大艦は鉄甲の艦に現る先頭は二本檣実、二本マストの香椎なり次なるは同型の御召艦鳥にして檣頭高く皇太子旗を掲ぐ最後は三本檣実、二本マストの供奉艦摂手にして左舷に白波、朝汐の二艦堅艦随ふ蓬風堂々迫を圧して来り一時五十分別府沖中央に各艦一番に投錨す其位置は追風朝露前方に並び鳥を中央にして香椎左に摂手右に其後方摂手の左前に朝汐白波列し縦陸として一大浮城を築き一糸乱脈なり

今さら歓呼喧騒せし沿民は艦隊を望んで一斉に鳴りを静め皇太子旗を仰いで遽然襟を正したり汗上流なく厚顔なく実地間として太古の如くなる折しも高砂炮を放つて中空に閃くは幕舎の煙火、「萬歳」の旗は高く碧落の上に翻はる

黒木山御登臨

殿下の御健脚

午後三時各艦の艦載水雷艇を遣られて御上陸あらせられ中央なる鳥島の御召艦には中山大尉、木戸侍従長、甘木武官長、東郷大将等御陪乗申上げ供奉艦には奉王事以下供奉員、長田警部長、竹原県会議長、県治警視等乗組み御上陸直に東島司御先導申上げ黒木山御扱分あらせらる山下には黒木浦郷二村の在郷軍人会員、赤十字社員、愛国婦人会員、氏人並統、各小学校生徒等参列若無慮二千人を数ふ　殿下には極めて活発にて御上陸の際村木小前が御手を取らんとせしに払らはせ玉ひて御威勢よく攀らせ玉ひて御昇覧種々御下問ある少時にして下山あらせられ海生村に向はせらる　殿下には本日海軍服を召されたり

黒木山御手植

殿下本日黒木山御登臨の模様を承はるに御休憩所にては御膳を召させられ随従の人々に勢し扱屋舗帝道幕

隱岐別府灣と翠本御所

一、後醍醐天皇御座所位置
二、同皇御記念物埋藏地位置

一、後下御上陸候地
二、後下御休憩所位置

隱岐西郷港全景

の事に就て御下問あり夫より木戸侍従長を陪して玉座の内へ入らせられ二尺許のあしなろを御手植遊ばされ先に有馬侍従が御使として渡島の際手植なしたる植を御覧あらせられたりと云ふ

雜況

▲御召艦御假　艦隊の投錨するや東郷艦隊司令長官は直に御召艦に伺候したり

▲臨時電信取扱　別府郵便局にては電信取扱の為めが為油郷郵便局の臨時出張所を設け松江局より三島通信局柯通通信技手の二氏北俣島内より二名の局員出張して臨時電報事務を正木旅館の本宅にて取扱ふたり

▲島廻出張所　正木旅館の西隣に隠岐島廳の出張所並に新聞記者の宿舎を設けたり記者は大阪朝日松江の松陽の二人のみなりし

▲警官と村吏　大塚西郷警察署長、影山浦郡分署長は巡査數名を統率して別府駐在所に出張して警戒に當ふ又黒木村役場員五名牛鳥委員として別府毛利千太郎方に出張勤務せり

▲川越警察署長　川越島取縣警察署長は知事代理として牛島の沿岸警部を陪ひ島廻護衛まで特に出張せられたり

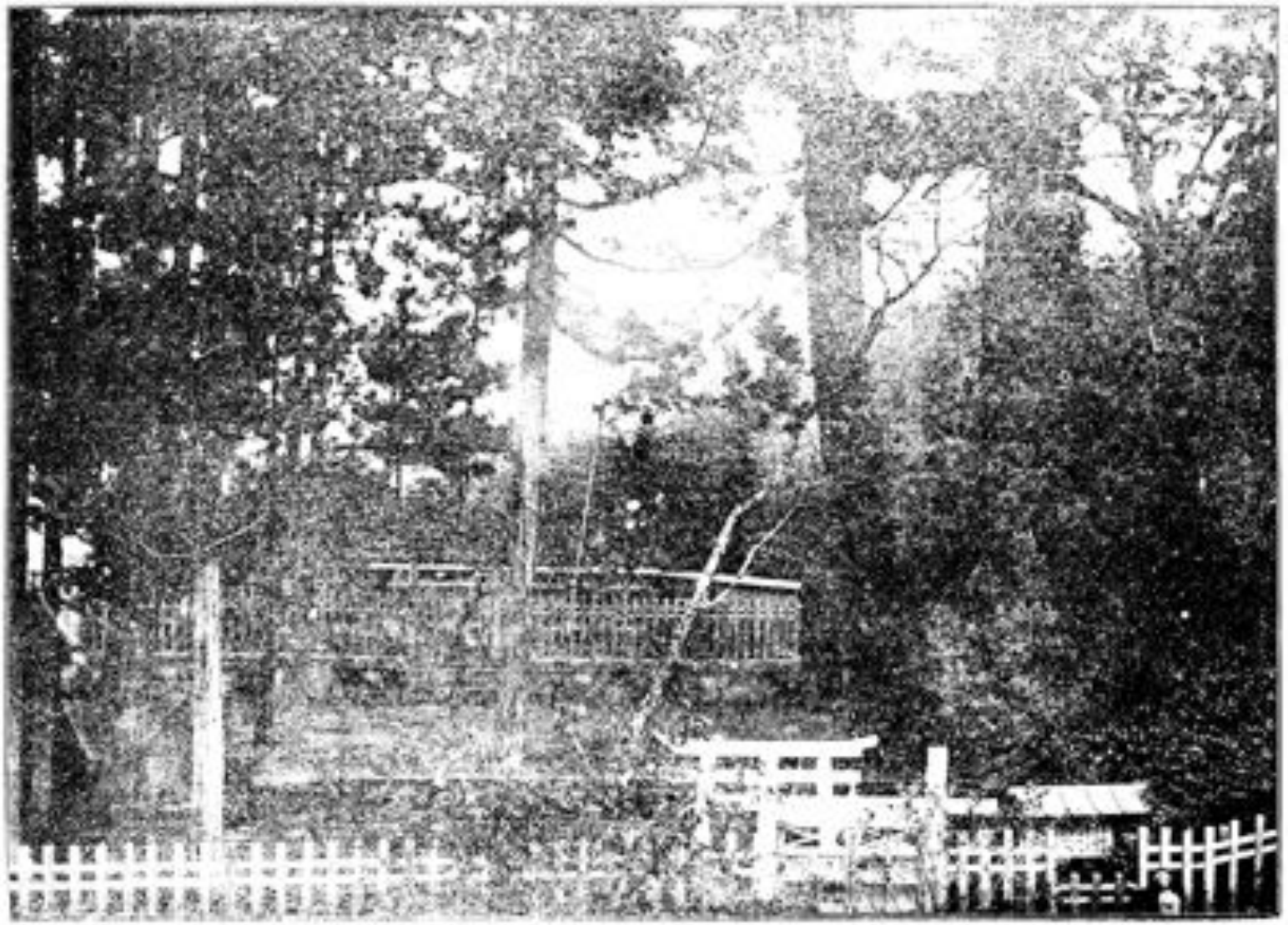
▲別府の景況　塩焼、鮑、牛鳥の行列艦隊の投錨するや別府の茶山にては煙火數發を打揚け之を相圖に國旗を建てたる塩焼數百は列をなして岸に沿ふて漕き出で艦上にては黒木浦那二村の小學校生徒七百餘名鮑行列をなし又別府の後方山腹なる字北尾の牧場に於いては牛鳥九百の行列をなし御覧に供したり

▲輕氣球　御召艦の後半我六時頃黒木山の下に於て黒木村小學校生徒は一丈三尺許りの輕氣球を揚けて奉祝したり

▲後圓の美観　香東諸島繋手の三艦は當夜八時前より全艦イルミネーションを點ず陸には小學校生徒七百名東登の谷より西大山明までの間約二里の間に亘りて提灯行列をなし別府の沿岸二千餘の球燈と相映せり又一千餘の篝火は階圓形に艦隊を取り巻き炎々天を焦し又海士村嘉徳山の半腹には假名にてホーテノ三字を火文字にて現はし其一字の長さ二十五間角、一の長さ四十間なり烟火は其間に揚きて二十發を打上げ上下相映して詩興眞紅を流したるが如く天焦け海湧かん許りの壯觀を極め九時頃に至て總て揚したり

▲殿下の御聰明　殿下には行啓中深く地方の教育、勧業の事に御注意あらせられしことは本誌の屢々記せし所なるが前記牛馬の牧移しを御覧に相成たる時も東島間に對し四鼓國産業に關し種々御下問あらせられたる後、扈從官たちに向はせられ洋種動物の繁殖に伴うて日本固有の動物が漸次跡を絶つに至るとて自然淘汰の理を御説き遊はされ原に劣種の絶滅といふのみならば差極甚だべけれど中には優種の敗亡といふ事なきにあらず現に四鼓島の如き然るにあらずやと御話せられたるに御附の面々何れも心に殿下の御聰明を感賞せざるは無かりしとぞ後の獻上馬鹿騒の件に付き往生事を以て御下命ありしは此時なりと云ふ

▲牛馬行列の説明　こは單純の行列にあらず四鼓島前に從來行はれつゝある牧移しなるものを實行して縦覧に供せしなり島前にては牧場と畑地とを時々相轉用するの慣習あり例へば山上の甲地に牛馬を放牧し一定の時期を經過せば其の牛馬を乙地に移し最の牧場地即ち甲地に畑作をなすなり斯くする時は牛馬の糞尿の爲め土地自から肥沃にして復た別に施肥するの要なし此の利便の爲め年數回、群牧轉換をなす之を牧移しと云ふ今回は黒木村内各戸一頭と定めて字北尾の山に牽き上げし牛馬九百餘（大部分は牛）に及びたれば此の大畜群が山腹に旋回する様、之を遠く望む時は牛馬が動くと云ふより寧



海使道 後鳥羽院御陵

隱岐國知夫里島知夫里村所在

ろ山がゆらぐ如くにて頗る壮観なりき　　殿下には艦上より双眼鏡にて御覧に相成りいと打興じ給ひたるやに承はる

海士村御上陸

五月四日

殿下は黒木山御下山御後暫しく浮び艦載水雷艇に召させられて直ちに對岸なる海士郡海士村字袋湾内園成寺鼻なる假桟橋へ午后三時三十分御着御上陸遊ばさる

御火葬場行啓

厚くて御上陸に相成るやいなせき此路をいと健脚に歩ませられ東島司の御先導にて御火葬場に行啓あらせられたり御火葬場は宮内省の所轄に屬する飲村より手を入るゝ譯に行かねば道路も無ければ道路も交叉せず一切の設備を省きて單に境内を清掃せしのみなれば却つて昔の儘にて

殿下には一入御感慨深く渡らせ給ふ辺く御見受け挙られたり御火葬場より後島羽院御行在所たりし源福寺の舊蹟に歩を移し給ひ中山東宮太夫を顧みて何事とか數次御話し給ひたるは上皇の御遊幸を偲ばせ給ひたるにやあらん有難に堪へ感佩まるに忍びたまはざる御事様なりしが聞て昔無しの松の跡に松（高さ二尺）の御手植を遊ばされたり元ありし昔無しの松といふは昔し後島羽院が松風の音に深く物の哀れを感し給ひて

　　蛙なくかつたの池のゆふたゝみ
　　きかせしものは松風のたと

と御詠ありたるに忽ち松の昔思みたりと云ふ新の御き古来の傳説ある松が植れ果てしは遺と惜むべき事なるが其跡に今回　殿下の御手植ありたるは實に千載の好記念たり又た東郷大将は一尺三寸の樫を手植されたり

村上家行啓

御火葬場を出させられて直ちに村上藩九郎兵衛に行啓あらせられ約二十分間御休憩全部御に設けられたる玉座に就かせ給ひ同牛を御覧あらせられたるが頗る御意に適ひ絶えず御微笑を催はさせられて牛の強剛なる供奉官に語らせ給ひ同牛四頭までを御覧になりて茲に豫定の時刻をさへ過させられし程にて其間約四十分に及べり

御歸艦

午後五時御歸路御出され御舟造生洲御覧ありて酒水器の船を指させ玉ひてあれは何かとの御尋ねあり奉答申上げたり後酒水器にて御採御覧に供する筈なりしも其間もなく急かせ玉ひて葵葉の裡に御歸艦遊されたり時に五時四十分

拜謁者

御召艦内に於て單獨拜謁を賜はりし諸氏

東　島　司　川越警務長

御下賜

左記の如く御下賜ありたり

一酒肴料金一封（百圓）

一酒肴料金一封（廿五圓）

岡崎國へ

奉迎委員一同

一金一封宛　別府郵便局長
同局事務員一名
三島通信局

一金二封（二十五圓）　村上結九郎

献上品

一生鯛鯛三十貫目　海士村より献上
一鮑鰒詰壹箱宛　魚山幸市、安達和太郎

村上結九郎氏の光榮

殿下全家御休憩中荏主事を經て村上結九郎氏に左の優渥なる御言を賜はりたれば村上氏は感泣措く所を知らざりしと云ふ

後鳥羽院隠岐に遷座あらせらるゝや汝が祖先は院を挙して誠忠を盡せり深く之を嘉賞す

同家は人も知る如く其先が後鳥羽院に奉仕して誠忠を抽んでたる深き由緒ありされば御座所には二間の御簾を垂れ床には一間の御茵を敷けたるが其に全家が後鳥羽院行在所たりし當時に用ゐられたる御品なりと云ふ又た御座所の柱にも後鳥羽院の用ゐさせたまひたる黒塗りの手拭掛と黒塗りに菊菊の金蒔絵せる湯帷及び盥を掛かれ床上には左の賞物を安せらる是等を賜はされたる　殿下には御何に御感斐深りしならんと推し奉るさへ最と畏し

一後水尾天皇の御宸筆　一後鳥羽天皇の御宸筆

一後鳥羽天皇御用の御葉鋼、御茶碗、猫石　一厄俸の靈骨

一古鏡　（以上村上氏家寶）

一後醍醐天皇の御寶筆　一後鳥羽天皇御番鍛冶助宗の短刀

（以上焼火神社寶物）

一扇鈴　（以上億岐氏家寶）

闘牛御覽

闘牛場は鳥井式鳥を以て之に充つ御茶屋場の四方一町道路に沿ふて九百六十坪の廣さあり其四隅に竿を樹て山形に万國旗を張り道を設て、土俵を築き砂を盛り其三方を白天竺にて圍ひ御座を設け夫れに並んで供奉官の席を設け闘牛場の裏には高等官新聞記者等の席を設けたり場外には島前の村人は無論島後よりも老若男女群集し闘牛の勝負あるごとに萬呼の聲天に震ひ地を動かし勝敗一たび決すれば主は崇より其村知己のものは萬呼の間に勝事に騎し揚々として場内を曳廻すなり闘牛は前後六番の規定なりしが殿下は第二番より五番まで御覽あらせられ珍らしき風俗なれば殊に御興に入らせられたる為め長らく御覽遊ばされし當日の闘牛番組及所有主は左の如し

大關	保々見	岩田屋	北部大	敷	
關脇	東部	上原	宇受賣	竹	屋
小結	保々見	名田屋	宇受賣	桝	屋
仝	東部	尾崎	北部	石原屋	
前頭	中部	蔦屋	保々見	小崎	
花相撲	知々井	佃屋	宇受賣	福島屋	

船渡橋と生洲

隠岐は御巡行の事とて御車の用意なきに若し普通の上陸場たる港より御上陸相成りたらんには我島羽院御火葬場まで約一里の御徒歩を装はざる可らず斯くては恐多き極みなればとて海士村にては急に村民調百を従し立て道の清なる演詞詞西圓城寺畔に舟橋を造りこゝより御火葬場まで六七丁の間草深き畦路なるを力を盡して清掃したり斯く準備はしたれど御上陸になるや否やは其時に至るまで確知されざりしが幸ひに御上陸の栄を得たれば村民は非常に歓喜せり

全道内に四隅四面の生洲を作り鯛百尾を放なして御台覧に供する設けたり

皇孫殿下へ御土産

同吉弥並団右長長谷川鉾太郎氏は多年自家に愛育せる隠岐産牝馬一頭の献上を願ひ出で之を松江に寄りて農林學校官舎の設厩校舎に於て養性に供したり元来隠岐馬は形體小にして强健なるを以て特質とするものなるが長谷川氏の芸出せるは躰二十を超ゆたる牝馬にこそあれ非常の駿足なれと聞る老牝馬を献上するは如何のものにやと松永知事始め心窃かに気遣ひ居たるに果馬が殊の外　殿下の御意に適ひ直ちに献上の儀を許されたるのみならず今回の御巡行に東島司が御召艦伺候の際、牡主事を以て後馬を乗る十六日只後に於て京宮御所へ送致すべし必ず　殿下御帰京前に届かね様すべき旨懇かに知事へ申通はせよと御下命ありたれば島司は畏みて御受けし早速其の手筈ひをなしたり去れば初め献上に付き思召し如何と気遣ひたる島司も大いに安心し殊に献酒者長谷川氏は無上の面目を施したるが扨て後に一つ企画行かぬは何故右馬を　殿下御帰京前に送せ御覧に供すべしとの御下命ありしかと云ふ事なり斯る事は尊意を拝度し事る事にて最と恐れ多けれども拙民の至情として口惜一疑問たらざる能はざりしが之に就き某島従宮の談なりと云ふを聞き始めて釋然たるを得たり、ろは如何と云ふに後馬が時足なるに拘らず形體小にし

て面も従順なるより　皇孫殿下への御土産となされん思召しにて　殿下御歸京の上御手づから皇孫に與はり其の愛らしき御喜び顔を御覧せられたき御意に出でしものなるべしと云ふ　殿下が御愛情深くまし〳〵て何も御旅行中人形なと許多御買上になりて　皇孫殿下へ遣らせ給ふ由なるが是は人形なとゝ事變り形體小なる猶当なれば　御父殿下に宵まてし、いと男々しくまします　皇孫殿下には最適當の御樂みにて深く山陰道行啓中第一の御土産なるべし

隱岐御發艦

六月五日

今日はいよ〳〵我島根縣を去らせ玉ふ日なればにや陰天ドンヨリと曇りて今にも涙流さん事なり氣色なり艦隊にては曾に早くより出航の準備成り午前五時三十分旗艦よりの信號に依りて順逐艦追風、朝凪先づ發し白雲、朝汐之に次て先驅し續て二十分許にして先頭香取次に御召艦鹿島供奉艦整手之に隨ひ西に向つて出航す此時煙火三發中天に響き村民は數十艘の漁船に旗を飾て列をなし沿岸一帶には拜觀臺塔をなして發り何れも萬歳申上ぐ艦隊は別府烈を離下しキヅ口を出で東に向ひ少時にして雲烟模糊の間に沒す

島根縣各郡市町村參迎送委員ト正門內奉拜者氏名

能義郡ノ部

郡會議員	廣瀨	宮田　爲紀	仝	廣田源次郎	仝　山佐　澁田　潤一
仝	飯梨	森脇健三郎	仝	安來　原本大三郎	仝　並河　渡邊
仝	荒島	廣江長五郎	仝	赤江　松浦治太郎	仝　山本　芳
仝	能義	山本原太郎	仝	安田　高橋六三郎	仝　尋常　柴田　莊吉
仝	宇賀莊	由根宍一郎	仝	大塚　中尾石太郎	仝　井尻　稗田儀右衛門
仝	泰江	西田長太郎	仝	布部　濱田岩右衛門	仝　比田　安部善太郎
仝	島田	日高林之助	廣瀨町長		飯梨村長　森脇健三郎
謝義村長		山崎宇太郎	泰江村長		安來町長　楯山榮之助
島田村長		永田熊太郎	宇賀莊村長		大塚村長　經田伯太郎
安田村長		永野幸太郎	尋常村長		井尻村長　稗田彌右衛門
泰江村長		細田長太郎	比田村長		山佐村長　安井與右衛門
布部村長		濱田善太郎	荒島村長		郡書記　廣江長之助
仝		山崎　增平	仝		仝　島田　竹吉
仝		田中　正敬	仝		仝　石田久四郎
仝		細田源次郎	郡視學		技手　土倉茂一郎
安來		並河理二郎			赤江　民部
荒島		岩田秀太郎			

功勞　安田　門脇久右衛門　有功章　安來　建河理二郎　仝　安來　眞木大三郎
貴金屬助　赤江　民部傳次郎　仝　荒島　岩田秀太郎　仝　母里　柴田晃次郎
仝　安來　横山榮之助　仝　安來　船才之助　仝　布部　小林利一郎

松江市ノ部

上賣品陳列主任
高橋千代司　永井卓一　山本誠兵衛　深津助次郎
佐藤喜八郎　西尾松太郎　古志伴藏　足羽仲次郎
山内佐助

御座設備主任
小川善淵　門脇秀次郎　坂本昌淵　諏訪部　彦次郎
岡崎松太郎　佐野正雄　田中結次郎　山口卯兵衛
佐藤球三郎

獻上品主任
西尾松太郎　太田豪之丞　古志伴藏　三島佐次右衛門
森脇甚右衛門　森脇新兵衛　足羽仲二郎

裝飾主任
荒原富次郎　長谷川四郎衛門　神庭久三郎　田中又兵衛
井原武三郎　山本豊一郎　布施輕富　青山和太郎
三島和一郎　廣瀬長之助　森脇新兵衛　森山祥藏

尾原佐七　清原管太郎　曾田泰十郎　西川自省

小西佐助　森島佐平　園山喜三右衛門　中島虎之助

山本權七　川上彌太郎　吉本幾太郎　高橋千代司

庶務主任

岡崎運兵衛　金澤傳十郎　山内仙之助　清原管太郎

貴谷源次郎　森島儀兵衛　太田臺之丞　三島佐次右衛門

森島甚右衛門　高橋千代司　永井卓一　山本誠兵衛

深津助次郎　佐藤喜八郎　杉江達三郎　繁澤岩三郎

土屋藤吉　堀村彌一郎　右津元市　河内忠助

會計主任

大島新四郎　綾原万次郎　高見兵助　松本巽三

增田誠七　桑原羊次郎

衛生主任

吉本幾太郎　森本文齋　田野俊貞　曾田泰十郎

西川自省

綠綬褒章

佐藤喜八郎

特別社員

青山久之助　志谷鎭次郎　小其謹信　長谷川金一郎

安達謙藏　毛利八彌　岡騎運兵衛　森脇甚右衛門
三島佐次右衛門　高橋義比　三谷勝之助　永瀨重太郎
木村金三郎　芦田元之助　南嘉市　大島新四郎
藏部長太郎　織原万次郎　星野甚右衛門　吉田清次郎
仁多郡　福井三郎右衛門

教育奬勵
成瀨岩太郎　海野典之　太田元長

全勸績
加田榮太郎　海野幸基　樋木百太郎　奈倉軍太郎
園山佐五郎　中村德之助　本多甚之助　石原久之助

實業篤志者
原源藏　伊藤憂之助　中島桐之助　小具謹信

市役所事務委員
三谷勝之助　矢島新吾　渡部常守　松岡鐵郎
岩佐健一　高尾敬三郎
岡崎常太郎

各町總代の委員
南殿町　西川自省　北殿町　吉本健太郎　特志町　鬼村節郎
南田　布施欽太郎　北田　諏訪部弘　北堀　加藤伸藏

全　諏訪部　孫次郎
全三丁目　田中竹次郎
內中原　勝部健之助
百性町　加納傳右衛門
芳町　江角吏助
酒茶町　清原管太郎
紙屋町　桑原平次郎
末次魚町　福島松三
末次　太田武一郎
濱町　長谷川圖師右衛門
北寺町　和泉豐吉
松江分新町　和田芳太郎
新町　曾田臺重
津田町　河本兵藏
地行場　曾田吉右衛門
三丁目西部　木新之助
全東部　米田善之丞
六丁目西部　伊藤紋太郎
松江分新町　永德造
石橋二丁目　森山勇助
石橋縄手　上田藤兵衛
外中原　水谷水清
八片原　青山和太郎
片原西部　星野瑞雲
東茶　井原武三郎
元札木　渡部善太郎
鍛治町　木村壽一郎
白潟本町　高見兵治
天神町　岩谷榮助
八幡屋　深津助次郎
堅町　大島臺之助
橫濱　外山伊一郎
全中部　江指定重郎
二丁目西部　上田精藏
東部　松本武八郎
五丁目西部　宮廻仙太郎
全東　西川扇之助
全西部　三代慶之助
全二丁目　高井常太郎
奧谷　末田元長
土手　曾田壽十郎
末次　貴谷源次郎
全東部　吉金嘉太郎
末次本町　古志伴藏
新材木　金澤傳十郎
御船屋　小林茂三郎
魚町　松本貞太郎
雷寺町　松木榮三
和多見　澁見周之助
橫濱　佐川文之助
雜賀本丁　森本文藏
全東部　安本壽明
全東部　加部清
四丁目西部　戒淵岩太郎
東部　山本金市
七丁目　池田榮行
全稻荷廻　恩田金之丞

全田中　藤井　清　笠倉下　平塚柳之助　全松江須作藤兵太郎
乃木　瀬川徳之丞　・西津田　渡部熊平　松江分松尾上野小次郎

八束郡ノ部

特別社員

末幡　久右衛門　鹿野　長谷儀太郎　朝酌　稲垣與右衛門

郡視學

永江眞澄

郡書記

安達種郎　栗原熊太郎　長谷川　稔三郎
石原秀忠　山崎重太郎　杤本雄次郎　法尾玄一
上坂研　古川房次郎　山崎善一郎　内藤喜太郎

郡會議員

法吉村　和田豊太郎　大東村　石川鹿太郎　野波村　金村治次郎
千酌村　永田太四郎　片江村　山根金太郎　澁山村　渡部長之助
本庄村　多久萬太郎　持田村　野津喜代太郎　川津村　安達儀太郎
朝酌村　川上義太郎　大野村　香川善九郎　秋鹿村　加藤啓一
長江村　中倉晃之助　右志村　長野勝太郎　裏悉村　山本鹿三郎
津田村　立籐啓一郎　竹矢村　小川嘉太郎　揖屋村　石原久重
意東村　栗田審　乃木村　福島金之助　忌部村　桑垣豊市

寒待村	永江新市	庄道村	持田貞一郎	渡入村	竹谷俊一
二子村	安部貞太郎	大庭村	松浦幸一		

玉湯村會議員

松浦岩太郎					
野波村長	小川猶十郎	片江村長	井川新一郎	津田村長	小村米太郎
竹矢村長	青戸慶三郎	出雲郷村長岸	本喜八	意東村長	桑原和一郎
岩坂村長	石倉竹次郎	大庭村長	吉野武三郎	乃木村長	野津宰右衛門
寒待村長	武田寒次郎	庄道村長	村田虎太郎	仝助役	黒山源之助
揖屋村長	後藤孝之助	仝助役	越野武一郎	熊野村長	長澤儀太郎
玉湯村長	長谷川定十	仝助役	山田金五郎		
教育功績	大木常盤	本庄校長	正井儀之助	朝酌校長	本多松彌
秋鹿校長	奥原輯市	竹矢校長	富井淳太郎	忌部校長	生松詮一
寒待校長	森山岩三郎	玉湯校長	海野林太郎	乃木村	福島榮太郎
庄道	小豆澤勝良				

仁多郡ノ部

櫻井三郎右衛門

教育横田	井上榮太郎	仝功績	糸原儀兵衛

實業篤志

三武	川島俊藏	横田	粟田熊太郎

大原郡ノ部

特別社員　大東　木村吉郎　海潮　曾田市三郎　阿用　藤原佐一右衛門

教育獎勵　日登　藤井朝一郎　要伊村　板持健市　春殖　古瀬　最

大東　野々村太一郎　幡屋　山崎運一郎　神原　鴨緑真十郎

海潮　加納大二　要伊組合長渡部守之助

功勞　幡屋　深津啓一郎　北村　黒川愛之助　木次　土屋豊三郎

飯石郡ノ部

田部長右衛門

隱岐國ノ部

特別社員　渡部新太郎　仝中村　森浦造　美田　竹田センン

美田　橋本傳吉　官業功勞　尾關由若　教育　田中德三郎

仝　齊藤延七

本迎送委員

舊郷村

今崎半太郎　和田房太郎　渡部松市　安部ナダ

廣澤松之丞　荒川徳五郎　奥山重義

黒木村

安達和七郎　塚本熊次郎　木村勘五郎　藤田万次郎

三美才太郎　櫻内常次郎　堺　和次郎　石塚保慶

松島宗太郎　淀川惣次郎　万田利作　安藤傳市

渡部才次　尾關由若　真野啓太郎　角丸徳次郎

宇野常智　真當篠太郎　宇野惣雄　宇野國吉

前田邦一　近藤常助　玉川常次郎　前野竹若

中西松次郎　佐倉鶴松　玉置嚴　關真岩之助

新谷作次郎　宇野志摩造　高田甫太郎　岩佐剛

木村良市　真野万次郎　田部ハツ　日向松太郎

岡本壽　山本徹　澤松乙次郎　山村マツト

永見松太郎

行啓ノ際奉拝ヲ賜ハリシ人名

海士村

村上助九郎　齋藤延七

行啓奉迎総委員人名

海士村

渡邊矢次郎　田中徳三郎　片野新市

佐伯鎮雄　掛庫茂次郎　宮都三枚　秩川政美
平井藤市　宇野鉦九　松尾国次郎　淺野勝太郎
徳山長五郎　山根義八　宮部徳太郎　森又四郎
長尾達市　早川吉若　玉谷万次郎　中畑鉦松
高橋直一　永原安治　檜野松次郎　宮岡重若
原六郎　吉川長次郎　山河才次　増谷幸次郎
小谷甚太郎　佐渡善一郎　千歳謙次　村尾勝太郎
遠藤宜太郎　毛利鉦松　今坂鉦太郎　宇野清次
玉島金太郎　横山安太郎　藤田琦若　淺川鉦次郎
福村嘉太郎　富沢才太郎　松尾鉦太郎　村上勝太
和巻岩守　松本富男　毛利権八　中地貞次郎
中村清次郎　藤岡芙吉　奥田富次郎　豊田順正
山下春次　

西郷町奉遷送委員

公吏

町長　大西佐源太　助役　松浦寛信　書記　島田重市
仝　宮田直次郎　仝　池田晋　仝　磯能一郎
區長　小室熊太郎　仝　小笹忠次郎　仝　渡邊勉

奉遷送委員

大字西町
吉木百一　長田熊一郎　松岡熊次郎　谷田安太郎
谷田勝太郎　奥村嘉吉

大字中町
高橋重太郎　吉岡梅吉　高梨浦太郎　渡邊三吉
原　銑　大西太一郎

大字東町
青砥源太郎　渡邊卯之吉　佐々木文太郎

鳥川郡之部

郡書記
藤田林蔵　椋木六之丞　中山一郎　米村啓三郎
大國栄吉郎　富田定　岸龜一　吉見敏夫
岸　算太郎　高橋美成　佐藤源市　山本良太郎
岡本長之助　佐野亟市　吉田正二郎

郡視学　佐藤賢伍　技手　太田藤市　郡會議員　高橋久次郎
村議長　三島源之助　參事會員　梶谷福太郎　同　猶野孤之助
同　小村藤三郎　同　山田金右衛門　同　加茂豊七
今市町長　日野卯助　会助役　鶴巌喜市　全收入役　板垣定次郎
田儀村長　島屋尼富　全助役　清山弘之助　江面村長　本田栄次郎

知井宮村長矢野和一郎　　幷瀬町長　山本繩太郎　　全助役　長谷川梅太郎
同行啓關係者　森山茂太郎　　同　森山繁市　　同　森山豊市
同　森縣村大郎　　同　鳥屋尾吉藏　　同　藤原善市
同　和田文四郎　　同　立花富之助　　同　曾田幸次郎
同　木佐平四郎　　同　中澤倉太郎　　同　寺本國市
莊原村長　須田立助　　出西村長　常松國雄　　伊波野村長津田佐一右衛門
直江村長　山根匡之助　　出東村長　勝部喜太郎　　田畝村長　落合義雄
全助役　鈴木數順　　布智村長　神田卯太郎　　古志村長　加藤正次郎
高松村長　元井豊　　荒木村長　伊藤兼市　　鵜鷺村長　田中喜太郎
四鄰村長　西田万藏　　大津村長　森牧右衛門　　邊治村長　永田豊之助
久村長　森農作助　　久木村長　江角啓太郎　　當分村長　山本栄三郎
調富村長　細木榮三郎　　神西村助役殿田要三郎　　知井宮村助役　後野尚英
幷瀬町書記上田竹市　　出西村助役多々野筆次郎　　今市町書記伊藤虎之助
同　松井金八郎　　同　小村銀之助　　多波野村助役　佐藤悳藏
直江村役助伊藤彌次郎　　出東村同　足立常太郎　　江南村同　五十嵐兵太郎
神西村同　小村細藏　　古志村同　小玉常一　　高松村同　宍道道藏
久村助役　岸田清一郎　　出西村書記中村富之丞　　直江村　荒木喜次郎
田儀村書記和田吉重市　　同　和田利三郎　　神西村書記松本德太郎
知井宮書記謀谷榮太郎　　同　板木要吉郎　　布智村書記撰　原栄市

古老村書記園山伊太郎　　笠木村書記伊藤善吉
今市町書記伊藤文四郎　　同　金山政助
同　恒塚精一　　益治村書記成相徳市
同平田　横溝佐五郎　　同檜山　長岡佐三兵衛
同鶴岡　芝木捨次郎　　同西浦　三原龍孟
同荘宗　吉子亮一　　同西浅　荒田権六
同平田　持田基太郎　　同江南　今岡常次郎
同今市　種野勝吉　　同久米　玉木元太郎
同笠井　竹田貞三郎　　同　藤井源市
西田村長　河瀬夫右衛門　　同　岡勇二
金助役　恩田盛三郎　　同若志　石橋義之助
猪山村長　田中和太郎　　同伊波野　新田園次郎
金助役　上田兼太郎　　同　三島久太郎
立田銀之助　　荒木村書記園山友次郎
金助役　笠井長之助　　同　小川貞三郎
同　恒塚精一　　同精技　星野登造
同　金山政助　　同大津　田部梯次郎
益治村書記成相徳市　　同潤分　大谷善太郎
同檜山　長岡佐三兵衛　　同伴笠村　野波十蔵
同西浦　三原龍孟　　同　恒塚文左衛門
同西浅　荒田権六　　同佐香　鎌苅愛三郎
同江南　今岡常次郎　　笹間村長　高橋其吉
同久米　玉木元太郎　　久多美村役場用達之助
同　藤井源市　　金助役　阿部忠太郎
同　岡勇二　　東村長　長崎庫吉
同若志　石橋義之助　　富田村長　小玉虎三郎
同伊波野　新田園次郎　　金助役　影山善次郎
同　三島久太郎　　同　園山善之助

特別村長　黒澤幸得　　仝助役　神戸喜太郎　　日御碕村長　武田常太郎
仝助役　内藤守衛　　邑智村長　上野健右衛門　　仝助役　松井延三郎
高濱村長　本田政登　　川跡村長　伊藤勘左衛門　　朝山村長　江角幸次郎
神西村長　多々野巳一郎　　仝助役　柳楽利助　　上津村長　妹尾瑞太郎
荒茅村長　曾田泰造　　仝助役　今岡基一　　園富助役　水野彦三郎
西郷助役　荒木栄　　乙立助役　大野儀之助　　江南助役　今若新一郎
園瀬助役　中尾庄太郎　　園村助役　河井秀市　　高濱助役　富田喜太郎
嗣　並河虎太郎

郡行啓準拠關係者

江角善次郎　小村本次郎　　新宮徳五郎　　土江豊次郎
北島伸太郎　仲間喬市　　小村宇三郎　　石川次郎
荒木忠太郎　三原本八　　片寄久四郎　　水儀之助
竹下深太郎　竹下重太郎　　吾郷新太郎　　渡部恵太郎
森山英治　清山友太郎　　鼻山是市　　和田森長太郎
廣瀬金藏　今村九一郎　　和田喜三郎　　川上國一郎
島屋尾伴藏　河上昌之助　　島屋尾利太郎　　秦卯市
森下與吉郎　本田忠次郎

江南

中尾愛藏　　今岡柴四郎　　今岡久助　　森山清之助

中尾大吉郎　增田種吉　今岡善一郎　江角万次郎
立花幸太郎　林　豊平　片倉勘　栄五郎　中尾虎太郎
今岡照次郎　吉田賢蔵　立花利三郎
剣井宮
山本伊三郎　高橋豊四郎　山本喜一郎　横谷鶴吉郎
山本儀一郎　北川定太郎　吉川久吉
特綫
藤岡福左衛門　古川健五郎　西田美作穂　吉田善左衛門
岩江啓三郎　佐藤甚右衛門　中井繁太郎　富倉秀次郎
森山謙禮　伊藤儀三郎　石田又兵衛　内藤幸之助
岡垣昌忠
今市
森山嘉太郎　卜部善右衛門　足立勝之助　本多仁設
武田代七　井上保右衛門　直良新三郎　直良儀四郎
伊藤貫右衛門　石橋太右衛門　廣戸松右衛門　江垣源四郎
遠藤和助　米原善市　稲野清蔵　久保名　治次郎
種野德助　佐藤文藏　武永貞助　高橋甚三郎
米原長五郎　米原秀三郎　足立乙市　竹原源市
兒玉新助　金山善市　板倉悟郎　兒玉新市

大澤茂一郎　　加藤清三郎　　柳樂太三郎　　片岡信助
見玉清三郎　　山崎久三郎　　米山岩之助　　見玉信太郎
米原庄七　　澁田嘉右衛門　　高橋勘助　　馬場運
廣瀨市五郎　　武和忠太郎　　大坪金藏　　日野下吉之助
鵜飼萬三郎　　廣戸彌市　　遠藤久太郎　　花田宜四郎
内田秀市　　村島德市　　須山榮吉　　船木桑三郎
森田榮一郎　　森井忠之助　　伊藤信次郎

出雲　保井陽治　久木　江角泰助　企　三代愛三郎
出東　江角千代次郎　企　鄂藏榮次郎　企　植田元吉郎
重江　土江吉十　灘分　高見甚右衛門　東村　角當三郎
平田　木佐德三郎　企　山口寬淳　企　石橋基入
企　原權三郎　企　大谷彌吉　田儀　島屋尼美登
知井宮　山本原太郎　企　山本梓助　高松　安田來藏
鰐淵　須山榮市　園村　塘野萬三郎　荒木　澁田友三郎
秤量　大村真藏　秤量　和田定右衛門　秤量村　手錢自三郎
大津　山田織藏　个市　石田善市　稗原　高松陸一
企　倉橋國藏　企　牛尾伊太郎　遠治　布野儀之助

運岸郡ノ部

久利村奉迎委員

佐々木　清太郎　　夏野藤一郎　　林　浅一郎　　森山幸二郎
山根長五郎　　森山英市　　梶野栄之助　　波多野康二郎
梶野誠太郎　　杉谷虎一　　宮島甚蔵

大森町奉迎委員

上野栄次郎　　上野虎次郎　　森川仙五郎　　長安令造
松浦信義　　野澤孫一郎　　渡邊良七　　注田栄一郎
注田嘉一郎　　中村助次郎　　岸本三男子　　松原俊三
田邊逸三郎　　中島金作　　松尾隆　　宮内利吉
藍谷三左衛門　　石崎義　　吉田信久　　安田平一
波多野源吉　　岡實太郎　　丸茂貞盛　　大島信文
大草朝　　佐々木澄平

大宗村奉迎委員

市原久吉　　長尾和人　　渡俊寛　　田邊清治
長谷齊　　原田正見　　小笠原了遠　　松島定俊
渡淳二郎　　市原幸三郎　　渡鳥吉郎　　田邊昇六
渡寛　　大崎晉朗　　渡井源太郎　　笹谷龍四郎
山下德太郎　　市原健一　　今田春作　　立野喜一郎

藤原保山　尾崎繁人　市原準吉郎　尾崎稗
田中末市　山根長二郎　永井延雄　山根榮太郎
安田善六　今田音二郎　高崎富次　木村泰二郎
加藤善二郎　淺利安一郎　島田健二郎　藤井晉一郎
高崎廣次　永岡貴太郎　山内與隆　清山友次郎
立花良平　吉田市太郎　今田正雄　山根常作
高畑富吉　島田壽市郎　立野伊助

波濱村奉迎委員

原田藤吉　嘉戸常九郎　有田文吉　鄭原喜太郎
北畑季吉　宮本運兵衛　藤井淺穀　靜陽仁吉
中島國太郎　柴田晉二　岩谷長市　山崎定市
嘉戸友治郎　伊藤琢市　靜陽國治　山下深太郎
益野久太郎　多島作孚　中川庄吉　林　稔三
坐　貞二郎　山口熊三郎　石田孝吉　嘉戸貫治郎
鄭原文造　石田恒治　多島榮三郎　鄭原善治郎

安濃郡ノ部

奉迎委員

川合村　貴族院議員男爵　金子有鄰
長久村　衆議院議員　恒松隆慶

大田町　縣會議員　　細田貫造

郡會議員

大田町　掛野啓一　　仝　中村佐五郎　　仝　細田俊一郎
長久村　細田仙之助　　島井村　宮脇友善　　仝　細田桑二郎
割石村　大澤儀右衛門　　波根西村　有馬寛一郎　　仝　三谷林平
波根東村　福　晉三　　仝　小澤安右衛門　　朝山村　岩谷朝二郎
富山村　品川佐之助　　佐比賣村　林　藤十郎　　仝　本坂正雄
仝　大谷榮次郎　　川合村　和田孫二郎　　仝　丸清左衛門

町長

大田町　和田吉人

村長

長久村　植地郡次郎　　島井村　宮脇隆介　　割石村　細田伍三郎
波根西村　三谷清七　　波根東村　加藤公平　　朝山村　波多野順作
富山村　岡田靜慮　　佐比賣村　花田治太郎　　川合村　佐々木清四郎
佐比賣村　森山儀八郎　　割石村　和田松二郎　　大田町　濱崎孝太郎

縣書記

縣　書一　勝部儀之助　　長谷要太郎　　岡田　肇
中島啓造　　民本信一　　有馬忠次郎　　生越榮造
技手　谷城亞之助　　農業技手　北山正太郎

監役所屋　加藤利寛　　仝　中村藤次郎

大田町奉迎送委員（静休泊地）

大田町役場員

中村重吉　中村直次郎　恒松稔造　小田圓治郎
松井直治郎　岩谷尹三　石田桑市　渡邊晴之
中野和一郎　山根助九郎

大田町會議員

森島延吉　竹葉英七　岩谷小三郎
掛野朝一郎　井上藤之助　郷田藤之助

委員

恒松壹太郎　尾添習次郎　本田良太郎　西村虎之丞
恒松謹介　幸田林太郎　中島籍造　細田政寛
恒松律造

波根西村奉迎送委員（静休泊所）

助役　田邊豊造　仝　有馬直治郎　收入役　三谷幸三郎
書記　中村忠治郎　仝　三谷重兵衛

村會議員

有馬完治郎　岡田林右衛門　川上友五郎　竹下治三郎
土江浅太郎　安原虎太郎　岡田靜　渡邊辨之助

安原重吉　岩谷新四郎　笹下弘　山尾傳吉

岡田太郎治　三谷幕六

邑智郡之部

東宮殿下御行啓奉迎委員

委員長　郡長　横山喜雄

委員

郡視學　中谷昌左

郡書記　中島重雄　有福福太郎　勝部鐵三郎　西村德次郎

岡部忠次郎　永見友太郎　今田繁友　大熊義知

丸山助　丸文一郎　伊藤友吉　伊藤唯一

郡技手　大藤兵太郎　鎌繼拾四郎

村長　川本幸平　本松省吾　山根唯一郎　柏淵波多野領之助

流原小割元吉　澤谷中原芳　谷村雖波勝佐

都賀行田邊喜一郎　都賀田中謙三郎　口羽日高和夫

阿須那末田光次郎　志津西島杢次郎　出羽三上五一郎

田所　森島槻太　　井原　島居淨市　　中野　前敬治郎
矢上　奥野作太郎　　日賀　河峯卓郎　　長谷　松本宗太
市山　井上淨治　　日和　森島重太郎　　川戸　山口隆清
谷住郷　島田爲吉　川越陣詰代理　片岡次郎八　　川下　藤田房竹
三原　平田勘吉　三谷陣詰代理　難波良直　　組式　森山富藏
君谷　小田善之助

詰役

高原　北村三市　　市木　大屋宣　　組式　堀田安次郎

郡會議員

川本　山根信央　　吾郷　山根太郎三郎　　柏園　大草孝嗣
濱原　二上隆俊　　澤谷　神田富太郎　　谷村　前川廣藏
都賀行　遠藤德三郎　　都賀　三上誠七郎　　日羽　井上元市
阿須那　末田佐太郎　　布施　山根良有　　高原　和田編三郎
出羽　有井當太郎　　田所　日高勝人　　井原　野田秀次
中野　前類五郎　　矢上　植田光次　　市木　本光三郎
日賀　山崎多助　　長谷　古川寛　　市山　山崎見得
日和　能美幾造　　川戸　能美壽治　　川越　坂根長藏
川下　谷川讓　　三原　平田淵　　三谷　尾崎幸三郎
組式　金田茂吉　　君谷　三宅六吉

組式村　清水德二郎　　同　吹譯義作　　同　伊藤順吉
日置村　山崎重樹　　箱淵村　林　幸太郎　　三和村　平田民之助
別ヶ丸　板垣仁吉
堀籠山

美濃郡之部

奉迎委員
郡書記　吉野留次郎　　同　岡崎格　　同　坂井民五郎

歡迎委員
吹川村長　　二筒村長　岩本信一

鹿足郡之部　（那賀郡委員トシテ）

郡書記　原新七　　同　横山才藏　　同　和崎博

出張町村吏
津和野町助役　永嶺嘉太郎　　畑迫村長　堀每之助　　木部村長　大河原義治
青原村長　中村房太郎　　日原村長　內藤留次　　小川村長　竹中綱造
柚木村長　竹內直太郎　　七日市村長　矢富橘八　　朝倉村助役　能美長五郎
六日市村助役　溝內勝太郎　　蔵木村長　讃井孝太郎

那賀郡之部

江津御旅館に於て
郡會議員　千代延　順四郎　　江津村長　島田庸　　江津助役　日高高次郎

郡會議員　森　儀三郎　　江津助役　山本万太郎

西谷富太郎　藤田武雄　　森脇愛吉　　山本英市　　江津收入役　福田經太郎

横田卯一郎　田等平之助　　中村友太郎　　猿田千代太

飯田八郎　高島源太　　市原明作　　高島常市

福原金二郎　武田勝太郎　　八神勘次郎　　平田久四郎

平下友吉　島田信世　　山根庄中　　池田又七

上野喜十　金川健次郎　　久保田誠次郎　　野村源作

笠井清之助　寺本整一　　鄰田政市　　島田三作

佐々木勝四郎　笠井順二郎

壹枝褒章受有者正八位　島田儀次郎

廣兵

高橋幸太郎　　森脇熊吉　　笠井德市

江津村書記　　恒松万之助

藤井智勇　　沖田留市　　青硫數三郎

江津村屋

佐々木定保　　田中繁市

郡書記

岩田藤吾　福原礒助　渡部善五郎　平郡鑑二郎
山本栄一　三浦博智　生島力雄　岡本眞丸
岩間可一　木村運吉　日下部愛輔　岡本秀孝
佐々木直太郎　岩崎通武　北林賢二郎　小川卓爲
有美操　豊島岩太郎　垣孝二郎　儀寛祐
苅田吉四郎

郡視學

技手

増田鈴造　久保田松太郎　佐々木宗三郎　風野國吉
井上唯吉　佐伯信　江尾健吉　土居準吉

渡部善五郎　川波村長　福田逸太郎　山藤六郎次
生島力雄　今市村長　國本長吉　上席村長　尾﨑　後
岡本眞丸　都濃村長　黒川德一　波根村長　今本平次郎
日下部愛輔　三階村長　佐々木代次郎　久喜村長　神田國治
北林賢二郎　黒松村長　永井慶造　下松山村長　中村鐵藏
小川卓爲　鵜峠村長　小武直郎　伊田村長　岡本俊輔
垣孝二郎　美又村長　千代延保吉治　木田村長　佐々岡延民
儀寛祐　今市村長　由崎朝吉　全助役　中島啓助　波根村長　松竹實一

全助役　大屋與一郎　上席村長　尾﨑　後
今助役　國本長吉　波根村長　今本平次郎
都濃村長　黒川德一　久喜村長　神田國治
三階村長　佐々木代次郎　下松山村長　中村鐵藏
黒松村長　永井慶造　伊田村長　岡本俊輔
鵜峠村長　小武直郎　木田村長　佐々岡延民
美又村長　千代延保吉治　波根村長　松竹實一
全助役　中島啓助

今助役　木田寛一
書記　佐伯信
石見村長　岡本良
右原村長　森島勘一
都野津村長　山佐卯太郎
大国村長　牛尾仁市
二宮村長　小川勝二郎
国平村長　小川博文
久佐村長　佐藤義一
今市村長　由崎朝吉

湯田町長　中村豊年
収入役　二宮勇夫
全収入役　野村源作
下府村長　池上稔一
都治村長　村上良治郎
園原村長　谷田右藤吾
松山村長　三宅萬吉
栗栖村長　山東吉三郎
都川村長　榎根友之助

高城村長　徳田　泰助
西陽村長　田中詩太郎
芦谷村長　泉川　兼太
岡市村長佐々木保太郎
仝書記　若田伊三七

郡會議員

漁山　都井　宗照
鄙野津　三輪保太郎
伊南　浮　孝四郎
川辺　千代延寛二
波佐　岡本　重昌
岡見　渡邊　國吉
長浜　永見　房造

行啓事務關係者

伊南　岡本　俊信
仝　中村　喜時
仝　高橋　集次
仝　岡本　正雄
仝　西原彦太郎

長浜村長　齋藤　伴
阿見村長　寺戸　善吾
井野村長　三笘隆太郎
和田村助役酒井　新一
仝書記　河上序一郎

清田　儀　新十郎
今市　山根　憲
松山　山下　秦
國分　三明　乙一
石見　宇津　喜太
西浦　崎森伊勢次
長田布一郎

牛窪村長　加戸辨三郎
吉市馬組合長大橋房太
漁山村長　佐々木熊次
清浦町收入役小川三四郎
仝書記　治田　治一

岡市　桑原　順介
美又　河田　義孝
鹿市　河村雪太郎
上房　佐々木竹一郎
黒岩　中村　駒治
井野　橋内　善六

高城村長　三笘　顯吉
三阿村長　澁井　長助
大麻村長　福井助太郎
仝書記　山本　久一
淺利村書記兼井出之助

雲城　石口　寿藏
都濃　吉岡久五郎
有龍　山都　長作
和田　久保田豊吉
清田　原田　陸藏
清田　日下部明剛

仝　藤井保次郎
仝　宮崎吉五郎
仝　儀　平六
仝　儀三右衛門
仝　忍　四方吉

波佐　右和　文一
仝　中川　金平
仝　小林藤一郎
仝　原　市太郎
仝　桐田治右衛門

清田　永見　喜市
仝　大庭　新作
仝　山崎　寛次
仝　儀　三九郎
仝　儀　弥吉

仝	澁原敏忠	仝	竹田傳七	仝	尾崎謙一	仝	尾崎ナタ		
仝	坂中龜一	仝	小澤爲次	仝	小田貫一郎				
都農	長谷川昌三	川渡	黒川坡太郎	仝	黒川源三郎	都治	笠井順二郎		
木田	佐々田寛次	和田	段原良一郎	仝	澤浅禮	今市	左右田三助		
三隅	中村宣之助	大内	牛尼辰吉	石見	横ヶ邊長治	仝	宇川尾次郎		
仝	門田勇太郎	仝	大迫正義	仝	大澤豊吉	仝	木村小次郎		
井野校長	河上總市	富田校長	今田新太郎	仝	山根登七	仝	笠原晨		
石見校長	吉鹿太郎	有福校長	上野忠郎	水産校長	福谷淳次郎				
濱田	中田清之助	仝	吉田益太	仝	宮本晃太郎	仝	藤井力平		
仝	角田益太郎	仝	戸倉川善吉	仝	岩田德市	仝	石坪次男		
仝	安延精輔	仝	忠次金次	仝	佐野登三	仝	竹吉善五郎		
仝	吉森吉郎治	仝	江本志津馬	仝	木下竹治	仝	橋本政友		
仝	高澤彩太郎	仝	天津清太郎	仝	清水三次郎	仝	大宮長之丞		
仝	岡新七	仝	杉名八重太郎	仝	佐々木善吉	仝	佐々木龍太郎		
仝	中山安太郎	仝	瀬良藤吉	仝	鵜狩熊吉	仝	川崎文吉		
仝	牧野駒吉	仝	浜橋玉次	仝	三好堪一郎	仝	原田永治		
仝	永田末吉	仝	牟田義雄	仝	串崎伊三郎	仝	澄川傳藏		
仝	樋野角市	仝	九川謹助	仝	岩間路一	仝	青忠樹		
仝	佐々木正次郎	仝	長谷川生一	仝	寺本啓太	仝	西田芳平		

山下　チカ　　森口　寅市　　小田　共平　　小林　藤治
中川　吾一　　淵重　剛矣　　里見義一郎
川波　　中村栄太郎　　野波賢之助　　横田　菊一　　横田　鹿一
千代延丈作　　大屋清四郎　　寺浪幸太郎　　江津　山崎　イエ
有福　　佐々木景作　　熊美　ヤス　　井野　三原　又市
旭　行俊　　森口熊太郎　　岡村繁次郎　　右田　古文　　特東
石見　　黒堤　浅蔵　　西平三代吉　　野村善太郎　　砂川　為吉
高松　熊次　　森島藤次郎　　新谷　富次　　佐々木岡太郎
宇津　寅市　　木村　乙吉　　浅野　友市　　中　助一郎
錦野　虎七　　金川徳次郎　　山根　左中　　和田吉五郎
上野　喜十　　寺本　忠一　　油田　又七
島田　三作　　佐々田倉一　　江津　山路　忠勇
泉　乙吉　　岩谷栄次郎　　有福　由中　源治
横田　都吉　　川上　米一　　千代延六太郎
大島　熊吉　　佐々木作一　　藤田精次郎
竹川石一郎　　由内　作次　　安島　功
鈴木倉蔵郎　　田原　善吉　　日野山敬雄
高崎　安治　　高原　直一　　高原　吉郎　　島根書記有美　琢

舞鶴灣御着御假泊

六月五日

山陰道百万臣民の願を容れさせ給ひ五月十日東京御發輦より三個有餘御巡幸に御車に日本海の波濤たる四伯雲の險峻をも厭はせ玉はず風を視察を怠し盛業を奨め老幼を召し玉ふ、玉音を誇ふ所實貴安業赤誠を捧げて御迎へ申せしも理りなり、期くて長途の御疲勞もあらせられず本日は再び御還啓の御途次當港に御假泊あらせらるゝを迎へ奉らんと朝來海陸共始め町民は其準備に忽りなく陸鶴鼠道にては御上陸点なる第二棧橋に紅白の幕を以て柱壁を装ひ御通路には筵席を敷き、万國旗を掲げ装飾全く整ひ舞鶴町にては海岸廿餘町の間に數千の國旗を吊ろし學校生徒は除内村和田附近より町民は海岸一帯に整列し奉迎したり待つ間程なく高搓たる一發の煙花は御艦列が當日金ヶ崎に現はれたるを報せるなるき時に正五時、先つ眼に入りたるは編隊艦白雲次で朝汐、朝霧、追風の四隻先導し御召艦嚴島は艦幸艦香取を先頭に磐手を後殿に更に村雨、朝霧は第廿一艦隊なる四六、四四、四七、四八の各水雷艦を從へ折から靄々と降り出せし細雨は四山の新緑を潤めて山色鮮麗たる中を奏すが如き海面を練り御豫定より先つ十五分午後五時十五分に御入港あらせられたり御等衛の水雷艦四隻は太野港海岸に臨護艦六隻は四所村海岸に整列し香取は大君浄に磐手は吉田和田對岸中央に、御召艦は嚴島高く皇室旗を掲へし大君和田中央一直線の中央に投錨せり此時師團司令部より廿一發の禮砲に代へて煙火を打揚げ奉迎人は萬歳を三呼し直ち高司令長官以下各團隊長は小蒸汽にて又安東第十師團長閣元要塞司令長官以下は直に御召艦に參倒し大倉府知事以下地方官は午後六時廿分に來倒せり海面には折から降りしきる雨を事ともせず參迎の船舶陸上の人は和田岡に沿ふて整列し時なら萬歳を唱したり中に尤も人目を惹きしは新舞鶴尋等小學校の生徒が兩國旗を以て裝飾せる小舟に分乘し小蒸汽船に曳かれて用中を事ともせず艦側に押け萬歳を三唱して引返したるなり

晝の歓迎

提灯の光栄に浴せんものと夜来夢をも貪らず陵を待てる現方の民草、猶て寝らしたる準備にたさおさ忘なりく早や已に家毎〳〵には幔幕もて装り詰たるあり、門戸を飾る国旗球燈たしなべて何處も彼所も華やかに掛け連らね随所に高く風に飜く経巻り空にひらめく大旗の提灯緊緑新なる松樹には各学の印章を止めたる紅提灯を吊せる大波屋蓋の組立は成りて舘に着むべく海岸へと向ふさ一入目新しく打つ太鼓の音は艶かなる新緑の山に響き渉りてろの反響を聞らせたるの嬉しさ之れも御成徳の徳歴かと思へば飛立つ程に楽しく弥増す想を百岸に延せば装飾らせる小旗の数、幾百本幾千枚、算する遑もあらず、西は水上警察より東は住吉神社に到る為野川南岸、海岸砲臺跡東端より埋立地西町口至る間国旗の飾鈎今即ち之れなりき往き来さの人、さては随所に足を運ぶは之れを点ずる等火の設備に着手するものやと知られ此の海岸砲臺跡東端より埋立地及び大野遊泳院下までの延長約九百間、十間毎の点火のかすかす夜の美観も想ひやられつ、其他海岸線路の沿道は念入に掃き清められ、停車場附近の装飾さた一入にして市中は大祭最の如く眼々しく正午頃と覚しく照り揺らし夏の暑さを厭ひ給らせてか天は徴々たる揺雨を下し初夏の爽気を泥ひ清めたるなりき嬉び合へる挙堂は互に手を連らねて奉迎場所に向ふ態さたは海岸指して集ふ老若男女の群衆共に着色を誇へつ所くて埋立地に昔く皇殿絵を合図に満波叢の如き歓声に御召艦の投錨を待つなりき

夜の歓迎

喜び勇みし地方民も今宵を限りに明朝はしも御顔を見奉り奉るべき運命を控ゆるを想ひては胸はなら ね感に浸はれて熱き涙の迸るもや出でんこゝちせらるゝなりしが天恵地方民の衷情を酌みてや清めの雨は時の進むと共に降りさまさり御召艦の御着港當時は更に繁くなり行きね、やゝもすれば明朝の御名残を

態ひやりてこゝろ沈まんとせし民衆も感涙堂々として御艦列の港内に進せらるゝを見ては再び歓喜の情に駆られて狂せんばかりとなり戸島の東端に集合せし観艦、砲艦、四所、高野、串筑、西大浦等よりせる数十隻の太鼓船は時は今よりやと話題の用意をなし午後七時と云ふを合図に無数の提灯に一斉に火を入れぬ、と見る眼を移せば港岸の各所は一時にはッと明るく提灯、篝火等に火は点ぜられつゝ遠き山上の紅灯は繁星の集まれるが如く連き港岸の篝火は民情の歓喜を語せるなるき、扨て太鼓屋竜船は面白ろく囃しつゝ御召艦より八丁の距離を保ちつゝ列を作つて御召艦の東端に沿ふて旬航に向へるなり艦上よりは絶えず煙火を打揚げ満天賑しく壮観の粋を尽す、屋竜船は恰も海上に数個の市街を形作り電燈装飾を施されたる在港の諸艦は巍然として無数の不夜城を現出せるなり各艦上より発射さるゝサーチライトは遥かに煙火を照して五里の洞内白昼の如く美観云ふばかりなく雨もこゝばかりは降らぬかと疑はるゝなり港岸に於ける提灯、篝火の背景は一々数ふべくもあらず御召艦の背後に当る百田あたりの山腹には提灯を以て「万ヂイ」の三大字を現はせる等殊に衆目を惹けり

一時間許も練り出でんばかりに漕し立てし太鼓船も長時間に渉りて疲労に過ぐる如きことありては恐れ多しと九時以前に漕りを収め各かしこ、港をさして漕ぎ戻り、陸上に太鼓屋竜を引き揚げてよりは各字に飯るなどでドン〳〵と打囃し雨中も紅灯を打連ねて最最はしく雨もものかはと浜岸に詰めかけて御召艦を拝するもの夜に入りても渇せず客舎の賑ひを呈したるが、十時頃には一同舞鶴湾の波静かに御夢の安からんことを祈り奉りつゝ散会なり

舞鶴発御

六月六日

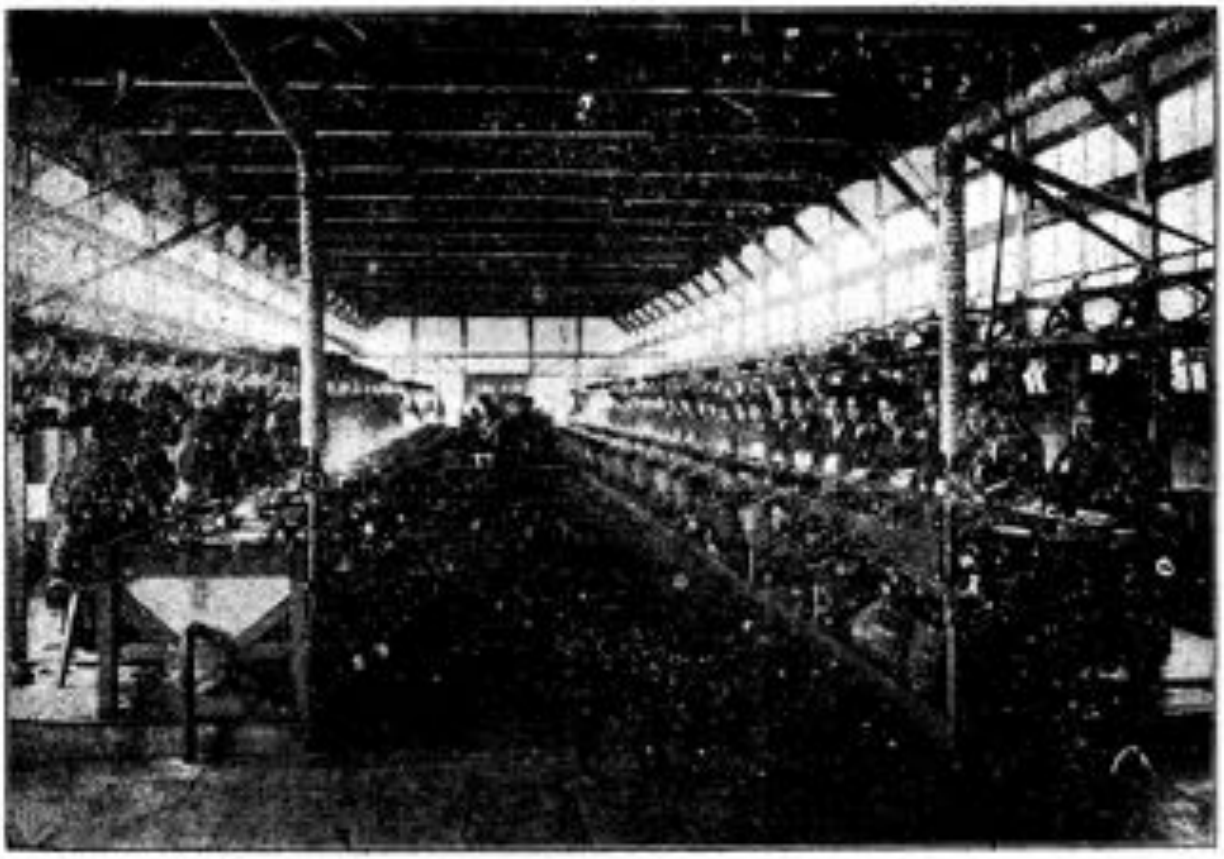
地方民が日々御名残りを惜み奉る浜の雨は遂々として甚だ宸襟を悩まし奉つたが、十時頃には一回舞鶴湾の波静かに御夢の安からんことを祈り奉りつゝ散会なり

置駅渡一碧瑠璃の如きところ遙に御艦列を拜せば各艦既に滿艦飾をなし艦載水雷艇は御召艦鹿島、先導艦香取、供奉艦磐手より下されて御上陸の用意をなせるなり、地方民は參らん限もあらばこそ絶起出を待いて海岸要立地より海岸沿線を埋て西舞鶴停車場一帶に蟻集し奉迎の赤誠を表すべく待てるなり、されは今は昨と思ひを異にし御發艦の一刻も遲からん事をこそ祈り居るなれ、刻々たるセコンドの響は如何に無限の感想を投等に與へしとよ、午前第九時に先つこと數分御召艦鹿島の發せし禮砲に續ひ在港各艦は皆しく禮砲を放ち發煙、登舷の敬禮式を行ふ此時陸岸よりは絶ゆ煙火を打揚げ殷々たる響は濛氣を破つて雷中なは朝陣の發するを見る、御て　殿下には東鄕大將等を隨へさせられ鹿島の艦載水雷艇に移らせられ、有馬艦隊司令長官は香取の艦載水雷艇に、供奉の諸員は鹿島、香取、磐手の艦艦長は各所屬艦の艦載水雷艇に分乘す此時鹿島橋頭に榮光を放てし皇太子旗は振せられ、有馬長官同御先導申上げ御召艇の次には供奉員艇、香取、磐手兩艦長艇及び第十三、十四駆逐隊司令の乘込める勢手浪艇殿後となり威風堂々として高野川下なる特設浮橋へと進ませらる一ヶ中隊の海軍儀仗兵は海岸に整列し海陸高等官皆これに奉迎す　殿下の御上陸相成るや海軍々樂隊は嘹喨として絶ゆ演奏し日高司令長官及各艦艦長、安東第十師團長及全參僚、關元要塞司令官及び幕僚、大森知事等は浮橋近くに進んで御迎ひ申上げ、平井鐵道作業局長、田阪鶴吐長等御案内にて長蛇を流せる海岸乘車場より御召列車に移らせらる、

殿下には御氣色最と麗に御面を拂ふ朝風を受けつゝ一々奉迎の諸員に御會釋を賜つて、靜くて九時五分御發車の信號あるや在港各艦再び禮砲を放ち陸上よりは煙火を打揚く東鄕大將始め有馬、日高兩司令長官安東十師團長、關元司令官、大森知事等御陪乘申上げ歡聲天地を動かすところ玉車は徐々として進行を始めぬ、此時各艦の滿艦飾は振せられつゝ、九時十五分と云ふに西舞鶴驛御着、此處には要塞の儀仗兵整列し地方高等官等及各名譽職員、各團体、學校生徒及地方民の奉迎を受けさせられ一分間の御停車にて九時

福知山第二十聯隊

社會絲製是鹿何孫君（咖使西墨）



十六分と申すに玉章は煙烟を後に曳しつゝ地方民が御名殘の時びとも聞かせつらん煙火の響の絶うなると共に上の方へと飛せられぬ、大森知事は京都まで御陪從すべく東郷大將は有馬司令長官其他海岸より奉送せし海陸將官と共に西舞鶴驛にて御暇申上げさかり退りぬ

福知山行啓

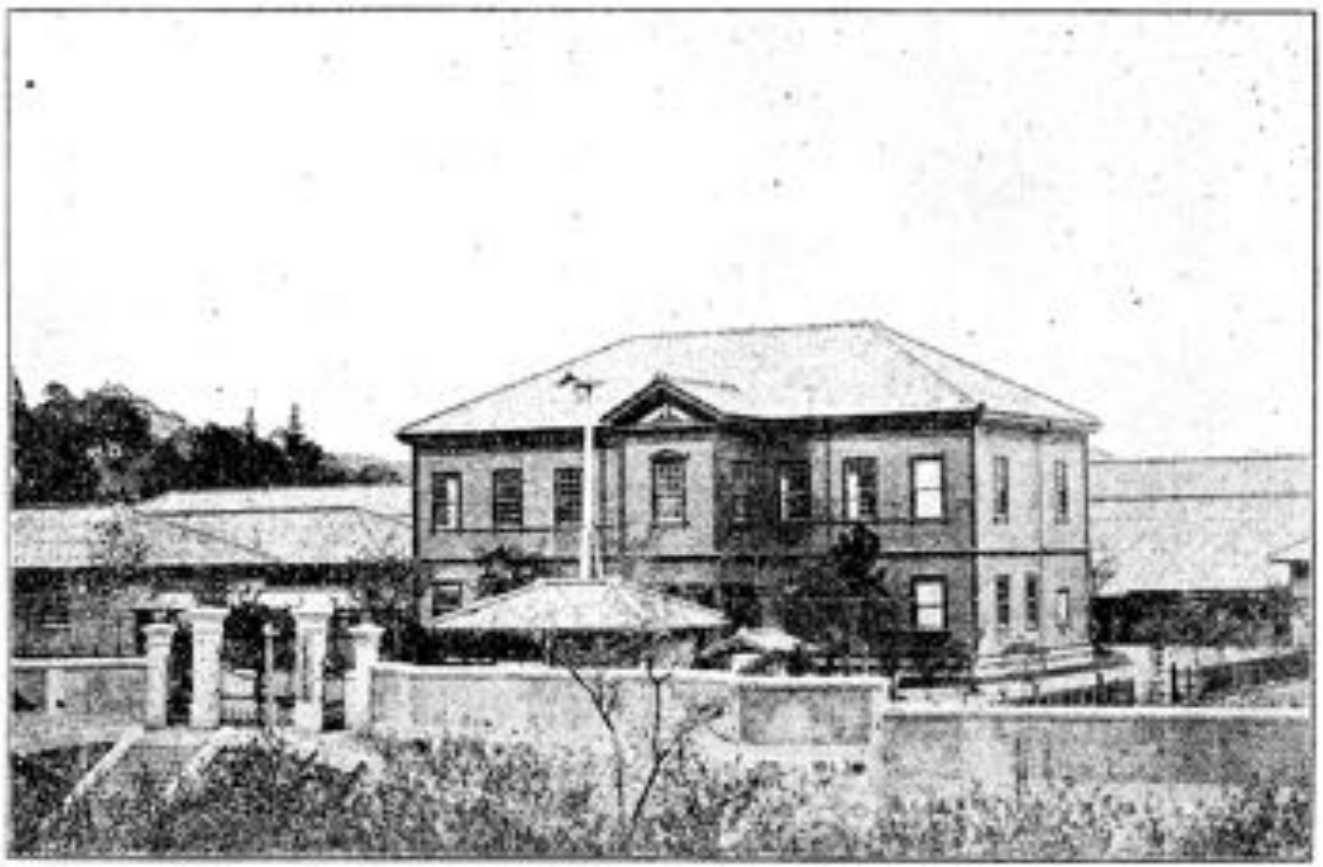
仝　日

舞鶴海軍に始りたる　東宮殿下山陰行啓は名譽ある福知山陸軍に終らんとす左れば八ヶ國の民草が奉迎し奉送する間に福知山の衆區は最終の光榮に浴すべく歡天喜地奉迎準備に狂奔せるなるも、待に待ち奉りし日は來れり、千歳一遇なる六月六日の天地は晴けぬ、而かも夜來の陰雲は堅く鎖さし烈しき西南風さへ加はりて今日を晴れと祈り奉りし數方の民草の肩遂さた薄く厚く雲に鎖されぬ、總奏主誠の天地に通せぬことやあると事ともせず昧爽より三三五々彼方に馳せ此方に集りて準備怠りなく見られしさて其設備如何と見るに御順路には道く無鶴海岸より運びたる白砂を散布し各戸軒幕を打廻し福知山驛前には本村街通及び福知山街道に二臺の奉迎緑門を樹て停車場には道く紅白段々布を以て柱を卷きアーチの上下は青草を以て埋め其上無數の薔薇造花を点綴し扁額は前子爵を以て「奉迎」の二字を現はし二字の間に菓を以て見事に菊御紋章を描き出したり、奉迎員は驛前より市中へ掛け面側には高等官、衆議院議員、府會議員、判任官、町村長、町村名譽職員、實業團体長、紳士會會員、女學校生、實田郡一町廿一ヶ村各小學校生徒、官公院兵並警察署は北側には高齢者、廢兵、戰病死者遺族、新聞記者、愛國婦人會、在鄉軍人、赤十字社員、義勇艦隊建設基金義捐者、武德會、各青年會、一般奉迎者等を正しく奉迎したり

怱くて十時三分頃過しに煙烟を幣見するや一發の禮砲轟然學園の一角に響き御紋章の御料車は日章旗を機關車に飜しつゝ徐々進行全五分豫定の如く福知山驛に御着あらせられたり此時第四節團より出發の樂隊は君が代を奏し

殿下には陸軍少將御略服にて供奉員を從へ御下車あらせられ玉歩緩やかにアプローチの緑毯を踏せらるゝや歩本歳聞長小澤武雄隊長、川人工兵十大隊長、丸山中佐以下將校三十餘名御迎へ申上げしに軽く御會釋を賜ひ田阪鎮台長御案内申山太夫御介添にて御召の車に召さる、斯くて武藏國知山署長先驅し次で二臺の侍從武官先導し殿下には後に村木武官長、木戸侍從長、中山太夫、柱石事を從へさせられ列外には安東第十師團長、大森知事、平井縣會總裁、野村全技師長、兵庫縣參事官等扈從し永瀬周山署長後驅し進行あらせらる、此時天も福知山町民の至誠を感應したるにや忽地風雨全く霽れ　殿下は輦をも掛けさせ玉はず奉迎員の間を御會釋はされたれば道側に並ぶる貴方の臣民は感を深め感泣して奉迎し參らせたり、斯くて　殿下は福知山街道を東へ惟場尋常小學校裏を過ぎられ新町の十字街頭より南へ折れ朝陽山下消防隊の電所前より內場通しを過き福知驛被の四圍大奉迎門を經させらる此處より兩側は歩兵第廿師隊は小澤隊長、工兵第十大隊は川人隊長の指揮の下に捧銃奉迎し兵營背面を南へ廿師隊正門に着せられしが此時藤本歳團長は御到を隱れ進んで將校集會所に至り奉迎御案内申し集會所へ御入りあらせられたり時に十一時廿分なりし　殿下濱時御休憩遊ばされ高等官五等以上へ單獨拜謁を、以下へ御通り掛け拜謁を賜ひ終つて將校下士の集會を御覽せらる、十一時半より正午まで御晝餐を召上られ供奉員任官安東師團長、大森知事等に御陪食を、又別室にては以下供奉員等に配膳を賜ふ、其間絶えず陸軍樂隊あり、終つて十五分間御休憩、零時三十分兵士の銃劍仕合を御覽あらせられしが　殿下は御椅子にて御劍を拭き玉ひ左右に村木武官、中山太夫を從へさせられて御機嫌麗はしく時々武官長を顧みて何事をか仰せられつゝ、煙はせ玉ひたり、夫れより又も陸り遠る迄をも御眺ひなく田中外務をも召さず御徒歩にて後殿車へ入らせられ小澤隊長の說明を御聽遊ばされ零時四十五分御出門、供奉の順序前の如く第三中學校生徒の奉迎處に會釋を賜ひつゝ福知驛に入らせらる驛前の奉迎者は皆に全く驛には福知山驛と結搆を同ふせる「奉迎」の扁額あり、此下には日高鎮守府長官、中澤工廠長提川港務部長、松本水雷團長、池中海兵團長等迎へ奉

駐箚特派全權公使 鳳凰山第三中學校



り　殿下は御料車に召されしが此時海陸軍各將官はプラットに出でゝ奉送し大森知事、安東師團長等陸奥供奉せしが奏樂の聲は煙花の聲と和し奉別を惜むは流か雨か、奉送者の衣裳濡ふの時號砲一聲鳴るや殿下は姿勢正しく御挨拶遊ばし御襟線珠に劍かに車窓より厚き御會釋を賜ひ廿有七日岡山縣八ヶ國の民草が至誠に名殘と惜ませられつゝ御料車は煙幕として一客神社森に隱れ去れり

御使差遣

福知山第三中學校へ

殿下歩兵第十旅團行啓の際特に第三中學校へ御使差遣の事となり秋澤東宮武官は根本府視學先導にて學舍、内記の十字街頭より供奉の列を離し仕人を從へ警官の後衛にて雀部村字土師の全中學校へ向はる校本全校長以下職員生徒は門外に出迎へ校長の案内にて豊授幣時休憩の後教授の標標生徒收拾の博物標本等を觀察して其設備を賞し　殿下の令旨を傳へ行列前の如く還校せられたり

御下賜

一金百圓
一御紋章付銀杯一組
一金子一封宛

献上品

一金五千疋

幣　校　集　會　所
第十聯隊及工兵大隊
福知山町、曾我井村

第三中學校生徒が　殿下御臨みに供すべく狩り集めたるもの之を視福知山町長、蒔野安兵衛、中島校長の三氏携帯御昼泊の夜感上せり

念記

山陰道行啓錄

終

明治四十年九月四日印刷
明治四十年九月十二日發行

定價金壹圓五拾錢

編輯者　角　金次郎
發行者　稻吉金太郎　島根縣松江市天神町二一〇番地
印刷者　市岡乙松　島根縣松江市末次本町廿六番地
印刷所　市岡活版所　島根縣松江市末次本町廿六番地

賣捌所

松江　川岡本店
書林　圓山文會堂
有田書店
川岡支店

賣捌所

米子　木村玉文堂
今井書店
平井久松堂
鳥取　山木靜觀堂